2023

長谷川　雄治

一月二日（月）

「大変申し訳ないんですが、次の入荷がいつになるかは分からなくて」

何度目か分からない定型文を、一言一句間違えないように気をつけながら再生する。私に問い合わせてきたおじいさんは、向こうの方が申し訳なさそうな表情で「そうですか。ありがとう」と微笑みを返し、ペット雑誌の棚へ移って行った。

「札立ててわざわざ書いてんのにね」

店長は、すぐ後ろにある「攻略本、売り切れました」の立て看板を触りながら、黒縁メガネの向こうから、「困ったもんだ」とでも言いたげな眼を送ってくる。

「浪川さん、もう六時だし、上がって」

レジ上の時計を見やると、いつの間にか六時を少し過ぎていた。レジ前に列ができつつあるけど、「僕が行くから、貴女は帰れ」とアイコンタクトを残した店長が、小走りでそちらに向かった。

「お疲れ様です」と出来る限り愛想良く会釈をしながら、従業員用ドアを抜け、更衣室でエプロンを外す。事務所のロッカーにエプロンを押し込み、カバンを取り出してタイムカードを押す。従業員用の通路から出て、上着とマフラーを整えながら一般客に紛れ込む。首から下げっぱなしのセキュリティーカードはカバンの中、と。

人が多すぎるなんて滅多にないイオンも、今日は地元の人っぽい親子連れ、祖父母連れな人たちで賑やかだ。いつものようにスタバへ足が向かうけど、中で飲むのは無理かもしれない。

飲食店の前で並んでいる人たちを避け、のんびり広がって歩く親子連れ、向かいから歩いてくるカップルの間をぶつからないように抜ける。平日の夕方に比べれば短い列が見えてくるものの、お店の中は会話が盛り上がっている団体さんでいっぱいらしい。年始の限定フラペチーノも気になるけど、今日はまっすぐ帰ろうかな。

スタバに背を向けてポケットのスマホを取り出す瞬間、明らかに周りから浮いてる二人が視界に入った。向こうも何となく察したようで、視界の端でこちらに手を振ってくる。

——瑞希、なに飲む？
——抹茶のフラペチーノ。大きいやつ。

すぐに既読がついて、どこで買ったかよく分からないスタンプが返ってきた。レンズの大きいサングラスでキメた女の人を置いて、財布を握った一兄が列の最後尾に並んでくれた。「お前は座ってろ」のジェスチャーがめちゃくちゃウザい。正直、気乗りしないというか、易々と隣に座れない空気を乗り越えて、女の人の向かいに座る。カバンを膝の上に乗せる間もズーッと視線が追いかけてくるぅ。

「アレ、さっきも居ませんでした？」

「うん。抜き打ちの素行調査。査察？」

茨木の、それも太田のイオンには全く溶け込まない覆面調査官、十分ぐらい観察されて、ファッション誌と地元特集のムック本を立ち読みされたっけ。

「一兄は」

「一人でブラブラしてた」と、私のオーダーを連れてきた。すっかり小洒落て都会の男になったらしい長兄と、モデルのようなこの人と。実はお似合いなのかも。

「ついでにアレも」

「アレね」

女の人は、コビトカバのストラップをつけたカバンの中から、ニフレルのロゴがついた紙袋を取り出した。一兄に促されるまま受け取り、後ろのシールを外すと中から出てきたのは、リアルなカバの口元がプリントされた布マスク。

「ワゴンで投げ売りされてたし、お土産」

これは流石にリアルすぎて、つけるにつけれない。

「私とお揃い」

目の前のお姉さんは、シュッとした手付きで、カバンから取り出した開封済みのカバマスクをつけて見せた。自信に満ちたキメ顔と整った顔立ちとカバの口元のミスマッチがヤバいのに、全く動じない。

隣の一兄はニヤニヤしながら視線を送ってくる。二人分の圧に負け、封を開けずにマスクを口元にかざしてみた。一兄は声を抑えながら盛大に笑い、カバマスクのお姉さんは嬉しそうに眼を細めてマスクを外した。

「私たち、仲良くなれそうね」

「え、ああ、そうですね」

お姉さんは和かにコーヒーカップを口元に運んだ。私は私で、氷が少し溶けたフラペチーノを吸う。今更だけど、大きいのを頼まなきゃ良かった。正月二日目の晩酌が始まった画像が届いて、何時に帰れそうか想像を巡らせた。

『一月二日（月）』——浪川瑞希編

初出　令和三年二月一二日　noteにて公開

一月三日（火）

娘の小さな手を引いて、バスを降りた。交代乗務員の前を横切って、アルプラザへの横断歩道を渡る。寝起きでもご機嫌に歩いてくれている。

――パンと牛乳と、他に何かいる？

――卵かな。

――了解。

アルプラザは、まだまだ正月気分。ごった返す食品売り場で最低限のモノをカゴに入れ、お利口さんだった亜衣のご褒美にリンゴジュースも。後で芽衣に怒られるかな？　まぁ、良いさ。

セルフレジを終え、アルプラザを出る。道なりに茨木川を越え、右に左に歩けば家に着く。誰も居ないつもりだったけど、灯りが点いてる？　ドアを開ければ、見慣れない靴もある。

亜衣は空になったリンゴジュースを僕に渡し、自分で靴を脱いで中へ入った。リビングから芽衣と男性の「おかえり」が聞こえてくる。

「ああ、牧人くん」

「お邪魔してます」

芽衣に買い物袋を差し出し、リンゴジュースのパックを流しの脇へ置いた。背中のリュックをテーブルに降ろしながら、「ジュース飲ませちゃった。ごめんね」と謝ると「お出掛けだもんね。仕方ないよ」とパックを摘んで捨ててくれた。

「お祖母さんどうだった？」

「元気にしてたよ。他のみんなもピンピンしてた」

リュックから、パイナップルケーキ、台湾茶、特別なパッケージのリプトン、南京町でも買えそうな月餅、調味料が出てくる。要らないと言ったのに、作りすぎたお節や手作りスイーツも入っていた。

「そっちはどうだった？」

「長男嫁の予定と映美の話で持ち切り」
「桃子さん、予定日いつだっけ？」
亜衣と戯れている義理の弟に視線を送る。牧人は、亜衣にアクロバットな高い高いを繰り出しながら、「今年のGWです」と答えた。「妊婦を一人にしてよかったの？」と訊くと、「お義父さんの迎えで実家に行っちゃったんで、姉さんを送って行けって」と言った。
「それはありがとう。パイナップルケーキぐらいしかないけど、一つ持って帰る？」
「あ、じゃあ、いただきます」
要冷蔵の品々は、出した側から芽衣に片付けられていた。三本積み上げられていた山から、一本を牧人の方へ移す。
「ちょっと早いけど、晩ご飯も食べてく？」
芽衣は僕の隣に座り、飲みかけのコーヒーを飲む。僕は入れ替わりに空いたキッチンへ入り、蛇口を捻って手を洗う。
「いえいえ。もうお暇します」
牧人は、亜衣を床に下ろす。亜衣はまだまだ遊んで欲しそうにしがみつくが、「ごめんね」と姪の頭を撫でながら、牧人は上着に手をかけた。芽衣は亜衣を手招きし、膝の上に座らせる。
「ゆっくりして行けばいいのに」
「ゆっくりしたいんですけど、向こうのお義父さんが『早く来い』らしいので」
牧人は上着を羽織り、スマホの画面を見た。返事を送ったのか、顔を上げた。パイナップルケーキを持ってきた紙袋にしまい、そのまま玄関へ向かう。
「アレ、クルマ？」
「ええ。その辺のパーキングに」
「じゃあ、ガソリン代と料金だけ」
「いえいえ。また姉さんにはお世話になると思うんで」
玄関まで見送りに来た亜衣の頭を撫で、「じゃあね」と声をかけると、そのままドアの向こうへ出て行った。薄暗がりの中を近場の駐車場へ向かって颯爽と歩いていく。
さてさて、いつもの焼きそばをいつもの分量、作るとしますか。

『一月三日（火）』――森田康徳編

初出　令和三年二月一二日　NXZ（旧サイト）にて公開

一月五日（木）

ほんの数分前まで元気に走り回っていたコーギーは、いつの間にかお行儀の良い先導役に様変わり。黒の割合が強い濃い茶色の背中と対照的に真っ白なお尻を眺めながら、のんびり散歩するのは悪くない。

冬休みで静かな三島中学校の横を通り、JRに沿うように右手へ曲がる。安威川の上にかかる水色の橋を渡りかけたところで、犬のリードを握っていた孫の智希が足を止めた。

「安威川に沿って帰るよ」

我が孫ながら、まだ耳慣れない声。声変わりが落ち着けば、次第に慣れるのだろうか。足元のコーギーは白い息を吐きながらこちらを見上げる。

「お姉ちゃんによろしく」

私が持っていたビニール袋を智希に渡す。智希はケータイショップでもらったらしい、犬のキャラクターがデザインされた布マスクをつけ、河川敷へ降りて行こうとする。

「くれぐれも、走るんじゃないぞ」

「分かってるよ」

言葉ではそう返しながら、すでに軽く早歩きになっている。ビニール袋はガサガサと音を立てながら小さく揺れている。まぁ、汁漏れ防止は念入りにしたそうだから大丈夫だろう。

夕暮れにはまだ早い河川敷。智希の他にも、下流に向かって走る市民ランナーの姿が見える。高架下でトランペットやオカリナでも吹いているんだろうか。ランニングコースを避けてダンスの練習に励んでいる中高生もいる。寒いのに、立派なもんだ。

よそ見をしていると、智希の姿は見えなくなっていた。

真っ直ぐ帰っても晩酌にはまだ早い。橋を渡り切って、図書館と郵便局でも寄って帰ろうか。このまま道なりに行って、Amazonの倉庫を越えれば中央図書館が見えてくる。

歩きながらスマホを取り出し、履歴から「武藤」を押す。数回の呼び出し音で、

すぐに嫁が電話口に出た。

「ああ、史穂さん。私です。先日は遅くまでどうも」

智希を送り出した件を伝え、取り留めのないやりとりをして通話を切った。その間に、交差点を渡る。伏見屋さんの豆腐を買って帰るのはまた今度だな。いや、豆腐好きの孫娘を連れて長女がウチに来るのは次の週末。立ち寄る郵便局を変えて、図書館の帰りに立ち寄ろう。

少しずつ暗がりが増してきて、冷えも徐々に強くなる。茨工のグランドを見ながら右手に折れる。久しぶりの中央図書館。窓際の椅子に深く沈み込んでる同年輩もチラホラ。自習室もいっぱいだ。

いつもなら文庫本を適当に眺めて帰るところだが、ペットの棚でも見て行こう。図書館の左手奥へ歩を進めると、カバのマスクが目についた。智希のマスクとは違うリアルなタッチのカバの口元。それを身につけた姿勢の良い佇まい、流れるような所作は見覚えがある。

こちらの視線に気がついたのか、カバマスクの女性がこちらへ顔を向けた。目元しか分からないが、全体的な雰囲気はやはり見た気がする。なんとなく目を逸らし、近くの棚へ視線を向ける。興味のない本の背表紙を見ながら横目でみると、先の彼女が隣に立った。

「先日の攻略本、来週には入荷します」

「え、ああ、それはどうも」

カバマスクの君は颯爽と自動貸出機の方へ歩いて行った。新作ゲームの攻略本なんてもうどうでもいいのだけど、週末の予定が済んだらまた寄ってみよう。太田イオンの、カバマスクの書店員さん、か……。

『一月五日（木）』——武藤幸次編

初出　令和三年二月一二日　Mediumにて公開

一月七日（土）

沙綾が物珍しそうに、居住スペースのリビングやダイニングを眺めている。私は私で、そこに娘がいる光景を新鮮な気持ちで見ている。居間や吐き出し窓の向こうの景色を確かめると、いつも通りの手付きで使い込まれた椅子に腰を下ろした。隣に置いた紙袋を覗き込み、カバのぬいぐるみを取り出した。

「カバの何がそんなにいいのかしら」

「ただのカバじゃなくて、コビトカバよ、コビトカバ」

カバのぬいぐるみを抱えて、キョロキョロしながら辺りをウロつく。何かを思いついたように階段の下へ降りようとするから、「サロンスペースにカバはダメよ」と呼び止めた。

「あの空間に置いていいのは、ホワイトタイガーだけ」

沙綾は不満げな声を漏らすけど、私は首を振って改めて否定する。そこで面倒臭くなったのか、隣の和室へぬいぐるみを置いた。

「ニフレルのホワイトタイガーだけど、ファミリーランドのホワイトタイガー、だっけ？」

「そう。宝塚の空気をちょっとだけ、ね」

ニフレルで買ったぬいぐるみに宝塚の要素は微塵もないし、ファミリーランドも閉園してから永いけど、サロンのイメージを少しでも補強してくれたらと思って置いている。リラクゼーションに丸いコビトカバも悪くないけど、ハイソなイメージは保ちたい。

テーブルに戻ってきた沙綾にコーヒーを出す。沙綾はスマホの画面を見たまま椅子に座る。

「一輝、もうすぐだって」

沙綾は顔を上げ、コーヒーを啜った。時計に目をやると、もうそろそろ一七時半。お店の予約は一時間後だから、流石に間に合うだろう。沙綾はコーヒーを飲みながら、インスタでも見ているらしい。

「あっちの部屋はどう？」

スマホの画面をスリープにして、テーブルに置いた。

「まだまだ、な〜んにも」
「全部持ってきちゃったけど、良かった？」
沙綾は頷きながら、「今のところは」と言い添えた。スマホを手に取り、写真を見せてくれた。少ないなりに家具はあるものの、部屋の広さを持て余しているといった感じで、部屋に馴染んでいる、納まりがいいという雰囲気ではない。
「彼は才能豊かなデザイナーさん、じゃなかったっけ？」
「外側と中の空間づくり、はね」
「お友達のインテリアコーディネイターさん、紹介しようか？」
私が返したスマホを受け取りながら、沙綾は首を振った。
「春までに決着つかなかったら、その時はお願いするかも」
沙綾のスマホに、新しく通知が届いた。「一輝、駅に着いたって」。彼女はスマホを仕舞い、そそくさとコートに袖を通し始める。私は汚れのないシンクに、二脚のコーヒーカップを置き、支度が済んだ沙綾に、「先に行ってあげて」と声をかけた。彼女はなんの遠慮もなく、自分の鞄を肩にかけて階段を降りていく。
戸締りを確かめ、空調を切って、灯りを消す。いつもの家、いつもの暗がりが少しだけ広く思えた。和室のコビトカバの頭を撫でて、玄関へ。靴を履いて待っている沙綾と共に家を出て、ちょっぴり賑やかな土曜日の住宅街を、地元駅の方へ向かって歩き始めた。

『一月七日（土）』——奥野朋子編
初出　令和三年二月一四日　Pixivにて公開

一月九日（月）

Slackの雑談チャンネルを開いて、今日の予定を確認する。西宮へ向かうにはまだ早い。明朝の福男選びに向け、今夜から現地に前乗り。その後は歓迎会を兼ねた飲み会も開かれる。

「くじ引きした後はどうするの？」

出かけるための身支度を万全に整えた沙綾が、スマホを触りながら言った。

「取引先のお宅に泊めてもらえる、だって」

「ふーん。じゃあ、手ぶらじゃダメだね」

「あ、そうか」

持っていけるものが、何かあっただろうか。そういえば、晃が持ってきたヱビスの五〇〇mlがまだ冷蔵庫に残っている。クローゼットに突っ込んでおいたクーラーボックスを開け、スカスカな冷蔵庫から缶ビールを取り出しては詰めていく。運べる程度の量にとどめて、クーラーボックスの口を閉じた。

壁の時計を見上げると、時刻は一六時一〇分。ソファでくつろいでいた沙綾はスマホをカバンに仕舞うと、スッと立ち上がった。すぐ近くのコンビニにでも行くような、財布とスマホしか持っていなさそうな荷物だ。

「あ、もう行く？」

流れるように玄関へ向かう沙綾に声をかけると、彼女は顔をこちらに向け、開いた手をひらひら振った。

「そっちも忙しいだろうから、見送りとかいいよ。一人で帰れる」

せめて駅前のバス停まで、と言いかけたところで、彼女はこちらを見やることなく靴を履いた。「じゃあ、また連絡するね」と言い残し、ドアを開けて出て行った。

――東京でもニュースに映るよう、頑張って。無理は禁物。

――ありがとう。そっちも気をつけて。

すぐに既読が着いた。窓から下を見ると、駅の方へ向かうそれらしい背中が見えた。周囲を行き交うまばらな人影は背中を縮めて歩いているのに、沙綾はキビキビと人の間を抜けていく。

空調の効いた室内ではピンとこないが、今夜は寒くなるかもしれない。貼るカイロの在庫も確かめておこう。なければ、駅前のコンビニか薬局を覗けばいい。

沙綾の予定に合わせて一緒にバス、JRで新大阪まで見送っても良かったけど、僕の方が夜通しになるなら早すぎる、と彼女の方から断られた。シャワーを浴びて、身支度を整えてから行け、と沙綾に言われた通りの段取りをこなす。

完全に身の丈オーバーの、一人では広すぎる4LDK。一人暮らしの部屋から持ってきた調度品を全て置いても、全く格好がつかない。家具も家具で安物なのが良く分かる。

内装の件を晃に相談してみたが、沙綾と暮らし始めるまでに納得がいくレイアウトになるかは分からない。部屋を譲ってくれた彼女の母のこともあるし、一応「気鋭のデザイナー」でもあるし。「ここに住んでいること」をもっと活かす、演出することも考えないと。

その辺りも含めて、今夜、社長に相談してみよう。

立派な部屋には全く馴染まないスポーツウェアを引っ張り出し、替えの下着も持って脱衣所に足を踏み入れる。全く肌寒さを感じない脱衣所で、姿見を見ながら服に手をかける。鏡に映った中肉中背の自分の裸体に、怪我だけはしてくれるなよと念じてみた。

『一月九日（月）』——浪川一輝編

初出　令和三年二月一四日　NOVEL DAYSにて公開

一月一〇日（火）

「小野寺さん、平和堂のところまで来たよ」
武藤さんが顎で信号を示した。
「あそこのマクドナルドまで」
「分かってる、分かってる。もうちょっとだけ頑張れ。笠井さんは、もう良いですよ」
私の背中に手を添えてくれている笠井さんは、首を振って「最後まで付き合います」と眼鏡の向こうの優しそうな目を細めて答えてくれた。穏やかで優しい雰囲気の笠井さんがめちゃくちゃイケメンに思える。などとぼんやり考えていたら、肩を貸してくれている武藤さんが、「さぁ、歩いて」とグイグイ安威川の方へ歩かせてくれる。
二人のおじさんに支えられていると、だんだん足に力が蘇ってきた。信号がまだ二つ三つあったのに、あっという間に北摂つばさ高校前のマクドナルドに辿り着いた。
「本当にここで良いの？」
武藤さんはお店の中まで連れて行ってくれて、ゆっくりと私を座らせてくれた。笠井さんはコーヒーと水を持ってきてくれた。
「ああ、すみません。お代」
財布を探してカバンに手を伸ばしたのに、笠井さんは「いい、いらない」と言う。私の向かいに腰掛けた武藤さんは、笠井さんに両手を軽く合わせて、「付き合わせちゃって、すみません」と言った。
「いえ、どうせ帰り道ですし。沢良木の市営住宅あたりなんで」
「ああ、それで。じゃあ後は僕が見てるんで、また『にしじま』か『かどや』で」
「それじゃあ、よろしく」と頭を下げ、笠井さんはお店を出た。武藤さんは自分のコーヒーも注文してくると、再びどっかりと向かいに座った。しきりに水を飲めと勧めてくる。
「武藤さんも、すみません」
「いやいや、ウチの妹が無理やり飲ませちゃってたでしょ。ペースも考えないで」

武藤さんの妹さん？

「夕方に帰った、高橋香織。アレ、実の妹」

「え、そうなんですか？」

そう言われると、目元というか、全体の雰囲気は似ていた気がする。武藤さんは通知のなったスマホを見て、申し訳なさそうな顔を私に向ける。

「ごめん、妻が『まだか』って送ってきちゃって」

「あ、私のことはお気になさらず」

「じゃあ、とにかくお水飲んでね」と言って、武藤さんは自分のカップを持った。奥さんによろしくお伝えください、と遠ざかっていく背中に伝えると、片手を上げた身振りが帰ってきた。

水が入った手元のカップを口元に運び、ぼんやりと外を眺める。デリバリーから戻ってきた店員さんは、ほんの数分で私服に着替えてバックヤードから出てきた。デリバリーの制服を着ている時は気がつかなかったけど、見覚えがあるような……。

「もしかして、ルミ？」

マクドナルドの店員さんはこちらをジッと見て私の名前を呟いた。その声にも聞き覚えがある。

「彩夏？」

彩夏は小さく頷いた。通行の妨げにならないよう、私の方へ体を寄せる。彼女に「今、実家？」と尋ねると、「そっちは？」と質問が返ってくる。否定も肯定もない沈黙の後、彩夏は「じゃあ」とお店を出ていった。

彼女と入れ替わりに店内へ吹き込んだ冷たい空気に、頭が少しずつ冴えてくる。とりあえずコーヒー飲んで、トイレ行こう。

『一月一〇日（火）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年二月一四日　小説家になろうにて公開

一月一四日（土）

B棟のスタバでレジ前の列に並んでいたら、二つ前で注文を終えたメガネのおじさんが僕を見て、「この間はどうも」と声をかけてきた。「そういえば、ここの学生さんだったっけ」と軽く挨拶を交わし、熱々のコーヒーを持って商工会議所の方へ歩いていく姿を尻目に自分の注文を済ませる。

「流石は経営学部。いや、英才教育の賜物か」

「ご立派だねぇ」と呟いて、先に座っていた東堂は自分のコーヒー代を差し出した。

「そりゃどうも。まぁ、そういうのも春までだけど」

「それで心理学ってのは恵まれすぎっていうか、天邪鬼っていうか。ボンボンの戯れよ」

東堂は少し声のボリュームを上げて言う。隣の座席では、心理学部のテスト勉強をしているらしい。他の席からも冷ややかな視線が送られてくる。「すみません」と軽く頭を下げ、東堂には声を抑えるよう手で示す。

「お前はいい友達だと思ったんだけどなぁ」

「学部を移ったって、友達は友達だろ」

「ちゃっかりネットワーキングしてる奴のセリフなんて、信じられるか」

言葉とは裏腹に、不貞腐れた表情を浮かべている。

「心理分析してんだろ？」

「バレた？」

東堂の握り拳が小さく肩に押し込まれる。周囲の迷惑そうな視線が流石に気になった。空になった二人分のカップを片付け、そのまま公園の方へ出る。まだまだ外は刺すように寒い。

元気に走り回る近所の子供たちを避けながら、駐輪場の方へ歩を進める。ぐだぐだ言う割に、東堂は隣を歩く。その視線は、少し先の立て看板を見ているらしい。

「一回ぐらい、ああ言う店で飲んでみたいけど、いい値段するなぁ」

黄金のヱビスビールと様々なフレーバー、色とりどりのビアカクテルが並んだメニューは、酒が飲めなくても見て楽しい。

「量は少なかったけど、結構旨かったよ」
この前食べたハンバーグは、中々良かった。次来るときは、ビールも飲んでみたい。足を止めて値段を確かめていると、隣から強い視線を感じた。東堂の目には怒りの色が見える。
「いや、バイト先の懇親会でさ」
「へー。ただ酒か？」
「酒は飲んでないよ。誕生日まだだし」
「え？　いつ？」
「一月三一日。二〇〇三年の早生まれ」
律儀に守る必要もなかったが、大人だらけの仕事の場、学内の会場とあっては流石に控える。「結局ただ飯だろ」と噴火しそうな東堂は、さっきまでの怒りを忘れたように、爛々と目を輝かせている。
「じゃあ、今度飲みに行こう。原田の誕生日祝いに」
東堂の勢いに、「いや、いい」と断る意思は追いやられる。完璧にど平日、一人の誕生日と思っていたけど、全て彼の段取りで押し切られそうな予感。
「俺の友達も呼んでいい？　サシ飲みじゃ寂しいし」
嫌だと言っても、彼は止まらないだろう。東堂はスマホでメッセージを打ち込みながら、足早に自分の原付へ向かう。東堂に遅れて、僕は自分の自転車を駐輪場から引っ張り出した。
「じゃあ、そういうことだから。段取りしとくわ」
お手柔らかに、と声をかける間もなく、東堂はヘルメットをかぶった。流れるような動きで目の前の車道へ出ていく。明るい「じゃあな」の声を残し、東堂のバイクは交差点を右に曲がった。

『一月一四日（土）』――原田哲朗編
初出　令和三年二月一五日　ノベルアップ+にて公開

一月一五日（日）

二〇二三年、令和五年。年明けがまだ二週間前というのがウソに思えるぐらい、身の回りで大小様々な事件が起こる。福男絡みで新人がテレビに見切れたらしいアンドウさんのところからは、仕事の相談がひっきりなしに飛んでくる。

おかげさまで日曜日だというのに、バイトの学生くんも出社してくれて、詰まり気味の仕事をどんどんこなしてくれている。しかし、このバイトくんもバイトくんで、話題を欠かさないサービス精神を持っていた。

「哲朗くん、本当に心理学部生になるの？」

「ええ、まぁ」

哲朗は返事しながらも、目はモニターから動かさず、指はキーボードを叩いている。

「ちゃんとご両親に相談した？」

「ええ、まぁ」

哲朗はさっきと同じトーンで間を置かずに返してくる。

「可能なら、大学院とかその先も考えてたり」

「カウンセラーとか、学者志望だっけ」

「人の根というか、気持ちを追究したくって」

哲朗の手が止まり、顔がこちらに向けられる。同時に「ご確認、よろしくお願いいたします」と哲朗からのメッセージが飛んできていた。すぐに森田さんが反応を返し、チェックに入ってくれる。

「神学でも経営学でもないってところが、君らしいよ」

森田さんのOKが出て、とりあえず一案件ケリがついた。最終着地は明日で、最後に一悶着あるかもだけど。一息ついて身体を解している哲朗と、次の案件について打ち合わせを、と応接スペースに目をやると手前の席でMacbookを叩いていた香織が、少々強めにエンター機を押した。

香織は「ふぅ」と一息つくと、自分の持ち込んだ荷物を片付けていく。炭酸水のペットボトルと自分のパソコン、電源コードをカバンに詰め込み、帰り支度を整える。自分のスマホを弄りながら顔を上げた。

「ルミちゃんが、お兄さんによろしくって」
香織はコートをハンガーから外しながら、自分の席に座ったままの哲朗の方を見る。
「次は哲朗くんだね」
哲朗は口角を上げながら、乾いた声で「お手柔らかにお願いします」と答えた。
香織はコートを羽織り、カバンを手にオフィスを後にした。それを追いかけていた哲朗に視線を送る。iPadを持って立ち上がり、応接スペースを指し示す。
「打ち合わせ、良い？」
「ああ、はい」
哲朗はノートとペンを持って立ち上がる。応接スペースの椅子に向かい合って座る。iPadでブラウザを立ち上げ、見せたいサイトの読み込みを待つ。
「哲朗くん、誕生日いつだっけ？」
哲朗はペンをいじりながら、「今月の末、三一日です」と答えた。
「もうすぐだ。流石に誕生日ぐらいは帰るんだろ？」
「いやぁ、先約が入っちゃって……」
目の前の青年は、香織への返事とあまり変わらないトーンで言う。母親譲りの柔和な雰囲気と優しそうな目で、僕の説明を従順に聞いてくれている。
「俺、仕事、振りすぎてる？」
「いやいや、全然そんなことないです」
哲朗は手振りも添えて否定する。「むしろ、もっと振ってください。勉強になります」と付け加えた。
「本当にちゃんと帰るんで」
「そう？じゃあ、頼んだよ」
哲朗との打ち合わせを終えると、彼は自分の席へ戻って行った。新しい案件の資料を確認していく。彼の母親、明子さんからの連絡にどう返信するか考えながら、僕は自分の席に腰を下ろした。

『一月一五日（日）』——武藤幸弘編
初出　令和三年二月一七日　カクヨムにて公開

一月一七日（火）

テレビは朝から阪神大震災の特集をやっていた。もうそろそろ三〇年前の話。在京系の全国ネットでは当時の映像と追悼式典の映像とを流すぐらいで、恒例行事は終了した。

五年前、この辺りを襲った大阪北部地震の痕跡は、流石に目立たなくなっている。新型コロナも含めた災害続き、延々とブルーシートが残ったままかと思いきや、最近はほとんど見られなくなった。

夕方の日課となった散歩を兼ね、西河原公園をグルグル周り、太田のイオンへ入る。年末に買ったお酒が切れ、いつもの関西スーパーとは目先を変えて、こちらのリカーショップを覗いてみる。これという目ぼしいものは見つからなかったが、地元の清酒と読み方が分からない芋焼酎とを一本ずつ購入した。

財布から、本屋でもらった控えが落ちた。リュックに入れた酒瓶に気を付けながら、小さな紙を拾い上げる。そうそう、コレも行かないと。

エスカレーターで二階に上がり、コジマのゲームコーナーをチラッと長め、ふたば書房の前に行く。レジに向かい、注文書の控えを出すと、「浪川」の名札をつけた女性が応対してくれた。

「武藤さまですね。少々お待ちください」

流れるような動きでバックヤードに入り、賑やかな表紙の本を持って戻ってくる。

「こちらで、お間違いないですか？」

浪川さんは、ゲームの攻略本を持って見せてくれた。「間違いありません」というと、「お包みしますか？」と聞いてくる。

「いえ、手提げ袋だけ」

「有料になりますが、よろしいでしょうか？」

「ええ、結構です」と答えると、厚手のビニール袋を用意してくれた。支払いを済ませながら、どこかで見覚えのあるような女性を頭の上から下まで、ジッと眺める。

「もしかして先日、図書館でお会いしました？」

浪川さんはにこやかに笑みを浮かべ、カウンター越しに商品を手渡してくれる。
「ありがとうございました」
浪川さんは深々と頭を下げる。私は後ろ髪を引かれる思いもありながら、次の客へレジを譲った。彼女は目の前の客に応対する。
マスクの下をやっと見た。誰もがハッとするような美人ではないが、ちょっぴり儚げな京美人っぽさがある。スッとした姿勢もあって、和装がとても似合いそうだ。
手に下げた攻略本の重さと、背中の酒瓶の重さを感じながら、エスカレーターを降りる。食品売り場も見て帰ろうかと思いきや、流石に特売日の夕方で人が多い。諦めてイオンを出る。
次に智希が来るのはいつになるか分からない。明日とか、明後日にでも、幸弘の家に行って攻略本を届けてこよう。
賑やかな西河原公園の横を抜け、総持寺の駅へ向かう学生さんの後ろをついていく。私の後ろから、イオンから出てきた三人乗りのママチャリが駆け抜けていく。
安威川の方から吹いてくる風には、公園の緑の匂いが載っている。
一七一号線のところで道路を二度渡り、関西スーパーの方へ足を向ける。向こうに見えた自転車を避け、後ろからやってくる自転車の気配にも気を配る。代わり映えのない、いつもの景色。
目新しい芋焼酎をどう飲むか。ああでもない、こうでもないと考えながら住宅街へ入っていく。

『一月一七日（火）』――武藤幸次編

初出　令和三年二月一七日　Mediumにて公開

一月一九日（木）

彩都西から徒歩二分のマンションに住み、千里中央のデザイン事務所に勤務しているのに、平日の昼から茨木駅前の本通商店街で、ガストに入店するとは思わなかった。ランチタイムには少し遅い時間帯らしく、チラホラ空席も見られる。

目の前にソファ席に、何度目かのドリンクを取ってきた男子学生が腰を下ろした。メロンソーダを一口飲むと、テーブルに置いたMacを弄り始める。僕もここで一仕事しようか考えたけど、デザインを考えるには周りの目が気になりすぎた。

目の前の男子学生、哲朗くんはMacの隣に広げたノートへ、何かを書き写している。

「手書き派なんだね」

哲朗は軸の太いペンを止め、こちらをチラリと見て「ええ、まぁ」と曖昧な笑みを浮かべた。すぐにクリーム色の厚手の紙に目を落とし、メモの続きを太めの線で書いていく。罫線のないノートに、余白をたっぷり取っている。

「レポートの清書とか提出物は完全にコッチなんですけど、考えるときは手の方が良いというか、ペン先で考えてるというか……」

「書けるか否かより、書き心地が大事？」

哲朗くんはちょっぴり驚いたように僕をみる。書けたらなんでも良いコスパ至上主義の奴より、信用できる。まぁ、そもそもの育ちが違うか。でも、

「立派な親父に反発する俺たちがいると、下がしっかりするのも共通項か」

「え？」

「ウチは政治家なんて立派な家系じゃないけど、弟が家業継ぐって頑張っててさ」

哲朗くんは、「へ〜」と軽い返事をしながら、ペンにフタをしてノートに挟んだ。両手を膝の上に置いて畏る。

「家族は元気にしてましたか？」

「お父さんとはお会いしなかったけど、お母さんも妹さんも元気そうだったよ」

「そうですか……」

嬉しそうな表情を浮かべながらも、彼の声は少し沈んだ声だった。

「LINEしても、全然既読にならないって、妹さん怒ってた」

「こっちで好き勝手にやってるんで、メールもLINEも開きにくくって」
「そっちの方が気楽なら、それで良いんじゃない？その気持ちは、俺もよく分かる」
哲朗くんは、さっきの驚きよりやや強めの驚きを顔に浮かべた。
「帰りたくなければ、帰らなくていい。俺も似たようなもんだし」
実家を出てそろそろ丸三年。親父の顔を見なくなったのは、そこからさらに四年前。
「でも、会えるんなら後悔する前に会いに行った方がいいし、兄妹とはやり取りしておいた方がいいとは思うよ。もちろん、君が辛くなければだけど」
哲朗くんの顔つきが、ちょっとずつ変わっていくような気がする。社長も武藤さんも、コレを狙ってランチを段取りしたのか。二人とも、人が悪い。
哲朗くんのスマホに、リマインダーの通知が出た。もうそろそろレポート提出の期限らしい。哲朗くんが荷物を片付けている間に、二人分の伝票を摘む。視界の隅で身支度が整うのを気にかけながら、さっさと支払いを済ませてしまう。念のために、領収書をもらっておく。
お店を出たところで財布を出そうとする哲朗くんに、いらないと手で合図する。
「なんか、色々とすみません。ありがとうございます」
「いいよ、いいよ。それより、早く行きな」
哲朗くんは元気に「失礼します」と頭を下げ、自転車を止めた場所へ小走りに駆けていく。今回のランチ代、ちゃんと経費で落ちるのか。それを考える僕の横を、自転車に跨った哲朗くんが軽い挨拶を寄越しながら通り過ぎた。

『一月一九日（木）』——浪川一輝編

初出　令和三年二月一七日　NOVEL DAYSにて公開

一月二〇日（金）

章二さんは、勤め人時代のお友達と合同の誕生日会だと三宮へ出かけて行った。新年会も兼ねた毎年の恒例行事。お昼も晩ご飯も考えなくていいのは気楽だけど、自分一人の食事は、それはそれで面倒臭い。

ちょっと暖かい気候に誘われて気ままに出歩いてみたら、何故か、ロイヤルホストでiPadに向かって筆を走らせている。もう少し暖かくなればイーゼルと椅子を持って絵を描くのだけれども、それをやるにはまだ寒い。

前に書いた手書きの線画をiPadに取り込み、その上に何色を置くか考えながらああでもない、こうでもないと何度か塗っては消してみる。絵具と紙では難しいことも、デジタルなら簡単にできて非常にありがたい。

流石に漫画家さんはいそうにないけど、家の外に出てファミレスで絵を描くと、なんだか仲間入りしているようで楽しくなってきた。軽いランチにドリンクバーを注文し、時間を忘れて色塗りに集中していると、隣の席から視線を感じる。手を止めて、顔を上げた。

「もしかして、小野寺ルミちゃんのお母さん？」

小学校中学年ぐらいの男の子を連れた二人組の女性に、声をかけられた。男の子の隣に座る女性は彼の母親っぽいけど、その向かいに座っている女性がマジマジと私の顔を見つめている。

「ああ、やっぱりルミちゃんのお母さんですよね？」

娘の名前を何故知っているのか。ルミと私とをどうやって結び付けたのか。一人で困惑してフリーズしていると、女性は「一人で興奮しちゃって、すみません」と謝った。

「ルミちゃんの仕事仲間です。何度かZOOMでお見かけしてました」

そう言われれば、ビデオ会議しているところに入っちゃって、ルミに何度か怒られたことがあったっけ。私からはハッキリ見えなかったけど、向かいの女性も私に見覚えがあるらしい。

「あら、そうですか。その節はお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそお世話になっております。えーっと、私が武藤で、あっ

ちが高橋です。で、」

武藤と名乗った女性が男の子の方を見ると、「ヒラクです」と自己紹介した。

「啓蒙とか自己啓発の啓で、ヒラク」と、彼の母が教えてくれる。高橋さんは申し訳なさそうに口を開いた。

「ルミちゃんこの間、大丈夫でした？」

「この間、何か？」

「先週、ちょっと飲ませすぎちゃいまして……」

「あら、そうだったんですね」

ルミからは、特に何も聞いていない。高橋さんは不思議そうな表情を浮かべているが、武藤さんは「香織さん、ルミちゃん、今は同居してないのよ」と、こちらを向いて「ですよね？」と確認してくる。「えぇ、まぁ」と返すと、

「そうですよねぇ。五年ぐらい前から背景が変わったなぁと思ってたら、家が変わったって言ってました。えーっと、」

武藤さんは私の顔を見て、言葉に詰まった。

「あ、香帆です」

「香帆さんのお住まいは？」

武藤さんの雰囲気に呑まれ、ありのままに答えると「へー、良いところにお住まいですね」と帰ってきた。武藤さんはルミの家の近く、高橋さんは南茨木、天王小学校の近所だとか。

いつの間にか、武藤さんが横に座り、高橋さん達が向かいに座る。iPadの絵を見せたり、啓くんにお絵かきさせてあげたり。夜まで一人寂しく過ごすと思っていたら、娘のおかげでご縁ができた。ルミ、ありがとう。

『一月二〇日（金）』——小野寺香帆編

初出　令和三年二月一七日　MAGNET MACROLINKにて公開

一月二二日（日）

亜衣の着替えを気にかけながら、洗濯物を干している間、早くからウチに来ている敬子が、映美の相手をしてくれている。妻の芽衣は朝のスキンケアを終え、敬子と何か話している。

洗濯を干し終え、掃き出し窓から中に入ると、空になった洗濯カゴを芽衣が脱衣所へ持って行ってくれた。一人で靴下も履けた亜衣は、テレビの前に座って熱心にプリキュアを見ている。もうそろそろ、新シリーズの時期。画面の中はクライマックスにふさわしい盛り上がりを見せている。

映美を膝の上に乗せている敬子の向かいに座った。

「保育士も向いてるんじゃない？」

「向き不向きの前に、資格がないから」

「今から取ればいいじゃん。看護師とダブルライセンスなら、引く手数多だろ？」

「保育士、馬鹿にしすぎ。簡単じゃないって」

敬子は、「ねー」と映美に同意を求めた。映美は楽しそうに「ねー」と反応を返す。

「じゃあ、復職すんの？　そろそろ半年でしょ」

「ま、おいおいね」

看護師一筋だったのに、去年の秋頃に離職してから、自由気ままに生活している。手が空いているからと祖母の介護、老人ホームへの入居手続き、祖母宅の整理なんかも任せっきりだから、無碍に「働け」とも言いにくい。

「あ、そうそう。こんなのも出てきたから、今のうちに渡しておくね」

敬子は自分のカバンから、薄い額に入った賞状と手作り感あふれる冊子を取り出した。実家に置いてきたつもりだったが、祖母の家に仕舞ってあったのか。

「あ、懐かし〜」

脱衣所から戻ってきた芽衣は、五冊ある冊子の中から一番上にあった分を手に取った。無造作にパラパラとめくっていく。

「そこに棚に、飾っておく？」

壁際のカラーボックスに、雑誌が数冊入る隙間は空いている。その上も、賞状

を並べて飾るにはちょうど良い空間がある。芽衣は意地の悪そうな目でこちらを見る。今し方最後まで見た冊子を置いて、次の冊子に手を伸ばす。

「な〜んて、冗談冗談」

「でも、表現者なら恥ずかしがっちゃダメだよねぇ」

「お、さすが敬子ちゃん。分かってる〜」

女二人で楽しそうに笑い合う。賞状と冊子をテーブルの片隅に寄せ、端の方にまとめておく。芽衣は時計を見上げて、「さて、あとはよろしくね」と言って、寝室へ向かった。

敬子はスマホを見て、今来た通知の詳細を読み上げる。

「あっちはエキスポシティで、コーヒー飲んでるって」

「え、もう着いたの？　流石に早すぎない？」

テレビ画面では、まだプリキュアが踊り始めたところだ。

「ゆっくり待ってるから慌てずに〜、だって」

敬子は「とりあえず、了解っと」とメッセージを返した。僕は亜衣と映美の上着を取ってくる。冷蔵庫に貼っていた「フードトラックEXPO」のチラシも外し、万博公園までの道のりに思考を巡らせる。

スムーズに抜けられそうな道をシミュレートしている間に、敬子は僕の手から二人の上着をとって、プリキュアを見終わった亜衣にも着せ始めている。

「じゃあ、行きますか」

敬子の合図で亜衣が玄関に向かう。敬子は映美の手を引いて靴を履かせてくれている。テレビを消し、食卓の上を軽く片付け、車のキーを取って外に出た。

『一月二二日（日）』——森田康徳編

初出　令和三年二月一八日　NXZ（旧サイト）にて公開

一月二三日（月）

Slackで、森田さんからのDMが届く。個人のやり取りは珍しいと言うか、コレが最初だ。通知を辿ると、「フードトラックのケータリング事業とか、認定保育園と看護師とのマッチングサービスとか、どう思う？」とのメッセージ。

Macの画面を見て、メッセージの意味を考えていると、横から藤堂が覗き込んだ。

「どう思うって、随分フワっとしてるな」

「まぁ、具体的な仕事の話じゃないんだと思う」

仕事の話ならそれ用のチャンネルに書き込むだろうし、案件の相談、確度の高い知人からの持ち込みなら、雑談用のチャンネルで「大人の意見」をやり取りしてもらった方が早い。それに、普段の森田さんなら、目的も意味も明確な、取り違えにくいメッセージを送ってくれる。

「お金の目処は立っていないけど、経営学部的にどう思うか、広い意味で聞いてるんじゃない？」

「なるほど。向こうは向こうで、それなりの答えも持ってる、もしくは考えている最中か」

藤堂は芝居っ気たっぷりに眉間にシワを寄せ、「難しいねぇ」と肩をすくめる。彼は自分の腕時計を見て、席から立ち上がった。そろそろ次の講義、テストが始まる。机に広げたMacとノート、筆記用具をカバンに詰め込んで僕も立ち上がる。学食から目的の教室へ移動しながら、東堂に聞いてみる。

「で、どう思う？」

「お前の課題だろ？　オレには他人事さ。それに、」

藤堂は僕に向け、顔の前で指を擦り合わせる。

「タダの相談事ほど高いもんはない。自分にとっても、相手にとっても。俺らが学生だと思われているなら、余計にな」

普段の言動や仕草で見誤るけど、藤堂も流石に同級生。言葉を飲んでジッと見ていると、「なんだよ」といつもの「らしい」反応が返ってくる。

「その上で言うなら、なくはないけど、需要や可能性はそこまで大きくないかな。

専門家、当事者だったらやるだろうけど、俺は手を出さないね」

「オレもそんな気がする。調査、分析で変わるかもだけど。まぁ、後でヒアリングしてみる」

藤堂が先に教室に入り、広い教室の真ん中後ろの空席を確保する。僕はテスト用に間を開けて、席を抑えた。

「で、今のバイトはそういうのをやってんのか」

「パパッとサイト作ったり、サービスを踏まえたアプリ、システムを考えたり、ね。レディメイドの、最低限のマーケティングならすぐできるよ」

「へー。優秀だこと」

同業の先輩、それもバイトじゃなくて本業でやってる森田さんなら、自分よりもはるかに分かっていそうだけど、わざわざ効いてきたのは僕なりの意見、僕なりの視座が欲しいから、だろうか。

藤堂と共にテストを受け、回答のレポートを書きながら、全く関係ないことも考えている。自分なりにできうる精度の高い資料を作ってみて、頓珍漢かもしれないけどディスカッションしてみよう。可能なら、武藤さんや安藤さんも巻き込んでみたい。

気がつけば、あっという間にテストを終えて、帰り支度を整えていた。この後、図書室に寄ってみて、関連資料があるか見てみよう。

「こんだけ良い顔してんのに、心理学部生になるのか」

藤堂は心底残念そうに呟いた。「先に帰る」と藤堂に言われ、僕は図書室の前で独りになった。

『一月二三日（月）』——原田哲朗編

初出　令和三年二月一八日　ノベルアップ+にて公開

一月二五日（水）

小野寺さんの隣で、少し潰した中華ポテトの刺さったフォークを掲げたまま、娘の映美が船を漕いでいた。数分前までは睡魔に抵抗していたようだけど、流石に限界らしい。席を立ち、映美の手から何とかフォークを外してベッドまで抱えていく。

小野寺さんは、小皿に残った焼き飯とエビチリを口に運びながら、私が戻ってくるのを目で追いかける。自分の席に戻って、彼女のカップへお茶を注ぎ足した。小野寺さんは自分の口元を抑え、彼女が一緒に持ってきたペーパーナプキンでエビチリのソースを拭う。

「すみません。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそすみません。お昼までご馳走になっちゃって」

正午より少し早いタイミングで、雁飯店のテイクアウトを提げた小野寺さんがやってきて、映美と共に美味しい中華をいただいてしまった。自分たちの分を払おうと思ったけど、彼女は「商談ってことで、経費にできると思うので」と断った。

娘の食べかけを口に運んだ。

「上のお子さんは、幼稚園でしたっけ。旦那さんは」

「今日は珍しく外出してて、武藤さんのオフィスで打ち合わせ、だって」

三年前頃から基本的に家にいて、普段から積極的に家事も育児も手伝ってくれている。亜衣が帰ってきたらちょっと大変だけど、彼は映美が起きる前には帰ってくるだろう。

「ふーん」と頷いていた小野寺さんは、自分の用事を思い出したように、持ってきた荷物をゴソゴソし始めた。私と彼女の前にあったお皿を流しに片付け、彼女が包装紙で包まれた箱を置く前に、軽く布巾でテーブルを拭いた。

「あぁ、すみませ〜ん」

「いえいえ」と返していたら、小野寺さんは先ほどの箱をそこに置いた。

「年始の会に芽衣さんだけ来られなかったんで、改めてご挨拶に」

「あら、そんな。わざわざ、ありがとうございます」

包装紙を剥がし、箱を開けると中は個包装の洋菓子、ラングドシャっぽい焼き菓子が入っていた。彼女には先ほど、お父さんからもらったと言う神戸のチョコレートもいただいている。

「こんなに色々、良いんです？」

「良いんです。良いんです。今年も、よろしくお願いします」

小野寺さんの動きに釣られ、こちらも座ったまま頭を下げる。

「せっかくなんで、コーヒーどうですか？」

「お言葉に甘えて、いただきます」

さっきいただいたチョコレートも、横に出そう。電気ポットに水を入れ、スイッチを入れる。お湯が沸くまでに、食卓を片付け、流しの食器を洗っていく。台所で洗い物をしている間、小野寺さんは椅子を離れて食卓の周りを見て回る。

「え、康徳さん、文学賞取ってるんですか？」

カラーボックスの上に飾った賞状に目を止める。

「地域の小さな賞だから、何にもならないんですけどね」

二つ、三つ、似たような規模の賞状を置いてある。その隣には、五冊の冊子も並べてある。小野寺さんは美容雑誌でも手に取るように、一冊抜き取った。そのまま自然に、パラパラめくる。

「これも、康徳さんの？」

「彼が学生時代に作っていた、同人誌」

小野寺さんは軽いトーンで「へー」と最後までめくって、冊子を元に戻した。彼女のコーヒーを入れ、食卓に置く。小野寺さんは「ありがとうございます」と言いながら、席についた。彼女は「そっか、書けるんだ」と呟いて、コーヒーを飲んだ。

『一月二五日（水）』——森田芽衣編

初出　令和三年二月一八日　アルファポリスにて公開

一月二七日（金）

「しっかし、森田さんは面白いよね。お付き合いし始めて三年ぐらいになるけど、まだまだ色んなアイディアが出てきそうだよな」

アルコールが入って思いの外大声になっていた自分に自分で驚いている間に、向かいで顔色一つ変えずにグラスを傾ける浪川くんが「そうですね」と言いながら頷いた。隣で顔を赤くしながら黒ビールの入ったグラスを傾けていた新田くんが、グラスを置いて口を開く。

「チャットだとめちゃくちゃ硬いイメージでしたけど、あんなに熱い人だなんて知りませんでした」

「飲ませたらもっと面白そうなんだけど、まだ誘ったことないんだよねぇ」

薄濁りのビールを飲み干した浪川くんが、「森田さん、下戸なんですか？」と訊いてくる。首を振って、「愛妻家のイクメンなんだよね」と返す。

「まだ下の子が小さくて、誘いにくくってさ」

浪川くんは「えっ？」と漏らして新田くんの方を見やる。新田くんは少々気まずそうに、「ウチは二人とも小学生だから」と切り返した。

「すぐ帰すから、もうちょっと付き合ってよ」

自分のグラスを空け、三人分のグラスをカウンターで返して、同じものを注文する。新田くんも、さっきと同じで良いという。自分のスマホを見ている浪川くんの頭頂部に、「君はどうする？」と声をかける。彼は、「自分で注文するんで、大丈夫です」と答え、「すみません、ちょっと行ってきます」とスマホを持って階段を降りて行った。

注文を済ませ、大きい方のグラスを受け取って元の場所へ戻る。財布を出そうとする新田くんに、要らないと手振りで示す。

「すんません、お義兄さん」

「いや、もうただの仕事仲間だよ。慎一郎くん」

慎一郎は後頭部を指でかきながら、少し身体を小さくしてビールに口をつけた。僕は浪川くんの立っていた空間を見つめながら、自分が注文したIPAをグッと流し込んだ。慎一郎はポップコーンを摘んで、指先で転がした。

「香織は、元気ですか？」
「さあね。年相応にガタは来てるみたいだけど、大病はない、とは思う」
慎一郎も自分の家庭を持って長いだろうに、2年弱しか関係を持たなかった妹を気にかけてくれている。安藤さんのところに居ると聞いたときは、世間の狭さに驚いたっけ。
「で、彼はどう？」
そこにいない浪川くんを想像しながら、慎一郎に訊いてみる。慎一郎はビールを飲み、グラスから手を離して「優秀ですよ」と答えた。
「若くて優秀なだけに、危なげですけど」
「だから、人生経験豊富な君が相棒なんだろ？」
慎一郎は「自分なんて」と謙遜するが、少なくともウチの妹たちより遥かにマトモだ。彼にそう言われる浪川くんも、最近の哲朗を見れば、自分よりも有能なのはよくわかる。
下から冷たい空気をまとって、浪川くんが戻ってくる。彼の後ろから、背の高いモデルのような美女が姿を現す。少々意識の高い、立ち飲みクラフトビアバーとはいえ、流石に馴染まない。
「へー、立ち飲みなの？」
浪川くんの彼女らしい女性は、カウンターのメニューをじっくり読んでいる。隣で注文が決まるのを待っている浪川くんも、並んで立つと背の高さがよく映える。
「あれは相当優秀だぞ、慎一郎」
義理の弟だった男を見ると、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔で、「ですね」と呟いた。

『一月二七日（金）』——武藤幸弘編

初出　令和三年二月一八日　カクヨムにて公開

一月三〇日（月）

隣に座る女性は、空になったグラスを握りながら、カウンターの上から下げられている紙を順番に見ていく。読み方がよく分からない銘柄が書かれた紙は、入り口の方までズラッと並べられている。後ろの方を気にかけながら、身体をグッと引いて遠くの字を読もうとしている。

「もう一回、十四代もらおうかな」

隣で注文を待っている店員さんに、少し先の紙を指した。店員さんがメモを取る間に、私に注文を促した。まだ何口か残っているけど、同じ奴でいいかな。手元の小さなホワイトボードの文字を指し、「コレで」と告げる。「十四代と、東洋美人ですね」とメモした店員さんは、隣の女性、郁美さんの空のグラスとコースターがわりの小皿を回収すると、すぐに戻ってきて、背後の冷蔵庫を開けた。ズラッと並ぶ酒瓶から、注文した物を探してきて、私たちの前で「こちらですね？」とグラスに注いでいく。

自分の分が注がれる前に慌ててグラスを空にして、今入れてもらった新しいお酒を一口嘗めた。郁美さんは、ナスの辛子漬けを摘む。

「ゴメンね。オバさんの徘徊に付き合わせちゃって」

「こちらこそ、わざわざご足労いただいて、すみません」

郁美さんに軽く頭を下げると、少しだけクラクラする。「いいの、いいの」と言いながら、彼女はスマートウォッチをちらりと見た。

「時間、大丈夫ですか？」

「全然大丈夫。まだ九時前だし、子なしの独身アラフォーだし？」

そういえば、さっきもそんな話を聞いたっけ。

「ルミちゃんこそ、こんな時間にオバさんとサシ飲みしてていいの？」

郁美さんの視線が刺さる。優しい言い方が余計に苦しい。お酒を口に含む。

「仕事が恋人〜とかやってたら、十年ぐらいあっという間よ」

すぐこうなる、と郁美さんは自分を指した。嘲笑気味にお酒を飲み、残っている料理に手をつける。居酒屋で照明は少し落としてあるけど、十分綺麗に見える。容姿や性格の好みはそれぞれだろうけど、真剣に調理をする様と彼女の作るプロ

の味に、心もお腹も掴まれない男性が一人もいないとは思えない。
「私は、素敵だと思います」
郁美さんは一瞬動きを止めて、私の方を見た。
「年齢なんて聞かなきゃ分かんないし、素敵な生き方だと思うし」
郁美さんは、「ありがとう」と呟くように言った。自分のグラスを傾け、日本酒を一口飲んだ。
「ルミちゃん、いい子だね。香帆さんも、いいお母さんだわ」
郁美さんはニッと歯を見せて笑うと、グラスに残ったお酒をグッと飲み干した。私のグラスを見て、「次、何する？」と言う。
「気分いいから、奢っちゃう。選んどいて」
そう言いながら席を立つと、すぐ後ろのトイレに入った。グラスのお酒は、まだたっぷり残っている。隣に置いた水を飲み干し、お冷やのおかわりをもらう。
店員さんが、水がたっぷり入った大きなグラスを交換するのと同時に、郁美さんがトイレから戻ってくる。彼女は椅子に戻りながら、「決めた？」と訊いてくる。
「いや、もう……」
目の前でバツを作る。
「そう。遠慮してない？」
私が頷くと、彼女は自分の水をゆっくり飲んだ。

『一月三〇日（月）』——小野寺ルミ編
初出　令和三年二月一九日　小説家になろうにて公開

二月一日（水）

向かいの席でホットコーヒーを飲む瑞希さんは、隣の席に置いた大きな紙袋を見た。

「本当に、半分出してもらって良かったんですか？」

紙袋の中から、プレゼント用の包装紙とリボンが覗いている。

「お兄さん、えーっと、」

「一輝？」

「そう、一輝さんにはお世話になってるんで」

月初に安くない出費は痛くないといえば嘘になるが、取引先の担当者が誕生日だと言うのなら、出さざるを得ない。この間奢られたランチもそのまんまだし……。

瑞希さんからのリアクションは特になく、二人揃って黙ったまま、賑やかなフードコートの中でコーヒーを飲んでいる。平日の夕方とはいえ、早めの夕食を取る近隣のサラリーマンや、親子連れでハンバーガーやフライドチキンにかじりついている姿もチラホラ見える。

「ご兄弟は、一輝さんと晃さんのお二人なんですか？」

コーヒーで口を湿らせたのに、声が少々上ずった。瑞希さんはそれを気にも留めない様子で、頷いた。「原田さんは？」と会話をつなぐ意思を示してくれた。

「三つ下に妹が一人」

「じゃあ、高校生？」

記憶が定かではないが、そうだった気がする。文字のやり取りもしばらくしていないし、顔も見ていないから、実家にいるときの印象から更新されていない。

「一輝さんも早生まれ、水瓶座だとは知らなかった」

「一輝さん、も？」

「いや、僕も昨日誕生日で。って、お兄さんから聞きませんでした？」

瑞希さんは首を振った。昨日、藤堂が連れてきた幼なじみのサッカー友達、浪川晃から、「明日、妹と映画に行ってくれ」と言われて今に至るのに。雑な投げ方に苛立ちを募らせかけたが、見知らぬ男と行動を共にしてくれた彼女に罪はな

い。横を向いて、呼気と共に負の感情を吐き出した。
「じゃあ、お祝いしないと」
瑞希さんは立ち上がり、空っぽらしい蓋付きのコーヒーカップを手に取った。
「今日のお礼もしたいんで」
僕が一人で、「えっ？」とか「おっ？」とか言ってる間に、彼女は僕のカップを指して、「もういいですか？」と訊く。僕が小さく頷くと、自分のカップと共にゴミ箱へ捨てに行った。近くの水道で手を洗い、席まで戻ってくる。
「ほら。行きますよ」
彼女は紙袋を僕に押しつけ、腕を引っ張って強引に立たせると、そのまま食品売り場の方へ引っ張っていく。僕は転けないようにバランスをとりながら、身体の向きを変えて隣を歩く。
「ケーキ二つと、晩ご飯の材料買わないと」
「えっ？」
「私に作れるご飯なんて、たかが知れてますけどね」
少し下から僕を見上げ、瑞希さんは笑ってみせた。
「いや、うち、一人だし」
僕のささやかな抵抗を意に介さず、瑞希さんはカートと、買い物カゴを取りに行く。ガラガラと音を立てながら、僕の隣までカートを引いて戻ってくる。
「だから、節約、節約」
彼女は強引に僕の手とカートを引いて、食品売り場へ先導する。青果コーナーで残り少なくなった玉ねぎやら人参やらを手にしては、見比べながら選んでいく。真剣な眼差しでああでもない、こうでもないと値段を気にしながら買い物する様は、なんだかとても愛おしく見えた。

『二月一日（水）』——原田哲朗編
初出　令和三年二月一九日　ノベルアップ+にて公開

二月四日（土）

我が家の決して広くはない台所での、二人の調理師によるパフォーマンスが全て終了した。二人はエプロンを外し、髪の毛を解いてお互いを称え合うかのような笑顔を見せ、互いの手を強く握り合った。

土曜日の昼下がり。普段は妻と僕の大人二人、小さい娘が二人で広さを感じるリビングが、今日はとても狭く感じる。実の姉と妹、僕の両親、なぜか妻の仕事仲間である小野寺さんと、その御母堂が我が家に集っていた。

亜衣と映美、二人の娘は見慣れない人たち、食べ慣れない料理に興奮、圧倒され、お腹が膨れたタイミングですっかり疲れ、眠ってしまった。

台所の姉、郁美は調理器具を片付け始める。それを見て、妻の芽衣が手伝おうと近寄った。

「芽衣さん、ごめんね。勝手に触っちゃって。片付けまでやりますから。香帆さんも私に任せて、休んでてください」

郁美の隣にいた相方、香帆さんを向かいのソファへ促した。郁美を手伝おうとする香帆さんを、姉の目配せに頷いて、芽衣がソファまで誘導する。

「じゃあ、お言葉に甘えて。ちょっとだけ」

敬子がお茶を持って、香帆さんの隣に座った。香帆さんの顔を覗き込み、「失礼します」と手首で脈をとっている。少々呼吸は荒そうだが、身体に異常はないようだ。

「君のお母さん、すごいな。ルミさん」

小野寺さんは、「とんでもないです」と首を振った。向かいに座っていた父、康信は「いや、大したもんですよ」とたっぷり響く声で言う。隣の母、乃莉も同意を示す。

「姉さんの独立プロジェクトが、こんな展開するとはね」

「私も二、三週間でこんなことになるなんて、想像してなかったわ」

郁美は調理器具を大方洗い終え、使い捨ての皿を透明な袋に詰め込んだ。我が家の食器は物量の関係で使われなかった。彼女は濡れた手を拭いて、自分のスマホを弄った。香帆さんと二人で作った料理が、スープからデザートまで写真に収

められている。

「HP用の物撮りは、また今度やろう」

「インスタのブランディングも、今から考えないとね」

郁美はそう言いながら、比較的映えそうな写真をピックアップして、個人のアカウントに投稿する。Facebook、Twitterへの連携も忘れない。

「あとは、いやらしくならない程度にモデルとの写真とか？」

僕の提案に姉は「ゆっくり考えるわ」と言った。ビジネスプラン、市場調査もまだまだコレから。具体的な資金繰りも算段ついてないし、コッチが焦りすぎ、か。

少し落ち着いたようで、香帆さんが食卓の椅子に手をかけた。敬子の手を借りながら、小野寺さんの隣に腰掛けた。

「香帆さん、本当にイイんですか？」

僕の問いかけに、香帆さんは頷いた。

「すぐにフルタイムは身体が追いつかないけど、ちょっとずつ慣らせば大丈夫だろうし」

「香帆先輩の主婦としての経験、ノウハウ、発想も、頼りにしてますよ」

郁美との連携がスムーズなのは、技術のルーツが同じだからだろうか。限られた機材とスペースを活用する術も、栄養のバランスを考えた健康的なメニューを組み立てるのも、香帆さんの知見が生きるのか。

郁美も小野寺さんも、香帆さんも。みんな生き生きしたい表情だった。

『二月四日（土）』――森田康徳編

初出　令和三年二月一九日　NXZ（旧サイト）にて公開

二月五日（日）

沙綾から一日早い誕生日祝いを受け、そのまま彼女を東京へ送り出して帰路に着くタイミングで、瑞希からのメッセージ。バイトが終わる一九時頃に太田のイオンタウンへ来い、と。

茨木で降りず、JR総持寺駅で下車して、府道一二六号に沿って歩いていく。国道一七一号線の交差点に突き当たっても、横断歩道を渡り、そのままイオンタウンへ真っ直ぐ向かった。

瑞希はいつものスタバじゃなくて、中のサイゼリヤまで来い、先に中で待っていると送ってきた。言われた通りに、イオンの中の店舗へ足を踏み入れる。新規客の案内に出てきた店員を制し、先に通されているはずの瑞希を探す。

「一兄、こっちこっち」

先に僕を見つけた瑞希がソファから身を乗り出して、こちらに手を振った。その隣に誰かいる？　瑞希の隣に座った男がこちらに振り返る。

「えっ？」

「あ、どうも。こんばんは」

武藤さんのところの学生くん、哲朗くんがそこにいた。なぜキミが、瑞希の隣に？

「ド派手な彼女さんは？」

「さっき、新大阪まで送ってきた。もうそろそろ、京都に着くんじゃないか？」

二人の向かいに座る。二人の前にはすでにドリンクバーだの、辛味チキンだの、軽い食事が並んでいる。近くまで来た店員さんにメニューをもらい、その場でグラスワインの赤を注文した。

哲朗くんに視線を置いたまま、目の前に置かれた水を口に含んだ。隣の瑞希が口を開いて、「哲朗さんにも、お祝いしてもらおうと思って」と言った。

「お祝い？」

瑞希は横に置いた大きな包みを持ち、哲朗くんと共に差し出した。

「お誕生日、おめでとう」

「ございます」と哲朗くんは付け加えた。とりあえずプレゼントを受け取り、

入れてきたらしい紙袋も渡してもらった。
「この間、エキスポシティで一緒に映画見て、一兄の誕生日プレゼント探しにも付き合ってもらって」
「僕もお世話になってるんで、この間のお礼も兼ねて、半分出させてもらいました」
哲朗くんの言い分は、半分くらい理解できる。その前提の瑞希の説明が飲み込めない。詳しい説明を訊きたかったのに、彼女は「ちょっとトイレ」と席を外した。哲朗くんは、気まずそうに身体を小さくして目線を逸らしている。
「なんか、成り行きでこういう感じに」
消え入りそうな声で「すみません……」と付け加えた。できるだけ落ち着いて聞こえるように、ゆっくりと訊く。
「いつから？」
「今月の一日から。やましいのは、一切ないです」
「ないんですけど」とまた下を向きながら呟いた。真相を追及しても仕方ない。自分を守るためにも、「良いお友達」でカッコに括ろう。
ちょっぴり気まずい沈黙の中、あっけらかんとした瑞希が楽しそうに戻ってくる。入れ替わる形で、哲朗くんがグラスを持ってドリンクバーの方へ向かう。瑞希は鼻歌を歌いながら、目の前のアイスコーヒーに口をつけた。僕はやっと出てきたワインを一口飲んだ。
「おお、哲朗くん」
入り口の方から、最近耳に馴染んできた人の声がする。哲朗と共にこちらにやってくるのは、ご家族を伴った武藤さん。
「あれ、浪川くん。もう哲朗くんと仲良くなったの？」
「ええ、まあ……」
瑞希は武藤さんの後ろにいた男性に、挨拶したらしい。武藤さんは瑞希と哲朗くんに注視しているが、店員に促されて自分たちの座席へ向かう。
「また今度、話聞かせて」
哲朗くんはさっきより一層気まずそうな雰囲気で、ゆっくりと瑞希の隣に腰を下ろした。僕もどことなくその空気に飲まれる形で、ちょっぴり沈んだ気持ちになる。僕らの落ち込みなんて微塵も感じていないらしい瑞希は、「次、何食べる？」とメニューを広げた。

『二月五日（日）』――浪川一輝編

初出　令和三年二月一九日　NOVEL DAYSにて公開

二月六日（月）

「じゃあ、別に彼女ではないんだ」

応接スペースで普段より少し早い昼食を取っていた。向かいに座る哲朗は、父の買ってきたうな重に箸をつけている。「えぇ、まあ」と口を隠しながら頷いた哲朗に、なぜか隣の親父は嬉しそうに微笑み、うな重の残りを掻き込んだ。

早飯が染み付いた彼は先に食べ終え、「ごちそうさまでした」と両手を合わせ、自分が散らかした食器を片付ける。自分で持ってきた紙コップと来客用のカップホルダーを組み合わせ、来客用の緑茶パックをあけてウォーターサーバーからお湯を注いだ。

「で、親父はいつまでいるんだ？」

「ん？」と特に悪びれる様子もなく、元の席に戻ってきた。カップホルダーに垂れた紐を数回上下させ、息を吹きかけて少し冷ますと、ズルズルと音を立ててお茶を啜った。

「昼休みが終わるまでには帰るさ。たまにはうな重も悪くないだろ、哲朗くん」

割り箸の入っていた袋から楊枝を取り出し、口の中を掃除しながら哲朗に投げかけた。哲朗は少々緊張した面持ちで「はい」と答えた。

「史穂さんのお遣いで弁当届けて、ついでに息子と飯食って帰るぐらい、いいだろう？」

「一応機密っていうか、セキュリティってのがあって」

「どうせ見たって、俺には分からん」

彼はそう言いながらも、応接スペースの書棚、オフィススペースの張り紙やポスターに視線を向ける。僕は父の持ってきた愛妻弁当を、向かいの哲朗は父と同じうな重を黙々と口に運ぶ。父の視線はいつの間にか、僕と哲朗に向けられる。

「そうやってると、本物の親子みたいだな」

「なぁ、似てないか？」と電話番をしてくれている香織に話を振った。香織は自分のMacから目を離し、こちらを振り向いた。

「智希に似てなくもないけど、他人の空似じゃない？」

「そうか。気のせいか……」

息子の智希はどちらかといえば母親似。比較対象としてはズレている気もするが、血縁者からの否定は心強い。哲朗は少々面食らったように箸を止めていたが、香織の回答に納得する父を見て、箸を再び動かし始めた。

「あ、安藤さんからモデル選定の件どうですかって、メールが来てる」

香織がMacのモニターを見ながら言った。

「モデル選定ってなんだ？」

父の疑問に、香織がサッとチラシのラフ案を差し出した。コピーやレイアウトは概ね固まっているものの、肝心の写真がまだ入っていない、レンタル衣装屋のチラシ。ど真ん中に「和装モデルで」と安藤さんの指示が書き添えてある。チラシをじっと見ていた父は、急に視線を上げてこちらを見た。

「和装モデルなら、瑞希さんでいいんじゃないか？」

うな重を食べ終えた哲朗が、驚いた表情で父を見る。

「瑞希さんって、哲朗くんのいいお友達の……」

父は頷き、胸ポケットから覗くストラップを引っ張ってスマホを取り出した。

「こんな娘だけど」と、昨日のサイゼリヤで撮ったらしい瑞希さんとのツーショット写真を画面に写した。

「何で親父が」という言葉を飲み込み、画面の中の女性をじっと見る。昨日は一瞬の余り印象に残らなかったが、程よい存在感と和装が似合いそうな顔立ちをしている。プロのモデルを使うほどの予算がないなら、ダメ元で頼んでみるのはありかもしれない。

「浪川くん経由で、色々頼んでみるか」

どうせなら、先日見かけたド派手な彼女と二人にすれば、いい塩梅で仕上げられるかも。弁当箱に残っていたご飯を掻き込み、昼からの展開に妄想を膨らませた。

『二月六日（月）』——武藤幸弘編

初出　令和三年二月二〇日　カクヨムにて公開

二月八日（水）

今日は久しぶりにスケッチブックとイーゼルを抱えて、市役所近くのIBALAB@広場、中央公園で屋外スケッチ。水も冷たいし、荷物にもなるし、水彩絵具じゃなくて色鉛筆でささっと仕上げた。

防寒着はしっかり来ているものの、風が少し強い。身体がすっかり冷える前に、商店街の一本裏にあるレトロ調の喫茶店、ワンシーンへ駆け込んだ。ランチタイムだったけど、水曜日は少し空いているらしい。それほど待たずに中へ通してもらった。

日替わりのハンバーグランチを平らげ、食後のコーヒーを出してもらって、さっきスケッチブックに描いた絵を改めて見直す。一人で矯めつ眇めつ眺めていると、「こうした方がいいんじゃないですか？」と若い男性が、絵の一部を手で隠した。

最後に描き足した手前のボールが、全体のバランスを崩していたらしい。テーブルを挟んで目の前に立っていた男性は、隣の席に荷物を置いて、私の横に座った。「それか」と、スケッチブックの隣に置いた色鉛筆を眺め、私の目を見る。私が頷くと彼は色鉛筆を一本摘んで、手前のボールに色を塗り重ねた。色味が変わることによって、さっきとはまた違う絵になった。

「勝手にいじって、ごめんなさい」

「いえいえ。この方が素敵な絵になりましたから」

若い男性はもう一度「すみません」と言い、色鉛筆を戻して自分の席についた。仕立ての良さそうなスーツと、ほんのり鼻をくすぐる木のいい香り。ビジネスマンっぽい出で立ちをしているけど、ただものではない雰囲気が微妙に漏れている。

彼はメニューを見て、サッとブレンドコーヒーを注文した。スマートフォンを見ながら、お店の時計を見上げている。

「おお、悪い悪い。待たせたな」

お店のドアを開け、作業着の男性が彼の前に座った。作業着の男性は店員を読んでメニューを見ると、「メシ食ってもいい？」と彼に尋ね、返事を待つ前に日替わりランチとセットのブレンドコーヒーを頼んでいた。食事より先に、コー

ヒーが運ばれてくる。
作業着の男性は、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。
「水曜日は休みじゃなかったっけ？」
「現場は休みでも、色々あんのさ。そっちは昼休み、だっけ？」
「そう。貴重なね。久しぶりに兄弟でメシ食おうって言うから抜けてきたのに、直前で遅れるか？普通」
「だから、色々あるんだって」
「晃の見積もりの甘さは変わらないな」
「兄貴が細かすぎるんだよ」
晃と呼ばれた作業着の男性は、運ばれてきたランチに手をつけた。スーツの男性は、それを見ながらコーヒーをゆっくり飲む。
「瑞希と原田くん、お前の仕業だって？」
作業着の男性は、食事を口に運びながら彼の方を見る。
「聡太みたいな変な虫より、アイツの方がマシだろう？」
「聡太って、お前のサッカー友達の」
作業着の男性が頷くと、彼も納得した表情になる。
「変なことしたら俺がぶっ飛ばすけど」
「そういうキャラじゃないな。免疫はなさそうだけど……」
作業着の男性と彼は、ニヤリと笑う。ジッとそちらを見ていると、スーツの男性がこちらに視線をくれる。何かを言いたげに片目を瞑る仕草は、とてもこなれているようだった。

『二月八日（水）』——小野寺香帆編

初出　令和三年二月二〇日　MAGNET MACROLINKにて公開

二月九日（木）

一足先に実店舗での撮影を終え、貸衣装から着替えて沙綾さんの撮影を見守る。背が高くて日本人離れしたスタイルとクッキリした目鼻立ちは、すごくいい写真が撮れそうだ。どちらかと言うとのっぺりとした奥二重の私は、チンチクリンの身体が生かせる程度に裏方をやる方が良い。

プロの仕事の邪魔にならないよう気を付けながら、カメラマンの撮影方法をじっくり観察する。構図の決め方から照明器具の置き方、学校では触らせてもらえていない機材まで、この機会に隅々まで観察させてもらう。

「写真撮影も、気になるんだ」

今日は記録係として現場に来ている哲朗さんが後ろから声をかけて来た。

「スチールの勉強も、動画に活かせるから」

哲朗さんを見て答えたのに、彼は少し視線を逸らした。ガラスに反射する自分の顔を見ると、ヘアメイクは撮影時のままだった。何気なく哲朗さんの方へ一歩近づくと、彼は一定の距離を保って横に動く。

哲朗さんと戯れていると、沙綾さんの撮影に一区切りがつく。カメラマンと武藤さん、沙綾さんは今まで撮影した画像を確認していく。哲朗さんも背後からそれを覗き込み、ザッと一通り見終えた沙綾さんは、メイクさんのところでチェックを受けている。私はさっきまで彼女が飲んでいた水を持って、沙綾さんに差し出した。

「ありがとう」

彼女はスッと受け取り、ストローをくわえた。沙綾さんが水を飲む間も、私は撮影機材が気になって、あちこちに視線を向けてしまう。

「瑞希ちゃん、撮る側に興味があったのね」

「撮る側っていうか、裏方全般に」

「出る方やれば良いのに。もったいない」

沙綾さんはボトルを私に返した。彼女は衣装を崩さないように立って、モニターに集まっているスタッフの方を見る。どうやらOKが出たらしく、武藤さんとカメラマンさん、ここのオーナーさんが笑顔を見せ合っている。手持ちのライト

を持ってカメラマンさんをお手伝いしていた照明さんが、私の方にやって来た。
「成人式の前撮りをする時は、ぜひ使ってください」
レンタル衣装と撮影スタジオの無料引換券を差し出した。私がそれを受け取っていると、隣で装飾品を外されていた沙綾さんが照明さんに声をかけた。
「この娘、バイトにしない？」
「今、バイトは募集してなくて……」
沙綾さんの押しに、照明さんは「バイト代は出るか分からないけど、勉強したいなら、連絡してください」と自分の名刺も差し出してくれた。彼は軽く頭を下げて、武藤さん達の方へ戻っていった。
沙綾さんを見ると、自信満々な表情で私にウィンクした。彼女は「良かったね」と言い残して、更衣室へ入っていった。
「凄いパワーだね」
自分の荷物をカバンに詰め、哲朗さんが隣に立った。
なんとなくで自宅から通えるアルバイトを選んだけど、やりたいことがあるならガツガツ行かなきゃいけない。
「動画でやれることって、何かない？」
哲朗さんに、少々強めに投げかける。彼はちょっと考えて「Youtube、とか？」と言った。
「手垢がつききって、今からYoutuber目指したってキツいだろうけど」
彼の言うことはもっともだ。もっと作家性を発揮できそうな動画共有サイトも、あるにはある。機材やネタ、資金を理由に「作らない」をやるよりは、自分のやりたいことと目の前にあることを考えて、どうやるかを考えないと。
「これからどうすれば良いか、一緒に考えてもらっても良い？」
哲朗さんは一瞬息を飲み、すぐに力強い目で「もちろん」と言ってくれた。やっぱり、イイ人だ。

『二月九日（木）』——浪川瑞希編
初出　令和三年二月二〇日　noteにて公開

二月一四日（火）

久しぶりに娘がウチに来たかと思えば、可愛らしいお客さんを連れて来た。二階から上の自宅スペースではなく、一階のサロンスペースに作った応接セットへ座ってもらった。お客様用のお茶を入れながら、沙綾の話を聞く。

「へー。一輝くんの妹さん……」

沙綾の連れて来たお客さん、瑞希さんは少し緊張した面持ちで目の前のお茶を見つめている。沙綾に「遠慮しないで」と言われると、「いただきます」とグラスに口をつけた。

「立命館の学生さんで、映像の仕事をしたい、と」

「えぇ、まあ……」

服の上からパッと見る限りでは、全身のバランスは悪くない。沙綾のようなメリハリのある体型ではないが、スレンダーで付くところには付いている十分に魅力的なスタイルをしている。背丈は一六〇cm未満、極度に痩せている印象もない。

今は肩に力が入っているけど、姿勢そのものは悪くないし、歩いている姿や立ち姿は程よく力が抜けていて、流れるような所作が身についている。一々派手な沙綾に、少しは爪の垢を煎じて飲ませたいくらいの好対照だ。

「出る方じゃなくて、撮る方をやりたいのね」

「お母さんもそう思う？　演者をやらないのがもったいないと思わない？」

地味なくらいなのに、不思議と耳目を引く器量は、十分に映える逸材に思えるが、彼女自身から出るプレッシャー、役者っぽい気迫のようなものは感じられない。

「高校生ぐらいの時にも、そういう話はされたことがありまして」

瑞希さんは、「『葬式の名人』って、ご存知ですか？」と言葉を継いだ。

「地震の後ぐらいに公開された、茨木オールロケっていう映画？」

彼女は頷き、撮影時の話を語り始める。

「エキストラにって声をかけてもらったんですけど、場当たりって言うか、テストの時に交代させられちゃって」

近い背格好の友人に出番を取られてしまった、と。

「何となく悔しくて、公開された映画を見にいったら、個人的にはイマイチピンとこなくって……」

瑞希さんの話が一旦途切れる。沙綾は全くピンとこない様子で、「それで、なんで撮る方をやりたくなったの？」と瑞希さんに続きを促した。彼女はお茶で口を湿らせると、「茨木でも映画が撮れるんだって思ったら、なんか嬉しくなっちゃって」と言った。

「でも、映画は茨木らしさがあんまりなくって……。もっと茨木ならではの映画っていうか、いい映画作れるはずだって悔しくもなっちゃって」

瑞希さんの話を聞いていた沙綾が、稀に見る真剣な表情で彼女を見ていた。

「で、映像作家の修行として、沙綾と一味違うYoutube動画をやりたい、と」

「沙綾さんがインフルエンサーとして活動する合間に、私たちの映像制作もやらせていただきたいんです」

瑞希さんは「よろしくお願いします」とテーブルに額を擦り付ける勢いで頭を下げた。

「沙綾はそれでいいの？」

沙綾の目はいつも以上に強い意思を湛えて、真っ直ぐ私を見つめてくる。瑞希さんに、頭を上げてもらうように伝えた。彼女は顔を上げ、「いいんですか？」と言った。私はそれに頷いた。

「あなたの地元愛、作家のプライド、気に入ったわ。ただし、学生だからって中途半端な作品は許さないから。私にも沙綾にも、紹介するお友達にも、失礼のない映像を作って頂戴」

瑞希さんの顔がパッと華やいで、「ありがとうございます」と勢いよく頭を下げる。今度はテーブルに額をぶつけ、グラスに残っていた彼女のお茶が少しだけ周囲に溢れた。「大丈夫？」と笑いながら瑞希さんを手助けする沙綾に、私の中の何かがグッと揺さぶられた。

『二月一四日（火）』——奥野朋子編

初出　令和三年二月二〇日　Pixivにて公開

二月一五日（水）

株式会社Mサイズの就業規定的には定時の一九時を過ぎ、いつものようにそのまま残業に突入するか、適当に切り上げて飲みに行くかというタイミング。今日は、応接スペースを少し拡げてお客様に座ってもらっている。普段は家で子供達と先に晩ご飯を食べている妻の史穂が隣にいて、その向かいに得意先の奥野さんが座っていた。

奥野さんは先日仕上がったばかりのレンタル衣装やのチラシを見て、後ろの哲朗たちの方を見る。哲朗は、チラシのモデルをやってくれた浪川瑞希さんと共に、目の前のモニターを見ながら楽しそうにやっていた。

「彼は、優秀なの？」

僕は打ち合わせ用のノートPCと、大きめのモニターを繋ぎながら答える。

「ええ。優秀ですよ。制作スキルは文句なしです」

ケーブルを繋ぎ、一度画面を閉じてモニターとノートPCの画面とを連動させる。テレビ会議用のアプリを立ち上げ、森田さんと小野寺さんにも入って来てもらった。

「お疲れ様です。急な声掛けで申し訳ない」

森田さんは自宅から、小野寺さんは摂津市のオフィスから参加してくれているらしい。

「僕と森田さんだけで完結しないかもと思ったんで、小野寺さんもよろしくお願いします。早速なんですが、送ったやつ、見てくれました？」

打ち合わせが始まる前に、Slackで動画のURLを送ってあった。少しの遅延を挟んで、森田さん、小野寺さんがほぼ同時に「見ました」と答えてくれた。奥野さんの自宅サロンを題材に、彼女の娘の沙綾さん、瑞希さんとが作ったショートムービー風の体験映像。

「レポートはほとんどないんですよね？　PRというか、Youtube動画的に埋もれないかが心配ですね」

「私は好きですよ。海外から見た日本みたいな感じだし、チャンネルとロゴがコビトカバっていうギャップも可愛くて」

森田さんの懸念、小野寺さんの感想、どちらも正解だろう。ロゴ関係は、瑞希さんの兄、一輝さんに作ってもらった、可愛くもシンプルなシンボリックなイメージ。

「再生数とかチャンネルが伸びるかは、瑞希さんと哲朗くんに悩んでもらおうと思う」

実際に、瑞希さんたちのバックアップ、Web周りのマーケティングやブランディングは全て哲朗に丸投げしてある。沙綾さんがインフルエンサー、モデルとして伸びれば、そこの底上げも期待はできるだろう。

「問題は、新機軸のマーケティング施策、プロモーション施策が考えられないかなと思いまして」

奥野さんが議論をすっ飛ばして、少々強めのボールを蹴って来た。森田さんは「あ、動画の話じゃないんですね」と軽くトラップしてくれる。

「こういう動画をどんどん作ってもらったり、お友達を紹介したりするのは問題ないんだけど、こういう取り組みをさらに生かす、お互いによりWin-Winになる仕組みが構築できればもっと良いのになぁ、と思ったんですが……」

奥野さんの起業家仲間、小野寺さんの繋がりで、動画を使ったマーケティング、プロモーションを重ねていくのは可能だろうし、機材やスタッフを追加して映像そのもののクオリティも上げられるだろうけど、それだけでは少し物足りない。確かに、それもよく分かる。

「今まで、アンドウさんとか小野寺さんのところでやっていただいた施策は今後もお願いするんだけど、それとは毛色が違うような気がして」

「で、アイディアなりコンテンツなりを小野寺さんも巻き込んで考えたい、ってことですか？」

「ま、そういうこと」

森田さんはかなり深刻そうに「う〜ん」と唸り、小野寺さんも小野寺さんで難しそうな顔をしている。

「若人と地域のお客さんのために、ゆっくり知恵を捻ろうじゃないか」

僕の言葉に、森田さんはまだまだキツそうな表情を浮かべている。会議はさっき始まったばかり。とりあえず、たっぷり二時間やろうじゃないか……。

『二月一五日（水）』——武藤幸弘編

初出　令和三年二月二一日　カクヨムにて公開

二月一七日（金）

およそ三年ぶりに実家へ帰るという哲朗くんに、二十歳と餞別を兼ねた祝杯を上げ、JR総持寺駅の改札で見送った。たまたま、長岡京のお父さんのところに泊まりがけで出かけるという里紗、啓を連れた香織とすれ違う。孫娘の里紗たちは姉弟の二人だけで電車に乗り、里紗は先日返って来た数学のテストを持って、お父さんとともに振り返るらしい。

幸弘、香織を伴って自宅に戻る。自分で持って来た携帯ゲーム機で遊ぶ智希、連れて来た愛犬の面倒を見ながら、台所の志津香を手伝う史穂さん。陽菜は幸弘の家で一人、勉学に勤しんでいるらしい。

幸弘はスマホを操作して、誰かにメッセージを送った。

「陽菜か？」

「いや、哲朗くんの親御さんに。さっき、電車に乗りましたって」

「随分と過保護ね。茨木から西宮なんて、小学生でも一人で大丈夫だって」

横から香織が茶化すように言い、夕飯が並ぶ食卓にさっさと座った。彼女の場合、子供達が少々逞しすぎるところもある。とはいえ、二十歳を過ぎた男子学生に、哲朗の向き合い方も違和感がある。ボサッと幸弘を見つめていると、彼の顔がこちらを向いた。

「本当に、何にもないんだよな」

「またその話？ドラマの見過ぎだよ」

幸弘は智希にゲームを終えて手を洗ってくるように良い、香織の隣の席に座った。

「ウチの貴重な戦力で、大事な大事な取引先のご子息だから」

「憧れの先輩に、頼むって言われてるしね」

史穂さんは犬のテディを隣に座らせて、幸弘の説明を補足した。志津香が調理に区切りをつけて、食卓に着く。智希も座って、夕食が始まった。

「一朗さん、関学じゃなかったっけ？」

香織は自分の取り皿にサラダを取り、片手で缶ビールを開けて史穂さんに差し出した。史穂さんは「すみません」とグラスを傾けながら、「明子さんの方が、

立命で同じサークルの……」と言うと、幸弘が「一コ上」と付け足した。
香織は、史穂さんのお酌を受けながら、「なるほど。そういうことか」と呟いた。
「お義姉さん、良い人すぎない？」
「本当にそう思う？」
史穂さんと香織は、お互いに少々黒い笑いを浮かべているように見える。史穂さんは智希、テディの面倒を見ながら、自分の食事に手をつけた。
「ま、色々あるんだよ」
幸弘はそう言い、スマホに届いた通知をチラリと見て、すぐに画面を伏せた。
「親父なんて、最近もあっただろ？」
「なんの話？」と志津香が尋ねると、香織は自分のカバンから二つに畳んだチラシを取り出した。志津香にチラシを見せ、真ん中あたりを指差すと、志津香は納得したように頷いた。智希も興味津々に覗き込み、「ああ、本屋さんの。この前、サイゼリヤで写真撮ってたね」と言った。
「お父さんは、和風美人が好きだから」
志津香はそう言いながら、自分の食事を終えると調理を再開した。おにぎりを握り始めた彼女に、「すみません、お義母さん」と史穂さんも席を立って手伝いに加わる。智希が「ごちそうさま」をすると、香織は「もういい？」と私と幸弘に聞き、答える前に空いた食器を片付け始めた。

『二月一七日（金）』――武藤幸次編

初出　令和三年二月二四日　Mediumにて公開

二月一八日（土）

朝から燃えるゴミを出し、近所の業務スーパーまで週末の買い出しを済ませてから、そろそろ二時間。娘二人を連れて、名神高速沿いに安威川を渡り、人気のパン屋さんへ散歩がてらお昼ご飯を買いに行って戻って来ても、旦那はリビングの椅子に座って考え込んでいた。

一番日当たりが良さそうな椅子に座り、いつになく真剣な表情を浮かべている。結婚する前から考えすぎる人だったけど、長女が生まれてからは家の中で不機嫌な顔を作らないようにしていたけれど、今日は少々不穏な空気を醸していた。

旦那の整った顔立ちに、真剣かつアンニュイな表情の組み合わせは非常に美しいと思うのだけど、まだ幼い子供たちには少々怖く見える気がする。

亜衣と映美と洗面所で手を洗い、さっき買って来たパンをお皿に出していると、顔の緊張を解いてキッチンまで手伝いに来てくれた。

「あなたも食べる？」

「ああ、うん。僕の分もある？」

パンの詰まった袋を見て、彼は電気ポットでお湯を沸かし始めた。「気が利かなくてごめんね」と人数分のカップを出し、娘たちの分には真新しい牛乳を開けて注いでくれた。娘たちは早々に食卓について、「いただきます」と両手を合わせ、自分たちの目の前にあるパンにかじりついた。

「芽衣も先に食べて。コーヒーは僕が入れる。紅茶の方がよかった？」

イエローラベルの箱を掲げる。「じゃあ、紅茶で」と私は椅子に座った。子供達の様子を見ながら、二人も食べているクリームパンに手をつけた。少し待っていると、康徳さんが紅茶を持って来て、隣に座った。

ちょっぴり緩慢な動きでミックスサンドを開け、ぼんやりと口に運ぶ。その視線は窓の外に向けられている。

「まだちょっと肌寒いけど、日差しは暖かかったよ。亜衣は途中で上着脱いじゃった」

「へー。午後も天気良さそうだしな……」

彼はもそもそとサンドイッチを咀嚼し、紅茶を啜った。

「公園でも行ってこようか？」
「公園」のフレーズに、亜衣がはしゃぎ始める。食事中に身体を動かし始めた長女を見て、康徳さんの目に少し生気が戻った。
「僕も行こうかな」
「え？」
「身体を動かさないと、頭も動かないし。帰りにアルプラザで、アイス買って帰ろう」
アイスのフレーズにも娘たちは大いにはしゃぐ。アルプラザまで行くと余分な散歩になってしまうけど、今の彼にはそういうものが必要らしい。
「公園はいいけど、アイスは小さいのにしてよ」
そういうと、亜衣は「えー」と抗議の声を上げる。不満げな長女に「マクドナルドのシェイクにするか」と康徳さんが提案すると、亜衣はすぐに「シェイク、シェイク」と繰り返す。
「もー。仕方ないなぁ」
私がそういうと、康徳さんと亜衣は「やったー」とハイタッチした。食べ差しのパンを食べ、しっかりとお昼ご飯と片付けを終えてから外に出る。亜衣とそう約束すると、彼女は行儀良く、しかし少し気忙しくパンを食べ始めた。隣の映美もお姉ちゃんに負けじと自分の選んだパンを食べ進める。
二人の娘を見つめる康徳さんの顔は、ちょっとだけ元気がなさそうに見えた。

『二月一八日（土）』――森田芽衣編
初出　令和三年二月二四日　アルファポリスにて公開

二月一九日（日）

郁美さんが、妹の敬子さんと共に我が家を訪れてくれた。章二さんは相変わらず外出中で、娘のルミが一緒に来客応対をしてくれている。

「台所、お借りしてもいいですか？」

郁美さんはプチプランスの袋を持って、台所に入って行った。敬子さんの誕生日が今日で、私とルミもお相伴いただけるらしい。ルミにお皿とフォークを出してもらい、私は人数分のお茶を用意する。郁美さんは手早くケーキをお皿に出した。

「私たちもいただいてしまって、いいんですか？」

ルミは可愛らしい小分けのケーキを食卓に並べながら、敬子さんに尋ねた。

「いいのいいの。手土産がたまたまケーキになっただけだから」

「妹の三三歳を祝ってあげてください」

郁美さんが笑いながら敬子さんの隣に座る。一個ずつ違うケーキを順番に選び、残った一つは箱に戻した。お誕生日の歌は省いて、目の前のケーキにかじりつく。程よい甘さが、章二さん秘蔵の渋めの紅茶とよく合う。

「あ、ムジカの紅茶だ」

敬子さんが紅茶のパッケージを見て言った。

「あの辺の調味料も、あの辺のチョコレートも、そこらじゃ買えない輸入食品よ」

郁美さんは台所に並べてある瓶やストッカーに入っている袋を指差した。

「この間持って来ていただいた調味料も、南京町とかで買ったモノですよね？」

「ええ、まあ。お菓子とか紅茶は、主人の好みというか、こだわりに付き合わされてるところもあるんですけど」

「ホンモノを足で買え、だっけ」

ルミの言葉に頷くと、敬子さんが驚きの表情を浮かべた。郁美さんは納得したように小さく頷いて、「定期的に三宮とか、芦屋に行かれるんですか？」と訊いて来た。

「最近私はたま〜にですけど、主人は勤務先があっちだったんで、しょっちゅう」

「へー」

引き出しの上に、港に停泊中のタンカーと共に撮影された写真が飾ってある。
郁美さんは立ち上がって写真を覗き込み、ルミに「どれがお父さん？」と尋ねた。
彼女は真ん中の方にしゃがんでいる男性を指差した。
「海の男って感じですね」
郁美さんの隣で写真を見ていた敬子さんは、ルミに「めちゃくちゃ厳しそう。怖かったでしょ」というと彼女は首を振った。
「ガンコで面倒臭いけど、怖いって思ったことは一回も」
「へー。そうなんだ」
彼女たちは食卓に戻って来て、紅茶に口をつけた。ケーキのお皿が空くと、郁美さんがスッと立ち上がり、お皿を洗ってくれる。
「お客さんなのに、すみません」
「いえいえ。勝手にお邪魔してますから」
郁美さんは残りのケーキを新しいお皿に移し、ケーキが崩れないようにふんわりラップをかけて仕舞ってくれた。
「それでルミちゃん、本題なんだけど」
敬子さんがルミに話を切り出した。
「例のプロジェクトに、医療用テントも転用できないかって話を今してて」
「医療用テント？」
「フードトラックの移動販売に、医療用のテントとか間仕切りとかコンテナとか追加できたら、もう一個差別化ができないかと思ってて……」
敬子さんは昨秋まで看護師として医療現場で活躍されていて、この二、三年で急増した主に医療用の商品がそれなりの在庫となって積み上がっているのではと、ルミに告げた。単純なデリバリー、移動販売も定着してきた今、いくつか仕掛けを増やさないと厳しい気がする、と「あくまでも素人の意見として」と口にした。その観点、アイディアがいいのか悪いのかは私には良く分からないけど、ルミの表情が少し変わったような気がする。
ひょんなことで協力することになりそうな、郁美さんの独立開業プロジェクト。
まだ見ぬ楽しみが山のように出て来そうだな。

『二月一九日（日）』——小野寺香帆編
初出　令和三年二月二四日　MAGNET MACROLINKにて公開

二月二〇日（月）

今日は朝から株式会社Mサイズさんのオフィスにお邪魔して、先日リモートで参加した打ち合わせの続き等々を行う予定になっている。Mサイズさんの主要取引先、アンドウデザイン事務所さんも含め、年度末の繁忙に加え、近々始まる統一地方選挙関連の仕事も加わる。

引退の噂もあった哲朗さんのお父さん、原田一朗氏も次の四期目を目指して出馬する方向で調整しているらしい、と里帰りしたばかりの哲朗くんがタレ混んでくれた。ウチの株式会社Zライフも、主に紙媒体、ライター関係、ポスティング周りで忙しくなることは間違いなさそうだ。

「へー。結構、伸びてるんですね」

先に到着されていた康徳さんは、哲朗さんの後ろで彼のモニターを見ながら呟いた。

「JKパワーだったり、安藤さんも紹介してくれたり、色んな要因があるみたい」

武藤さんは印刷した資料を持って、私が通された応接スペースにやってくる。哲朗さん、康徳さんもやってきて、武藤さんが自分の端末とモニターを繋いでいる間に、哲朗さんは来客用の紅茶を出してくれた。

「森田さんはストレートでいいけど、小野寺さんにはフレッシュね」

「そうでした、すみません」と哲朗さんはフレッシュとマドラーも用意してくれる。

「森田さんも小野寺さんも、月曜の朝からごめんね。来週には三月突入しちゃうし、この時間しか空いてなくって。芽衣さん、亜衣ちゃんたちにも謝っといて」

武藤さんは顔の前で両手を合わせ、康徳さんに「申し訳ない」と頭を下げた。

康徳さんは「いえ、大丈夫です」と答える。

「で、申し送り事項としては通常の業務に加えて、イチロウさんの選挙関連が来る見込みです。あとは年度末の駆け込みが去年、一昨年よりちょっと多そうなんで、もしかしたらZライフさんにもお力添えいただくかも、って感じです」

武藤さんは淡々とモニターの資料をめくっていく。今年に入ってから案件の量も増えている。このところ滞っていたリニューアル案件なんかもやっぱり増えて

いるらしい。

「その上で、森田さんのお姉さんの件と、コビトカバフィルムの件と、朋子さんからの無茶振りの件が飛び交ってる、と。順番に、フードトラックの件から行こうか。どんな感じ？」

康徳さんが、「独立に向けて具体的な計画立案には至っていない」と話した。案件、ビジネスになるかはまだペンディングだ、と。

「差別化がまだ弱いというか、市場調査が不十分というか」

「小さくトライアルするにしても、パンチが足りない気はするよね」

「あの……」

私の挙手に、武藤さんが発言を促してくれた。昨日、敬子さんからもらった「医療用テント等を転用する案」を伝えてみる。

「トラックで出向きながら、簡易な出店っぽい空間演出もできれば、テキ屋さん代わりに色々進出できないかなぁ、とか思ったり……」

「でも、飲食スペースも含めてデコるって、結構やってるよね」

康徳さんの突っ込みがグッと刺さる。確かにコーヒースタンドとかタピオカ、鯛焼き屋さんでも、簡易テントと折り畳み椅子とかは見たことがある。私が意見をまとめている間、武藤さんはジッと考え込むと、

「いや、悪くないんじゃない？　トータルプロデュースできれば差別化できるかも」

武藤さんは、「ほら、安藤さんのところ店舗設計もやってるし」と補足する。話を聞いているだけに見えた哲朗さんが、何かを思いついたように口を開く。

「一輝さんも、賞取られてましたよね？　トラックの方は」

「ウチの親父が整備士だ。ツテもあるかも」

厳しそうな表情をしていた康徳さんも、武藤さん、哲朗さんのやり取りに段々エンジンがかかって来たような顔になっていく。プロデュース、ブランディングまで噛み合えば、メディア事業のウチにもいい話になるかもしれない。

ふと時計を見ると、まだまだ一〇時半。午後からオフィスに戻って事務作業のつもりだったけど、これからの予定はリスケできたかな……。

『二月二〇日（月）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年二月二五日　小説家になろうにて公開

二月二一日（火）

「もう一回、行ってくる」

亜衣はそう言い残し、一人で長い長いローラーすべり台のスタート地点へ戻っていく。映美は私の隣で、朋子さんの愛犬と戯れあっていた。

「梅はもうどこか、見に行った？」

朋子さんは愛犬のケビンを視野に入れながら、広い公園をぼんやりと見つめている。彼女に首を振って返事をすると、まだ少し肌寒い風が頬を撫でていく。

「まぁ、まだ少し早いわね」

「朋子さんは、どこか行かれるんですか？」

「まあ、適当にね」

彼女のことだから、そこら辺の公園とかパッと思いつくような有名な梅園には行かないのだろう。詳細はきっと、Facebookかinstagramで知ることになる。

「そうそう、まだ少し肌寒いからって、運動をサボらないこと。旦那さんも巻き込んで、身体を動かしなさい」

ベンチに座っていた彼女は立ち上がり、ケビンのリードを持って少し大きめにグルッと回った。それに釣られてケビンが、ケビンに釣られて映美が少し遅れて後を追いかける。

「座りっぱなしじゃ、いい仕事できないぞって伝えておいて」

朋子さんはそう言うと、もっと大胆にジグザグと走っていく。愛犬と私の娘を従えて、遠ざかったり近づいたり、速度を上げたり落としたり。映美でも無理なくついていけるレベルの速さで、運動量を増やしていく。

滑り台から帰って来た亜衣まで、彼女らの追いかけっこに参加する。「ママもおいで」とお呼びはかかるけど、荷物番は投げ出せない。芝生の上をたっぷり走り回るのを見ていたら、だんだん映美の足取りが重くなって来た。

朋子さんはゆっくり足を止め、「亜衣ちゃん、ママのところに戻ろうか」とちょっぴり不満そうな亜衣をなだめ、ケビンのリードと映美の手を引いてこちらに戻ってくる。私のところまで来ると、映美はゆっくり船を漕ぎ始めた。

「ごめんなさい。ちょっと、やりすぎちゃった」

「いえいえ。ありがとうございます」
映美を背負い、なおも遊び足りない亜衣に「そろそろ帰るよ」と伝える。「パパもお家で待ってるし」と言うと、ブーたれた表情がいくらか和らいだ。朋子さんは自分のお散歩グッズを手に持ち、私たちの準備が整うのを待ってくれる。
「今日は、バスだっけ？」
朋子さんに頷くと、彼女は公園の出口へ歩き始めた。愛犬との散歩にしては随分ゆっくりのペースで少し前を歩いてくれる。
「旦那の提案、そんなにダメでした？」
手を繋いで歩いている亜衣は、一人で楽しそうに何かの歌を歌っている。朋子さんは「いいえ。とっても素晴らしかったわ」と言った。
「芥川龍之介の『河童』なんて、最高じゃない？　この茨木で」
彼女は「い・ば・ら・き・で」ぐらい、ハッキリと強調した。
「川端康成も嫌いじゃないんだけど、ちょっと推し過ぎよね」
今度は周りを行き交う人の耳に入らないよう、小声で言った。「ね」のところでウィンクをされて、ちょっとドキッとする。
犬を連れて歩いても良さそうな道を通り、モノレールの駅を上手に避けて駅前のバスターミナルに到着した。次のバスは一六時三六分。もうそろそろ、休憩中のバスがグルっとこっちへ回ってきそうな気配。
「あの旦那、きっと、もっといい仕事するわ」
朋子さんは少し身体をほぐし、ケビンのリードを持ち替えた。
「だから、もっといい仕事ができるようにサポートしてあげてね」
彼女は「じゃあ」と言うと、かなり足早に自宅サロンの方へ歩いて行った。ケビンも勢いよくついていく。
ロータリーで停車していたバスが乗り場まで回ってくる。私は映美をちょっと背負い直し、亜衣の手を引いてバスの一番後ろの座席に腰を下ろした。彩都の住宅街へ去っていく朋子さんとケビンの背中に、西から差す陽の光が暖かそうだった。

『二月二一日（火）』――森田芽衣編
初出　令和三年二月二六日　アルファポリスにて公開

二月二三日（木）

沙綾が出演する舞台の初日が終わり、いつ終わるか分からなかった楽屋話も一区切りがつき、出演者は仲が良いもの同士で三々五々、帰路についたり、飲みに繰り出したり。沙綾は楽屋まで来てくれた瑞希さんと、新しい動画の仕上がりを打ち合わせるべく、市役所近くの電源が取れるカフェに向かった。

彼女らの影のプロデューサー、株式会社Mサイズさんの学生バイト、原田哲朗さん、その妹の美桜さんと共に、私も脚の高い椅子に腰掛けている。沙綾と瑞希さんは奥の席に座り、美桜さんはその横から編集画面を見ている二人を見つめている。哲朗さんは、女子三人を私の向かいからやや遠巻きに眺めていた。

ウェイターが背の高いグラスに入ったカールスバーグを運んできた。哲朗さんの前には、似たようなグラスでジンジャーエールがそっと置かれる。

「呑まないの？」

一緒に運ばれて来たチーズを摘み、グラスを傾けた。「ええ、まあ」と答えた哲朗さんは、沙綾たちのテーブルをジッと見ながらジンジャーエールの細いストローを口に咥えた。

真ん中でパソコンを操作している瑞希さんが気になるというよりは、その周りでチョロチョロしている美桜さんを気にかけているらしい。兄の視線が気になったのか、彼女はこちらを見ると、少々不満そうな表情を浮かべ、自分の飲み物を持ってやってくる。彼女は数歩手前で息を吐き、負の感情を顔から追いやった。

「お忙しいのに、ありがとうございます」

「いえいえ。日頃からお兄さんにはお世話になってますから」

美桜さんが離れると、賑やかだった編集会議が少々緊張した雰囲気に変わっている。言葉数は少なめに、キビキビと作業を進めているらしい。哲朗くんと一緒にそれを眺めていると、美桜さんは彼を小突いた。

「同席のレディをほったらかしにしない」

哲朗くんは「あ、すみません」と私に向き直り、頭を下げた。

「別に良いのよ。オバさんだし」

私の言葉に、美桜さんはとても困惑した顔をしていたが、ザックリ編集が終わ

った瑞希さんに呼ばれ、そっちの席へ移動した。
「政治家志望の妹さん、だっけ？」
独り言に近い呟きに、哲朗くんはしっかり頷いた。
「あなたの方が、向いてるかもね」
「え？」
「なんでもない。オバさんの独り言」
テーブルに運ばれていたカプレーゼに箸をつけた。唐揚げやポテトサラダも並んでいる。娘たちのテーブルにはピザも運ばれている。唐揚げを哲朗くんに勧めると、彼は少々かしこまり、「いただきます」と口をつける。一口かじって食欲にスイッチが入ったらしく、自分の取り皿に少しずつサラダやトマトを移していく。
「そうそう、それでいいの。どんどん食べなさい」
中肉中背、いや少し背が高いくらいなのに、なぜか線が細く思えるというか、他を威圧しない柔らかい印象をしている哲朗くん。柔和な顔の割に、時々頑固そうな気配を漂わせることもある。アーティストっぽい瑞希さんとは、意外とお似合いなのかもしれない。
美桜さんに見せていたパソコンを閉じて、今度は沙綾がそれを持ってこっちにやってくる。代わりに、美桜さんのドリンクも持って瑞希さんの方へ来いと哲朗くんが手招きされる。彼は自分のお箸とドリンクも持って、座席を移動し、哲朗くんの座っていた席に沙綾が座り、パソコンを開いた。
明日の公演終わりに劇団関係者に見せるという、新編集の映像作品。妹にやいやい言われている哲朗くんを視界の端で気にかけながら、再生が始まった動画に気持ちを切り替えた。

『二月二三日（木）』——奥野朋子編
初出　令和三年二月二八日　Pixivにて公開

二月二四日（金）

哲朗さんの妹、美桜さんは改札を通り、左手奥のエスカレーターを降りて行った。少々小柄ながら力に満ち満ちた女子高生は、連日の往復を一切苦とも思わず、平然と習い事にでも通うかのような足取りで今日も西宮へ帰っていく。

隣で一緒に見送っていた哲朗さんは、美桜さんがまだ見えている間に視線を逸らし、左へ身体を向けながら、全身で伸びをする。

「あ〜あ。やっと、帰った」

全身から力を抜き、大きな欠伸をして歩き出す。

「え、まだ」

「アイツのことは、適当でいいよ」

頭の天辺がまだ少し見えた気もするが、哲朗さんが駅を出てしまう。「ごめんなさい」と心の中で呟いて、哲朗さんの後を追いかけた。

「みぃちゃんは、この後どうする？」

真っ直ぐ帰るなら、美桜さんと反対方向に一駅乗ってしまう方が早い。でも、今日は武藤さんのところに一兄が挨拶に来ている。演者さんたちと打ち上げに行った沙綾さんは、その後どうだったのかな？

なんとなく、哲朗さんの歩くままに合わせて隣を歩く。彼はJR茨木駅を出て、駅前商店街を右に曲がる。そのまま、市役所の方へ道なりに進むと株式会社Mサイズの入ったビルに辿り着く。

「哲朗くん、おかえり」

彼は応接スペースで打ち合わせをしていた武藤さん、一兄に挨拶を返し、自分の席に戻る。私は置きっぱなしにしていた自分の荷物を彼のデスクから拾い上げた。武藤さんは一兄との話を切り上げ、哲朗さんに声をかけに行った。

手持ち無沙汰になったらしい一兄が、私を応接スペースに座らせる。

「で、その後どう？」

カバンからMacを取り出し、画面を開いてYoutubeの管理画面とGoogleアナリティクスの画面を出して、一兄の方へ画面を向けた。彼は「へー。結構伸びてるじゃん」と画面のあっちこっちを見ながら言った。

「コビトカバのロゴも可愛いって、JKの間で人気らしいよ」
「マジ？」
「マジ、マジ」
「ロゴ、ありがとう」と言うと、「可愛い妹のためだから、気にするな」と答えて、今日の昼に上げたばかりの動画を再生した。
「へー。よくできてる」
「上手く行ってたらいいんだけどね」
スマホをチラリと見るが、特にメッセージは来ていない。動画もまだ限定公開で、そんなに再生数は伸びていない。コメントも評価も、まだついていない。
一兄は自分のスマホを見て、すぐに何か返事を返した。
「じゃあ、帰ろうか」
「え？」
「向こうはまだ、遅くなるって」
一兄は椅子から腰を上げ、武藤さんに帰ることを伝えに行った。武藤さんは飲みに行きたかったようだけど、一兄は丁寧に辞退して私に「帰ろう」と促した。
「じゃあ、失礼します。哲朗くんも、またな」
一兄は私の背中を押して、先にオフィスから押し出そうとする。出しっぱなしのMacをカバンに仕舞い、促されまま株式会社Mサイズを後にした。扉が閉まる瞬間、哲朗さんと目があった、ような気がした。
「さ、行くか」
一兄は川端通りへ向けて歩を進めるけど、私は市役所近くの駐輪場へスクーターを止めてある。一兄に「こっち」と道を指し、駐輪場に向かって歩き始めた。

『二月二四日（金）』——浪川瑞希編
初出　令和三年二月二八日　noteにて公開

二月二七日（月）

今日は朝イチでJRの踏切を渡り、普段はあまり通らない総持寺の裏を抜け、郵便局の混雑を眺めながら、市立庄栄小学校に隣接された庄栄図書館に踏み入った。小説やエッセイ、児童書の類はそれなりに所蔵してあるが、それ以外はもう少し先の中央図書館に出向いた方がいい。

新刊の傾向もあちらの方が好みだが、今日は休館日。仕方がないというか、少し目先を変えて文庫本でも手に取ってみようかとこちらに来てみた。こちらもピンとこなければ、市役所の方へ赴いて、中条図書館にでも行ってみるさ。

この数日、息子たちの周辺で話題に上がっているらしい、芥川龍之介の『河童』でも久しぶりに読んでみようか。他館で借りていた本を返却し、悠々と手ぶらで新刊のコーナーを眺め、返って来た本のコーナーもチラリと目で追う。たまに素晴らしい偶然もあったりするが、今日はどちらもピンとくる出会いがない。さっさと文庫本の棚に足を向ける。

「あ」の棚を目指して、「わ」の棚から逆に動いていると、ポケットのスマホが低い唸りを上げて震え始めた。消音モードのバイブレーションだけでも、静かな図書館では周りからの視線が集まってくる。

サッと画面を見ると、史穂さんからの電話。バイブレーションを止め、一度ロビーへ出ると呼び出しが途絶えてしまった。電話を起動して、こちらから折り返す。相手はすぐに出てくれた。

「ああ、お父さんすみません」

「いえいえ。どうされました？」

「本っ当に申し訳ないんですけど、テディの定期検診をお願いできないかと思いまして」

電話口の向こうで、縮こまって話している姿が想像できる。愛犬の定期検診が先に入っていたのに、どうしても外せない急用が今日の今日で入ってしまい、そちらに行かざるを得ないという。

「当日のキャンセルになってしまうと、次の予約が大分先になってしまうので……」

非常に申し訳なさそうな声が聞こえてくる。その電話をすぐそばで聞いていそうなあのコーギー、テディの姿も思い描ける。まぁ、アレなら意思疎通できるだろう。

「いいですよ。どちらで預かりましょう？」

「ありがとうございます。そしたら……」

史穂さんは阪急茨木市駅ではどうかというので、二つ返事で承諾する。本を借りてから向かっても間に合うだろう。落ち合う時間と駅までの道のりを頭の中で練り上げる。

「じゃあ、後ほど」

「すみませんが、よろしくお願いします」

史穂さんとの電話を終え、サッと「あ」の棚から芥川龍之介の『河童・或阿呆の一生』を拾い上げ、近くにあった他の文庫本も二、三冊、気になった題名の書籍を借りてみる。

図書館の外に向かいながら、貸し出しの処理を終えた本を手提げカバンに仕舞う。庄栄小学校を避けながら住宅街を進み、安威川にかかる千歳橋の方へ向かった。

途中、大きな荷物を持ってJR総持寺駅の方へ向かう浪川さんとすれ違った。

「おはようございます」と挨拶を交わす時間しかなかったが、思わぬところで知人と出会った偶然に、なんだかとても胸が弾んだ。今日はきっと、いい日になる。目の前を駆け抜けていった阪急電車に、そんな想いを投げてみた。

『二月二七日（月）』——武藤幸次編

初出　令和三年二月二八日　Mediumにて公開

三月四日（土）

土曜の朝一〇時過ぎ。久々に一日オフの予定が、今日は少々重い足取りで自分のオフィスにたどり着く。扉の向こうから、FM802のパーソナリティが番組に届いたお便りを読み上げているのが聞こえてくる。

「おはようございます」

オフィスに入ると、土曜日出勤の哲朗が挨拶してくれる。普段は香織が座っている席から、今日は浪川さんが顔を覗かせた。彼女も「おはようございます」と声をかけてくれた。二人とも不思議そうな顔をしていたが、僕が自分の席に荷物を置き、端末を立ち上げながらコートを脱ぎ始めると、浪川さんは目の前のモニターに視線を移し、自分の作業に戻っていった。

哲朗は自分の席を立ち、僕にコーヒーを入れてくれた。

「今日、お休みでしたよね？」

「娘にフラれてね」

コートのポケットに突っ込んでいたテーマパークのチケットを、積み上げた資料の上へ適当に置いた。中で遊ぶには別料金がかかるらしい、「入園無料」の券。

「要る？」

二枚揃えて哲郎に差し出す。彼は「今月末まで」と書かれたチケットを受け取り、「じゃあ、遠慮なく」と言った。

僕らが二人で立ち話をしていると、浪川さんが哲朗を呼んだ。

「コレでいい？」

哲朗はモニターを見て、「うん、OK」と答えた。

「一応、Slackにもコメント残しておいて」

「りょうか〜い」

「じゃあ、次は画像の差し替え頼んでもいい？ コレなんだけど」

哲朗はモニターにSlackを表示して、該当のチャットを開いた。年度末に合わせた画像変更の依頼を、浪川さんのマウスを横から取って説明していく。

「浪川さん、できるんだ」

「立命の映像なんで、簡単な作業は」

哲朗は浪川さんにマウスを返し、彼女は楽しそうに作業へ入っていく。Windowsの操作感に戸惑いながらも、テンポよくリネーム作業を進めている。

「て、すみません。勝手に」

「いやいや、助かったよ。浪川さん、後で書類とタイムカードだけ」

顔をこちらに向けた彼女に、空中で物を書く仕草をすると「は〜い」と明るい声を返してくれた。「ひと段落ついた時とか、お昼休みでいいからね」と声をかけ、自分の席に戻ってSlackを確認する。年度末のテキスト変更やら画像差し替えやらがそれなりの速度で片付いていってる。

哲朗は、顧客から届いた書式がバラバラのデータを整形してくれているらしい。じゃあ、僕は未着手のLPとCMSのカスタマイズでもやろう。昨日、確認を依頼した件のフィードバック、修正もさっさと片付けたいが、アレは週明けまで動かない。

作業用のアプリケーションが立ち上がる間に、スマホに通知が届いた。妻の史穂と、長女の陽菜が神戸南京町で水餃子を啜っている写真だった。

朝はかなり不機嫌に見えた陽菜の表情が、随分と和らいで見える。娘とのデートが流れたのは寂しいが、楽しそうならそれでいい。

肉まんと月餅を買って帰るように頼むと、夕方にはオフィスに立ち寄ると返ってきた。哲朗と浪川さんの分も頼んでみた。年度末の追い込み、気合を入れて片付けますか。

『三月四日（土）』——武藤幸弘編

初出　令和三年三月二日　カクヨムにて公開

三月五日（日）

今日までだった漫画をTSUTAYAで返却。借りて帰りたかった目当ての漫画は貸し出し中で、空振りの心をなんとかしようと斜め向かいのミスドに足を踏み入れた。窓に貼られた少々ぽっちゃりなピカチュウ、フシギダネのシールが私も欲しいんだけど、どこで手に入るかは分からない。とりあえず、毎年のカレンダーで我慢する。

「あれ、小野寺さん」

夕方の遅い時間、ショーケースに欠品もチラホラ見えるレジに並んでいると、隣の席から聞き覚えのある声がかけられた。ちょっぴりよそ行きっぽい浪川瑞希さんと、随分ホクホクした表情の哲朗さんが座っていた。仮面ライダーに似て、見慣れないヒーローグッズっぽいものも、その隣に鎮座している。

「どうも」と軽く挨拶し、前が開いた列を詰めた。浪川さんが物珍しそうに、私の頭から爪先まで眺めている。こちらは知り合いに会うとはあまり想定していない、着古したユニクロ一式。ヒールのない靴、手抜きの化粧も相まって、ちんちくりん加減、幼さが加速している。

彼女の視線を気にしていると、レジの向こうから「お次の方どうぞ」と声がかかった。ポンデリングとオールドファッション、期間限定の新作も少しお得になる組み合わせで詰めてもらう。

会計を済ませ、「じゃあ、また」とお二人に挨拶して店を出た。外から二人を見ると、彼はとても楽しそうに話し込んでいる。非常に、眩しい。逃げるようにTSUTAYAの隣で停めた自転車をピックアップして、そのまま阪急の駅の方へ向かう。

陽が落ちるとまだまだ肌寒い。自転車には跨らず、荷物をカゴに入れて押し歩く。商店街を抜け、茨木市駅の一階を通ってバスロータリーに出る。駅前の横断歩道を渡った少し広いところで、自転車に跨った。前後の安全を確認して、ゆっくりと市役所の方へ向けて走り出す。

私と同じように自転車のカゴにスーパーの袋を入れた女性たちが、前から後ろから通り抜け、歩道の上をまばらに埋めている歩行者の間を上手に縫っていく。猛

烈な勢い鈴を鳴らして駆け抜けていくオバさんたちもチラホラ見える。
夜の飲食店は今日はほぼお休み。昨日までは飲み歩いていた人たちも、今日は大人しく家で飲むのだろう。さっきのイオンで、大きなボトルを買って帰ったオジさんもいたな〜。あのウィスキーはどう飲むんだろう、と目の前に気をつけながらも想像が捗る。
綺麗になった茨木神社、立派な茨木童子の前を通り、交差点を二階渡った。市役所の前を南へ進み、業務スーパーの混雑ぶりを眺めて右に曲がる。カレーの匂いに心惹かれながら、JR茨木駅の方へ自転車を進める。
駅前の駐輪場で一回停めないとと思っていたら、見覚えのある女性が駅へ向かって歩いている。後ろに気をつけながら自転車を脇に寄せ、サドルから降りた。自転車を押して、女性の隣までかけていく。自転車の音で気がついた女性、郁美さんがこちらに振り向いた。
「あら、ルミちゃん」
「もう帰るんですか？」
郁美さんは自転車のカゴを見て、「あら、差し入れ？」と言った。私が頷くと彼女は「ごめんなさいね。明日も早くって」と答えた。
「また今度、ゆっくりお茶しましょ」
郁美さんは「お母さんによろしくね」と言い残し、改札へ向かうエスカレーターに乗り込んだ。彼女の背中をゆっくり見送りながら、カゴの中のドーナッツをどうするか、思考を巡らせた。

『三月五日（日）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年三月二日　小説家になろうにて公開

三月六日（月）

昼下がりに、駅前の喫茶店でコーヒーを飲みながら、残り僅かな文庫本のページをめくる。臙脂のスピンは、昨日読み終えたところに挟んだまま。

ランチタイムには少し遅い時間帯とはいえ、しっかりしたランチといいコーヒーを淹れてくれるココの店内は、色んな年代のお客さんで賑わっている。目の前で古い友人の昼寝に付き合っている身としては、すっかり薄くなった頭を眺めているよりは、返却期日の近い本の世界に身を投じている方が、気が楽だ。少し冷めたコーヒーを飲み切り、おかわりをオーダーする。

ウェイトレスが新しいコーヒーを持ってきたところで、目の前のおじさんはゆっくり身体を起こし、額に上げたメガネを元の位置に戻す。その仕草ひとつひとつに、おじさん臭さが纏わりついている。

「僕も、おかわりもらおうかな」

彼は寝起きの顔を両手でマッサージすると、近くに来ていたウェイトレスに注文した。ウェイトレスは「かしこまりました」と笑顔で答え、空のカップを持って下がった。

「朋ちゃん、ゴメンね。鼻炎薬でさ」

眠くならない物にすればいいのにというと、彼は、眠くならない奴は効かなくて、と答えた。私の読んでいる本を見ながら、運ばれてきたコーヒーを啜る。

「東野圭吾？」

「そうそう。映画になるっていうから、今度はどんなもんかと思って」

「で、どう？」

私は読みかけの本を閉じ、肩を竦める。彼は「だろうね」とコーヒーを飲んだ。私は文庫本を鞄に仕舞う。

「もういいの？」

彼の問いかけに、小さく頷く。最後まで読み切らずに、返却ポストへ投げ込もうかな……。

「沙綾がこっちに来るのは来月だっけ？　ケントは、」

首を振って答える。

「そっか。会わないまま、二十歳、か。元気にはしてるの？」
「向こうで元気に大学通ってる」
彼にしては珍しく、「ケントが大学生か、想像つかないな」と随分しみじみとした様子で呟いた。彼が健人に会ったのは、八歳の頃が最後だっけ。
「四年前の写真ならあるけど、見る？」
「いや、また会う時の楽しみに」
彼の手振りで出番を失ったスマホは、さっきまでいた鞄の中へ逆戻り。
「おっと、もう一四時か」
彼は自分の腕時計を見て、カップに残ったコーヒーを飲み干した。
「僕は戻るけど、朋ちゃんは」
私は首を振る。
「じゃあ、お先に」
彼は財布から五千円札を取り出して、私の前に置いた。そのまま流れるように、喫茶店の扉を開ける。お店の外に出た彼は窓の外から私に手を振り、株式会社Mサイズの方へ早歩きで去っていく。
私は残りのコーヒーをゆっくり楽しんでから、駅前をぶらついてバスに乗ろう。駅の向こう側に出て、イオンモールを覗いてもいい。
まだ少し肌寒いけど、だんだん春めいてきた。宇野辺までのんびり散歩して、モノレールを乗り継いで帰るのもアリか。
最後に数ページだけ残った文庫本を、もう一度鞄から取り出した。イオンモールへ行くのなら、中の図書館で返却しよう。どこまで読んだか記憶を辿りながら、「この辺りだった気がする」と手を止める。今一つ肌に馴染まない物語も、最後まで見届けてあげようじゃない。

『三月六日（月）』——奥野朋子編
初出　令和三年三月一二日　Pixivにて公開

三月七日（火）

ティ・コ・ラッテーの前から北上して、キリン堂の交差点を万代の方へ曲がる。万代でも火曜日の売り出しをやっているけど、今日の目的地は平和堂。お店の前を素通りして、マクドナルドのさらに先、スターバックスの駐輪場に自転車を止める。

自分用に、ムレスナティーのマスカットフレーバーを買う時に小休止したけど、それまで延々と自転車を漕いできたもんだから、少し身体が冷えてしまった。タイムセールにもまだ少し早い。一杯だけコーヒーを飲んだって、混み出す前にレジまで行ける。

隣のマクドナルドもそれなりに人がいたけど、こちらも案外混んでいる。窓際の一人席は電源を取りながら長居している人がチラホラ。おしゃべりな同年輩も優雅な午後を楽しんでいるらしい。

できれば店内で腰を落ち着けたいけど、お店の真ん中にある大きなテーブル席しか座れなさそうだ。図書館で借りた本やら、さっき買った紅茶やらが入った買い物袋を椅子に置いて、ホットのドリップコーヒーを注文する。隣のドライブインも忙しいらしく、店員さんはあちらこちらに目まぐるしく動きながら、私のコーヒーを出してくれた。

さて、久々に中央図書館まで行って借りた、芥川龍之介の『河童』でも読もうかな。いや、ようやく借りられた気になってた雑誌の方を開こうか。大きめの冊子を買い物袋から取り出してみる。

顔を上げて早速ページをめくろうと思ったけど、斜向かいの席に座る若い女性が気になった。ルミと同い年ぐらい、見覚えがあるような気がするけど、どこかで見たっけ？

ジッと顔を見ながら記憶を辿っていると、視線に気がついたらしく相手の女性と視線がかち合った。彼女はこちらに軽く会釈をする。ちょっとぶっきらぼうに見えるこの娘は確か……

「野村さん？」

向こうは「どうも」と会話を切り上げようとする。そういえばルミから、マク

ドナルドで配達をしている友達がいる話は聞いた気がする。「彩夏に嫌われたかも」と少し前に落ち込んでいたのも思い出した。

彼女とルミは高校まで一緒で、そこから野村さんは関東の大学へ進学し、そのまま就職したと聞いた気がするけど……。

野村さんは軽く挨拶をしてからは、こちらの視線を一切気にすることなく、どこか暗い表情でコーヒーを啜っている。ルミと仲良くしていた頃は、底抜けに明るい娘だった覚えがあるけど、そんな印象は微塵も感じさせない。

時折ため息をつきながら、かなり上の空といった様子。動きもいちいち緩慢で、覇気というか、元気がない。

自分のことをしようと雑誌に目を通すものの、なんとなく彼女のことが気になって内容が入ってこない。ジッと観察していると、野村さんは席を立ち、自分のカップを解体してゴミ箱に入れた。私も彼女と同じタイミングでコーヒーを飲み切り、野村さんの後に続いてカップを片付けた。

店を出る彼女の後を追い、外に出たところで声をかけた。

「もし良かったら、またルミと仲良くしてあげて」

そのまま行ってしまうかと思った野村さんは足を止め、両手をポケットに突っ込んだままこちらに振り向いた。

「嫌じゃなかったら、ルミも私も、いつでも相談に乗るから」

彼女は何も言わず、私に軽く頭を下げて、隣のマクドナルドへ向かって歩いていく。少し先まで歩いてから立ち止まり、身体ごとこちらに向き直る。今度は、両手をポケットから出し、頭を下げた。どう声をかけるか迷っている間に、彼女はスッとマクドナルドの店内へ入って行った。

『三月七日（火）』——小野寺香帆編

初出　令和三年三月一二日　MAGNET MACROLINKにて公開

三月一〇日（金）

一輝さんは入り口横の冷蔵庫からビールを選び、店員さんに渡すと僕らのテーブルまで戻ってきた。斜め向かいに座る沙綾さんと二人だけなのは、まだなんとなく背筋が伸びる気がする。

店員さんがグラスに注いだビールと、さっきの瓶を持ってくる。一輝さんはちょっと黒いビールをグッと流し込んだ。沙綾さんは瓶のラベルを眺め、一輝さんが手を離したグラスに口をつけた。

「結構甘いのね。これなら哲朗くんも飲めるんじゃない？」

彼女は口元を拭いながら、ビールの入ったグラスを差し出した。手振りで辞退を示すと、「ふーん。そういうの、気にする感じ？」と笑みを浮かべながら、一輝さんの前にグラスを戻した。

「あんまりいじめてやるなよ」

「大事な妹の彼氏だし？　ね、もうヤった？」

一輝さんの表情が一瞬固まる。全力で頭を振って否定する。「冗談、冗談」と沙綾さんは笑みを浮かべるものの、鋭い視線は僕の目から離れない。曖昧な笑顔を作り、一呼吸置いてから視線をグラスに移し、一口飲んだ。ホワイトビールだからそんなに苦くないと書いてあったのに、自分には十分苦い。

「次は、どうしよっかな〜」

沙綾さんは自分のビールを飲み干して、冷蔵庫の方へ歩いていく。

一輝さんは声を少し落として、「なんか、ごめんな」と囁いた。

「こっちのチョンボもカバーしてもらったお礼だったのに」

「いえいえ。こちらこそ、いつも奢ってもらって」

「いいって、いいって。どんどん食べて」

「じゃあ、いただきます」と改めて箸を持ち、目の前の肴に手を付ける。牛肉のしぐれ煮が豊かな風味と甘味を口いっぱいに拡げてくれるのに、添えられている葉わさびがそれなりに辛い。鼻にくる辛さに耐えてビールを飲むものの、やっぱり苦い。大きい方のグラスを選んだのは、失敗だったかもしれない。

「今度は緑？」

一輝さんの視線は、僕の後ろを見ていた。沙綾さんが新しいビールを持ってテーブルへ戻ってくる。手元のグラスには緑のビールが注がれている。
「そ、抹茶」
「抹茶といい、桜といい」
「いいじゃん、春らしくって」
沙綾さんの後ろについてきた店員さんは、ポテトフライとサラダを置くと、空いたグラスをもってカウンターの向こうへ帰っていった。
「みぃちゃんもいたら良かったのに」
沙綾さんは緑のビールを一輝さんに勧めながら言う。彼はそれを一口飲んで、
「あいつの誕生日はまだ先だよ」と答えた。
「誤差みたいなもんよ」
「いやいや、お店に迷惑かかるから」
「じゃ、手土産持って実家で飲ませるか。そのときは、哲朗くんも一緒に行こ」
一輝さんの表情が微妙に濁った気がするけど、それ以上に僕へ向けられた沙綾さんの圧が強い。視線と近さにうろたえている間に、「ね？」と念押しが加えられる。
「大丈夫、大丈夫。杏より梅が安いって」
沙綾さんは一輝さんの背中を軽く叩いて、ご機嫌に笑う。一輝さんの顔に「うわぁ」と書いてあるような気がしたけど、それは酔っ払いに関してなのか、ワードセンスに関してなのか、僕にはよく分からなかった。
「お嬢さんとおつきあいさせてもらってます、ってちゃんと」
「いや、彼氏とかじゃないですよ」
沙綾さんの言葉が途切れる前に、言ってやる。そう、彼氏とかじゃない。彼女の手が柔らかいこととか、その小ささとかは先週知ったけど、彼氏とかじゃない。
二人でひらパーに行ったぐらいはなんともない。そう自分に言い聞かせながらも、細心の注意を払いながら目の前の二人と向き合った。酔っ払ってなくても厄介な人と近々一緒に住むのは大変だろうな、と思いを馳せながら、口を潤すためにビールを飲んだ。

『三月一〇日（金）』——原田哲朗編
初出　令和三年四月九日　ノベルアップ+にて公開

三月一三日（月）

日中は暑かった背広にコートも、二一時だとちょうどいい。もうじきお彼岸だけど、まだまだ三寒四温。今日の暖かさはたまたまだろう。朝から降り続いていた雨は夕方には上がり、傘は広げずに歩けるのもありがたい。

いつもはビルを出たところで分かれる哲郎くんが、今日は珍しく少し後ろをついてくる。小柄とは言い難い体格、いつも穏やかな雰囲気を纏っているものの、今日は輪をかけて覇気がない。

「今日は外食？」

哲郎くんはゆっくりと顔を上げる。

「外食っていうか、餃子でも買って帰ろうかなと」

「餃子？　餃子もいいなぁ……」

哲朗くんはJR茨木駅の方へ歩いて行こうとする。線路を挟んで王将と大阪王将の店舗はあるが、線路をくぐって右手に曲がった春日商店街にも、餃子の美味い店はある。とぼとぼ歩く背中に声をかけ、素朴な商店街の餃子バルへ連れていく。テイクアウトのメニューをもらう。店内もそれなりに賑わっているらしい。

「へー。ニンニク不使用なんですね」

メニューを見ていたら興味が湧いてきたのか、ちょっと元気が出てきたようだ。狭いなりにどこも手の込んだ飲食店、飲みどころが軒を連ねている商店街の活気にも釣られ、自分もちょっぴり気が大きくなってくる。

「じゃあ、焼餃子と梅しそ餃子にしようかな」

「それを二つずつと、麻婆豆腐、油淋鶏も」

テイクアウト用の窓口でオーダーを伝え、容器やら袋やらの分け方もパパッと決める。あとは出来上がりを待って支払いを済ませるだけ。店内で飲みながら待とうにも、今は満席らしく座れない。

大人しく外で夜風に当たりながら、妻に送るLINEメッセージを考える。

「結構食べるんですね。森田さん」

「なに言ってんの。君の分だよ」

「えっ？」

哲朗くんが何かを言い足そうと口を開いたタイミングで、出来上がりのお呼びがかかる。財布を取り出そうとする彼より先に、パパッと二人分の支払いを済ませてしまう。麻婆豆腐と油淋鶏の入った方を哲朗くんに差し出した。

「いやいや、流石に悪いっすよ」

「若いのに遠慮すんなって。ほら」

半ば押しつける形で彼の手に持たせた。自分が食べる分もしっかり持った。まだ何か言いたそうな哲朗くんに、さっさと移動して店の前を開けようと手で合図する。

「しっかり食べて、社長をサポートしてもらわないと」

「じゃあ、いただきます」

哲朗くんはまだ何か引っかかっているようだったが、多少素直になった足取りで茨木駅の方へ身体を向けた。

「僕はコッチだから」

茨木駅とは反対の、春日商店街の出口を指差した。哲朗くんは、「あ、じゃあ、おやすみなさい」と軽く頭を下げて、駅の方へ曲がって行った。

その背中を見届けていると、ポケットの中でスマホが震える。さっき送ったメッセージに、「了解です」と芽衣からの返事が届いていた。

広くない一方通行を抜けてくる自動車を避け、月曜日の夜から元気な酔客の間を縫って真っ直ぐ帰路を急ぐ。たまに遭遇する人懐っこい黒猫に遭遇したらどうしようか、期待と悩みとを胸に抱いた。

『三月一三日（月）』——森田康徳編

初出　令和三年四月一四日　NXZ（旧サイト）にて公開

三月一四日（火）

色鮮やかなメニューを一ページずつめくり、最後のドルチェ、デザートまでしっかり目視してクルッとひっくり返す。振り出しに戻って最初から眺めるものの、何を頼めばいいのかよく分からない。

向かいの席に座るルミさんがメニューから視線を上げ、「どう、決まった？」と訊いてくる。私は曖昧に微笑んで、「すみません。まだ、迷ってて」と答えた。

「じゃあ、適当に頼んでもいい？」

私が頷くと、彼女は呼び出しボタンを押した。

「何か一品、どうしてもコレだけはってのを選んでおいて」

メニューをじっくり見て選ぶ間もなく、ルミさんが読んだウェイトレスがやってくる。ルミさんはメニューを指差しながら、サラダやらチーズやらを頼んでいく。「それと、」と私の方を見た。

「ああ、じゃあ、コレを」

メニューを広げ、品物を指し示す。

「あと、ドリンクはフルーツワインのラ・フランスで。瑞希さんは？」

「お酒はアレなんですけど、オールフリーを」

ウェイトレスは注文を繰り返し、メニューを抱えて厨房へ歩いて行った。

「ピザ好きなんだ。意外～」

「そうですか？」

「勝手に、和食とか魚好きだと思ってました」

ウェイトレスが先にドリンクを運んでくる。ルミさんと乾杯すると、彼女はグイッとワインを飲んだ。私はビール風飲料で喉を潤す。

「ルミさんはワインがお好きなんですか？」

「う～ん、嫌いじゃないけど、好きってほどでもないかな。コレは物珍しかったから、ついつい。瑞希さんはそれで良かったの？」

ルミさんはウェイトレスが運んできた葉野菜たっぷりのサラダを、手際よく取り皿に分けてくれる。彼女に手振りで「食べて」と促され、「いただきます」と手を合わせてお箸を手に取った。一口頬張ると、食べ慣れない味が口中に拡がっ

ていく。

「一応、未成年なんで」

「えっ、ウソ。気を遣わせてゴメンねぇ」

「いえいえ。ビールっぽい味は好きなんで」

ノンアルコールビールは家でも散々、晃兄に飲まされている。誕生日を過ぎたら、哲朗さんや一兄にも色々連れ回されるんだろう。

「いくつだっけ？」

「一九です」

「一九？　七コ下……。七コ下、か」

ルミさんは次々に運ばれてくる料理に目もくれず、茫然と何もないところを見つめている。私はチーズやらソーセージの盛り合わせやらを適当に取り分け、自分の分を端っこから摘んでみる。

「仕事もできて、モデルもやれて、彼氏もいて。羨ましいなぁ」

「か、彼氏なんていませんよ」

「本当に～？　この間のおめかしは、誰がどう見てもデートでしょ」

ルミさんは底意地の悪そうな目つきでじっとり見つめてくる。通りがかったウェイトレスを呼び止め、二杯目のフルーツワインを注文した。空きのグラスをそのままウェイトレスに手渡し、自分の目の前にある取り皿にフォークを突き立てる。サラダを口に運んで、ヤギみたいに口を動かして草を咀嚼した。

「アレは、ただのお出かけです」

「二人っきりでお出かけしてたら、十分デートでしょうよ」

程よくアルコールが入ったルミさんは、新しく届いたワインをまたまたグイッと飲んだ。徐々にエンジンがかかり始めているこの人相手に、デートかどうか論争を持ちかけても勝ち目はなさそうだ。

哲朗さんとは彼氏彼女の関係かどうかの話に切り替えよう。それで納得してもらえるかは分からないけど、酔っ払いをなだめる、あしらうことを最優先に考えよう。上手くいくかは神のみぞ知る――。

『三月一四日（火）』――浪川瑞希編

初出　令和三年四月一五日　noteにて公開

三月一五日（水）

朝のメールチェックを済ませ、時計を確認すると午前六時四四分。三月も後半に入り、日の出が随分早くなったとはいえ、まだまだ少し肌寒い。起きがけのスキンケアはしっかりやった。日焼け止めも忘れていない。

ランニングウェアにウインドブレーカーを羽織り、愛犬のケビンと共に散歩を兼ねたジョギングに出かける。軽い運動のつもりでも、成犬のゴールデンレトリバーに合わせて走れば、それなりの速度で景色が後ろに流れていく。

早めの通勤時間でもおかしくない時間帯なのに、この辺りの住民はこんな時間から出かけないようで、私のように犬とお散歩する人や、自宅の前やゴミステーションを掃除する人は見かけても、スーツ姿に革靴で急いでいる人は見かけない。

隣を走り抜けた公園では本格的にトレーニングしている人もいたし、彩都西中や雪稜高校の方からは、野球部やらサッカー部やら、運動部の掛け声も聞こえてくる。女子バレー部の力強い声も心地いい。

車通りの少ない大通りを渡り、坂を駆け下りてモノレールの高架に近づく。そこから右手に曲がり、真っ直ぐ北へ。ミニストップが見えてきたらさらに左へ曲がって、モノレールを潜る。彩都西公園をグルッと回って一息つけば、朝のお散歩は一区切り。だんだん体温と息が上がってきたけど、ケビンは主人を気遣って、ゆっくり歩いてくれるかしら……。

「あ、お母さん」

ベンチの横に差し掛かったところで声がかかった。お利口さんのケビンは上手に速度を落としてくれる。

「あら、一輝さん」

「おはようございます」

長女の彼氏、一輝さんが仕立てのいいスーツを着て、ベンチにコーヒーとパンを広げていた。挨拶と共に「随分早いのね」と返すと、

「今日は、特別に。どうせ特別なら、そこのパン屋さんで特別な朝食をと思ったんですが、水曜日は開店が遅いんですね。失敗しちゃいました」

「それで、コンビニのパンとコーヒー？」

「まぁ、そんなところです」
彼は笑みを浮かべ、ケビンにも挨拶をして全身を撫で回した。
「おっと、もう行かないと」
チラリと腕時計に目をやると、慌ててパンをカバンに詰め込んだ。
「じゃあ、失礼します」
「いってらっしゃい」
一輝さんはコーヒーを片手に、駅の方へ走って行った。蓋付カップのコーヒーがこぼれないように、上手にバランスを取りながら、力強いフォームで遠ざかっていく。
いつの間にか私の隣で大人しくお座りしていたケビンが、下から私の顔を見上げた。
「ゴメン、ゴメン。行くよ」
私がゆっくり走り出すと、ケビンも徐々に速度を上げていく。芝生の上を抜け、駅に向かう人たちの邪魔にならないよう、バスロータリーを大きく迂回して、再び住宅街へ入っていく。
毎朝すれ違うご近所さんに挨拶して、ケビンもたっぷり撫でてもらって自宅に戻った。ケビンのリードを外し、たっぷり水を飲ませてあげる。愛犬が美味しそうにがぶ飲みするのを見届けながら、私もミネラルウォーターを手に取った。
今からストレッチをして足を入念に労ってから、愛犬と一緒に朝ご飯。今日も一日、頑張るぞ。

『三月一五日（水）』——奥野朋子編
初出　令和三年四月一七日　Pixivにて公開

三月一六日（木）

日没後に子供の手を引かずに夜道を歩くのは、なんだかとても久しぶりな気がする。旦那も子供も自宅に残し、一日お手伝いに来てくださったお義母さんを最寄りのバス停までお見送り。

大人が二人並んで歩くにはやや細い歩道を抜け、橋に差し掛かったところでお義母さんが申し訳なさそうに口を開いた。

「食べ散らかしたまま出てきちゃったけど、大丈夫だった？」

夕方に帰宅予定だった康徳さんが、一九時を過ぎてようやく帰宅したのと入れ違いになる形で、娘二人と晩ご飯の後片付けもお願いして、少々バタバタと出てきてしまった。

「大丈夫ですよ。こちらこそ、追い立てるみたいになっちゃって、すみません」

「気にしないで。世間の嫁と姑なんて、そんなもんだから」

お義母さんは目を細めて笑った。肯定したものか、否定したものか迷っている間に、お義母さんは話題を切り替える。

「義理の妹さん、予定日いつだっけ？」

「来月末とか、GWとか……」

「じゃあ、あちらはバタバタね。どんどん、うちに頼りなさい。無茶振りも大歓迎」

お義母さんは軽く胸を叩いて、「ドーンとね」とウインクした。

「あの子たちにもイトコができるんだ……。よかった、よかった」

アルプラザの裏口から中に入って、向かいの出入り口を目指す。食品売り場の横を抜けて目の前の道路を左に曲がれば、国道一七一号線に突き当たる。お義母さんの少し前を歩いて先導しながら、話を拾う。

「お義姉さんも、敬子さんも、まだまだコレからありそうですけど」

「あの子たちはダメダメ。敬子もすっかりアラサー、郁美はアラフォー。昔は浮いた話も聞いたけど、最近はね……」

手に職を持っていて、女一人で生きていくには問題なさそうだけど、器量も性格も問題なさそうに見えるところが、かえって災いしてるのか。とはいえ、姉妹

の恋愛事情どころか、本人の色恋沙汰にも一切興味を持ってなさそうな康徳さんが立派なイクメンになるぐらいだから、何があるかは分からない。

一七一号線との交差点で、お義母さんは「ココまででいいわ」と言った。

「あっちの吉野家の前よね？」

「そうです。最後まで、」

「ココでいいわ。信号変わっちゃったし」

お義母さんは、歩行者用の信号を指差した。向かいに渡って左へ戻ったところに、石橋方面行きのバス停がある。

「大事な孫と、出来の悪い息子をよろしく」

お義母さんは私に手を振ると、信号待ちをするために横断歩道へ、二、三歩近付いた。背中をじっと見ていたら、私の視線を気にすることなく、スマホを取り出して何やら操作をし始めた。

箕面方面行きは順調に流れているように見える。バスは時刻表通りに来て、大した遅延もなく終点へ送り届けてくれるだろう。見えていないと思いつつ、お義母さんの背中に頭を下げ、踵を返した。

来た道を戻り始めると信号が変わったらしい。ちょっとだけ立ち止まって後ろを振り返ると、お義母さんの姿はとっくに見えなくなっていた。

『三月一六日（木）』——森田芽衣編

初出　令和三年四月一七日　アルファポリスにて公開

三月一八日（土）

大きな公園に面した席に座り、はしゃぎ回る子供たちを眺めている。遊具の周りには比較的年若いお父さん、お母さんもいて、親子連れで楽しそうに遊んでいる。芝生の方では、大学生ぐらいの男の子たちがボールを追い回す。時折、それらの間を縫い、私の目の前を横切って、ペースを変えずに走っていく人もいる。十分に間隔をとって、二人ぐらい？

私なんて、少し遠出して、普段より多めに歩いた程度で足腰にキているのに、少し下ぐらいの人たちが週末にしっかりランニングしているなんて、立派だわ。とても真似できない。

「すみません、お待たせしました」

一人で感心していると、後ろのドアを開けて浪川さんがコーヒーを運んできた。

「外の席しかなくて、申し訳ない。砂埃、大丈夫ですか？」

彼は、私が頼んだドリップコーヒーを目の前に置いてくれた。

「全然問題ないわ。広い空も気持ちいいし」

口を動かしながら、財布を取り出そうと鞄の中を見る。すると、何かを察したらしい浪川さんが、手を横に振った。

「いや、いいですよ。一日付き合っていただいたお礼です」

「あら、そう？」

「それに、うちの連れが娘さんにご迷惑をかけたみたいなので、お詫びというか」

浪川さんは心底申し訳なさそうに眉根を寄せる。

「そう？じゃあ、ごちそうになります」

コーヒーを口に含む。心持ちスッキリしているような気がするミルクと、コクのある微かな甘さが鼻を抜けていった。

「無脂肪乳とブラウンシュガー、でしたよね。娘さんから聞きました」

さっきまでの表情をコロッと変えて、ちょっぴり悪戯っぽい顔を浮かべている。

「ルミと、随分仲がいいんですね」

「僕が、というよりは妹の瑞希が、ですかね。仕事も何度かご一緒させていただいているみたいで」

妹さん？　そう言えば、そんな話を「迷惑」の件で聞いた気もする。その娘と何かトラブルがあったという話ではなく、ルミが一人で勝手に自爆した、みたいなことを先週辺りに聞かされたっけ。

「それにしても、郁美さんのパワー、凄かったですね。僕だけだったら、気圧されてましたよ。本当に、助かりました」

浪川さんは深々と頭を下げた。確かにちょっと線の細い印象がある彼と、パワフルな郁美さんとでは分が悪そうだ。デザインの領域ではちょっとした生意気さも発揮できるのに、アーティスティックな部分を全面に押し出すにはまだ若いのかもしれない。とは言え、彼やルミの周囲にいる若い男の子たちのリーダーシップがないと、乗り掛かった船は泥舟のまま沈んでしまう。

「郁美さんも浪川さんも目的は同じだし、お互いにプロなんだから、遠慮なく意見を出せばいいのよ」

「それはそうなんですけどね。強く来られそうなのが、どうも苦手で……」

郁美さんも気が強いし、プライドも高いし、声も割と大きい方だけど、出会い頭の軽いやりとりで、良くない方に学習しちゃったかしら。　浪川さんは、頭の後ろを指で軽くかきながら、コーヒーを啜った。半分笑ったような表情と、微妙に別のことを考えていそうな視線が少々気になる。

「苦手なら、克服してみません？私もフォローしますから」

「克服？　克服っていうか、苦手っていうか……」

浪川さんの視線が泳ぐ。何気なく見えて、これは案外、根深い問題かもしれない。

コーヒーで口を湿らせ、自分で自分に、ほんの少しだけ気合を入れ直した。

『三月一八日（土）』――小野寺香帆編

初出　令和三年四月二二日　MAGNET MACROLINKにて公開

三月一九日（日）

「で、話ってなんだっけ？」

いつものように、作業着姿の晃くんは、今運ばれてきた串を摘み、串に刺さっていたささみを一気に食べた。スムーズな動きで旨そうにビールを飲む。

「瑞希さんとのことなんですけど、」

「え、もうやった？」

「いや、そういう話じゃなくて」

「できちゃった、じゃないよな」

晃くんの目つきが鋭くなる。心なしか、ジョッキを持つ肩にも力が入ったように見えた。全力で頭を振って否定する。

「じゃあ、何の問題もない。妹の貞操とか、興味ないしな」

晃くんはメニューを眺め、次に何を頼むか検討し始めた。僕の方を見て、「どうする？」と訊いてきたけど、「僕のことは気にしないで、好きなように頼んで」と答えた。

「いや、割り勘だし」

「いやいや、コッチから呼び出したんだし」

「同級生相手に、無理すんなって。で、どうする？」

「じゃあ、コレかな」

晃くんが既に呼んでいた店員さんに、メニューを指して注文する。

「山芋の鉄板焼き？　随分、健康的だこと」

「こういう時じゃないと、食べないし」

独り暮らしで、他の根菜ならまだしも、山芋を買うことはない。串も目ぼしいものは一通り頼んだし、お腹もそれなりに膨れてきた。晃くんもそろそろ締めるつもりなのか、釜飯をオーダーしていた。

彼はメニューを戻し、ビールを一口飲んで喉を湿らせた。

「あんたと瑞希が友達だろうが、一線越えようが、二人でよろしくやってくれれば、それで十分。聡太が義理の弟になるより、百万倍マシだ」

藤堂聡太とは晃くんの方が付き合いが長いだろうに、悲しい評価を下されてい

る。確かにアイツが友達なのはいいとして、親戚になるのは自分も嫌かもしれない。

「一線越えるときは、その前に挨拶はしといてくれよ。オレはいいけど、親父がね」

晃くんはすっかり冷えたポテトフライを摘み、ケチャップをすくった。

「ま、親父が面倒なのはお互い様よ」

「ははは。そうだね」

自分でも嫌になりそうな渇いた笑いが口から漏れる。美桜と付き合う人は大変だろうな。僕の場合も面倒かもしれないけど、瑞希さんなら大丈夫な気がする。

そうこうしているうちに、山芋の鉄板焼きが運ばれてきた。晃くんが注文したスライストマトも一緒に運ばれてきた。

「そっちも野菜？」

「こういう時じゃないと、食えないんだよ」

晃くんはたっぷりマヨネーズを乗せて、トマトを頬張った。今度は箸の先にマヨネーズをつけ、それだけを舐めてビールを飲んだ。

「ケチャップとか、マヨネーズとか、好きなんだ」

「好きっていうか、物珍しい、かな。家でも外でも和食が多いし、兄貴もいた時は争奪戦だったし……」

「へー」

そう言えば、焼き鳥が届いた時も素早くパパッと食べてたな。職人らしい早飯かとも思ったけど、そういう影響があるのかな？

「みぃちゃんは普通に食べてた気がするけど……」

「あいつは婆さんがね」

晃くんは急に、何かいいたそうな表情を浮かべ、「へぇ〜。みぃちゃん、ね」とねっとりした口調で言った。

「やっぱり、詳しく聞かせてもらおうか」

晃くんはグッと身を乗り出した。壁にかかった時計に目をやっても、釜飯が出来上がるまでは、まだ時間がかかる。目の前を通りかかった店員さんを呼び止め、メニューのドリンクページを開き、追加のビールをオーダーした。

『三月一九日（日）』——原田哲朗編

初出　令和三年四月二二日　ノベルアップ+にて公開

三月二一日（火）

スタバでテイクアウトしたコーヒーを、夕暮れ時の公園でベンチに座って飲んでいる。つい先日も、似たようなシチュエーションに遭遇したのを思い出した。

一人で思い出し笑いをしていると、ベンチから腰を上げて伸びをしていた瑞希が振り返り、「うわ、気持ち悪い」と心底気持ち悪そうに言う。女性として飛び抜けて背が高い方ではないが、上からスッと吊るされたような立ち姿、重力を感じさせない姿勢に、地味目のワンピースがよく似合う。

「何かついてる？」

「いや、つくづく地味な服装が似合うなと思って」

「どうせ私は、沙綾さんみたいなのは似合いませんよ～」

瑞希はわざとらしく「怒ってます」と全身でアピールしながら、僕の隣に座った。口でストローを迎えに行き、アイスコーヒーを飲む。

「今日は、ほっといて良かったの？」

「向こうも独りでやることぐらいあるさ。東京脱出が差し迫ってるし、忙しいんだろ」

「それで墓参りに？」

「ま、そんなところ」

大学を出て上京して以来、三年ぶりの墓参り。いや、当時は新型コロナもあったし、実家に帰らないこともあったから、さらに半年ぐらいは空いているのか。久しぶりに見た婆さんはすっかり背中が曲がり、年齢以上に老けているように思えた。

「せっかく来たのに、お父さんとは目も合わさなかったね」

「そうだっけ。目ぐらい、」

日中の出来事を思い出そうと記憶を辿るものの、霊園への送り迎えで一瞬目を見たかどうか、だっけ。いや、アレは睨まれていたような気もする。墓を掃除している間もろくにやり取りしないまま、墓前に手を合わせて、何事もなく戻ってきたっけ。

「まぁ、また今度、機会があれば」

「あるといいけどね」
瑞希は明後日の方向を向いたまま、ぼそりと呟いた。
「瑞希も晃も、自分のことで忙しいからなぁ」
僕もボソッと呟いたつもりだったのに、瑞希が少々苛立ちを込めた表情で振り返った。
「それが、イイとかワルイとかじゃなくて、オレのことで余計な負担をかけられないな、と思ってさ」
「かかってないと思ってるなら、タダのバカ兄貴ね」
瑞希は溜め息をつくと、残りのアイスコーヒーを一気に飲んだ。溜め息と一緒に、覇気というか、元気みたいなものも、身体の外に出て行ったらしい。ベンチから腰を上げた姿は、今の祖母に少し似ている気がした。
「帰るなら、送るよ」
空になったカップをもらい、一人で先に行こうとする背中に声をかけた。瑞希は一瞬足を止めて振り返ったが、「独りで帰る」と取り付く島がない。明るくて広い防災公園を、一所懸命スポーツに励む人の間を縫って、カジュアルな喪服っぽい女がスタスタと歩いていく。
その後ろ姿を小走りに追いかけるものの、どんどん距離が開いていく。公園の横を走る道路へ差し掛かるところで、大きな犬を連れた少年が、僕と瑞希の間に入った。僕の背後から、聞き覚えのある声に呼び止められた。
「やっぱり、浪川さんだ。向こうはもしかして、瑞希さん？」
後ろを振り返ると、武藤さんのお父さん、幸次さんだった。彼は大きく手を振って、先を歩いている瑞希にも声をかける。僕の前を歩いていた犬と少年もこちらを振り返り、少年は不思議そうな表情を僕に向けていた。

『三月二一日（火）』——浪川一輝編
初出　令和三年四月二二日　NOVEL DAYSにて公開

三月二二日（水）

昼過ぎには止みそうだった雨は結局、夕方まで降り続いている。雨脚は弱まっているが、両手をポケットに突っ込んで、傘を広げずに「濡れて参ろう」と歩く気にはならない。

アーケードのある商店街を通り、阪急の駅に直結しているソシオを抜け、改札の前までやってきた。間も無く、一八時。学生も社会人も、まだそれほど多くはない。

「新田さんは、直帰でしたっけ」

少し先を歩いていた浪川一輝くんが、券売機の前から戻ってきた。私の隣に立つ元娘婿、新田慎一郎くんは頷いた。

「武藤さんは、」

「私はちょっと寄り道して帰るよ。駅ナカでよかったら、一輝くんもどうだ？」

お猪口を傾ける仕草をしてみるものの、一輝くんはちょっぴり申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「お気持ちはありがたいんですが、ちょっとだけ仕事が残ってて」

立ち話に花を咲かせていると、梅田行きの電車が入ってくるアナウンスが聞こえてきた。一輝くんは少々慌てて、「また今度、行きましょう」と言い残して改札内へ入って行った。ホームへのエスカレーターに乗るまで、何度かこちらを振り返って挨拶してくれる。その姿が見えなくなるまで、しっかり見送り、今度は慎一郎くんの方を見た。彼は微妙な緊張感を残したまま、私が次に何をやるか、気にしているようだ。

「直帰なら、君も同じ電車でよかったんじゃないか？」

「その通りなんですけど、一服してから帰ろうかな、と」

一杯引っかけて、にはならないらしい。

「キミと行った喫茶店なら、もう無いぞ」

「そうらしいですね。この間、近くまで行ってビックリしました」

慎一郎くんは落ち着いた表情で、穏やかに言った。彼は親指を立てて、背後の喫茶店を指した。

「とりあえず、アソコにします？」
「ああ、いや、私は私で、適当に一杯引っかけてから帰るさ」
「そうですか……」
彼は一瞬腕を組むと、肘の辺りを指先で軽く叩いた。腕組みを解くと、「じゃあ、ここで失礼します」と軽く頭を下げた。慎一郎くんは「お気を付けて」と言い残し、改札の向かいにある喫茶店へ入って行った。
彼が改札の前を離れると、徐々に人の往来が激しくなってくる。後ろ髪を引かれる思いで後ろ姿を見送っていたが、早々に切り上げて駅の南側へ向かう。二階の突き当たりにある中華屋か、その手前辺りにある串揚げ、隣のニューミュンヘンにでも行けば、傘を気にすることなく飲んで帰れる。
改札を避けて奥へ進み、南側の改札前を通り抜け、市立ギャラリーの横を進む。水曜日だからか、一八時過ぎの駅ナカでも、人通りが若干少ない気がする。JRの方に向かっていれば、選択肢はもっと少なかっただろう。
洋菓子の焼ける甘い匂い、ラーメン屋のスープの匂いに、パスタ屋のニンニク臭。魚の匂いも心惹かれるが、「いちご大福」の文字も捨てがたい。一杯引っかけて帰るのを辞めて、和菓子のお土産を買って、まっすぐ帰ろうか。
桜餅と花見団子も旨そうだ。二つずつと手提げ袋を買い、小銭を一枚ずつ数えながら、志津香の表情を脳裏に思い描いた。

『三月二二日（水）』――武藤幸次編
初出　令和三年四月二五日　Mediumにて公開

三月二四日（金）

亜衣と映美とを芽衣に任せ、一人でふらっと業務スーパーまで買い出しに行ってきた。途中で蔦屋にも寄り道して、いちご大福も買ってきた。自分用にひとつ白餡を入れてもらったけど、取り合いにならないことを祈る。

冷蔵庫の野菜室に、ささやかな買い足しを入れ、冷蔵室に筍の水煮やらベーコンやらを放り込む。すぐに使ってしまう予定だが、先にウスイエンドウを剥いて、豆ご飯の段取りをしなくては。

買い物袋を片付けながら、ボウルとウスイエンドウのパックを手に食卓へ。教育テレビに釘付けになっている子供たちを眺めつつ、豆を剥くための準備を済ませる。一つずつ取り出しては、背中の丸くなった部分を押す。鞘が僅かに開いたら、隙間に指を入れて中身を取り出す。豆と一緒に付いてきてしまう三角の白い帽子もきっちり外して、ボウルに入れる。

ボウルを軽く振った時に、まだ少し硬い豆同士が中でぶつかる音とか、ボウルに落ちる時の音に、春の訪れを感じてしまうのは僕だけらしく、芽衣の共感を得られたことはない。

一つ剥いては豆を外す。一つ剥いては豆を外す。テンポよく豆を向き、一通り剥き終わったら、鞘を元々入っていたパックに戻し、ボウルは流しにおいて水を入れ、パックはゴミ箱に。

豆を軽く洗ったら、今度は米を三合研ぐ。分量通りに水を入れ、豆を上に入れて、軽く塩を入れる。あとは、炊飯器を信じて、炊き込みモードでスイッチを押すだけ。

「ごめんね。任せっきりで」

洗濯物を畳み終えた芽衣が、キッチンに入ってくる。両手を洗いに流しへ行こうとするのを、手で制する。

「そっちも疲れてるだろ？　オレがやるから」

「いいの？」

「いいよ。ただの気分転換だし」

「じゃあ、よろしくお願いします」

芽衣はサッと食卓に座った。映美を膝の上に置いて、テレビにかじりつく亜衣を眺めながら、手元のタブレットをサッと見る。

両手鍋にたっぷりの水を入れ、ひとつまみの水を入れて火にかけた。換気扇のスイッチを入れ、さっき買ってきたブロッコリーを野菜室から出して水でよく洗う。

この二、三日の間に飲んだ強炭酸水やら、エナジードリンクやらの残骸が目につく。先週の資源ゴミに出したところなのに、年度末の追い込みと鼻炎薬とで、僕の刺激物の摂取が増えている。

武藤さんのところへ出社する日も増やしたりしたものの、久しぶりの本格的な繁忙期に在宅で根を詰めても、中々捗らない。僕はささやかに家事をすることでガス抜きを、芽衣にも何かリフレッシュになるものを段取りしたいが、向こうも向こうでそれなりに仕事が詰まっている。

何かいいアイディアが出ないものか、今度はアスパラの硬い部分を折り取りながら、考える。ポキン、ポキンと、コレもコレで心地いい感覚なんだけど、本数はそれほど多くないからすぐに終わる尊さもある。断面をピーラーで少し削って、あとは軽くソテー、かな。

ボコボコと沸騰してきたところに、ブロッコリーをフサの方から放り込む。あっという間に四月、それからゴールデンウィークがやってくる。今年の花見はどうしようか気にかけながら、次の段取りを考えた。

『三月二四日（金）』——森田康徳編

初出　令和三年四月二六日　NXZ（旧サイト）にて公開

三月二八日（火）

メールソフトの受信箱を手前に出しながら、右下の時計に目をやるとそろそろ一九時。「お先〜」と香織がお気楽そうにオフィスを出たのが一七時半。哲朗と浪川さんに「まだ、帰らないの？」と声をかけ、二人を引き連れて帰ろうとしたのを途中で止めたけど、これで安藤さんから返事が帰って来なければ、この九〇分はムダになるかもしれない。

哲朗と浪川さんは、コビトカバチャンネルの新しい動画編集に勤しみ、次の動画をどう構成するか、どう発信していくかを話し合っている。哲朗はラジオの時報に顔を上げ、壁際の時計を見た。

「小腹空くよね？　なんか食べる？」

彼は財布から一〇〇円玉を取り出し、目ぼしいものはほぼ全滅したオフィスグリコの前へ行く。浪川さんは彼の隣で中を覗き込むが、やっぱり目ぼしいものはないらしい。「やっぱりいいや」と言わんばかりに首を振ると、二人揃って今まで作業していた机に戻っていく。

二人の動きをぼんやり眺め、一九時台の番組が始まったラジオに耳を傾けていると、視界の隅で、未読のマークがついたメールが届いていることに気がついた。安藤さんから届いた、件名に「Re」がついた回答メール。

哲朗の視線がこちらに向く。彼も、今のメールを見たようだ。ゆっくり頷くと、彼は大きく息をついた。

「哲朗くん、浪川さん。本当に、お疲れ様でした」

席から立ち上がり、二人に向けて頭を下げる。

「さ、今日はもう上がろう」

僕の号令に、二人は今までの作業を止めて、帰り支度をし始めた。動画をアップロードしている端末には「そのままでOK」を出して、付けっぱなしのラジオと空気清浄機を落とし、浪川さんにはタイムカードを押してもらった。

僕も僕で荷物を鞄に詰め、久々に社内用のサンダルから、外履き用の靴に履き替える。戸締りを確認して、二人に「忘れ物、大丈夫？」と念を押す。二人がそれに頷いたから、鞄を持って、オフィスの外へ出た。照明を落として、セキュリ

ティをONにして、鍵をかける。
前を歩いていた二人がエレベーターを呼んで待ってくれていた。哲朗がドアの前に立ち、ボタンを操作してくれる。
「で、二人はこの後どうするの？」
「僕らはもうちょっと、打ち合わせしていきます」
「そう？　晩飯なら奢るけど」
「いや、武藤さんは帰れる時に帰った方がいいですよ」
哲朗に反論しようと思ったのに、ビルの外に出たら、二人に「お疲れ様でした」と頭を下げられたら、一人で帰路につく他ない。哲朗と浪川さんは、最近見せなかった「ふたりの世界」な雰囲気を漂わせ、僕を置いてさっさと阪急の駅の方へ歩いて行った。
「オレもそっちに帰るんだけどなぁ……」
僕の呟きは、幸せいっぱいに歩く二人の背中には届かない。あっという間に彼らは商店街の方へ曲がる。僕は二人の後を追いかけるようにトボトボと足を動かす。
久々に忙しかった年度末。身も心も精一杯でやり切った達成感を味わいたかったけど、今日は寄り道せずに帰るとしよう。

『三月二八日（火）』――武藤幸弘編
初出　令和三年四月二六日　カクヨムにて公開

三月二九日（水）

薄暗がりの住宅街を、スマホのマップアプリが示すままに歩いて、そろそろ五分。アプリによると左手に広がる公園が、いつも目にする彩都西公園らしい。目の前にはモノレールの高架も見えるが、今のところ出入りする気配がない。

足を止め、横を歩いていたつもりの沙綾を探すと、少し後ろをトボトボ歩いていた。その場で眺めていると、三秒とかからず、目の前まできた。自分の足元を見ている彼女に向かって、「どうする？」と投げかけた。

「公園を抜けたら、着くらしいけど」

「帰る前に、お手洗いに行きたいな。ちょっと冷えちゃった」

五分もあれば自宅に帰り着けそうな気もするが、近くにトイレはあったかな？暗がりの公園でトイレを探すのもイマイチか。どうしたものかとマップアプリに視線を落とすと、道なりに真っ直ぐ行った先、高架の向こうにミニストップがあるらしい。

そういえば、この辺りだったっけ。少々遠回りになるけど、自宅に向かうよりは近い。公園のトイレよりは何倍もマシだろう。

「もうちょっとだけ我慢してくれよ」

沙綾の横に立ち、彼女の身体を支えながら、歩行を補助する。真っ直ぐ道なりに進むと、さっきは見えなかった看板が、煌々と輝いている。強かに飲んだ後の夜道には、とてもありがたい希望の光。高架を潜ってすぐ、駐車場の広いミニストップに辿り着いた。

沙綾は早々にお手洗いを目指した。運良く空いていたらしく、スムーズに中へ入って行った。僕はそれを見届けて、ドリンクコーナーと栄養剤のコーナーへ向かう。五〇〇mlの水と、ウコンのドリンクをカゴに入れ、ついでにお菓子のコーナーで袋入りの森永ラムネを二袋ほど追加した。

レジで会計を済ませていると、いつの間にか沙綾は僕の隣で腕を組もうとしていた。さっきまでトボトボと歩いていた割には、ケロっとした顔をしている。

「炭酸水とか、追加のビールとか入れなくていいの？」

「もう十分飲んだだろ？　お土産のウイスキーはまた今度」

駄々をこねる沙綾は気にせず、ビニール袋に入れてもらった商品を受け取った。

一瞬、荷物を沙綾に持たせて自分もトイレを借りようかと思ったが、そちらに目を向けたタイミングで、別の誰かが入るところを見てしまった。そこまで切迫していないし、このまま彼女をほっぽりだすとどうなるか分からない。

トイレは断念して、サッとお店の外に出る。外に出たところでウコンのドリンクを取り出して、軽く振る。蓋を開けて沙綾に差し出すが、彼女は顔をしかめた。

「いいから飲みな。明日も朝から忙しいんだろ？」

「らぁ～い丈夫らって。まだまだ飲めるし、日付も変わってないし……」

沙綾はそういいながらも、バランスを崩してちょっぴりよろける。転けないように手を出すと、手の中でドリンクが少しこぼれてしまった。それを見た沙綾は楽しそうに笑う。

この酔っ払いを大人しく連れ帰るには、まずはこっちがシャッキリしないと話にならない。すでに蓋を開けた方に口をつけ、一気に飲み干した。

『三月二九日（水）』――浪川一輝編

初出　令和三年四月二七日　NOVEL DAYSにて公開

三月三一日（金）

いつもの我が家では信じられないぐらい、あっちにもこっちにも煌々と灯りがついている。微妙な緊張感を保ったまま、いつもはしない「脱衣所での着替え」を済ませ、適当にほっぽり出しておく見られたくないものはしっかり隠して、鍵を開ける。

「へー。それが部屋着？」

ハンガーにかけるパンツを抱えてキッチンを横切ると、当たり前のように食卓でお茶を飲む透に声をかけられた。一瞥だけくれて、すぐに自分の部屋に入った。キッチンから呼びかける声が聞こえてくるけど、反応すればするだけ調子に乗るのは分かっている。ガン無視を決め込んで、形を整えてパンツを掛ける。消臭スプレーも振っておく。

ここの灯りは落としてからキッチンに向かう。そっちを見ると、透が椅子から立ち上がるところだったから、ちょっぴり冷や冷やした。後ろ手に外から静かに鍵をかけ、何事もなかったかのようにキッチンで手を洗う。透はそれを横に突っ立って眺めている。

「何？」

タオルで手を拭きながら、透の顔を見上げた。「いや、別に」と言いながら、彼は私を頭の先から爪先まで、じっくり上から舐めるように見ている気がする。

そこを退け、と手で示し、透に前を開けさせる。食器棚からグラスを取り出し、冷蔵庫から五〇〇mlのビール（正確にはリキュール）を取って食卓に腰を下ろした。

「オレももらっていい？」

「勝手にどうぞ」

彼は今までお茶が入っていたグラスを空けると、そこに私のグラスに入りきらなかった残りのビールを注いだ。美味しそうに一口飲んだ。

「何？」

「透もビール飲むんだなぁ、と思って」

「何だよ、それ」と言いながら、彼はもう一度、グラスに口をつける。ビール

を飲む姿どころか、今着ている仕立ての良さそうなスーツ姿も見慣れない。どうしても、坊主頭で野球部のユニフォームを着ていた姿を重ねてしまう。

「洗顔はいいのか？　お肌の曲がり角はとっくに過ぎてんだろ？」

「あんたが帰ったらするから、お構いなく」

透は、私のグラスが空になりそうなところで冷蔵庫の前に立つ。「もう一本いる？」の仕草に頷くと、流れるような手付きで私のグラスと自分のグラスに半分ずつ注いだ。

「帰るよね？」

「どうしよっかな。久々にココでお泊まりするのもいいな。思い出のベッドで一緒に寝るってのも、アリだな」

「はあ？」

こいつ、今年の年賀状に愛娘との写真を載せてたのに……。

「冗談、冗談。コレ飲んだら帰るよ。遅くなりすぎると嫁にも怒られるし」

透の、人を馬鹿にしたような笑いに何度ブチ切れてきたことか。でも、私はもう大人。そんなムカつく顔で一々腹を立てないし、煽り文句も華麗にスルーしてやる。腹式呼吸で苛立ちもしっかり身体の外へ吐き出した。

「ルミはルミのままだな。元気そうで良かった」

彼はグラスに残ったビールをグッと飲み干した。

「じゃあ、オレはコレで。また飲もうぜ」

透は席を立ち、椅子にかけていたジャケットを羽織り、コートを腕にかけた。カバンをしっかり握って、玄関に向かう。彼が出ていくと、滅多に人が来ない我が家にまた戻る。

「また飲もうぜ」のセリフに若干イラつきながら、普段より灯りの多い家で独りになると思うと、ちょっぴり怖かった。

『三月三一日（金）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年四月二九日　小説家になろうにて公開

四月二日（日）

哲朗さんの横に並んで、彼の妹を見送ったのはいつだったっけとどうでもいいことに思いを馳せつつ、先月の末だったっけとか、もう四月だから先々月になるのか、とか——。無理に思い出さなくてもいいことを必死に記憶から引っ張り出したり、カレンダーを頭に思い描いたり、さっきまでの高負荷を少しでも和らげようとしているのか、まだ終わっていない目の前の出来事にも、いまひとつ集中できていない。

遠ざかっていく人影をぼんやりと眺めながら、向こうがこちらを振り返ったから、半ば反射的に手を振り、軽く頭を下げた。ゆっくり視線をあげると、相手はもう見えなくなっていた。

「みぃちゃん、みぃちゃん？」

不意に呼びかけられた方へ顔を向けると、哲朗さんがエスカレーターを指していた。少し先にいた彼の背中を追いかけて、後ろのステップに乗る。一定の速度で地上階へ降りていく。

エスカレーターを降りて左手に少し進んだところで、急に足が止まってしまった。エスカレーターに乗っている時から哲朗さんが何か話しかけてくれているのは聞こえているけど、中身はいまひとつ頭に入ってこない。

哲朗さんは二、三歩進んだところで私が立ち止まったことに気がついたようで、その場で足を止めて振り返り、「大丈夫？」と気遣ってくれた。今はその頼もしさが嬉しくもあり、恥ずかしくもある。できるだけ顔を直視しないよう、視線を微妙に逸らしながら、「ちょっと、気疲れしちゃった」と答えた。

一人もぞもぞしている間に、彼はこちらに近付いてくる。その近さにゾクゾクしてしまい、半歩だけ後ずさってしまった。今まで何ともなかったのに……。

「とりあえず、ちょっとそこで座ろう」

彼はバス乗り場横のベンチを指した。先導だけしてもらって、自力でそこまで歩いていく。私が無事にそこまで行くと、彼は駅のコンビニへ走って行き、常温の水を買って戻ってきた。隣に座って、ペットボトルを差し出した。

「あったかいお茶の方がよかった？」

彼の顔は見ないで首を振る。ペットボトルを受け取って、一口飲んだ。少し気

持ちが落ち着いたところで、ゆるゆると長く息を吐いた。ゆっくり呼吸と共に気持ちを整える。

「急にゴメンね。余計な負担かけちゃって」

哲朗さんは私の返事を待たず、一人で話を続けてくれる。音として認識はできても、やっぱり話の中身が頭に入ってこない。

「この後、どうしようか？」

ぼんやりと顔を眺めていたのに、急に焦点が合ってしまった。一瞬の驚きが、だんだん別のドキドキに変わっていく。少しでも鼓動が治るように胸元を抑え、俯いて、なるべくいつも通りの声が出ろ、と必死に念じて口を開いた。

「あ、明日も早いから、今日はもう帰ろうかなって」

普段より少し大きめに、上擦った調子で言ったのに、彼は普段通りのトーンで「まだ夕方だけど」と返してきた。顔を見上げられないままでいると、いつもよりちょっとゆっくりな口調で「分かったよ。了解」と、彼は言った。

「僕も明日に備えて、今日は帰るよ」

彼は「一人で帰れる？大丈夫？」と付け加えてくれた。それに頷くと、彼は「じゃあ、またLINEするね」と言葉を残すと、私の隣から温もりと共に去って行った。

『四月二日（日）』——浪川瑞希編

初出　令和三年四月三〇日　noteにて公開

四月三日（月）

先に車を降りていた芽衣に映美を任せ、僕はチャイルドシートの中で眠る亜衣を抱えて車のキーをロックした。遮光カーテンを下ろし忘れた家の中から、煌々と光が漏れる。

胸の中の娘が起きないように、そっと家の中に入り、寝室の子供用ベッドに寝かせる。僕たちのベッドには、同じように映美が寝息を立てていた。階下からは、芽衣がせっせと戸締りやら明日の支度やらを進めている音が聞こえてくる。寝室のドアをそっと閉めて、リビングへ降りていく。

壁にかけた時計を見ると、午後十時を過ぎていた。当初の想定より二時間も遅れている。妻は部屋干ししていた洗濯物を畳み終えていた。

「ゴメンね、任せっきりで」

「亜衣は？」

「しっかり寝てる。無理言って、お風呂入れてもらって正解だったね」

芽衣は肩をすくめ、脱衣所へタオルを持って行った。お風呂にお湯を張るスイッチも入れてくれたようだ。二人の娘は義父さんと入ったけど、僕らの入浴はこれからだ。妻はバタバタしっぱなしで、自分がお風呂に入る支度もテキパキと進めていく。それをジッと見ていると「あなたが先に入る？」と訊いてきた。首を振ると、寝巻きの準備やらタオルの準備やらを進めていく。

僕はキッチンで手を洗い、半ば無意識に冷蔵庫を開けた。

「ビールは一番上、ドアポケットの方じゃなくて奥の方が冷えてるよ」

芽衣は髪を縛っていたゴムを外し、髪を振り解きながら、グラスの場所を指差した。

「芽衣も飲む？」

彼女は給湯器の画面に視線をやり、「いいの？」と言った。

「しっかり冷えてるのは、それしかないけど」

「二人でゆっくり飲めるなら、別にいいさ」

彼女は「じゃあ、お風呂が湧くまで」と条件を付け足し、自分のグラスを持って食卓についた。僕はできるだけ均等になるようグラスに注いだが、泡まで綺麗

にとは行かなかった。軽くグラスを合わせ、一緒にグッと飲んだ。義実家では見てるしかなかったビールが、全身に染み渡る。

「なんか、おつまみ出す？」

芽衣が椅子に手をかけたが、「いいよ。コレだけでいい」と座るように促した。僕の隣で、ただビールを飲んでいるのが落ち着かないようだ。微妙にソワソワしながらグラスを傾けている。僕はそれを見て、笑ってしまった。芽衣は「何よ？」とささやかに語気を強めた。

「いや、ゴメンゴメン。任せっきりにならないようにしてたつもりだけど、つもりでしかなかったなぁ、と思ってね」

僕も彼女も在宅で仕事ができるからと、それなりに家事も育児もこなしてきた自負はあるけど、夫婦水入らずの時間でも、彼女が落ち着かないのは僕が悪い。つい笑ってしまったけど、笑うようなことじゃなかったな。一人で勝手に反省していると、彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「ま〜た、一人の世界に入ってる。二人でゆっくり飲みたいんでしょ？」

給湯器が「お風呂がもうすぐ入る」と予告した。彼女は素早く席を立ち、風呂場の方へ行って戻ってきた。今度は椅子にしっかり腰を下ろした。

「蓋はしっかり閉まってたから、もう一杯ぐらい飲めるけど？」

彼女はニヤリと笑い、グラスに残ったビールを飲み干した。僕は冷蔵庫の前に立ち、まだ冷えていない五〇〇ミリ缶を取り出して、食卓に戻った。

『四月三日（月）』——森田康徳編

初出　令和三年四月三〇日　NXZ（旧サイト）にて公開

四月四日（火）

一輝さんは沙綾が置いて行ったコビトカバの大きなぬいぐるみに微笑んで、私に車のキーを差し出した。

「娘の彼氏を運転手にしちゃって、ごめんなさい」

彼に椅子を勧め、その前にコーヒーを置いた。彼は「いただきます」と、カップを口元に運んだ。

「お砂糖もミルクもいらなかった？」

「ええ。いつもブラックなので」

彼は一口飲むと、少し目を丸くした。改めて香りを確かめるようにカップを鼻先で動かし、もう一口飲んだ。

「良かったら、何か作るけど」

彼はチラリと腕時計に目を落とした。もうそろそろ午後六時。我が家の小さな冷蔵庫に、果たして何が残っていたかを思い出す前に、一輝さんにとても柔らかい表現で申し出を断られてしまった。

「この後、沙綾を迎えに行って、そこから何か食べようかって話をしてたので」

「あら、そう。じゃあ、車使う？」

さっき受け取ったキーを彼の前に押しやる。彼は手振りを交え、「いえいえ、バスで戻ります」と言った。

「バスがダメなら、モノレールでグルッと。お義母さんも行きます？」

多少の荷物があったからとはいえ、車で行って戻ってきた道を今からもう一往復する気力は残っていない。

「若い二人でいってらっしゃい。おばさんは、お土産のワインとパンを楽しむわ」

さっきのパーティ会場で一輝さんが手をつけられなかった物と同じワイン、同じパンを指して、できるだけ嫌みったらしく聞こえるように言ってやった。彼はコーヒーを楽しんでいた時と同じ涼やかな表情のまま、「そうですか、残念だなぁ」と呟いた。

「今日は本当に、ごめんなさいね」

知人のサロンを手掛けてもらい、担当のデザイナーということでお披露目パー

ティにも出席してもらったのに、ハンドルキーパーを買って出てくれたことに甘えたばかりか、おばさんの意地悪も意に介さずやり過ごしてくれるなんて、非常に申し訳ない。

一輝さんは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情で、ただただ困惑しているようだった。何故か私の方が慌てて別の話題を探すべく、少ない知恵を絞り出す。

「沙綾との約束は何時だったかしら？」

「一九時頃に箕面萱野駅、とは言ってますけど、向こうの都合次第ですね」

会場で別れる時、「友達と会う」とか言ってたっけ。こんないい人をあまり振り回さないようにしなさいよ、と心の中で娘に小言を言ってみる。ワガママも美徳、器量と教育してきたけど、少々やり過ぎた。

一輝さんは私のことなどあまり気にしていないようで、マイペースにコーヒーを飲み切っていた。「もう一杯いかが？」と尋ねると、「トイレが近くなるといけないんで」と辞退された。

彼はズボンのポケットからスマホを取り出し、腕時計を見ると、椅子から腰を上げた。

「もうそろそろみたいなんで、もう行きます」

彼は空のカップに目をやった。私が「そのままでいいわ」と言うと、彼は「飲みっぱなしですみません」と軽く頭を下げた。

「コーヒー、ご馳走様でした。美味しかったです」

「そう？じゃあ、また飲みにいらっしゃい」

彼は「ありがとうございます」と再び頭を下げた。自分のカバンを持って、

「じゃあ、行ってきます」とサロンへ通じる階段を静かに降りて行った。

『四月四日（火）』——奥野朋子編

初出　令和三年五月八日　Pixivにて公開

四月六日（木）

香織さんと郁美さんという、私には珍しい組み合わせでハッピーアワーな時間帯からグラスを傾けている。お店の中をパッと見回しても、マトモな社会人と言われそうな人はほぼいないように思える。

学生さんの新歓コンパっぽい賑わいを表向きは温かい目で見守りながら、時間制限なんて気にしないで飲みたいものを飲み、食べたいものを食べ、精神の安定を図っている。

郁美さんも学生の団体さんが気になるようで、時折あがる大きな声に視線をやりながら、お替りのビールを頼んでいた。

「先週は大変だったんだね……」

香織さんの優しい声に、つい涙がこぼれそうになる。

「これがその透って奴？」

郁美さんは私のスマホを触り、透が写っている写真を表示した。先週ばったり会って、半ば押し切られる形で家までついてきたときに無理矢理撮らされたツーショット。すぐに消そうと思ったけど、何かあった時の証拠として残してある。

「幼なじみでこの顔なら、色々あるよねぇ」

「確かに、モテそうな顔してる」

香織さんもスマホを覗き込み、郁美さんの意見に賛同する。確かに器量は悪くないし、スポーツもそこそこできたけど――

「性格は難あり、と」

郁美さんの呟きに、首を大きく縦に振る。香織さんは目を細めて、私の顔を見る。

「でも、だから気になるよねぇ」

香織さんの指摘に、郁美さんは「そっか、そうかも」と頷いた。「で、本気になって手を出すと、こうなっちゃう」と、彼女は自分を指した。

「二つバツをつけて〜も、ちっとも大人になんてならない」

香織さんはちょっぴり節をつけて言うと、肩を竦めた。

「うわっ、懐かしい。明日も仕事がなかったら、このままカラオケだったのに」

郁美さんが「ねぇ？」と同意を求めるように私の顔を見た。一人でキョトンとしていると、香織さんが「ルミちゃんは世代じゃないから、分かんないって」と郁美さんに言った。

「そっか、そっか。『るろ剣』も、佐藤健だもんね」

『るろ剣』は佐藤健でしょ？　普段からそんなに接点がなさそうなお姉さま方が、二人だけで仲良さそうに話しているのを見ていると、だんだん酔いが覚めてきた。透の件を愚痴ってやった高揚感が、次第に遠のいていく。

お皿にちょっとずつ残っていた料理を二つ、三つ口に運び、レモンサワーをグイッと飲み干した。空いたお皿を下げに来た店員さんに、ハッピーアワーが終わる前にもう一杯同じものを頼んでおく。

少しでもストレス発散になればと、たまたま一緒だった二人を食事に誘ってみたけど、失敗だったかな？　このところ、妙に上手くいっていない気がする。モヤモヤをぶつけられるような趣味、あったかな……。

もう香織さんも郁美さんも興味がなさそうな私のスマホを回収し、二人の会話を気にかけながら、LINEを開いた。退勤後の仕事の連絡は特にないけど、彩夏からの新着が届いている。

――また今度、ダンスしない？

高校のダンス部を卒業して以来の、彩夏からのダンスのお誘い。マトモに身体を動かさなくなって久しい今日この頃、インドア趣味が充実してしまってオバさん化に拍車がかかりつつあるけど、ちょっとずつ慣らしていくのは悪くないかも。

新しく運ばれてきたキンキンのレモンサワーを、景気付けにグビッと飲んだ。

『四月六日（木）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年五月二日　小説家になろうにて公開

四月八日（土）

大きな鏡の前で動きを確かめながら身体を動かす人影が、三つから四つに増えた。さっきまで構えていたアクションカメラを哲朗くんに預け、瑞希も沙綾たちに混ざって身体を動かしている。

瑞希からカメラを預かった勢いで、彼女の取材、素材撮りまで引き継ごうと一所懸命画角を探して動き回っていた哲朗くんだったが、どう動いても思った画にならないのか、あるいはどれだけ気を使ってみたところで邪険な視線が向けられるからか、心底打ちのめされた表情で、僕の隣へ戻ってきた。

撮れ高を確認している彼に、「お疲れさん」と水が入ったペットボトルを差し出した。

「君はほんっとに、偉いな。折角の週末まで、瑞希に付き合わなくても良いのに」

「そういう一輝さんこそ、沙綾さんのために時間割き過ぎじゃないですか？」

哲朗くんは「ありがとうございます」とペットボトルを受け取り、僕の隣に座る。

「まぁね。でも、良い光景だろ？」

カメラに記録された撮影データをじっと確かめている哲朗くんの肩を叩き、目の前に広がっている生の動きを示した。彼は真面目そうに僕の顔を見返したが、ゆっくりと瑞希たちの方に目をやると、そちらをしばらくじっと見て、「そうですね」と低い声で言った。

彼はカメラの電源を落とし、瑞希のカバンへ戻した。僕と同じように、目の前の鏡に正対するよう、座り方を変えた。目の前で躍動する女性たちの動きに合わせ、スタジオの床もわずかに振動するのが心地いい。

華やかさにパッと目が行ってしまうのは、中央の沙綾だが、その後ろで沙綾の動きを追いかける小野寺さん、お友達の野村さんも、キレやスピードにやや欠ける印象はあるものの、要所要所のキメるところはキマッていて、様になっている。

一番後ろでポニーテールを振り回している瑞希は、リズムが微妙に合わないのと、動きに固さと重さを感じさせている。ちょっぴりボテっとしてるところがこなれれば、まとまりも出てきそうなんだけど……。

音楽が止まるとともに、女性陣の練習も一時休憩に。小野寺さんたちは二人で

水分補給なり、タオルで汗を拭くなりしている。沙綾と瑞希は僕らの方へ来て、哲朗くんは瑞希に「お疲れ様」と声をかけ、タオルとペットボトルを差し出した。

僕も沙綾に「お疲れさん」とペットボトルを差し出す。彼女は水をグッと飲み、肩にかけたタオルで、口元も拭った。

「二人とも随分楽しそうに、ジロジロ見てたね」

「みんな頑張ってるなぁ、輝いてる女性は美しいなぁって。なぁ、哲朗くん？」

哲朗くんに話題を振ると、彼は瑞希の視線を受け止めながら、「え、えぇ、まぁ」と上擦った声で言う。沙綾も瑞希も、少々軽蔑が混じった疑いの眼差しを保っている。

「ほんとに～？」

「本当だって。邪な気持ちとか、一切ないって」

必死に否定するのも逆効果な気はするが、他の戦略が見当たらない。沙綾をなだめながら必死に思考を巡らせていると、彼女は「ルミさぁ～ん」と小野寺さんに声をかけた。沙綾に呼ばれた彼女は野村さんとの談笑を切り上げ、沙綾の方を向いた。

「ちょっと、音楽かけてもらっていいですか？」

小野寺さんは、沙綾に言われるがまま、さっきまで彼女たちが使用していた音楽を再生した。状況が今ひとつ飲み込めていない彼女らは、キョトンとしたまま僕らの方を見ている。

「見てたんなら、できるよね？」

沙綾は僕と哲朗くんに視線をやり、鏡の前へ立つように促した。瑞希も「それはいい」と言わんばかりに、哲朗くんの背中を押し出した。小野寺さん、野村さんも楽しそうな目でこちらを見ている。

「どうします？」

哲朗くんは困り果てた表情で僕を見た。

「どうするったって、やるしかないだろ」

「えぇっ！」

哲朗くんの驚きに一々反応する余裕はない。音楽のリズムを掴んで身体を揺らしながら、沙綾たちの動きを思い出すしかない。哲朗くんがついてこれるかは分からない。他人を気にかける余裕が、そもそもなくなっていく。

肚を括って、記憶を頼りに思い切って身体を動かした――。

『四月八日（土）』――浪川一輝編

初出　令和三年五月三日　NOVEL DAYSにて公開

四月九日（日）

ルミが買ってきた風月庵の桜餅を緑茶と共にいただいた。私がお茶を淹れ直している間、彼女は椅子に座ったまま、頬りに上半身を動かしていた。

「昨日の筋肉痛？」

ルミは頷いて、「クールダウンもしっかりやったんだけどね」と、腕に手を添えながら「いたたたた」と苦痛を漏らした。

「明日には何ともないといいんだけど」

「流石にそこまで老いてないでしょ。大丈夫よ」

若いと言い切るには微妙なお年頃ではあるけれど、まだまだ三十路には余裕がある。アラサーはアラサーで、「お肌も水を弾かなくなってきた」とか言ってたけど……。

ルミの湯飲みに、新しいお茶を注ぐ。「老いって言い方ないでしょう、老いって」とブツクサ言いながらも、彼女は黙ってお茶を啜った。

「昨日、大変じゃなかった？」

「全然平気。久しぶりに彩夏ママともお話しできたし」

急に娘から、「彩夏の子供を預かって」とメッセージが来た時は構えたものの、お子さんと共に彩夏さんのお母さまもお見えになると分かってからは、へっちゃらだった。もっとも、大人しい子だったから、彩夏ママから情報を引き継げれば、一人でも見れなくはない気もする。

「そういえば、透くんのところのお子さんも、この間のさくらまつりで見かけたわ」

「えっ？」

先週の土曜日、元茨木川緑地をお父さんと共に歩いていたら、すっかり大人の顔つきになった透くんから声をかけられた。彼は奥さんと共にベビーカーを押しながら、桜の下を歩いていた。

「透くん、今月から関西でお勤めなんだって」

「それは知ってる。ウチで本人から直接聞いた」

ルミは表情を変えずにサラッと言った。透くんと会った時は立ち話で挨拶ぐら

いしかしなかったけど、ルミが差し出したスマホには、透くんとあっちの家で撮影したらしいツーショット写真が写っている。

「透くんも、中々やるじゃない」

「えっ。お母さん、あっちの味方？」

「どっちの味方とか、そう言うことじゃなくて……」

彼ぐらいの大胆不適な振る舞いがルミにもできれば、今頃、彼の奥さんだったかもしれない。いや、「そうなる」には問題がいくつかあったから、学生時代に破綻したのだけど。

「貴女って、本当に真面目よね」

「そりゃあ、お父さんの一人娘だから」

我が子ながら、不器用なぐらいの真面目さで、潔癖が過ぎてズルいことが微塵もできないのは生きにくくないのかしら、と今更ながら思ってしまう。お父さんの方針に異を唱える強さを貫けなかった私の責任でもあるんだけど。

「もうちょっと、不真面目に生きてもいいんじゃない？」

ルミは鳩が豆鉄砲をくらったような顔で、一瞬動きを止めた。「不真面目にって？」と訊いてきた。

「不真面目にっていうか、豪胆っていうか、ワガママっていうか」

「豪胆、ワガママ……」

ルミは少し上を見ながら、私の言葉を口の中で咀嚼する。牛のように何度か反芻したらしく、一人で何度か頷くと、だんだん表情に力が戻ってくる。

「もうしばらく、ダンス頑張ってみようと思う」

ルミの力強い宣言の裏に、色んなお願いが込められていそうなのも察知した。娘がどんどん元気に、幸せになってくれるというのなら、私も精一杯協力しよう。娘よ、程々に頑張れ。

『四月九日（日）』——小野寺香帆編

初出　令和三年五月三日　MAGNET MACROLINKにて公開

四月一〇日（月）

可愛らしいミツバチにデザインされたハーネスリュックを背負った映美が、だいぶ葉桜気味になってきた元茨木川緑地をせっせと歩いている。つかまり立ちをし始めた頃も、頭ごっつん防止のミツバチリュックを背負わせてたけど、上の子よりこの子の方が黄色は似合うかも。

急に走り出すこともなく、新しくなった中条図書館でも静かに大人しくしてたけど、静かなお利口さんだからこそ、黄色とかオレンジが似合うコーデを着せたくなる。もうしばらくは亜衣のお下がりな日もあるだろうけど、この子用の衣類も買いたいな。また今度、大きめのアウトレットまで車を出してもらおう。

グズることもなく、しっかり自分の足で長時間歩いてくれている。先に図書館でちょっと休憩したとはいえ、少し足を伸ばして久しぶりにラッキードーナッツでお昼兼用のお土産を買い、大人の足でもそれなりの運動量になる一本道を道なりに歩いて、そろそろ終わりが見えてくる。次の交差点を渡れば、そこから先は児童公園になる。

亜衣はあまり見せることがない、驚異のスタミナと集中力で田中橋の交差点まで歩いてしまった。立ち止まったところで、彼女に水筒を差し出す。彼女は両手でしっかり水筒を持ち、吸い口から水を飲んだ。そろそろトイレが気になる頃だけど、中央図書館はお休みだし、道は逸れるけど、キリン堂のトイレを借りようかな。

映美の手をしっかり握って、前後の安全を十分に確かめてから信号を渡る。左手に折れて、正面にAmazonの建屋を見ながら、ちょっぴり交通量の多い歩道を真っ直ぐ進む。広さがあるおかげで、前からも後ろからも時々自転車がやってくる。そのまま児童公園の中を歩いた方が安全なんだけど、仕方ない。

ちょっぴりドキドキしながら、小さな手をしっかり握って、亜衣がいない間に映美と二人だけで出歩けるのも、あと二年ぐらいだもんね。二年なんてあっという間な気もするけど、子育てしながらの日々はそれなりに長く感じる。

今月中に、亜衣のお誕生日会も待っている。先日の映美のお誕生日もしっかりやったから、それなりにしっかりやってあげないと。

細心の注意を払いながら、次の交差点までたどり着く。信号を渡った先のファミリーマートに、あまり車が停まっていない。コンビニのトイレっていう選択肢もあったっけ。途中でセブンイレブンも見かけたのに、すっかり頭の中から選択肢が消えていた。

お昼時にはちょっと早いおかげで、店内にも人はそんなに多くない。

お店の前まで行き、往来の邪魔にならないところで映美に目線を合わせる。

「おしっこする？」

彼女は首を振る。「お尻、気持ち悪くない？」と尋ねても、彼女は首を振る。

そっか、私が気を揉み過ぎたか。このまま目の前の大通りを歩いて、さっさと家に辿り着いた方が良かったか。

「もうちょっと歩ける？」

映美は首を縦に振った。「じゃあ、行こっか」と彼女の手を引いて、広めの歩道へ出た。「休館日」の札が下がった中央図書館の駐車場の前を通り、Amazonの文字を右前に見ながら真っ直ぐ進む。そろそろ帽子が要る季節。どんな帽子にしようか考えながら、二人でのんびり家を目指した。

『四月一〇日（月）』——森田芽衣編

初出　令和三年五月四日　アルファポリスにて公開

四月一二日（水）

学問に励む若人、仕事に精を出す現役の皆さん、子育てに全力を尽くしている若い夫婦を眺めながら、昼日中から飲むビールは非常に旨い。ビアガーデンが本格化するにはまだ少し早い季節だけれども、日差しの強さだけは早々に初夏を思わせる。

頬を撫でる風に春っぽさを感じながら、もう一口ビールを飲んだ。

「いやぁ、郁美さんは残念でしたね」

私の前で小さめのランチビールを楽しんでいる香帆さんに笑いかけた。

「仕方ないですよ。お仕事ですから」

彼女は口に手を添えながら、ランチメニューのお肉を頬張った。しっかり味わって食べる様は、非常に可愛らしく見える。先日の現場で見せた真剣でカッコ良さすら感じさせた人と、同一人物とはにわかには信じ難かった。

今日は不在の郁美さんも、非常にカッコいい仕事ぶりだった。彼女は普段から男勝りな勝気な人だったけど、厨房に並び立っていた香帆さんも、郁美さんの相棒として一切引けを取らない逞しさを見せていた。

「旦那さんは良かったんですか？」

香帆さんは頷いて、「そちらの奥様と一緒です」と切り返した。声をかけるだけかけたけど、相手が誰と何をするかにはさほど興味がない、らしい。志津香は今頃、お友達と共に美味しいランチを食べていることだろう。

そう思ったら、もう二、三杯はビールを飲んだって許されそうな気がする。グラスを空けた香帆さんにも、お代わりを勧めてみる。

「じゃあ、折角なんで」

「さすが香帆さん。そうこなくっちゃ」

ウェイターを呼んで、二人分のお代わりを注文する。ビアカクテルも興味はあるが、エビスの変わり種を頼むぐらいが丁度いい。ウェイターは注文を確認すると、空いたグラスと皿を持って厨房の方へ歩いて行った。

「あら」

香帆さんはお店の外を見て声を上げた。視線の先には、お友達と連れ立って校

舎の方へ歩く哲朗くんがいた。ややあって、彼もこちらの視線に気がついたらしく、顔を上げて軽く会釈した。

「こうやって見ると、彼もまだまだ若く見えますね」

香帆さんは、テーブルに運ばれてきたビールを受け取り、一口飲んだ。

「利発で仕事もできて、立派な青年ですよ。本当に」

あれで性格の一つでも悪ければ難癖も付けられたのに、温厚な好青年というのができ過ぎな気もする。息子の下で仕事をするにはもったいない人材にも思えるが、何故か彼は幸弘をとても慕ってくれている。

ビールを一口飲んで、喉を湿らせる。「コハク」の濃さを味わいながら、言葉を組み立てる。

「香帆さんは、私の息子をご存知でしたよね？私の愚息と彼、似てると思いません？」

香帆さんは「う〜ん」と小さく唸りながら、少し上を見て考える。ちょっぴり遠くの哲朗くんを何度か見て、しばらく間を置いたのちに口を開いた。

「ザックリ分類すれば、顔立ちは同系統な気はしますけど、雰囲気というか、空気感は全然違いますよね」

「親子には見えない？」

「そこまでマジマジとは見てませんけど、他人の空似じゃないですか？鼻とか目元とか、結構違うような……」

香帆さんに言われた通りに、哲朗くんと幸弘とを比べると、確かに造作の差異はそれなりにあるような気もする。ということは、

「私が考え過ぎ？」

「だと思います。あくまでも、私は、ですけど」

香帆さんは口元に笑みを浮かべながら、グラスを傾けた。第三者から見てもそう思うなら、そうなんだろう。脳裏の悩みを片隅に追いやって、ゆっくりビールを飲んだ。さっきより幾分も豊かな香りと味わいが広がって、私は幸せな気分に包まれた。

『四月一二日（水）』——武藤幸次編

初出　令和三年五月四日　Mediumにて公開

四月一三日（木）

朝から地元のパン屋に赴いて、少々多めに買い込んだ。お店のロゴがプリントされた紙袋を抱えて帰宅すると、部屋を出る前はベッドの中にいた沙綾は、リビングにマットを敷いて、日の光を浴びながらヨガに勤しんでいる。

珍妙なポーズをとりながら、チラリとこちらに視線をやる。

「沢山買ったのね。食べ切れるの？」

「残りは昼飯にするさ」

彼女は「ふーん」と興味がなさそうにいうと、そこからはこちらを気にすることなく、自分のモーニングルーティーンをマイペースに進めていく。こちらもこちらで、薄着の彼女は気になるものの、艶かしい動きや曲線を横目で眺める程度に留め、朝食の準備を進める。ケトルでお湯を沸かし、いつもはインスタントコーヒーのところを、ドリップコーヒーの封を開け、のんびりとお湯を注いでいく。数回に分けてお湯が落ちるのを待つ間に皿を出し、今食べるパンをチョイスする。

揚げたてのカレーパン、きな粉パンと、ホントはお昼に食べたい要冷蔵っぽいミックスサンドを出して、残りの噛み応えがありそうなパンやらクリームパンはお昼に回そう。コーヒーを最後まで淹れて、食卓に付く。一人で「いただきます」とパンにかじりついていると、ヨガやらストレッチやらを終えた沙綾がタオルを肩にかけ、冷蔵庫から甘くない炭酸水を取り出した。汗を拭きながら、パンを食べる僕を見ている。

「一輝って、きな粉好きよね」

「そうかな？」

「お正月だって、せっせときな粉合わせてたじゃない」

「え、やらないの？」

市販のきな粉に砂糖と塩を混ぜて、自分好みの味にしておくのは、大事な行事だと思うのだけど、どうやら彼女はやらないらしい。「粉に気をつけてね」と言い残し、沙綾は風呂場へ向かった。

たまに抹茶や黒蜜、小豆を求めて出かけることもあったように思うけど、身近

な抹茶フレーバーやら、コンビニで手に入るわらび餅やらにはあまり興味を示さなかったっけ……。

粉を撒き散らさないようにきな粉パンを食べ終え、最後のミックスサンドに手を伸ばす。タマゴサンドとキュウリのサンドイッチに、ハムレタス。普通の白いパンと全粒粉らしい色違いのパンとで、見ていて楽しい。

お店には、フルーツサンドやら、もっと肉々しいハンバーガーっぽいのもあったけど、それは今度の楽しみにしておこう。

パンを食べ終え、「ごちそうさまでした」と手を合わせる。食事終わりのコーヒーは、新しくインスタントコーヒーを入れる。ゆっくりコーヒーを味わいながら時計を見ると、まだまだ午前八時を過ぎたところ。

先週オープンに漕ぎ着けた萱野駅前のサロンへご挨拶に伺って、その後のフォローやら、他の販促物、マーケティングに関する打ち合わせやらをするのが、今日一発目の仕事。現場へ直行してからの出社になるけど、まだ少し早い。

シャワーを終えてバスタオル一枚で出てきた沙綾をチラリと見て、「洗面所、空いてる？」と聞くと、「まだダメ～」と応えた。

「スムージー、お願いしていい？」

彼女は目一杯の可愛らしさをかき集めて、風呂上りの用事をおねだりしてきた。

「いつものでいいんだよね？」と訊くと、彼女は頷いて、「ありがとー。じゃ、よろしく」と脱衣所へ戻って行った。

「オレも暇じゃないんだけどな～」と呟きながら、自分の食事を片付ける。野菜室から小松菜を取り出し、「バナナを入れるんだっけ」とレシピを思い出しながら、自分がやらなければいけない朝の支度に思いを巡らせた。

『四月一三日（木）』――浪川一輝編

初出　令和三年五月五日　NOVEL DAYSにて公開

四月一五日（土）

学食のいつもの席で、いつものように弁当を広げる。ぼーっと目の前に広がる光景を眺めながら、焦点を合わせることもなく、ただただぼんやり頭を休める。

なんだかんだと、色んなものに首を突っ込んでいて、実家にそれほど頼らなくても苦もなく生活できているのと、楽しいのは間違いないが、仕事と仕事未満と勉学との狭間で、今年に入って休まる瞬間がめっきり減ってしまった。

転部によるキャッチアップも必死にやらなきゃいけないけど、みぃちゃんたちの「コビトカバチャンネル」も手は抜きたくない。Mサイズの業務も、年度末を越えて少し落ち着きつつあるけど、GW明けぐらいまでは気が抜けないとなると、ココで昼食を取るタイミングと授業ぐらいしか、心も体も休まる時間がない気がする。

「えーっと、原田くん、だったよね？」

割と綺麗に巻けた気がする卵焼きをつまんでいると、後ろから声をかけられた。そちらに顔を向けると、さっきの授業で同じ班だった女子、

「たしか――」

「上坂。上坂碧。ちゃんと自己紹介したんだけど、聞いてなかったでしょ」

溌剌とした、いかにもな女子大生。取り巻き、という表現は失礼だろうけど、上坂さんの後ろに控えている感のある、キリッとした印象の背の高い女性が青柳さんで、その隣にいるスポーティな印象の女性が鈴木さん。確かに、グループワークの冒頭で自己紹介し合った気はするけど、顔と名前とを一致させるだけの興味は湧かなかった。

「隣、いい？」

上坂さんが、僕の向かいの席を指す。土曜日とは言え、それなりに座席が埋まっている学食で、奇跡的に人数分の席が空いていた。少し離れたところにも四人掛けの空席は見えるけど、無理やり断る理由、というか気力がない。

彼女は僕の返事を待つことなく、他の二人と共に僕の隣へ座った。上坂さんの醸すイケイケな雰囲気、主張の強い見た目に、少々の緊張が走る。化粧品か香水の匂いがフワッと鼻先をくすぐった。

彼女らは「いただきます」と一斉に食事を取り始めた。三者三様に、メニューを選んだらしく、それぞれ何がどうだのと、楽しそうにレポートし合っている。

「原田くんは、お弁当なんだ。お母さんの手作り？」

上坂さんが僕の方を見た。近さにドギマギしながら、「自炊だよ」と答えた。

彼女は、弁当のおかずを一つずつ指して、「コレも？　コレも？」と訊いた。

一々頷いて答えると、「へー、凄い」と言った。

「この辺、ちょっともらってもいい？」

上坂さんは、生姜焼きの付け合わせに入れたポテトサラダの一角を丸く示した。

答えを迷っていると、「冗談、冗談」と彼女は笑った。

「でも、今度何か食べさせてよ。材料費は払うから」

「碧だけ、ずるい～」と鈴木さんが口を尖らせた。

「その時は、私たちもお相伴に与らせてもらっていい？」

青柳さんがやや細い目を輝かせて言った。

「人に食べさせるようなもんじゃないよ」

「え～。残念」

上坂さんたちは、心底残念そうな表情を作った。その揃いっぷりが可笑しかったのか、すぐに笑い声が飛び交った。

楽しそうに笑う女子大生の中に放り込まれた僕は、全然食事が進まない。何をどうしてこうなったのか。昼休みの間に思い当たる節は見つけられそうになかった。

『四月一五日（土）』――原田哲朗編

初出　令和三年五月五日　ノベルアップ+にて公開

四月一六日（日）

浪川さんと陽菜の注文をカウンターまで受け取りに行って席に戻ると、浪川さんと談笑していたはずの陽菜は、横に置いていた参考書を開いて勉強を再開した。勉強の邪魔にならない場所へ彼女の分を置き、浪川さんにもドリンクを差し出した。中身は確か、私には名前もよくわからない、期間限定の冷たいドリンク。

「すみません。奢ってもらっちゃって」

浪川さんは申し訳なさそうに手を出して、ドリンクを受け取った。今日は珍しくスポーティな装いで、ちんまりと座っている様子が非常に可愛らしい。

「いえいえ、お気になさらず。娘さんに奢るのは、ジジイの数少ない楽しみですから」

「じゃあ、遠慮なく」

彼女は太めのストローをくわえ、勢いよく吸い込んだ。陽菜は浪川さんに少し遅れて、自分のドリンクを飲む。すぐに視線を手元に落とし、勢いよくペンを動かしていく。

「寄り道までお付き合いしてもらって、本当にありがとうございます」

浪川さんは座ったまま深々と頭を下げた。

「いえいえ。孫娘のワガママついでですから」

陽菜の向かい、私の隣の席に置いてあるユニクロの大きな袋をチラリと見やった。なんとか自立している袋の下に、もう一回り小さめの袋も隠れている。

浪川さんと、今日のできごとを話していると、胸ポケットに入れたスマホが振るえた。「もうすぐ着く」と、幸弘からのメッセージが届いていた。頭頂部しか見えない陽菜に、「お父さん、もうすぐ来るって」と言ったのに、彼女はうんともすんとも言わず、ペンを動かす速度を微塵も変えずに勉強を続けている。

「浪川さんは、どうされます？」

陽菜はこの後、幸弘が迎えに来て、ここで食事するなり、車に乗ってそのまま帰路に着くなりするのだろうけど、この後の浪川さんは予定を聞いていない。彼女は再び申し訳なさそうに、「すみません。お心遣い、ありがとうございます」と言った。

「適当に本屋でも見て、歩いて帰ります」
「良ければ、送りますけど」
まだまだ明るい時間帯だし、そこまで治安が悪いとは思わないが、一人でほっぽって帰るのは気が引ける。浪川さんには「いえいえ。どうしてもって時は、兄でも呼びますから」と丁寧に断られた。
「そういえば、この間の攻略本、役に立ってますか？」
彼女は、年始にここの書店でやり取りしたことを思い出したらしい。楽しげな声にこちらも心踊らせながらいい返事をしたかったのだが、移り気な智希は攻略本どころか、ゲームそのものの話すら、最近は聞かせてくれない。もっぱら、部活のテニスと犬の話題ばっかりだ。
「それが、残念なことに飽きちゃったみたいで」
「そうですか……。もう、三ヵ月ですもんね。仕方ないなぁ」
浪川さんは遠くを見ながら、ゆっくりとドリンクを飲んだ。彼女がどこを見ているのか視線を追いかけていると、彼女は「あ」と声を上げた。浪川さんはテーブルを軽く指で叩き、隣の陽菜に「お父さん、来たよ」と合図した。陽菜は面倒くさそうに顔を上げ、店外の駐車場からゆっくり近づいてくる幸弘の方を見た。

『四月一六日（日）』――武藤幸次編
初出　令和三年五月六日　Mediumにて公開

四月一八日（火）

今月に入ってから、平日の日中はオフィスから人が減ってしまった。先月までは一緒にランチを取ることもあった哲朗も、仕事はすっかりリモートになってしまって、土日もあまり顔を見せてくれない。

森田さんも、年度末の繁忙期を乗り越えたら、来社の頻度が減ってしまった。結局、うちのオフィスで仕事をしているのは、基本的に僕と香織。時折、Youtubeへの動画をアップロードするのに、安定している回線の方がいいからと哲朗、浪川さんの二人がやってくる程度。

そんな二人が管理するYoutubeチャンネルの、非公開動画のURLがSlackに流れてくる。最近彼らや、取引先の小野寺さんらとやっている自主練ダンスの振り返りが主目的の動画だ。浪川さんがカット割りも考えて編集して、かっこいい動画に仕上げたっていいのに、彼女もしっかりダンスに参加して、彼女のなりの動きで元ダンス部の皆さんに食らいついていってるのがとても微笑ましい。

今回共有されたのは、先日の日曜日に行われた自主練の映像。ちょっぴり高めの画角は哲朗だろうか。鏡越しに親父の姿も見える。小野寺さんのもってきた音源に合わせ、彼女と彼女の友人とを筆頭に、浪川さんと陽菜がその後ろに立って動きをトレースしていく。

一輝くんと彼の連れ合い、沙綾さんは不参加らしい。見栄えのする動きは主に、前の二人。浪川さんは少々悪目立ちする感じで映っていて、陽菜のダンスは浪川さんほど悪くはない。体育の授業でダンスを選択していたんだっけか。それなりに、というかどうしても気になって追いかけてしまう。

「うわぁ〜。お父さんがそんな目で必死に見てるって知ったら、またややこしいことになりそうだな〜」

隣で僕のモニターを覗き込みながら、香織は嫌味な笑みを浮かべ、ふざけたトーンで言う。

「でも、コレいいね」

「お宅の里紗も参加するかい？」

「おじさんたちの邪な目で見られちゃ叶わないから、結構です〜」

中学校で水泳部に入ったらしい姪っ子の、地上でのバランスを整えるのにも良さそうだけど、ほぼ身内とはいえ、第三者に見られるのは確かに嫌がるかもしれない。そういう意味合いでは陽菜も似たようなもんだけど、久々に元気よく動く娘の姿が見れた喜びの方が僕の中では大きい気もする。

「コレが沙綾さんね〜。おー、すごいすごい」

香織は一つ前の動画を開いて、沙綾さん、小野寺さん、小野寺さんのお友達の三人だけで踊っていた冒頭の部分を、目を丸くしてジッと見ていた。単純にダンスの動きとしては三者とも大きな差はないように思えるが、中央の沙綾さんにどうしても目が行く、少し違って見えるのは表現力の差なのだろうか。単なる見た目、迫力だけの問題ではなさそうだ。

「沙綾さんも参加する回なら、里紗も行きたがるかもね。久々に陽菜ちゃんにも会える、とかはしゃぎそう」

そう言われると、陽菜があまり家族の行事に参加しなくなったせいで、彼女と里紗、啓が顔を合わせる機会も減っている。智希と啓は男同士で楽しそうにしているが、里紗はちょっぴり寂しそうにもしていたな。

SlackのDMで哲朗に、「沙綾さんが参加しそうな日って、分かる?」と打ってみた。彼女のファンらしい彼の妹にも、明子さんを通じて伝えてもらおうか。哲朗からの返事を待ちながら、既定の昼休みがもう間も無く終わることを思い出し、すっかり伸びきったカップ麺に箸をつけた。

『四月一八日（火）』——武藤幸弘編

初出　令和三年五月六日　カクヨムにて公開

四月二一日（金）

横長の長辺を留めたA4のコピー用紙を何度か繰り返し見て、耳に挿した赤いサインペンを手に取った森田さんは、そのままキャップを外すことなく、ペンを横に置いた。「うん、コレで、いいんじゃないでしょうか」と、紙面から顔を上げた。

「今週も、お疲れ様でした」

彼は椅子に座ったまま深々と頭を下げ、コピー用紙の束をトレイに入れた。印刷物の元になったデータを、ドラッグして「完成原稿」のフォルダに納めた。

「それで、どう？」

森田さんはテキストファイルの名前を変更し、モニターを軽く指差し確認してから振り返った。

「朋子さんのおかげでアクセスはあるんですが、書き手が足りてないですね」

彼は画面を切り替え、アクセス解析の画面を見せてくれる。確かに、私のエッセイはよく見られているらしいが、他の記事はあまり伸びていない。

「原稿をかき集めて、来月辺りに創刊号にしてもいいんですけど、朋子さん的にそれじゃダメなんですよね？」

「私的にっていうか、編集長的にそういう雑誌にはしたくないんでしょ？」

私の返しに、森田さんは苦笑いを浮かべ、「う〜ん、そうですねぇ」と唸りながら後頭部を掻いた。

「もうちょっと、ごった煮の部活感は出したいですよね。せっかくなら、フィクションの割合も増やしたいんですけど、いい人というか合う人が中々いないんですよね……」

このままボリュームだけ出しても、私のエッセイと彼の小説と、小野寺さんたちのちょっと捻った情報提供ページだけでは確かに物足りなさはある。もう、二、三人ぐらい、できれば四、五人ぐらいは作家が欲しい。

自分の席で仕事に勤しんでいる武藤さんは、エッセイは書けるものの、小説はあまり得意じゃなさそうだし、安藤さんにお願いしたとしても、独自の映画批評コーナーぐらいしか頼めない気がする。

芽衣さんの別名義の漫画や挿絵も挟まってはいるものの、コレから拡がっていく未来はまだ描けない。

「サイト上で募集してたり、お問い合わせフォームから応募があったりもするんですが」

「それで、いい人が来たら困らない、と」

森田さんはゆっくり頷いた。彼の思い描くイメージ、世界観に合うかどうかというハードルも着実にある。上手い下手はあるとしても、それ以外の「何か」が噛み合うかどうか、そこが肝にはなってくる。フィーリングやセンスが合うかどうか、コレばかりは運次第。

「哲朗くんの身近なところに、そういう人居ない？」

森田さんは、武藤さんと打ち合わせが終わって自分の席に戻っていく哲朗くんに声をかけた。彼は椅子に座りながら、少し考え込むように「う〜ん」と唸る。

「聞いてはみますけど、僕のところより、みぃちゃんの学部の方が居そうだなぁ……」

彼は隣の瑞希さんに視線を送る。彼女は「え？　私？」とパッと顔を上げた。

「そうだ。立命の映像だったっけ」

「そうですけど、な、なんでしょう？」

哲朗くんが、彼女に今までの経緯を説明する。彼女は軽く頷く。

「そうか。学生とか知人に当たってみればいいんだ」

森田さんは、目の前のモニターを見ながら、独り言のように呟いた。彼は一人で納得したらしく、大きく頷いてこちらに顔を向けた。

「書き手の方はこっちで頑張ってみるんで、購読者の件はお願いしてもいいですか？」

力のみなぎった彼の目に、「えぇ」と反射的に応えてしまった。

なんだかんだでこの編集長、頼りになるじゃない。おばちゃんのネットワークで、目一杯支援しなくっちゃ。

『四月二一日（金）』——奥野朋子編

初出　令和三年五月七日　Pixivにて公開

四月二四日（月）

「なぁ〜んか最近、可愛くないね」

四人掛けの席で目の前に座った沙綾さんは、赤のハウスワインが届くなり早速喉を湿らせて私に言った。あまりに唐突な言い方に、水を入れてきたグラスを落としそうになる。

「そうですか？」

彼女は頷いた。

「前は違う意味で可愛くなかったけど、それが無くなったかな……」

沙綾さんの言いたいことがイマイチ飲み込めず、一人でジッと考え込んでいると、彼女は運ばれてきた辛味チキンをパパッと二つ食べてしまった。「嗚呼っ」と思っている間に、例の魔法の粉をササっと塗してしまう。

相当残念そうな表情でじっと見つめていたらしく、沙綾さんには珍しく「あら、ごめんなさい」と頭を下げた。彼女は呼び出しボタンに手をかけながら、「もう一つ頼む？」と訊いてくれた。それに首を横に振って応えたのに、彼女はボタンを押した。呼び出された店員さんに白のグラスワインを頼み、空きのグラスをついでに下げてもらう。

店員さんがテーブルを離れるのを見守ってから、沙綾さんは私の目をジッと見る。

「で、哲朗がどうしたって？」

彼女は頬杖をついて、つまらなさそうに言う。取り繕った返事をしても、彼女は「そういうの、いいから」と取りつく島もない。「欠席裁判が嫌なら、本人呼んじゃう？　もう、仕事も終わってるんでしょ？」

容赦ない詰めっぷりに、自然とあうあうしてしまう。いつもながら、この人強い。一兄、こんな人と同棲してるなんて、凄すぎ。などと、この場にいない人のことを褒め称えている暇なんてない。

さっき二人でMサイズの事務所を出る時にはいなかったから、哲朗さんは今頃、駅の向こうの学生マンションに帰っているはず。呼び出したってすぐに来れる距離だけど、なんとなくメッセージは送りたくない。

「呼べない理由が何かあるのか。なるほど……」

スマホをチラッと見たのがバレたらしい。沙綾さんは新しくテーブルに届いた白ワインをゆっくり味わっている。しっかり口の中で転がしてから、飲み込んだ。

テーブルには、マルゲリータやらパスタやら運ばれてくる。彼女は店員さんに愛想良く「ありがとう」と言うと、早速パスタをフォークで巻き上げた。私はピザカッターを握って、歪な円形に下手くそな切れ込みを入れていく。沙綾さんはパスタを一口食べ、ワインを飲んだ。彼女はフォークを持ったまま、私の方を見る。

「コレ食べたら、私、帰っちゃうけど」

「えっ、あ……」

彼女の宣言に不意を突かれ、言葉が出てこない。相談したいことも色々あったのに、考えがまとまらない。

「帰る前に、突撃しちゃう？」

彼女は悪い笑みを浮かべながら、ワインを飲む。

思い切って突撃？　それも悪くないような。少なくとも、夕方に見た光景は拭えそうな気がする。私は不器用に切り分けられたピザを口に運んだ。

「私も一口、もらっていい？」

沙綾さんは、私が「どうぞ」という前に、スッと小さめの一切れを持って行った。彼女はニヤニヤしながら、ピザとワインのマリアージュを楽しんでいた。

『四月二四日（月）』——浪川瑞希編

初出　令和三年五月八日　noteにて公開

四月二六日（水）

すっかり夜も深まった時間帯に、水尾東公園のベンチで身体をほぐすことになるとは思いも寄らなかった。もうそろそろ半月になりそうな夜空を見上げながら、

「乳酸よ、出ていけ」と強く念じながら、念入りにストレッチする。

「ごめん、遅くなっちゃった」

彩夏が、裏手の水尾図書館の方からではなく、表通りの方から、ファミリーマートの袋を提げてやってきた。

「フレスコ、九時までなのね。そっちのファミマまで行ってたら、遅くなりました」

私はお尻を浮かせて、彼女の座るスペースを確保する。彼女はビニール袋から「ファミマ限定」と書かれた五〇〇ml缶を取り出して、私に差し出した。彼女も、自分の分を手に持って、ベンチの腰を下ろすや否や早速開ける。吹き出しかけた泡を口から迎えに行って、乾杯もなしにいきなり始めてしまった。

私も置いて行かれないように、缶を開ける。向こうが落ち着くまで一応待って、遅まきながら「乾杯」と缶を軽くぶつけた。グッと喉に流し込むと、だんだん夜も暑くなってきた時期に嬉しい冷たさが、程よい刺激や苦味とともに駆け抜けていく。

「ルミとここで缶ビールを傾けるなんて、夢にも思わなかったな」

「アラサーにもなって、花見でもないのに月を見ながら外飲みなんて、私も想像してなかったな」

「アラサーって」と彩夏は笑った。彼女が隣にいなかった学生の頃は似たようなところでよくやったけど、最近はこういうの、やってなかった。

ぼーっと目の前を眺めていると、案外、交通量はそれなりにある。その割に、背後に広がる団地、住宅街は恐ろしいくらいの静けさが広がっている。私の家も、彩夏の実家も、この静けさの中に含まれている。

「ゴールデンウィークは、なっちゃんとどっか行くの？」

さっきまで背中に感じていた重み、温もりを思い出しながら、彩夏に訊いた。

彼女は「な〜んにも決めてない」と言った。

「仕事もいっぱいもらっちゃったし、まだまだ勉強しなきゃいけないこともあるし」

仕事も勉強も依頼したのは、私だったっけ。在宅でも稼げる時に稼いでもらおうと、比較的簡単な仕事をお願いしたつもりだったけど、彼女の「頑張ります」の熱量に甘えて、やりすぎちゃったかもしれない。

配慮が足りずに申し訳ないなと、後頭部を掻いていると、彩夏は「でもね」と明るい声で言った。

「お母さんと一緒に、沢山お出かけするんだって。森田さんのところとも、遊ばせてもらう約束しちゃった」

「へぇー。それは、凄いね」

そういえば、芽衣さんのところの亜衣ちゃん、同い年ぐらいだったっけ。彩夏ママもまだまだ若いし、孫とのお出かけを口実に、色んなところへ繰り出しそうだ。

「お仕事紹介してくれて、本当にありがとう」

彩夏は勢いよく、深々と頭を下げた。

「気持ちはよく分かったから、もう頭上げて。お願い」

彼女の体を揺すって元に戻るように促すものの、彩夏は彩夏で身体をガチッと固めて、頭を下げたまま戻る気配はない。私が揺さぶりを強めると、彩夏の手中にあった缶から、ビールが飛び出した。勢いよく彩夏の顔に直撃し、彼女の顔面がビシャビシャになる。

彩夏はやっと顔を上げ、無表情で私の方を見る。無言のプレッシャーに、「ごめんなさい」と小さく謝ると、彼女はプッと吹き出して笑った。満面の笑みを浮かべる彼女に、私はタオルハンカチを差し出した。

『四月二六日（水）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年五月八日　小説家になろうにて公開

四月二八日（金）

喫茶店を出て、衣料品コーナーをぐるっと周り、一階まで降りるエスカレーターに乗る。前を歩く郁美さんは領収書を財布に仕舞いながら、「ご足労いただいて、本当にすみません」と言った。

「いえいえ。それより、ごちそうさまでした」

「明日はその分、よろしくお願いします」

彼女は一階に着いたところで腕時計を見ると、「すみません、私、急ぎますんで」と少々慌てた様子で真っ直ぐ外へ出て行った。

金曜日の夕方、食品売り場も奥のフードコートも賑わっている。私も郁美さんのようにそのままバスで真っ直ぐ帰ってもよかったけど、あまり来ないアルプラザの中をグルっと見てから帰ろうかしら。

水尾に住んでた頃は平和堂もよく行ったけど、今の駅前通り界隈ではJR駅前の阪急オアシスか、その裏手のサンディに行くぐらい。市役所近くの業務スーパーもたま〜に見るけど、お父さんと二人であの量は中々食べ切れない。

ふらふらとフードコートの方へ歩いてみるものの、学生さんやご近所らしい皆さんがいっぱいいて、しばらく待っても座れる気がしない。たまにはマクドナルドでジャンクフードにありつく手もあったけど、バスに乗って持ち帰るほどではない。

手前のパン屋さん、シャトレーゼも気になるけれど、何か一つぐらいお土産に買って帰ろうか。アルプラザへ来る途中にあったパン屋さんも美味しそうだったし、ここは甘いものにしておこうかな。

洋菓子とかケーキも美味しそうだけど、そうそう、かしわ餅。白いこし餡とよもぎの粒餡がセットになった奴と、ピンクの味噌餡も一つ買って帰ろう。レジの横に置いてあったアップルパイも一緒に買って、一つにまとめてもらった。

あとは、適当に食品売り場を見て行こう。朝の食パンとヨーグルトは月曜日の分まであったと思うけど、日曜日のお昼と晩ご飯をどうしようか。調味料で切らしたものは何かあったっけ。

買い物カゴをカートに乗せ、特設青果コーナーから見て回る。豆ご飯はこの間

やったし、アスパラも割と食べたのよねぇ。ブロッコリーを一つと、きゅうりを一袋にしようかな。

グルっとカートを動かして、常設の野菜もチェックしていく。いつものお店ではあまり見かけない、野菜用調味料なんか見かけてしまうと、ついついセットでカゴに放り込んでしまう。できるだけ重たいものは買わないようにして、軽そうな変わり種、限定フレーバーだけにしよう。

そう心に決めたのに、お酒のコーナーで物珍しい缶ビールと缶チューハイを二本ずつ選んでしまった。カード入れの中から久々にホップカードを取り出して、ホップポイントを加算していく。半自動のレジで一瞬戸惑ったものの、レシートにはちゃんとポイント加算ができた旨が載っていた。

ちょっぴり重くなってしまった荷物を提げて、アルプラザの外に出る。バス停に近い出入り口には、「頭上注意」の注意書き。上を見上げれば、燕が巣を作っていた。

確か、目の前の通りを左へ抜けて、交差点をさらに左へ折れたら、バス停だったはず。手前のパン屋さんには、機会があればまた来よう。美味しそうなパンの匂いに後ろ髪を引かれながら、奥に見える交差点を目指して足を動かした。

『四月二八日（金）』——小野寺香帆編

初出　令和三年五月八日　MAGNET MACROLINKにて公開

四月三〇日（日）

ケトルでお湯を沸かしながら、お茶請けになるようなものが何かあったかしら、とお菓子入れを覗く。ソファの上で寝静まっている子供たち向けの物しかなさそうに思える。

どうしたものかと思案していると、車が止まり、玄関から色んな音が聞こえてくる。買い物袋を下げた康徳さんが、「ごめん、ごめん。遅くなった」とリビングに入ってきた。テーブルに置いた袋の中には、柏餅とちまきが入っていた。

「緑茶はコッチ」

康徳さんは肩にかけた袋から、お茶の袋を取り出して渡しに差し出した。残りは冷蔵庫の前に行って、野菜室なり、冷凍庫なりに詰め込んでいく。彼はパパッと片付けて、洗面所へ手を洗いに行った。私は彼が戻ってくる前にお茶を淹れ、お客さん用の湯飲みも準備して食卓についた。

「すみません、座ったままで」

康徳さんの赤が入ったコピー用紙を二人で話し込んでいた小野寺さんと、そのお友達の野村さんが顔を上げた。小野寺さんは、野村さんに書類と文具を片付けるように促しつつ、お茶の準備を手伝ってくれた。野村さんもカバンに荷物を仕舞い終えると、「何から何まで、すみません」と、頭を下げた。

「ああ、いいの。座ってて」

彼女まで席を立って手伝おうとしてくれるけど、広いとは言い切れないキッチンに、そんなに大勢は入らない。小野寺さんに和菓子をセットしてもらい、ポットに追加のお湯を足して、席に着く。康徳さんは私の隣に座ると、スッとピンクの味噌餡に手を伸ばした。

「ちょっ、お客さんより先に取るなんて」

彼はさっさと葉っぱを剥がして、餅にかじりついている。

「こちらが何も持たずに押し掛けてるので、気にしないでください」

「本当に、すみません」

小野寺さんと野村さんは、同時に頭を下げる。康徳さんは私の方を見ながら、何事もなかったかのように、餅の残りを口に放り込んだ。

「なっちゃんの分も、選んで」
「いいんですか？」
彼の言葉に、野村さんは私の顔も見る。私が頷くと、彼女は「じゃあ、遠慮なく」と白いこし餡、よもぎの粒餡を選んだ。よもぎの方はふんわりとラップで包んでおく。
私はもう一つの粒餡を手に取ってかじりついた。小野寺さん、野村さんも美味しそうに柏餅を食べている。一人先に食べ終えた康徳さんは、私たちを眺めながら、空いた手でスマホを弄っていた。
「昨日の香帆さん、見に行った？」
彼は、小野寺さんたちに、スマホの画面を差し出した。昨日の春フェス会場で撮影した、香帆さんと義姉さんの写真。ちょっと離れたところで、運転手らしい武藤さんのお父さんの姿も写っている。
お餅を食べ切った小野寺さんは手を拭いて、彼からスマホを受け取った。何枚かスライドして、実母の活躍ぶりを眺めていた。隣から野村さんも画面を覗き込み、「へー、かっこいいね」と、小野寺さんに囁いた。
「収支はまだ未確定だけど、そこそこ儲かったんだって」
小野寺さんからスマホを返してもらいながら、康徳さんは言った。
「今度の茨音も、ねじ込んでもらったんだって？」
「みたいですね。サポートというか、間借りみたいな形らしいですけど」
康徳さんは「みたいですね、ってルミちゃんの頑張りでしょ？」と、小野寺さんに突っ込んだ。彼女は「いえいえ、私の影響力なんて微々たるもので」と小さくなりながら頭を掻いた。
楽しそうな雰囲気を壊さないようにスッとキッチンに戻り、ポットに残りのお湯を足す。時計を見ると、そろそろ午後五時になりそうだ。遅くなってしまったけど、お米を研いで夕食の準備も進めねば……。

『四月三〇日（日）』――森田芽衣編
初出　令和三年五月九日　アルファポリスにて公開

五月二日（火）

連休前日の株式会社Mサイズは、久々にのんびりムードが流れているようだった。年度末の繁忙期、地方選挙前後も忙しそうにしていたが、今日は割と緩い雰囲気がオフィスに漂っていた。

「親父もすっかり、そっちの一員だね」

幸弘は私が持ってきた袋の中を覗き込んだ。「どれが、どれだっけ」という息子に、一つ一つ説明してやる。「じゃあ、これにしよっかな」と、一番上の弁当を手に取った。

「哲朗くんと、浪川さんに先に選ばせてやれよ」

幸弘は私の前にどっかりと座り、割り箸の袋に手をかけていたが、「それは、そうだな」と手を止めた。彼が席を立ち、哲朗くんたちを呼びに行っているのを眺めていると、後ろから「私もいるんですけど」と香織に声を掛けられた。

「あ、すまん。三つしか持ってこんかった」

私の声が聞こえたらしく、向こうの方から哲朗くん、浪川さんの困惑する表情が見える。香織は「ごめんなさい、気にしないで」と二人に向けて言った。

「兄貴のを一口もらうわ」

幸弘は二人を連れてこちらに戻ってくると、香織に「相変わらず、食い意地張ってるよなぁ」と言った。香織は「あら、悪い？味にうるさいシンママの意見も大切でしょ？」と切り返した。若人二人は慣れた様子で、私に「いいんですか？」と訊いた。

「好きなもの、といっても3種類しかないが、遠慮なく。アンケートも、よろしく」

幸弘が先に選んだハンバーグ弁当の外に、野菜がメインのヘルシー弁当、魚がドンと入ったシャケ弁当の三つから、浪川さんがシャケ、哲朗くんがヘルシー弁当を選んだ。

「哲朗くんが、ハンバーグでもいいんだぞ」

「いえいえ。野菜好きなんで」

哲朗くんは弁当を手に、浪川さんと並んで座る。蓋に貼ったQRコードにスマホをかざしながら、心底楽しそうに笑っている。

「あれが自然体っていうんだから、恐ろしいよなぁ」
幸弘もスマホにアンケートを表示しながら、ハンバーグに箸をつけた。香織も横からハンバーグを小さく切って口に運ぶ。一瞬目を丸くすると、その後はしっかり味わうように、ゆっくり咀嚼する。
「本当に、無理してないのか」
「執着しないというか、切り替えが早いのは、今の子っぽいけどね」
香織はスマホを何度かポチポチすると、「ごちそうさまでした」と割り箸を片付けに行く。
「臆病というか、要領がいいというか」
幸弘は一つ一つしっかり味を確かめながら、アンケートに回答していく。食べては応え、答えながら話す。消化には悪そうな気もする。アンケートの取り方は工夫の余地あり、か。
「でも、お父さんに反発する気概はあるのよね」
香織はお茶を入れて戻ってきた。哲朗くんたちの方を見ながら、お茶を啜る。
「要所要所で、結構頑固だし」
「こういう仕事には、必要だからね」
幸弘は、残りの漬物を摘みながら、ご飯を少しずつ口に放り込んでいく。
哲朗くんは、隣の瑞希さんと楽しそうに弁当を食べ進めている。彼らもそろそろ食べ切るようだ。
「あの若さで、か」
「そう。お父さんとか、兄貴とは比べ物にならない、いい男」
香織の言い方にカチンと来る部分も無くはないが、内容に異論はない。イマドキの若者も、悪くない。

『五月二日（火）』——武藤幸次編
初出　令和三年五月一三日　Mediumにて公開

五月四日（木）

映美に背負わせていたハーネスリュックを一回降ろしてもらい、中に入れる物を改めて確認する。私の荷物にも、子供たち用の水分やらオヤツやらは入れてあるものの、最小限の軽いものはこちらにも小分けに入れておきたい。

康徳さんは、アルプラザが開くまで待って、食品売り場で何か調達してからバスに乗ればいいと言っていたけれど、約束の正午を目安にバスに乗るつもりなら、九時台の便には乗っておきたい。

昨夜の話ではそれで了承し合ったはずなのに、そろそろ出発したい頃合いになっても、康徳さんはMacを開いたまま動かない。バス停までの道のりを考えると、そろそろタイムリミットだ。

「康徳さん？」

声をかけると、彼は少々驚いてこちらを見た。「ごめん、ごめん。もう出ないとね」と食卓に並んだ荷物に目をやった。私は亜衣にトイレを促し、彼女が戻ってくると映美をトイレに連れていく。トイレから出た映美を康徳さんに任せ、自分たちの出発準備を整える。映美にはハーネスリュックを背負ってもらい、康徳さんは私が持つつもりだった大きなバッグを持ってくれた。開いた手で、映美の手を握って外へ出る。

玄関横のガレージには、いつでも出かけられそうなマイカーが鎮座している。ドアにしっかり鍵をかけ、先に歩き出した亜衣たちを早歩きで追いかける。

「本当にバスで行くの？」

康徳さんは頷いた。怪訝そうな面持ちで「ダメだった？」と聞き返された。

「二人ともしっかり歩けるんなら、と思ったんだけど。サンデードライバーも怖いしさ」

子供らは確かに歩けるようにはなったけど、行き帰りの道中で、最後までグズらずに歩けるとは思えない。幸い、バス一本で座っていれば着くけれども、余分な荷物は増えるし、寝入った場合の手が足りるかどうかも不安ではある。

「別に、俺が飲めないからってだけじゃないよ。向こうに長いこと停める場所とかお金とか考えたら、安全も考えてバスでいいじゃん」

連休中の運転は確かにちょっと怖くはある。だったらもっと早い時間帯に出てもいいんだろうけど、今日は無理して動くのも難しい。康徳さんが一杯二杯は飲めないと困るのもよく分かるし、今回はバスしかないか……。

「おっと、まだ開いてないんだっけ」

アルプラザの裏手まで来て、康徳さんは建屋の外周道路に沿って右手へ迂回する。駐車場の出入り口に気をつけつつ、西出入り口の方へグルッと回る。正面の道路を左へ進み、一七一号線との交差点を渡った。吉野家の前のバス停で、「阪急石橋行き」を待つ。ここまでは、二人の娘は自分の足でしっかり歩いてくれている。

「次は、四一分か。一本前の奴は行ったばっかりか～」

彼は腕時計を見ながら、目の前の通りへ目をやった。反対方向は割とスムーズに流れているけど、こちら側、箕面方面行きはいつもより若干交通量が多い気がする。

「向こうにバスが見えるけど、アレが遅れてる奴だったらいいんだけど……」

彼は、「餃子の王将」の向こうに見えるバスをジッと見ている。まだ小さくて行き先表示は見えないけれど、阪急バスであるのは間違いなさそうだ。このままスムーズに、約束の時間に間に合えばいいんだけど、と思っていたら、段々近づいてきたバスの行き先には「豊川四丁目」と書いてあった。

『五月四日（木）』――森田芽衣編

初出　令和三年五月一三日　アルファポリスにて公開

五月五日（金）

居酒屋なのに連休中ということもあってか、二階には小さな子供を伴った家族連れもいた。他の席にも団体さんっぽい人たちがチラホラいる。彼らは食卓の真ん中に置かれたコンロで貝やエビを焼きながら、楽しそうに談笑していた。

そういう私たちも二つの卓に分かれ、団体で座席を占有している。もっとも、楽しそうにしているのは目の前にいる男一人だけで、なんとなく重たい雰囲気、鬱々としたトーンが漂っている。

一人だけ楽しそうな男は、隣に座る女子に声を掛けた。

「君も、向こうの席じゃなくていいの？」

メニューを握り締めたまま隣のテーブルをジッと見ている女子、瑞希さんは声をかけた男、透の顔を見ることなく頷いた。彼女はサッとメニューに視線を戻した。私は透に咎めるような視線を送るも、彼は悪びれる様子もなく、私に向けて肩を竦めた。

「で、なんであんたがいるの？」

「幼馴染みが若い男と居酒屋なんて、気になるだろう？　モテるみたいだし」

透は横目で隣のテーブルに視線を投げた。あちらのテーブルは確かに賑やかだけれども、渦中の彼はあまり嬉しくはなさそうに見える。助けを求めるような視線がこちらに向いているような気もするけど、それを出迎えるのは瑞希さんの冷ややかな厳しい目。こんな怖い表情もできるんだ。おまけに、どこか可愛らしさも隠れているというか、キツい表情を作っても美人さんに見えるのは単純にすごいというか、羨ましいというか、ちょっぴりズルいとも思ってしまう。

「ま、冗談だけど」

透は店員さんが運んできたドリンクを受け取り、私のグラスと形だけの乾杯を済ませると、グッと飲んだ。隣の瑞希さんはノンアルコールのジンジャーエールを両手で握り締めたまま、チビリチビリと飲んでいる。

せっかくのビールを楽しみに茨音へ出かけたのに、なぜかステージに出る羽目になってバタバタしている間にビールが売り切れてたのが悲しくて、打ち上げ代わりに居酒屋へ駆け込んだのに、よく冷えたビールをグーっと飲んでお気楽にプ

ハーっとする雰囲気じゃない。まぁ、カラカラの喉を潤すのに、そんなシチュエーションなんて関係ないんですけど。一口で半分以上が消えてしまった。

透は通りかかった店員さんを呼び止めて、ビールのお代わりを頼んでくれた。そんな彼をジッと見て、もう一度「なんであんたがいるの？」と訊いた。

「嫁、子供はほっといていいの？」

「ほっといてっていうか、向こうは一昨日から実家に帰ってるよ」

「で、一人だから幼馴染み相手に浮気しようって？」

「そういうこと」

彼は相変わらず楽しそうにニヤニヤしながら、まだ誰も手をつけていないポテトフライに手をつけた。ケチャップとマヨネーズをたっぷりつけて口に運ぶ。隣の座っている瑞希さんは、隣のテーブルをジッと見据えたまま鶏の竜田揚げに食らいついた。サクサクの衣と彼女の歯が醸し出す力強い咀嚼音に、「哲朗くん、逃げて～」と心の中で叫ぶ。

「それぐらいのメイクだと、十歳ぐらい若く見えるな」

透は私の顔をジッと見ながら、ボソッといった。ひょんなことからステージに立った後、パパッと汗を流して簡単に目元を直したぐらいだけど。

「えっ、まだ制服いける？」

「冗談、冗談。ルミが子供っぽいだけだったわ」

透はプッと吹き出した。お腹を抱えて盛大に笑う。こいつ、マジでムカつく。どんな仕返しをしてやろうか、頭の中でこねくり回しながら、店員さんが運んできた新しいビールを口に含んだ。

『五月五日（金）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年五月一四日　小説家になろうにて公開

五月七日（日）

土砂降りの雨の中、オフィスに赴いて端末を立ち上げてみたものの、何らかのレスポンスがあるはずもなく、世間は当たり前のようにゴールデンウィークを楽しんでいるらしい。受信ボックスを確かめても、Slackを立ち上げても、目ぼしい未読は見当たらない。

椅子の背もたれにグッと体重を預け、モニターを付けっぱなしにしたまま目を閉じる。普段はラジオの音やら、電話のコールやらが聞こえてくるのに、今日は空気清浄機の音が微かに聞こえるだけ。窓の外から聞こえてくる雨の音、表通りを走る車の音が心地よく混ざり合う。

目を閉じて、雨の音に耳を済ませる。音に誘われてゆったり船を漕いでいると、だんだん大きくなってくる足音が聞こえてきた。どうやら、誰かがドアの向こうで立ち止まったらしい。立ち止まった誰かはドアを開け、明かりをつけた。

「おお、哲朗くん」

急な明るさに目を細めながら、身体を起こす。呼びかけられた哲朗はビクッとして、こちらを見た。

「何だ、社長か」

「何だとは、何だ」

哲朗はヘラヘラ「すみません」と笑った。自分の席へ行って、端末を立ち上げる。

「ゴールデンウィークの最終日なのに、『こんなところ』で居眠りですか？」

「そういう君の方こそ、『こんなところ』に何の用だ？　一朗さんの祝勝会ぐらい、出たんだろうな」

「多選の地方議員なんて、一々祝ってられませんよ」

端末が立ち上がると、哲朗は早速自分の作業に取りかかった。その口振りでは、この連休も実家には帰っていないようだ。例の練習動画には彼の妹の姿もあったから、あちらからは来ているようだが、明子さんからも特別にメッセージが飛んできている気配はない。

「何か、仕事頼んでたっけ？」

彼はモニターを忙しそうに眺め、何度かマウスをクリックした。「いや、特にはなさそうですね」と、手にしたハードディスクを差し込んでいる。
「明日からまたしばらく来れそうにないんで、持ち出しちゃってもいいですか？」
「ああ、いいよ」
どうせ、機密らしい機密も大してない。彼の出先で開かれて困るような資料、データも特にない。彼は手早くマウスを動かし、必要なデータを移していく。代わりに、Youtubeへの動画アップロードも進めているようだ。
「この間の、茨音はどうだった？」
「社長は見てないんですか？」
「現場にはいたんだけどね。本部でバタバタしてたからさ」
彼は手元のハードディスクに手をやる。
「今ちょうど、その映像をアップロードしてますから、あとでまた見てください」
「え、もう編集も終わってんの？」
哲朗は頷いた。
「ちゃんと、浪川瑞希の監督、編集で見応えある動画に仕上がってます」
いつもの練習動画は撮ったままの映像だったけど、今回はしっかり手を加えたようだ。何やかんやで監督も急遽でステージに上らされたのに、事前にきっちり連携取って、過不足なく撮れたのだろうか。
「それは楽しみだな」
哲朗は「今回のは、公開してもいいレベルです」と力強く頷いた。公開、は二の足を踏んでしまうけど、いい酒が飲めるかもしれない。「どうだ、哲朗くん。この後、一杯行かないか？」
「すみません。この後、予定があって」
彼は申し訳なさそうに軽く頭を下げた。
「忙しいねぇ。さすがは、できる男」
彼は「いえいえ、そんな」と言いながらも、満更でもなさそうな表情を浮かべている。頼もしくもあり、末恐ろしくもあり。前途洋々の若者を見守りながら、この後どうしようか、思いを馳せた。

『五月七日（日）』――武藤幸弘編
初出　令和三年五月一四日　カクヨムにて公開

五月八日（月）

授業中の内職も順調に進み、授業そのものも卒なくこなした。あとは仕上がったデータのアップロードと、Slackでの共有ができれば一つ片付く。まだ時間には余裕があるし、帰宅後にゆっくりやろうと思ったのに、あと少しで家というところで、上坂さんに捕まった。

先々週は帰り際に捕まってしまったから、ちょっぴり警戒して帰ってきたのに、茨高すぐの古びた本屋の前でばったり出会した。自転車でそのまま走り去っても良かったのに、なぜか気が引けて自宅の方まで一緒に歩いてきてしまった。

で、なぜかそのままアレよアレよと、部屋の中に押し入られてしまった。先々週も取り巻きっぽい青柳さん、鈴木さんとともに家の前までやってきて、彼女だけ僕の部屋まで着いてきている。一人暮らしの狭い部屋に、二人っきりというのは落ち着かない。

彼女は「ちょっと暑いね」というと、自分の鞄を置き、財布だけ持ってどこかへ行ってしまった。一人で困惑していても仕方ないし、とりあえず手を洗い、机の前まで行ってMacを立ち上げる。Slackで作業に関して連絡をしていると、上坂さんがビニール袋を下げて戻ってきた。

「おぉ〜い、哲朗く〜ん」

台所の方からドアを開け、可愛らしい顔を覗かせた。

「あ、ごめんなさい。お仕事中だった？」

僕は「いや、大丈夫だよ」と答えつつ、部屋の中を極力見せないように台所へ移動した。後ろ手に扉を閉めるが、台所の狭い空間に二人でいる方が緊張するな。判断を誤ったか。

上坂さんは僕のことなどさして気にかける様子もなく、コンビニで買ってきたドリンク、お酒を冷蔵庫に詰め込んでいく。残った二本のうち一本を僕に差し出し、自分はそのまま手元の缶を空けて口をつけた。狭い台所で立ったまま、極々喉を鳴らしながら豪快にビールを飲んでいく。

さっきよりちょっと赤くなった顔で、僕の顔を見上げる。

「あれ、飲まないの？」

「ああ、うん。まだ、仕事があるから」
胸ポケットのスマホも震えて教えてくれる。もう少ししたら、次の動画について打ち合わせをするために、みぃちゃんがやってくる。
「私の酒は飲めないんだ」
彼女はビールを片手に、僕の方へ身体をグッと寄せてくる。狭い台所では後退りのしようもない。暖かくて柔らかいものが押しつけられ、生理的な怒張が下腹部で存在感を主張している。
「そ、そういうのは止めようって約束したじゃないか」
「あら。お友達のままでそういうのはしちゃダメなの？」
彼女は舐めるような目付きで、吐息がかかりそうな近さで見つめてくる。僕は拳をグッと握りしめ、血と意識を必死に拡散させる。永遠にも感じられる数秒間、ジッと硬直していると、僕にかけられていた体重がフッと消えた。熱いぐらいの熱もスッと遠のく。
「冗談、冗談」
上坂さんはケラケラ笑って、手に持ったままだったビールに口をつけた。
「そんなにあの子が大事なんだ。立派だけど、ツマンナイのね」
彼女はビールの残りをグッと飲み干すと、中を適当に洗ってから分別してある袋に投げ入れた。自分の鞄を持って、「じゃあ、帰る」と言った。
「あら、どうも」
上坂さんはドアを開けると、扉の向こうで誰かとしゃべっている。彼女は僕に「じゃあね」と笑顔で手を振って、そのまま靴音を鳴らしながら遠ざかっていった。入れ替わりに玄関に姿を現したのは、みぃちゃん。
台所に残っているコンビニの袋に、未開封の缶ビール。そこらへんに漂っている気がする、ちょっぴり蒸し暑そうな空気を、一刻も早く外に出したい。みぃちゃんは険しい表情のまま、玄関の中に一歩入って後ろ手にゆっくりと扉を閉めた。

『五月八日（月）』——原田哲朗編
初出　令和三年五月一四日　ノベルアップ+にて公開

五月一〇日（水）

「瑞希さんの気持ちは分かるけど、面白いのを書くんだよ」

森田さんは、印刷して肩をダブルクリップで止めたコピー用紙の束を差し出した。それ、結局分かってないんじゃんと思いながら、渋々受け取って流し読みする。確かに引き込まれる文章な気はする。あの人の顔が過ぎっても、読み物として嫌いになり切れない。

「取り巻きっぽい二人も中々興味深いんだよなぁ。特に、あの青柳さんて子？心理学部に来る京都人っぽさが、いい味になってる」

森田さんの横から、武藤さんが山積みになっている束から、青柳さん、鈴木さんの文章を引っ張ってくる。青柳さんのエッジが効いてるエッセイは、文章こそ練り上げ切っていない印象があるものの、朋子さんのエッセイと比べても、引けを取るものには思えない。

「瑞希さんは、そういう話をしてるんじゃないと思うんだけど」

後ろから、香織さんが声をかけてくれる。男どもは分かっていないと言わんばかりの表情で、私に笑いかけてくれる。

「兄貴も康徳さんも、娘いるんでしょ？　父親としてはどうなのよ」

香織さんの問いかけに、武藤さん、森田さんは腕を組み、難しそうな表情で上の方を見る。武藤さんの方が先に口を開いて、「う〜ん、人生経験と思えれば、そういう困難があってもいいかなぁ、と」と答えた。それを聞いていたらしい森田さんは、「そういう見方もありますね」と同調しながらも、「僕は、瑞希さんみたいな娘に育って欲しいなと思いますよ」と言った。

「作家の子、クリエイターになりたい子が真っ直ぐすぎるのも変な気はしますけど」

「陽菜がそういうテクニック、駆け引きに走る娘にはなって欲しくはないなぁ」

武藤さん、森田さんはお互いの顔を見合わせ、同時にゆっくり大きく頷いた。

「でも、明子さんとは会ってるんだろ？」

武藤さんは自分のスマホを持ち出しながら言う。

「瑞希さんはいい娘だったって、俺も聞いてるし」

彼はメッセンジャーを開いて、明子さん、哲朗くんのお母さんとのやりとりをグッと突き出してくれた。武藤さんはスマホを机の上に戻しながら言う。

「他の娘より、一歩も二歩も先んじてるんじゃない？」

「哲朗くんなら、身持ちも堅そうだし」

何かの弾みで間違いを犯す人なら、私も苦労はしない。香織さんは「でも、アレぐらいの男の子なら、その時はその時よね？」と横槍を入れる。

「聖人君主でもないんだし、据え膳食わぬも、私は嫌かなぁ」

何をやっても暖簾に腕押し、靡くことのない安全物件というのも、面白みに欠ける。駆け引きの面白さ、揺さぶる楽しさぐらいは確かに欲しい。それも分かる、分かるけど、と香織さんに視線を送る。彼女と視線がかち合うと、「あ、ごめんなさい」と舌を出して謝った。

「いやぁ、青春だなぁ」

森田さんは腕を組んで、しみじみと呟いた。そんな森田さんに、隣にいた武藤さんが「森田さんはまだ、羨ましいって歳じゃないでしょ」と突っ込んだ。それを見ていた香織さんまで、楽しそうに笑っている。

大人たちは他人事だと思って、やいのやいのと談笑している。こっちは本気で相談したのに、なんだかなぁ……。自分で答えを出さなきゃダメなのは分かってるけど、どうしたものか。悩みは晴れないまま、刻一刻と時計の針は進んでいく——。

『五月一〇日（水）』——浪川瑞希編

初出　令和三年五月一四日　noteにて公開

五月一三日（土）

随分久しぶりに見るような気がする哲朗くんの顔付きは、いつの間に精神と時の部屋に入ったのかと思うような変貌を遂げていた。隣のテーブルでやいのやいのと姦しく打ち合わせに興じている瑞希たちに視線を向けながら、手元のビールに手を伸ばした。

「お義兄さんは、まだ実家に帰らないんですか？」

彼は僕の目をジッと見つめてくる。問い詰めるようなトーンというよりは、ゆったりとした、たっぷり息を吸ったような低めの声だった。

「君のお兄さんになったつもりは、まだないんだけど」

彼は「あ、すみません」と口では言うものの、そこに余り意識は向いていないようだ。あくまでも悠然と僕の言葉を待っている。彼に対して悪意はないのだろうけど、ささやかないたずら心が異様に引っかかる。とはいえ、それに過剰な反応を示すのも、それはそれで大人気ないと言うか、カッコ悪いと言うか、己の美学に反する気もする。

できるだけさり気なく、かつ素っ気なく聞こえるように「そのうちね」と答えた。彼は、自分の口の中で「そのうち？」と繰り返すと、少しだけ身を乗り出した。

「来月は、みぃちゃんの誕生日ですよ。それも、二十歳の」

彼は瑞希の方へチラリと視線をやった。指折り数えれば、と言うかちょうど3週間後の土曜日が、彼女の誕生日。土曜日だってことで例年より気合が入っているらしい、とは聞いているけれども、それに出席しないのか、という圧のつもりだろうか。

とうの昔に実家を出た身にとっては、たとえ記念すべき二十歳の誕生日だったとしても、弟妹のその後にはそこまで興味が湧かない。健康でいさえすれば、勝手にやってくれとしか思わないし、彼も自分の妹にはそういう態度じゃないかと思うけど、どこまで行っても彼には「大事なみぃちゃん」だもんな。

どう答えるか考えている間に、隣のテーブルから自分のグラスを持って沙綾がこちらに移動してくる。

「随分ラブラブなのに、みぃちゃん以外の女に手を出してるんだって？」
沙綾はシレッと情報をぶっ込んで、届いたばかりの唐揚げに手をつけた。哲朗くんの顔に漂っていた余裕綽々といった印象が、一気に退いていく。
「それは興味深いな。本当なのか？　哲朗くん」
彼は「あ、いや」とさっきまでの勢いが微塵も感じられないぐらい、縮こまる。僕を「お義兄さん」と呼んだ時と同一人物とは思えない。
「私は別にいいと思うけど。そういうお年頃だし」
沙綾はあくまでも淡々と振る舞っている。初耳の貞操観念を隣で聞かされている同棲相手としては、その堂々たる態度に何とも言えない衝撃を密かに受けている。
「プラトニックなんです〜って下手なヤツより、場数踏んでてそこそこヤレる相手の方がいいじゃない？」
それは分からんでもないが、哲朗くんみたいなタイプにそういう話はパンチが強すぎる気もする。そちらをチラリと見やると、存外なんでもないような表情で沙綾の話に相槌を打っている。
「でも、みぃちゃんを不安にさせるのは良くないな〜」
沙綾の言葉に、哲朗くんは「確かに」と深く頷いた。
「分かってるなら、もっと言葉と態度で示せ〜。私の大事な友達、悲しませたら承知しないからね」
彼女は、指で摘んだ唐揚げの先で、哲朗くんを指した。彼は申し訳なさそうにペコペコ頭を下げている。僕はなんとも言えない不思議な気持ちを肴に、ちょっと温くなったビールを胃に流し込んだ。

五月一五日（月）

『五月一三日（土）』――浪川一輝編
初出　令和三年五月一五日　NOVEL DAYSにて公開

芽衣さんは颯爽とキッチンへ入り、食後のお茶を段取りしてくれている。

「急に押しかけたのに、手土産もなくてすみません」
彼女はティーカップを出しながら、「いえいえ」と言った。
「こちらこそ、お昼ご飯買ってきてもらって」
彼女はしゃべりながらも、テキパキと紅茶を入れてくれる。角砂糖の入った瓶と、「子供用の牛乳しかなくて、すみません」とミルクを小分けにして出してくれた。お言葉に甘えて、砂糖とミルクを少しだけ入れる。
「でも、結局ご馳走になっちゃって。良かったんですか？」
私の手元には、かかった費用分の代金がきっちりと積み上げられている。芽衣さんが「いいんじゃないですか？」と笑ってくれたのを見て、財布にしまう決意がようやく固まった。
廊下の奥の方から、A4サイズのクリアファイルを持った森田さんがやって来る。彼は、芽衣さんの「映美は？」の問いかけに、「向こうでぐっすり寝てる」と返し、私に中の書面が見えるようにファイルを差し出した。
「忘れないうちにコレだけ。と言っても、大したもんじゃないんですけど」
先日のアンケートのようだった。パッと見る限り、ぎっしりと書き込まれているらしく、読み応えは十二分にありそうだった。「先日は本当に、ありがとうございました」
「こちらこそ、いい経験になりました」
森田さんに合わせて頭を下げる。向こうは、「じゃあ、僕はコレで」と踵を返した。「ゆっくりして行ってください」と言い添えて、来た道を帰って行った。
芽衣さんはチラリと壁の時計へ目をやった。もうそろそろ、午後一時三〇分。
「もうそろそろ、上のお嬢ちゃん――」
「あ、ごめんなさい。気にしないでください。今日は旦那もいますから」
彼女は軽く頭を下げると、ゆったりした雰囲気を醸すかのように、のんびりした動きで紅茶を口元に運んだ。在宅ワークがしやすいご夫婦とはいえ、家事にも子育てにも積極的な旦那さんがいるというのは羨ましい。
ジッと芽衣さんを眺めていると、彼女は自分のスマホを手に取った。画面をジッと見て、私の方を見て、「すみませ～ん」と謝った。
「せっかくのお申し出なんですが、身内だけでやろうってことで」
「そうですか」
「何かあれば、お義姉経由でお願いするので、今回はお気持ちだけいただいておきます」

芽衣さんは「おむつケーキ、可愛かったんだけどなぁ」と呟きながら、スマホを操作して返事を打っている。あちらがそういう取り決めをしたのなら、仕方がない。すんなり引いて、また出直すとしよう。

芽衣さんは、「香帆さん、香帆さん」とスマホの画面を私に向けてくれた。ちょっと血色が良くなった新生児と、愛おしそうに抱く若いお母さんの写真。

「晴の一文字で、ハルちゃんですって」

芽衣さんは空いている方の手で、空中に文字を書いた。きっと、周りを明るく照らす活発な子に育つのだろう。母子ともに健康なのであれば、それで十分なのだけど。

芽衣さんは、画面の中の姪っ子が心底嬉しいらしく、とても幸せそうな笑顔を浮かべている。浮かれた陽気にちょっぴり釣られつつ、どのタイミングで、どの道のりで帰ろうか、午後の予定を頭の片隅に思い描いた。

五月一六日（火）

『五月一五日（月）』——小野寺香帆編

初出　令和三年五月一六日　MAGNET MACROLINKにて公開

我が家の食卓でノートパソコンと何やら印字された紙を広げながら、香織さんと彩夏とが二人でペンを片手に額を突き合わせている。宿題を見る親子、いや歳の離れた姉妹のように見えなくもない。

私はそれを眺めながら、コンロの前に張り付いている。火力の強い方にはたっぷりと水を張った大きめの両手鍋。弱い方にも似たような片手鍋でお湯を沸かし、換気扇の下で何も聞こえないなりに、二人のやりとりをジッと見つめてしまう。

火の熱さに少々ぼんやりしていると、冷蔵庫に貼り付けたキッチンタイマーが唸り出した。慌ててアラームを切り、両手鍋のガスを切る。シンクには既に大きめのザルをセットしておいた。取手の熱さに注意しながら、三人分のパスタをザルの中へ移していく。

「あら、バターないんだ」

私の動きをしっかり見ていた香織さんは、冷蔵庫を開けて言った。彩夏も彩夏で、食卓の上をザッと片付け、片手鍋のガスを切る。香織さんは「ないなら仕方ない」とドアポケットのマヨネーズを取り出し、湯切りをしたパスタに投下した。

彼女はパパッとマヨネーズを仕舞う。私はパスタにマヨネーズを絡め、いつかのパン祭りで交換した白いお皿に三等分していく。彩夏は引き出しから菜箸を探し当て、片手鍋のお湯の中にいたパスタソースのパウチを三つ、取り出した。キッチンペーパーで表面の水滴を軽く拭いてくれる。

「香織さんは、どれにします？」

「二人が先に選びなよ。残ったのでいいって」

「じゃあ、彩夏が先に選んで」

三つとも全部バラバラの、賞味期限が少々怪しいレトルトソース。近くのスーパーで適当に買ってきて、そのまま仕舞い込んでいたのを引っ張り出しただけの、適当ご飯。彩夏は和風きのこを、私はイカ墨を選び、残りのミートソースが香織さんという結果に。パウチを開け、サイズが微妙に違うカトラリーを食卓に並べる。三人で「いただきます」と声を揃えた。

「他人ん家でこういうランチも、たまにはイイね」

香織さんは心底美味しそうにミートパスタにフォークを突き立てている。

「こんなモノしか出せなくて、すみません」

「全然気にしないで。パスタに麦茶とか、サイコーじゃない？」

香織さんは隣に置いた麦茶を豪快に飲んだ。ミートソースとのマリアージュを、本気で楽しんでいるように見えてくる。

「でも、色気がない冷蔵庫だわ。バターもマーガリンもないなんて、朝からちゃんと食べてる？」

学生の頃から、朝からしっかり食べる方ではなかったけど、社会人になってからは、ほとんど食べなくなっている。

「朝っていうか、自炊もほとんどしてないでしょ」

彩夏が横から香織さんに加勢する。香織さんは大きく頷いて、「うん。アレは酒飲みの冷蔵庫だわ」と断言した。

「一人暮らしのアラサー女子だって、自炊ぐらいしますよ」

「へー。本当に〜？」

香織さんも彩夏も疑いの目で私を見つめる。彩夏はまだしも、香織さんにはさ

つきの手際で色々バレた気もする。大して汚れていない水回りにコンロ、五月も半ばというのに、換気扇だって比較的綺麗なままだし、それに引き換え、お酒の瓶や缶は見えるところに積み上がっている。

「こ、今度、ぺぺロンチーノぐらいご馳走しますよ」

「ぺぺロンチーノぐらい？　聞き捨てならんぞ～」

香織さんの目に何かが宿る。悪戯っぽい表情がかえって恐怖を煽る。どうやら私は何かを誤ったらしい。ほぼ初対面のはずの、二人のシングルマザーに、謎の結束力で追い詰められている。なけなしの私の女子力をかき集めても、太刀打ちできそうになかった。

『五月一六日（火）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年五月一七日　小説家になろうにて公開

五月一八日（木）

夕食を終え、キッチンで洗い物をしていると、食卓に座ってテレビを見ている芽衣の身体がピクッと動いた。画面に目を向けると、彼女が追いかけているらしいアニメ作品の劇場版が明日から公開されるという告知、CMだった。

アニメとはいえ、少々上の年齢を対象にしているからか、亜衣も映美も特に興味を示すことなく、テレビの前で遊んでいた。

僕は洗い終えた食器を乾燥機に入れ、両手を洗って芽衣の向かいに座った。テレビは二十一時前の短いニュースを写している。

「明日からなんだね」

僕は脇に置いた朝刊を手元に寄せた。適当に開いてみると、さっきの告知が新聞の下の方にも載っていた。紙面には明日以降の上映スケジュールは載っていないようだ。

「行かないの？」

僕はなんとなしに芽衣に聞いた。彼女は頷いた。

「すぐ配信されると思うし、子供らのこともあるし」

彼女は亜衣、映美の方へ視線を向ける。でも、声にはあまり元気がないように思える。

「子供は任せて、見てきなよ」

僕は新聞を畳み、スマホを持った。作品名を検索すると、地元のイオンシネマでもかかるらしい。そのままスケジュールを見に行ったら、意外と日中の枠もある。

「茨木のイオンシネマでもやってるらしいし」

「え〜っ、茨木イオン？」

「エキスポシティのところでも、やってるってよ」

僕は彼女にスマホの画面をむけた。まぁ、どうせ行くなら、生活圏内の茨木イオンよりは、もう少し遠いエキスポシティか。彼女は僕のスマホで上映スケジュールを確認すると、URLをコピーして自分宛にメッセージを送信した。

「母の日も何にもできなかったし、今月のおやすみデーもまだだし」

「じゃあ、お言葉に甘えて」
彼女はいつものように、「日曜日なら大丈夫だよね？」と確認すると、そのままスマホで座席を予約する。クレジットカードで決済も済ませると、ホクホクした顔で娘たちを眺めている。
「たっぷりガス抜きしておいで」と僕が言い添えると、彼女は何か思い出したように「あ、でも」とこちらに顔を向けた。
「パパだけだからって、甘やかしすぎちゃダメだからね」
「分かってる、分かってる」
「なぁ〜んか、ガミガミいうのは私だけ、みたいになってない？」
気のせいだと思うけどな。声に出していうとまた変なところを刺激しそうだから、曖昧な表情を浮かべて必死にごまかす。単純に接し方の違い、性格の違いなだけに思えるけど、「怖いオヤジ」に程遠いのは確かかも。
そんな風になる頃には、この子らも思春期、反抗期真っ只中だろうなぁ……。
僕がぼんやり娘たちの方を見ていると、芽衣は時計を見上げて、ハッとした表情を浮かべる。
「お風呂入れなきゃ」
彼女は少々慌てて寝室へ上がっていく。キッチンの給湯器が、お風呂がもう間もなく入ると、音声で教えてくれる。娘たちもその音に遊びの手を止め、ママの準備を確かめると玩具を片付けていく。
芽衣は、亜衣が片付け終えるのを待ってから、映美と亜衣の手を握った。
「じゃあ、入ってきます」
「よろしく〜」
芽衣は二人の手を引いて風呂場に向かった。僕は二人が片づけきらなかった玩具をしまい、リビングに軽くフローリングワイパーをかける。さっきは水の音でよく聞き取れなかったテレビCMがよく分かる。今度の日曜日、僕らは何をしようかな……。

『五月一八日（木）』――森田康徳編

初出　令和三年五月一八日　NXZ（旧サイト）にて公開

五月一九日（金）

久々に、哲朗さんの部屋に二人で向き合っている。碧さんと彼の扇情的な絡みを垣間見て以来の空間は、何となく緊張感が漂っている。ちょっぴり俯き加減で目を合わそうとしない哲朗さんも、どうやら少しは気まずいらしい。

何でもなかった時は普通に遊びに来て、いたずら心から押し掛け女房的な料理をしたこともあったけど、今はそういうおふざけも気軽にしにくい。何をどう間違ったか、これからどうしたいかもちゃんと考えないといけないけど、眼前に迫るもう一つの問題を解決しないと、腰を据えた話なんてできそうにない。

私の説明を聞いた哲朗さんは一呼吸置いて、「つまり、明日浪川家に遊びに来い、ってことでいいのかな？」と、内容をかいつまんで質問してくれた。私は縦に首を振った。

「できれば、一輝さんが来る前から家にいて、お邪魔してますって雰囲気を僕に醸せ、と？」

「事前に何も聞いてなくて、たまたま居合わせました、って感じに演技してもらえれば、最高なんだけど」

「いやいや、今聞いちゃったから、流石に顔に出るって。沙綾さんじゃないだから、演技なんてできないよ」

彼はそこそこ取り乱して、私のプランを否定する。こうなるなら、明日適当にメッセージを送って、サプライズで急遽呼び出した方が良かったかもしれない。でも、私も沙綾さんから指示を受けて事前に擦り合わせを行っているのだから、もう少しこちらの意向を汲んでくれてもいいんじゃない？　それに、私だって――

「私だって、急にお母さんに引き合わされて大変だったのに、ちょっとぐらい協力してくれてもいいじゃない」

哲朗さんは私の声に驚いて、目を丸くしてこちらをジッと見ている。

「沙綾さんもフォローするって言ってくれてるんだから、乗っかってよ」

「そ、そっか、そっか……。そうだよね、ごめん」

哲朗さんは最後にもう一度小さな声で、「ごめん」と呟いた。しゅんとした表情で今度は下を向く。ジッと俯いたまま、両手を閉じたり開いたりを繰り返して

いる。やっぱり小さな声で、「よし、分かった」と言って顔を上げた。
「協力するよ。その代わり、居合わせるだけだから。演技が下手でも笑わないでくれよ」
鼻息荒く言い切ると、最後の「笑わないでくれよ」が妙におかしく、私は小さく吹き出してしまった。真剣な顔と口調のミスマッチがまた、ツボに入って笑いが止まらない。
「ちょっ、みぃちゃん」
「ご、ごめんなさい」
私は呼吸を整えながら、目元に涙を拭った。心配そうな表情をベースに、色んな感情が入り混じった顔は、まだ笑いのツボを刺激してくる。笑ってはいけないと思えば思うほど笑いがこみ上げてくる。グッと拳を握り、口からフーッと長い息を吐いて諸々整え直す。
顔を上げ、視界に入る不満げな顔もやっぱり可愛いな。一応向こうのほうが年上だけど、どんどんいじってオモチャにしたくなる。そんなどうでもいい思いも頭から叩き出し、真剣な話を仕切り直さねば。
「沙綾さんの予定によれば……」
明日の予定、段取りを確認していく。幸い、授業は何とかなるのはありがたい。今回ばかりは、碧さんにも感謝しなくては。先日のシーンをちょっと思い返したら、自然と胸が昂まっていく。悶々としているのを悟られないように、平静を装わねば。今はとにかく、真面目な話、真面目な話……。

『五月一九日（金）』——浪川瑞希編
初出　令和三年五月一八日　noteにて公開

五月二一日（日）

茨木イオン一階のフードコートで、家族が到着するのを待ちながら、小さめのスケッチブックを広げてペンを走らせている。もうそろそろ夕方、向こうのスタバもサーティーワンも含め、家族連れでごった返している。

私は二人がけの席で周囲を少し警戒しながらも、気が赴くまま、筆が赴くままに絵を描いている。ここで落ち合う約束をした家族がやってくるなら、康徳さんから連絡があるはず。今のところはまだ、「家を出ました」のメッセージしか届いていない。少々安心して、時折往来を眺めて目を休めては、スケッチブックに向かうというのを繰り返していた。

あんなに尊いものを見せられて、家に帰るまで何も描けないなんて拷問に近い。普通に帰宅してしまうと、ママを終わってからでないとペンが取れない。今のうち、この瞬間にパパパッと下書きでも終えられたら、少なくともこの先一週間ぐらいは穏やかでいられる。座席を探してフードコートを彷徨っているお客様方、大変申し訳ない……。

「アレ、森田さんの奥さん？」

不意に上から声をかけられる。身体はびくっと震え、変な線を引っ張ってペンが止まる。顔を上げるとそこにいたのは、武藤さんのところの娘さんと、従業員くんのお連れさん。確か、陽菜ちゃんと瑞希さん。二人とも同じパンフレットを下げて、私を見つめている。

「こ、こんにちは」

私はそっとスケッチブックを閉じて、カバンにしまう。陽菜ちゃんは私の荷物をジッと見ている。

「森田さんも、ですか？」

彼女は、私の顔をいつになくキラキラした目で見つめてくる。入れ物の袋こそ違えど、中身のパンフレットは三人一緒。瑞希さんは袋にもピンときたらしく、黙って小さく頷いている。

陽菜ちゃんは椅子を二つ持ってきて、往来の邪魔にならないところに置いた。瑞希さんと共に並んで座る。

「もしかして、さっきの絵も？」
彼女らは興味津々の目でさっき片付けたスケッチブックを見ている。
「えぇ、まぁ」
「もう一回、見せてもらってもいいですか？」
「そ、それはちょっとごめんなさい」
私がスケッチブックに手を置いて頭を下げると、向こうの二人は私より大きな動きで謝った。私は二人をなだめ、話題を切り替える。
「二人はここで見たの？」
私には珍しい組み合わせに思えるけど、どうやら趣味が似ていると最近判明したらしく、時間を合わせて仲良く上の劇場に見にきたらしい。嬉々として語り始める彼女らを嬉しく思う反面、ちょっぴり恥ずかしい気にもなってくる。
「で、このまま母の誕生日プレゼントを見ていこうと思って」
「史穂さんのお誕生日、明日だっけ」
そういえば、そんな話を聞いた気もする。陽菜ちゃんの予定に付き合ってあげる瑞希さん、えらいなぁ。
「おぉ、陽菜」
向こうから大きな声が聞こえてくる。そちらを見ると、武藤さんご一家がゾロゾロと歩いてくる。隣には、駐車場で合流したらしい康徳さんたちの姿も見える。陽菜ちゃんは、お父さんに冷たい視線を向ける。
「珍しい組み合わせだね」
康徳さんは私と瑞希さんを見ながら言った。彼が手を引いていた亜衣は、「おかあさ〜ん」と足元にぶつかってくる。康徳さんは映美を抱っこし直す。
「今から、ちょっと早いお誕生日回なんだって。よかったら、君も一緒に行かない？」
彼は瑞希さんに視線を送るが、彼女は「私はここで」とやんわり断った。「陽菜ちゃん、またね」と武藤さん一家の中でもみくちゃになっている陽菜ちゃんに声をかけ、私に挨拶すると、瑞希さんは駅の方へ出る出口に向かって歩き始めた。

『五月二一日（日）』——森田芽衣編
初出　令和三年五月一八日　アルファポリスにて公開

五月二五日（木）

この間、年が明けたと思ったら、あっという間に桜が散って、もうそろそろ梅雨入りだのなんだの。季節感があるようで微妙にない仕事をしているが、寝苦しさと湿気には夏を感じる。

エアコンのタイマーが切れると同時に、何となく目が覚めてしまった。トイレに行き、戻り際に暗がりのキッチンで麦茶を飲んだら、もう一回ベッドに入る気は何処かへ行ってしまった。早々に寝間着から着替え、顔を洗う。キッチンに戻ってお湯を沸かし、インスタントコーヒーを淹れ、ささやかな書斎に持って入った。パソコンを立ち上げると、時刻はまだ四時。まだまだ外は暗く、仕事のメールやチャットをのんびり確認していると、新聞配達の音が聞こえてくる。雨脚が弱まってきたとはいえ、昨日から降り続いている雨の中、大変だなぁ。

今日の予定は、安藤さんのところへデータの納品。昨日、雨の中濡れないようにハードディスクを持って帰ってきたけど、それを持って行くついでに打ち合わせ、だったっけ。忘れないように荷物も確かめておかないと。

書斎でのんびりやっていると、寝室の方から耳慣れたアラーム音が聞こえてくる。史穂は今から、お弁当の準備らしい。足音がキッチンへ降りていき、階下から賑やかな音が聞こえてくる。

しばらくすると、今度は陽菜の部屋からスマートフォンのアラームが聞こえてくる。まだ朝の六時にもなっていない。一回でアラームを止めたらしく、彼女の足音は書斎の前を通り過ぎて階下へ向かった。風呂場の方から、シャワーを使う音が聞こえてくる。

僕はコーヒーを飲み干してからになったマグカップを手に、彼女らの邪魔にならないよう、そーっと階段を降りる。キッチンで史穂に「おはよう」と声を掛けると、驚かれてしまった。

「今朝は随分、早いのね」

彼女は寝間着姿のまま、手を一切緩めることなく僕にいった。僕はポットを指して、「お湯、もらってもいいかな？」と聞くと、彼女は一瞬思考を巡らせてから、「どうぞ」と言った。

新しいインスタントコーヒーを入れていると、シャワーから上がった陽菜がまだ濡れたままの髪を拭きながらキッチンに入ってくる。彼女は僕を見ても何も言わず、冷凍庫から食パンを出してトースターに放り込んだ。僕から彼女に「おはよう」と声をかけると、小さな声で「おはよう」と返ってきた。彼女は自分のマグカップにお湯を少し入れて温め始めると、再び脱衣所へ戻って行った。今度はドライヤーの音が聞こえてくる。

「いつもこんなに早いんだっけ」

「今日は電車だからじゃない？」

史穂は陽菜の小さな弁当を詰め終えると、テレビを付けた。天気予報では、雨は朝のうちに止むらしい。

「自転車は昨日、学校に置いて帰ったんだって」

史穂の言葉に、昨夜の雨を思い出す。合羽なしにあの雨の中を、一時間ちょっと自転車というのは確かに辛い。相当な早着替えで、制服に着替えた陽菜がキッチンに戻ってきた。少し焼きすぎたトーストを皿に乗せ、イエローラベルのティーバッグをマグカップに入れてお湯を注ぐ。彼女は一人、「いただきます」とパンにかじりついた。

史穂は横にヨーグルトとスプーンを出し、シンクの洗い物を片付けていく。

「良かったら、送るぞ」

「いいよ、恥ずかしいし」

即座に申し出を断られた。

「アプロの駐車場とか、コンビニで降りれば大丈夫だろ？」

石橋の駅まで送ってそこからバスに乗り換えるより、同級生に見られにくいだろう。もう少し坂の上に行った渋高側の広い場所でもいい。陽菜はパンをかじりながら、何やら思案している。

「じゃあ、俺も荷物取ってくるから、考えといて」

僕はマグカップのコーヒーを飲み切り、書斎へ向かった。大事なハードディスクもカバンに詰め込み、指差し確認も怠らない。まだ少し早い気もするけど、朝から娘とドライブだ。荷物をリビングに運び、洗面所で歯を磨く。久しぶりにヒゲも剃ろうか。

『五月二五日（木）』——武藤幸弘編

初出　令和三年五月一八日　カクヨムにて公開

五月二七日（土）

月末の土曜日、久しぶりにのんびり出かけようと思っていたのに、急に沙綾から連絡があったために、自宅でゆったりと本を読んでいる。数日前までは晴れ予報だったのに、前日の予報では曇りのち雨だから丁度いい。

窓の外は雨がパラつき始める中、私のいるリビングでは雨の音なんか微塵も聞こえず、キッチンで悪戦苦闘している沙綾の建てる音が響き渡っている。永らく積んでいた本を紐解いて、読書に集中して読み切りたかったのに、娘のドタバタが気になってしまう。顔を上げ、沙綾の様子を眺める。

「オーブンだったら、あっちの家にもあるでしょう？　レシピは貸してあげるから、自分の家でやったら？」

「ダメダメ。現地のオーブンとキッチンがシミュレーションできなきゃ、意味ないでしょ？」

沙綾はレシピ本をジッと睨みつけながら、薄力粉をふるいにかけている。お昼を食べたばかりだけど、今からその段取りで、夕方までにケーキなんて出来上がるのかしら。

「もっと簡単なクッキーだって載ってるでしょ？」

「せっかくの誕生日なのに、クッキーじゃ現地で作る意味ないじゃない？」

沙綾は私の提案を突っぱねて、作業に戻る。

「あなたがわざわざケーキを作ろうだなんて、よっぽど大事なお友達なのね」

最近懇意にしてる、歳が少し離れたお友達。仕事仲間でもあり、将来の義理の妹かもしれない、可愛い妹分。沙綾は私の茶々を完全にシャットアウトして、ケーキ作りに没頭している。辿々しい手つき、細かいことが苦手そうなのもよく分かる。一緒に暮らしていた時も、せいぜい簡単なチョコ菓子を作る程度だったし、今も料理なんてそんなにしてないんだろう。一輝さんは普段、どんなものを食べているのか、他人事ながら可哀想な気もしてくる。

沙綾は、ボーッと彼女を眺めていた私の顔を見ながら、「なに？」と聞いてきた。私は「なんでもない」と首を振る。

「お手伝いしましょうか？」

「ありがとう。お気持ちだけいただいておくわ」

本当にケーキなんか出来上がるのか心配だったけど、本を読みながら覗きにいくと、少しずつそれっぽいものに近づいていく。レシポ本の通りではなさそうだけれども、彼女らしいアレンジが効いていて、不格好なりに美味しそうな気がする。

上手に焼き上がったスポンジを切り分け、間にフルーツを挟んでクリームを塗っていく。美味しそうな匂いに、遠くでケビンが切なそうに声を上げる。彼にオヤツを上げてから、もう使わなさそうな調理器具を洗っていく。

あらかた片付いたら、コーヒーメーカーを動かして、エスプレッソを入れる。沙綾はそれらしいケーキが出来上がったところで満足して、試食のセッティングにまで気が回らない。私があれこれ段取りしてやって、やっとお皿に切り分けるところまで来た。

「この、残りはどうするの？」

「お母さんが食べればいいんじゃない？」

そこそこしっかりした手作りのホールケーキ。二切れ食べたところで、まだまだたっぷり残っている。

「適当にラップするから、持って帰りなさい」

「えー、めんどくさい」

「いいから。あの彼氏にも食べさせなさい」

私はとりあえず、残りのケーキにラップをかけて、食卓につく。フォークを手に、「いただきます」と一口食べる。甘さ控えめと言えば聞こえはいいけど、単純に甘みが足りない。

「ちゃんと計って作らないと」

「いやぁ、失敗、失敗」

彼女は舌を出して可愛らしく言った。

「じゃあ、もう一回だ」

え、まだ作るの？　もうそろそろ夕方の散歩に出かけて、夕飯の段取りをしたいところなのに、沙綾は私の予定を考慮する気など微塵もなさそうで、やる気満々な表情で自分のお皿に乗ったケーキを食べていく。ちょっぴり鬱々とした気分になりながら、本なんて読まずに陰ながらお手伝いしなくてはと、密かに決めた。

『五月二七日（土）』――奥野朋子編

初出　令和三年五月一八日　Pixivにて公開

五月二八日（日）

哲朗くんは胴回りがやや大きなワイングラスを傾け、ちょっぴり白濁した黄色い液体を身体の中へ流し込む。口に含んだ瞬間、苦そうな表情を浮かべる。僕はそんな彼に見せつけるように、同じグラスに注がれたビールをグッと飲んだ。初夏の暑さに、つい一口で飲み過ぎてしまう。

彼は僕の方をジッと見ながら、手元のワイングラスを持て余していた。

「やっぱり、運動した後のビールは旨いね」

「せっかく運動したのに、ビール飲んだら一緒じゃないですか」

「細かいことを気にするなって。それより、せっかく奢ってるんだ。もっと旨そうに飲んでくれよ。地元醸造の旨いビールなんだし」

哲朗くんは「別に奢ってくれって言ったわけじゃ」などと呟くものの、ビールスタンドでは手元のビールを飲むしかない。サーバーからたっぷり注いでくれたスタッフさんが、こちらに満面の笑顔を向けてくれる。まだ若そうに見える彼らがここで作っているビールだ。それを、いつまでも不味そうに飲むような哲朗くんじゃないはずだ。彼は再び、ビールに口をつけた。今度はさっきほど嫌そうな表情を見せなかった。

「一輝さんって、友達とかいないんですか？」

「なんだよ、藪から棒に」

「僕とか沙綾さんとかと飲み歩いてる印象しかなくて」

「だんだん、そういう遊びだけになっていくのさ」

東京にいた頃だって、知り合いに連れて行ってもらった店で顔なじみを作って、時間があればとにかくそういうところへ行って、終電ギリギリまで飲んだり、時には朝までぶっ通し飲んだり。おごりおごられ、時には男女の出会いもあったり、限界を超えて路上で吐いたり。

ちょっと前の出来事なのに、随分昔のような気がしてしまう。

こっちの友達、同級生と落ち合ったって、やることは多分変わらない。カラオケかボーリングか、山か河原でバーベキューか。こうやって、身近な仲間と一杯ひっかける方が、いくらも健全じゃないか。それに——

「先月から心理学部生なんだったら、こういうところで人間観察とかすべきじゃないか？　あっちの二人はどういう関係か、とか、お店の人はどういう背景でココにきたのか、とか」

哲朗くんは僕が示した人たちに、ゆっくり視線を向けていく。一通り観察すると、店内をグルっと見回していく。

「照明がどうとか、テーブルの素材がどうとか、スタンディングにしてる理由とか、遊びながら勉強にもなる」

「デザイン的にも、ビジネス的にも、確かに生きた教材ですね」

「答えが知りたければ、質問することもできるしな」

哲朗くんはそれなりに納得したらしく、小刻みに頷いて、ビールを飲んだ。

「それはそれとして、お父さん、どうでした？」

「別に。なんともなかったよ」

肩透かしレベルで、何にもなかった。ただお互いに異常にぶっきらぼうなだけ、こっちがありもしない想像を働かせて勝手に嫌悪感を募らせていただけ、のような気もしてくる。割と永年悩んできたつもりだったのに、蓋を開けてみれば、独り相撲に過ぎなかったとは。

「ただ、やっぱり好きにはなれないな」

「それで、いいんじゃないですか。僕も、親父のことは嫌いというか、苦手だし」

哲朗くんの言葉に、自然と口元が綻んだ。「なんすか、急に笑って」と彼には気持ち悪がられたが、そんなことは気にしない。

「もう一杯行こうか。どれにする？」

哲朗くんはグラスに目をやり、「まだ残ってますよ」と言うが、知ったこっちゃない。僕は彼をカウンターまで引きずって、メニューを突きつける。選べないなら、強めのIPAにしてやろう。さぁ、もう一回、乾杯だ！

『五月二八日（日）』――浪川一輝編

初出　令和三年五月一九日　NOVEL DAYSにて公開

五月三〇日（火）

武藤さんは、オフィスの隅に綺麗に積み上げられた雑誌の束から、一番上の一冊を手に取った。表紙をジッと見つめ、嬉しそうな表情を浮かべている。

「うん、イイじゃん。香帆さんの絵がまた、文芸誌っぽくてイイね」

彼は装丁を一通り眺めると、応接スペースでコーヒーを飲みながら待っている朋子さんにも、ヒイラギの創刊号を手渡した。彼女もしっかり表紙を眺めると、早速パラパラと中を開いた。

「うん。イイんじゃない？　マンガからエッセイから、小説に短歌、川柳まで。ちょっとちゃちなところはあるけど、雑誌として纏まってるのに、グチャグチャなラインナップが最高じゃない」

「個々の作品、文章も、パッと見は特徴ないと言うか、読みやすいぐらいなのに、根底の隠しきれない異常さというか、掴みきれない背景みたいなのが行間に滲んでる感じもあって、イイね。印刷物として縦書きで読むと、より一層、グッと来る」

「イイ同人誌じゃない。編集長さん」

「うん。最高だよ、森田さん」

武藤さん、朋子さんに異様に褒められて、めちゃくちゃ嬉しい。

「いえいえ。朋子さん、小野寺さんのお力添えあってこそ、ですよ。武藤さんにも助けてもらいましたし」

朋子さん、小野寺さんに書き手の年代別に取りまとめてもらったから、形になってるし、武藤さんたちの出資があったから、いきなりオフセット印刷で一〇〇部も印刷してもらえた。

「いやいや、編集長のプロデュースというか、底知れないヤバさみたいなもんがココに詰まってるから、コレはこうやって成り立っていて、強烈なインパクトがあるんだよ」

「そうね。表向きはちゃんとお行儀良くてお上品なのに、計り知れない野性味というか、偏執的な変態性も薄まってない。こういう雑誌が読みたかったのよ」

ヒイラギには、目の前の二人の作品、文章も掲載してある。褒められているの

かどうかよく分からないけど、あなたたちもその一角ですよ？　自覚があるのかないのかは分からないし、褒め言葉かどうかもよく分からないけど、黙ってニコニコしておこう。

「一旦、隔月目標で進めてみますか」

「そうね。定期購読メインで読者と部数、書き手もまだまだ募って、どんどん部活的に広げる、育てる方向で頑張りましょう」

「ということで、編集長、引き続き、頼みますよ」

まだ何も言ってないのに、二人はどんどん先へ話を進めていく。まぁ、どうせやるからには、こういうイケイケな人たちにある程度走ってもらいながら、こっちはこっちでじっくり練り上げるぐらいがちょうどいい、か。どうせ、一〇〇部は捌かなきゃいけないし、しばらくは同人誌扱いとはいえ、徐々に仕事として向き合うためには地道に拡げなきゃいけない。

「曲者揃いの、読む人を選びまくりそうな同人誌か」

「ここから派生して、憧れと信頼起点の情報発信、責任ある言論空間も作れそうじゃない？」

「ああ、例の河童みたいな」

「そう。狂人による狂人のための狂気の価値空間作り」

「ちょっと前に流行った、インフルエンサーのカウンターパンチャーっぽいですね」

「でしょう？」

まだまだようやっと体裁を整えて創刊号を擦り終えただけの雑誌に、彼らはどんどん夢を背負わせていく。既存の出版物、メディアとは相当毛色の異なる路線にはなりそうだけど、そこまで持っていく責任が、僕やこのヒイラギにはあるってことか。

人の世界とは価値観が異なる河童の国。とんでもない世界の入り口、きっかけを作ってしまった気もするけど、それで喜ぶ人がいるのならどんどん狂って見せるさ。

『五月三〇日（火）』――森田康徳編

初出　令和三年五月二〇日　NXZ（旧サイト）にて公開

五月三一日（水）

二コマ目の課題をサッと提出し、早めに学食へ移動した。いつもより少し広めの場所を確保して、ちょっと早めに弁当を広げる。

「おお、哲朗じゃん」

コンビニから出てきた藤堂と目が合った。彼は本を数冊手で持って、僕の方に近づいてくる。

「今日も相変わらず、弁当なんだな」

「まぁね。学部が変わったって、何にも変わらないさ」

藤堂は向かいの席に手をかけ、スッと腰を下ろした。僕の顔を少し見るなり、

「そうか？」と言った。

「ちょっと疲れてるように見えるけど。勉強のし過ぎか？」

「え、そんなにひどい？」

僕はスマホを取り出して、インカメに切り替えた。自分では何かが変わったようには見えないが、周りにしか分からないものでもあるのだろうか。

「お〜い、哲朗く〜ん」

教室へ通じる廊下の向こうから、黄色い声が聞こえて来た。賑やかな女性陣のしゃべり声が少しずつ近づいてくる。藤堂は声の方を一瞬見やって、僕の顔に視線を戻した。何かを察したらしく、小さく頷いた。

「心理学部生ってのは、モテるんだな」

藤堂は随分と茶化した口調で呟いた。彼に何か言おうと口を開いたが、その前に隣まで来た上坂さんが藤堂に声をかけた。

「そこ、空けてもらってもいい？」

藤堂は上坂さんらの方をチラッと見て、何も言わずに座席を立った。座面を手で払い、「どうぞ」と譲ると、隣の席に移動した。上坂さんは「どうも」と藤堂が座っていた席に腰を下ろした。その隣に青柳さん、僕の隣に鈴木さんが、ランチが乗ったプレートを持って座る。

「で、話って？」

上坂さんは豊かな胸を強調するように、グッと上体を乗り出した。ちょっと湿

度が高めな空気に、フワッと甘い香りが混ざって鼻腔をくすぐる。僕は食事を脇によけ、手を拭いてからカバンを引き寄せた。そこの方から三冊、同じ雑誌を取り出した。

「武藤さんというか、森田さんから預かって」

僕は彼女らに、出来上がったばかりの同人誌、ヒイラギを差し出す。上坂さん、青柳さん、鈴木さん、三者三様に嬉しそうな表情を浮かべ、食事をよそにパラパラと中身を確かめている。

「藤堂も、いる？」

僕は自分用のをカバンから取り出し、藤堂に差し出した。彼も彼女らのように受け取ってパラパラめくる。

「お前のが載ってる訳じゃないのか」

「サイトの運営は手伝ってるから、スタッフではあるんだけどね」

彼は「じゃあ、いいや」と返してくれた。

「で、この人たちは？」

「彼女らは全員、掲載されてる」

僕は藤堂に、作家先生の名前を順番に紹介していく。彼女らはみんなドヤ顔で藤堂に挨拶する。

「心理学部の女性作家か。お前、中々、えげつない付き合いしてんな」

「えげつないは、流石に言葉が悪いよ」

僕はチラッと女性たちの顔に視線をやったが、誰も大して怒っていないように見える。そういうところも含め、水面下でストレスを感じているところもなくはない。藤堂は、それを察してくれたのか。

「瑞希ちゃんとも付き合ってんのに、お前ばっかりズルいよ、本当に」

「だって仕方ないでしょ。哲朗くんは、あなたと違って面白そうな男だし」

上坂さんは、突き放すように言った。藤堂は大して声を荒らげることなく、自然な口調で「つまらない男は、退散しますよ」と立ち上がった。

「皆さんでごゆっくりどうぞ」

「お心遣い、どうも」

藤堂はスッと食堂を出ていく。僕がその背中に「じゃあ、また」と声をかけると、彼は振り返らずに、手を挙げて去って行った。

『五月三一日（水）』――原田哲朗編

初出　令和三年五月二〇日　ノベルアップ+にて公開

六月三日（土）

ルミは食卓で、先日受け取った真新しい雑誌、「ヒイラギ」を拡げている。正確には、武藤さんや森田さんが関与した同人誌というものらしい。差し出がましいことに、創刊号の表紙に、私が描いた絵を使ってもらった。雑誌全体の装丁は浪川さんのデザイン事務所が担当して、表紙の絵も少しだけご指導いただいた。

ルミは最後の最後、裏表紙の目前、奥付までしっかり目を通して、顔を上げた。

私は彼女の前に、切り分けたケーキと淹れたての紅茶を置いた。

「コレは、お母さんが作ったやつ？」

彼女はフォークを手に取りながら、ケーキを指差した。私は首を横に振る。

「私はお目付役というか、見守ってただけ」

「じゃあ、ほぼ沙綾さんの手作りだ」

ルミは「いただきます」と手を合わせ、ケーキを頬張った。事前の期待を超えたのか、眉が少し上がる。ゆっくり口の中で味わってから、紅茶を啜る。

「結構美味しいじゃん」

「驚いた？」

「正直、ちょっとびっくりした」

彼女はパクパクとケーキを口に運び、紅茶を楽しんでいる。確かにあのお嬢さんがコレぐらいのケーキをパパッと作れるとは思わなかったけど、持ち込んだ材料と事前の練習が物を言ったらしい。

「お母さんは食べたの？」

「私は向こうで」

お目付役の特権で、出来立てをその場で食べさせてもらった。少し時間が経っているとはいえ、しっかり冷やした分も、十二分に美味しいはず。お父さんこだわりの紅茶も、ケーキの味を引き立てている。

ケーキを食べ終えたルミのカップに、お代わりの紅茶を注いであげる。彼女はとても幸せそうに上を向いて、しばらくボーッとしていた。私はケーキのお皿とフォークを回収し、ササっと洗ってしまった。

ルミはノロノロとティーカップを持ち上げ、ゆっくり啜った。さっきより温度

は少し下がっていたはずだけど、随分熱そうにカップから口を離した。
「どうしたの？　ボーッとして」
「ボーッとしてるのは、いつものことなんらけど」
ルミは舌を出して口の中を仰ぎながら、カップを置いた。私が冷凍庫から氷を出してあげると、素直に口に放り込む。
「ケーキと雑誌の情報量が多すぎて、処理が追いつかないっていうか、感情が追い付かないっていうか、こう、なんて言ったらいいのかな。言葉になりそうなんだけど言葉にならない感じ」
氷を舐めながら、迸る思いの丈をぶちまける。グーっと強い何かがあるのはよく分かったけど、何を伝えたいかはさっぱり分からない。
「お母さんも読んだんなら、分かるでしょ？」
「私はまだ、読んでないけど」
「自分の絵が表紙に採用された雑誌の、それも創刊号読まないなんて」
ルミの表情がコロコロ変わる。彼女の主張より、その変わりっぷりの方が気になって、話の中身が頭に入ってこない。
「私も編集として関わってるんだから、ちゃんと読んどいてよ。普段は本の虫なのに」
「信じられない」とか、「理解できない」とか、そんな言葉を飲み込んだのかしら。彼女はキッと口を結んで、紅茶を飲んだ。この子がそういう主張をするぐらいだから、きっとよっぽどの雑誌なんだろう。
私は彼女が脇に置いた「ヒイラギ」を手に取り、表紙をジッと眺めた。綺麗に印刷され、ズッシリ重みを感じるそれに自分の絵が表紙として使われているのは、やっぱり嬉しくなる。時間がたっぷりあれば今からでも開くのだけれども、そろそろ晩ご飯の支度を始めなきゃいけない。また、お父さんが出かけているタイミングにでも読んでみよう。その時は娘と意見交換できたら嬉しいな。

『六月三日（土）』――小野寺香帆編
初出　令和三年五月二〇日　MAGNET MACROLINKにて公開

六月四日（日）

朝日が登ってから一度目が覚めて、なんとかトイレに行ってベッドへ戻ってきた、ような気がする。それから大分長い時間寝てた気がするけど、外はまだ明るいらしい。まだ少しクラクラする頭を支えながら、枕元のスマホに目をやった。時刻は午後二時。流石にちょっと寝すぎだろ、オレ。

ベッドの上でジッと座っているだけなのに、なんだか揺られている気がする。油断していると気持ち悪さが一気に頭を占領しそうだ。フラフラしながらもゆっくり立ち上がり、脱ぎ捨ててあったズボンを履き直した。ドアを開け、キッチンへ移る。

我が家の小さな食卓で、上坂さんはビールをお供に、先日渡した「ヒイラギ」に目を落としている。ようやく僕に気がついたらしく、雑誌を閉じて僕の方を見た。

「やっと起きたか」

「なんでキミがソコに？」

「なんで、とは失礼ね。留守番しててあげたのに」

「留守番？」

彼女はコップに水を入れ、僕に差し出しながら、「何にも覚えてないんだね」と言った。彼女によれば、僕はカギを開けたまま玄関で寝ていて、彼女の介抱によりベッドまで移動して、この時間になるまで寝ていたらしい。

家の鍵をかけて帰ろうにもどこにあるか分からなかったから、無人になるよりは、とここでビールを飲みながら雑誌を読んでいた、とか。

「それは、失礼しました」

僕は頭を下げようと思ったが、下を向いた瞬間に気持ち悪さが込み上げてきた。もう吐き出すものは残っていないらしく、一瞬口元に手を添えただけで、なんとか治った。

「二日酔いなのに、無理しないでいいから」

「二日酔い？」

そう言われれば昨日、というよりは日付が変わってからもガンガン飲まされた

ような。午前様で部屋には帰り着いたけど、途中で力尽きたのか。上坂さんは水を飲むように促した。

「とにかく、水を飲んで出す。あとは寝てたら何とかなるから」

「ありがとう」

彼女に誘導されるまま、水を飲み、起きがけのトイレを改めて済ませる。ちょっとずつ楽になってきた気はするけど、まだ長時間椅子に座るのは厳しいようだ。

「起きたんなら、帰ろうかな」

彼女は自分の鞄に、「ヒイラギ」を仕舞った。

「何か用事があったんじゃないの？」

「二日酔いの人と、何かする気は起こらないな。今日のところは、出直すわ」

彼女はふぅ、と一息ついて立ち上がる。僕がそれをボーッと見ていると、彼女は振り返って身を寄せてきた。

「それとも、私にされるがままになる？」

彼女は僕の胸に手を置いて、さらに近寄る。二日酔いのドキドキか、別の理由で鼓動が早いのか、頭の処理が追いつかない。

「な〜んて、冗談冗談。ラムネとウコンの力は置いていくから、お好きにどうぞ」

彼女はカバンから、懐かしい青緑のボトルを取り出すと、食卓に置いた。ウコンドリンクは冷蔵庫にあるらしい。彼女は自分が飲んでいた缶ビールを飲み切ると、空き缶を片付けた。

「そうそう、ゴムとか雑誌とか、もうちょっと上手に隠してね」

彼女は僕に振り返ってそれだけ言うと、カバンを持って出て行った。彼女の残して行ったラムネを素直に口にするか引っ掛かったけど、ブドウ糖の塊を口に放り込み、冷蔵庫のウコンドリンクをグッと一気に飲み干した。プラセボだろうけど、ちょっと気が楽になってきたけど、今度は違うところで気が重くなってくる。とりあえず、玄関の鍵を内側から掛けた。

『六月四日（日）』——原田哲朗編

初出　令和三年五月二〇日　ノベルアップ+にて公開

六月五日（月）

窓の外は、昨夜から猛烈な雨が降り続いている。朝方、亜衣を幼稚園に送り出す頃には少しマシになっていたけど、一人で留守番している間に雨脚は再び強まってきた。旦那と下の娘は、亜衣を送り出すタイミングで一緒に外に出て、今、自宅にいるのは私だけ。

電気も点けず、寝室に一人、ベッドの上で横になっている。家の中に響くのは、外で降っている雨の音と、遠くの方で仕事をしてくれている冷蔵庫の音だけ。時々、ブブブッとスマホのバイブレーションが短めに鳴る。通話じゃなくて、何かの通知。いちいち内容を確かめるのも億劫で、そのままほったらかしにして天井を見つめている。

梅雨時だから、雨も降る。強めの雨が夜通し降ることもある。でも、よりによってヘトヘトなタイミングで、強烈な低気圧を持ってこなくてもいいのに。家中に仕掛けた吸湿剤の働きも虚しく、高い湿気が肌に張り付いて息苦しさに拍車がかかる。

子供を連れ出す方が楽だろうと気を回してくれたんだろうけど、ありがたい反面、一人きりになる寂しさ、孤独さもある。とはいえ、もうそろそろお昼過ぎ。亜衣が幼稚園から帰ってくる前には、旦那も映美も戻ってくるだろう。

もう少し横になって、グダグダしながらママをやるためのパワーを捻り出そう。気怠い女のままで、家族の前に、娘たちの前に姿を見せたくない。

試しに目を閉じてみる。微かな眠気はあるものの、寝入るだけの眠さじゃない。仰向けになったまま、しばらくゴロゴロしてみる。スマホのブブブも気になるけど、ここで画面を見てしまうと寝れなくなる。グッと堪えて、力を抜く。あ、いい感じに寝れそうな気がする——。

ガレージに車が止まる音で、意識が呼び戻される。一瞬意識が飛んだ気がするけど、少しは寝れたんだっけ？　枕元のスマホに手を伸ばし、時間を確かめる。午後一時を少し過ぎたところ。二〇分ちょっとぐらい、気絶するように寝てたのか。

ベッドの上で体を起こし、電気を点ける。三面鏡の前まで行って、自分の顔を

確かめる。少々むくんでいるような気はするけど、寝ぼけ眼と髪が膨れ上がっている程度。今日は外に出ないだろうし、顔を洗えば何とかなるか。

洗面所に向かって階段を降りると、帰宅済みの旦那と映美とが、リビングでアンパンマンを再生していた。まだ目はよく開かないけど、声だけかけておく。

「おかえり」

我ながらひどい声だと思ったけど、康徳さんは微塵も嫌そうな顔をしないで、こちらを振り返って「ただいま」と言ってくれた。

「お昼、食べた？」

「まだだけど」

「母さんがお昼作ってくれたから、冷蔵庫から出して食べてよ」

彼は冷蔵庫の方を指した。扉を開けると、確かにビニール袋に包まれたタッパーが入っている。

「亜衣のお迎えも僕が映美と行ってくるし、ゆっくりしててよ」

彼は私の「ありがとう」を待たず、目の前のタブレットに視線を戻した。映美と一緒に、アンパンマンの世界を楽しんでいる。体調が悪い時に、自分以外の人が家にいる。煩わしいこともあるけど、やっぱりコレがいい。

私はとりあえず洗面所に足を運んだ。顔を洗って、お昼を食べよう。できる範囲で、ママをやろう。冷たい水を滴らせながら、鏡の中の自分に笑いかけてみた。

『六月五日（月）』——森田芽衣編

初出　令和三年五月二一日　アルファポリスにて公開

六月六日（火）

「本当に、送って行かなくていいのか？」
僕が妹に問いかけると、彼女は「うん」と答えた。大きなスーツケースを引きながら、一人で外に出て行った。
「相変わらず、心配症だなぁ」
普段より大人しめのファッションに、地味目のメイクをしている沙綾の姿に一瞬ドキッとしながら、「いつまで経っても、妹だからな」と答えた。
「もう、二十歳も過ぎたんだし、立派な大人でしょ」
「それはそうだけど、そんな簡単に、年齢で切り分けられるか？」
彼女は両手でマグカップを抱え、「う〜ん」と小さく唸りながら上を見上げた。
「難しい、か」
「それに、妹だから」
「弟だったらどうなの？」
アイツがもし、弟だったら？
「弟だったら、ほっぽり出してるな。男なら、自分の身は自分で守れ、って」
「それもそうか」
沙綾はそれ以上突っかかることなく、食卓でさっき作った資料を見直している。打ち合わせを経て書き加えた部分もさっさとデータにしておきたいところだけど、あくまでも彼女らのプロジェクトだから、余計な口出しは控えておこう。
「問題は、脚本ってところだよな」
僕は新しいコーヒーを淹れて、向かいに座る。端っこの方に行ってしまった資料を手元に引き寄せ、目を走らせる。粗も散見されるが、学生がパパッと作ってこのレベルなら、ギリギリ合格点か。
「書くだけなら、森田さんとかにお願いしてもいいんだろうけど」
「それだと、みぃちゃんの撮りたい画になるかは分からないんだもんね」
沙綾は再び天井を仰いだ。そもそも、森田さんに小説が書けることは疑わないが、映像向けの脚本、シナリオなんて書けるんだろうか。フィクション、ストーリーを考案する、肉付けするという意味では似ているけれど、微妙な違いが難し

い気もする。

「そもそも、課題、自主制作のために書いてくれるのかって問題もあるけどね」

「まあね。そこは何とかネゴするしかないけど、みぃちゃん次第かなぁ……」

普段とはまるっきり違う見た目で、真剣に悩む姿、考える姿がとても新鮮だ。

表情の一つ一つ、何気ない仕草が気になって仕方がない。

沙綾は僕の視線に気がついたらしく、視線を合わせて、やんわり睨む。

「ちょっと、真剣に考えてるんだけど」

「お、おお。悪い、悪い。可愛い妹と、彼女のためだもんな」

隣の資料をサッと引き寄せて、視線を隠すように目の前にかざす。紙の向こうで沙綾はしばらくムスッとしていたが、それどころじゃなくなったのか、再び真剣な表情で考え始める。

隣に用意しておいた白紙のコピー用紙を取ると、近くに散らばっていたペンを握った。彼女なりに何やら書き出していく。

「みぃちゃんの願望、画を優先するんなら、本人が脚本もやるのが一番よね」

「でも、プロデュースも脚本も演出も監督が全部やるのも、仕事としてどうなのか、ってところはあるよな」

「独り相撲の小さな作品になるのも、勿体ないもんね。折角やるなら、いいものにしたいし……」

沙綾のペンが、ここまでの話を適当にまとめていく。キーワードを丸く囲んで、関係性を何となく書き加えていく。

「今度、森田さんも巻き込んで相談しちゃうか」

「そうね。それがいいんじゃない？　悩んでても仕方ないし、協力してくれるかどうかも、まだ分からないし」

沙綾はパーっと表情を明るくして、「森田さんに相談、打ち合わせ」とデカデカとメモをした。二重三重にグルグルと丸く囲んで、ペンを手放した。

「あー、スッキリした」

彼女は椅子から腰を上げ、少し下がって腰を回す。食卓の上に広がっている資料、彼女が書いたメモも、スッキリとは程遠い散らかり方をしている。

「ねぇ、なんか食べに行かない？」

彼女は僕にグッと近づき、ヘアメイクにはそぐわない雰囲気で言う。そのギャップがまた、僕の変なところをグッと刺激する。

「でも、片付けないと」

「いいじゃん、そんなの。後でやるから」

沙綾はいつも通りの強引さで、僕の手を引いて立ち上がらせる。大人しめの衣装に、その強引さはちょっと反則だ。僕は彼女に圧倒されるがままに、財布と鍵だけ持って部屋を出る。こういう彼女と、どこで何を食べたらいいだろう。少ない選択肢を必死に探して、ベストな答えを早く見つけねば。

『六月六日（火）』――浪川一輝編

初出　令和三年五月二一日　NOVEL DAYSにて公開

六月七日（水）

武藤さんは隣でSlackの新着メッセージを見ながら、「だってさ」と他人事のように僕の顔を見ながら言った。

「編集長もやり、作家もやり、人気だねぇ。森田先生」

「先生はやめてくださいよ」

「人気のところは否定しないんだ」

彼は人の悪そうな笑顔を浮かべ、ニヤニヤしている。

瑞希さんから送られてきたのは、自主制作映画に関する相談。学校の課題とは別に、もう一本自主制作映画を作りたいのだけれども、脚本の執筆や協力、監修について相談したい、とのことらしい。

「映像作品の脚本までできるの？」

「自主制作レベルなら、経験ありますよ」

一人でプロデュースから脚本、演出から監督、制作進行までやって、結局グダグダのまま終わったあまり思い出したくない経験。結局、脚本の着手が遅れたために、中身のクオリティが今一つのまま、映像としてもお粗末なものにしかならなかった。

そのリベンジ、やり直しをいつかしたいと思って、早十年以上。そろそろ、やってみてもいいかなとも思いながら、結局仕事が忙しいと言い訳をしながら、ここまで来てしまった。

「で、やるの？」

武藤さんは少し険しい表情で僕を見る。

「彼女らにも助けてもらってるし、個人的にリベンジもしたいんでやりますよ。できる範囲を決めて、手弁当で、ですけど」

実際に「ヒイラギ」の創刊にあたって、書き手の募集を手伝ってもらったし、沙綾さんの知名度や女子大生の華やかさでアクセスなり、部数なりが積み上がっているのも事実。無償でやったって、利は十二分にある。

「でも、タダではやらないでよ。お互いのために」

武藤さんが横からグッと釘を刺す。手弁当、タダでやった時の不幸を知ってい

るからこその、正しいご意見。自分も沢山経験がある。

「今は出世払いってことにして、ちゃんと記録してから回収しますよ」

「貸付なら、利子も忘れないように」

「分かってますって」

どういう関わり方になるかはまだ分からないけど、ざっくりの見積もりを早めにしておいて、なぜそういう取り決めをするのかも、きちんと説明して合意を取ろう。

とりあえず、Slackのメッセージに、都合の良い日を三つぐらい上げて返信しておく。関係しそうな哲朗くん、浪川さんもメンションに含めておいた。

「これで浪川さんに箔がついたら、ますます面白いことになるね」

武藤さんは自分のモニターを見ながら嬉しそうに言った。

「ヒイラギもコレも、いつもの仕事も、よろしく頼むよ」

武藤さんはシレッというが、Webメディアの運営に、掲載作品の執筆、若手の育成に紙媒体の頒布拡大、新人作家の獲得に掲載者間の交流もやりながら、Web制作の業務委託という現状も、それなりに一杯いっぱいの状況ではある。そこに、もう一個新しい制作事案が乗っかるというのは、中々大変な仕事ではある。

「新人さんとか、入れないんですか？」

「人手を増やすのは良いんだけど、教育がね」

「ヒイラギを手伝ってもらいながら、哲朗くんらと伸ばすっていうのは、ダメですかね」

武藤さんは腕を組み、上を向く。

「コードとか、デザインとか、ツールを覚えてもらったとして、そこから先が問題だよなぁ……。うん、真剣に考えてみよう」

武藤さんは白紙の紙を引き寄せて、ペンを取り出した。真剣な面持ちでいろんなキーワードを書き出していく。資金繰り、事業計画の面でもう少し具体的な支援ができれば良いんだろうけど、僕に何ができるだろう？

取り急ぎは法人成り、とかか。ここからもう一段踏み出すためには、そろそろ必要かもしれない。考えをまとめている武藤さんを眺めながら、僕も僕で真新しい紙を引っ張り出した。

初出　令和三年五月二一日　NXZ（旧サイト）にて公開

六月九日（金）

スケジュール調整の結果だから仕方ないとはいえ、よりによって笠井さんに来社いただくタイミングで、オフィスの片隅で賑やかに打ち合わせしているのはよろしくない気がする。

うちのオフィスに人が集まってくれるのはありがたいことではあるものの、人員拡充の前に手狭になりつつあるのは早めに何とかしなくては。今更レイアウト変更っていうのも大変だよなぁ、とか思いつつ、笠井さんが資料チェックし終わるのを黙って見守る。

「うん、コレで良いんじゃないですかね」

笠井さんは顔を上げ、胸ポケットに刺した赤いサインペンのキャップを外した。下の方にある合計人数に丸をつけ、僕の方に差し出した。

「参加人数が前回よりかなり増えるようなので、我々は最初と最後でご挨拶に伺うだけにして、あとは邪魔にならないようにハケておくようにします」

「なんか、すみません。主催していただいて、会場の手配もお願いしてるのに」

「いえいえ。皆さんが交流を深めていただいて、それで経済が活性化するのなら、どんどん無理を言ってくださいよ」

笠井さんの漢気に、自然と頭が下がる。

「じゃあ、コレで小野寺さんにも共有しておきますんで」

「何卒、よろしくお願いいたします」

より一層深々と頭を下げる。笠井さんは涼やかな微笑みを崩さないで、眠気を誘うような穏やかな声で「頭を上げてください」と言った。彼は資料をクリアファイルに入れ、カバンにしまった。

「こちらのオフィスも賑やかになってきましたね」

「最近若い奴の出入りが増えて、良い溜まり場にされてるんですよ」

笠井さんの視線が、歓声が上がったオフィスの一角に向けられる。さっき、ボリュームを下げてくれとお願いしたのに、興奮冷めやらぬのか、また大きな声で喧々諤々とやり合っている。

「電話の呼び出し音が一番大きく聞こえるうちのオフィスより、全然マシですよ」

「笠井さんのところは静かでしょう。最近は静かなのも、味わいたいぐらいです」
笠井さんは腕時計に目をやり、手元に鞄を引き寄せた。時刻はそろそろ一八時。
「このあと、帰社ですか？」
「えぇ。一応、いただいた資料を取りまとめたりしなきゃいけないんで」
「せっかくの金曜日なのに、ご苦労様です」
「そっか、金曜日か……」
笠井さんはカバンの中身を何度か見て、スマホの画面でも何かを確認している。
僕は事務所の冷蔵庫を開け、三五〇mlの缶ビールを二つ取り出して、応接スペースに戻った。
「じゃあ、ココでちょっと飲みません？」
笠井さんの顔が、ちょっぴり綻ぶ。さっきは、鞄を抱えて立ち上がろうとしていたのに、迷うことなくカバンからサッと手を離して、椅子に座り直した。
「じゃあ、一本だけ」
「さすが笠井さん、そうこなくっちゃ」
僕は笠井さんの前に一本置き、自分の缶ビールを開けた。吹き出した泡がこぼれないように、口から迎えにいく。顔を上げると、向かいの席で笠井さんが同じポーズを取っていた。笠井さんはこぼさないように缶を持ち替え、空いた手でスマホを操作した。
「なんて打ったんですか？」
「ちょっと打ち合わせが長引いてますって」
笠井さんの顔に、ちょっと緩めの微笑みが戻る。さすが笠井さん。僕も彼みたいなやり方を見習わなくては。

『六月九日（金）』――武藤幸弘編
初出　令和三年五月二一日　カクヨムにて公開

六月一一日（日）

「茨木の川が、そんなに魅力的か？　どこにでもある風景だと思うけどなぁ」
一兄は隣で運転しながら、心底面倒臭そうに言う。
「どこにでもありそうだけど、そこにしかないから良いんじゃない」
「いやいや、安威川も茨木川も大したことないって。有名な橋も別にかかってないし」
「橋がどうとかじゃなくって、そういう自然を含めたシーンを良い感じに撮りたいんじゃん」
私がどれだけ力説しても、一兄にはピンと来ないらしい。彼は延々とブツクサ言いながら、ハンドルを握っている。ただ、せっかくの日曜日に、サンデードライバーばっかりで中々動かない一七一号線を箕面方面目指して走らされているのは、お願いした私もちょっとだけ後ろめたい。
「ローソンの先で、一七一に行かずにこっちに曲がる、と」
下井のバス停を過ぎた辺りで、左手の細い道に入ってもらう。細いとはいえ、バスが通れるだけの幅は十分にある。この先に、郡山宿本陣があるらしいけど、そのまま道なりに真っ直ぐ行ってもらう。
「このまま勝尾寺川渡ると、車止めるところないぞ」
「良いから、このまま行って。橋を渡ったところの、川沿いの細道が最高だから」
バスで箕面方面、豊川駅の方を目指すとここでグッと曲がって、一七一号線に再合流する。バスに乗ってると一瞬しか見えないこの画角を抑えておきたい。
「道幅も狭いし、そんなに停めてられないって」
「じゃあ、私たちだけ降りよう。イイ？」
一兄の回答を待たずに、ルームミラーで後部座席の哲朗さんに視線を送る。彼はちょっと疲れた目で頷いた。私は早速ドアに手をかける。「分かったから、ちょっと待て。一瞬停めるから」
一兄は車を少し歩道に寄せて、車を止める。私たちが降りるのを待ち、後ろから来る車に気をつけながら、再び車を走らせた。奥の信号まで行って、右折をするらしい。私は早々に視線を切り、右手に見える製紙工場、その奥に見える巨大

な倉庫を視界に入れながら、左手の勝尾寺川、眼前の広大な空を画角に収め、何枚か写真を撮る。

哲朗さんにもフレームに入ってもらい、再度映り方を確認する。フレームの中で背中を向ける彼は、撮影ボタンを押すごとに微妙に動いて、スマホを取り出した。彼は両手を口に添え、拡声器を作る。

「バス停前のセブンイレブンにいるって」

一七一号線を茨木方面に戻ったところのセブンイレブンか。徒歩だとちょっと遠いじゃない。とはいえ、戻ってきてもらってピックアップってのも難しいと言うか、申し訳ない。哲朗さんがこちらに戻ってくる。一兄の車が辿ったであろう軌跡を、自分の足で追いかける。一兄はいつの間にか車を降り、コンビニでアイスを買ってお店を出てきた。

「え、自分の分だけ？」

私が呟くと、彼は手元の袋をガサガサさせて、哲朗さんにアイスを差し出した。自分のアイスを咥えながら、私を見やる。

「お前の分はない」

一兄は、自分のアイスを私に渡そうとする哲朗さんを制し、「それは君の分」と付け加えた。

「お前は自分で買ってこい。隣のマックにシェイクもあるぞ」

一兄は、顎でマクドナルドの看板を指した。

シェイクも魅力的だけど、向こうまで歩くのもちょっと辛い。哲朗さんに視線を送ると、彼は微妙に目を逸らし、買い与えられたアイスにかじりついた。

『六月一一日（日）』——浪川瑞希編

初出　令和三年五月二一日　noteにて公開

六月一二日（月）

隣で自転車を押しながら歩く哲朗くんから、言葉が少なくなってどれぐらいの時間が経っただろう。ある程度見知った関係とは言え、暗がりの中を二人並んで黙々と歩き続けるのは、それなりに緊張感がある。

時折彼の方を見るものの、表情は至って平常、特に何かを気にしている素振りはない。どうやら、私が一人、疲れも相まってテンションがちょっぴりおかしくなっているだけらしい。

もう、目の前に平和堂の看板が見えてくる。前回、武藤さんと笠井さんに送ってもらった道まで帰ってきた。交差点の向こう側に、確かたこ焼き屋さんがあった気がする。あそこは、割と遅くまでやってたはず。

「お腹空いてるよね。たこ焼きじゃ物足りないと思うけど、食べる？」

哲朗くんの顔を見上げる。彼は少々思案するように上を見上げ、少しだけ間を置いて「じゃあ、いただきます」と微笑んだ。

遅くまで残って手伝ってくれたお礼に、と散々連れ回しては玉砕してきたのに、なんと爽やかな笑顔を見せてくれるのだろう。類を見ない優しさと穏やかさ、最近はメキメキ頼り甲斐も出てきて、非の打ちどころがなさすぎる。

彼の少し前を歩いて、交差点を渡る。お店の前まで先導し、往来の邪魔にならないところでちょっと待っててもらう。

「たこ焼きを、一五個入りを一つと、八個入りを一つ。それから、豚玉と焼きそば並盛りも」

自分の晩ご飯も差し込みつつ、注文と会計を済ませる。作り置きを少し温めてもらって、袋も二つに分けてもらった。粉もんがたっぷり入った方を哲朗くんに差し出す。彼は袋の中を覗き込みながら、「こんなに、いいんですか？」と言った。

「コレぐらいペロッと食べれるでしょ？」

彼はまた少し間を置いて、考えている。一人納得したらしく、小さく頷くと自転車の前カゴに袋をそっと置いた。

「で、君はどうするの？」

南茨木で行きたかったお店は定休日で、立ち寄りたかったたこ焼き屋さんは早々に閉まっていて、「送ってくれる」という言葉にも甘えながら散々連れ回してきたけど、お礼という意味ではミッションをクリアした。

「ココまで来たら、家までもうすぐだし。あんまり遅くまで連れ回すのもアレだし」

私はココから五分も歩けば家に着くけど、彼は自転車で五分ぐらいの道を帰らなきゃならない。そろそろ二一時半。目の前の通りを茨木市駅の方まで上がっていけば、そんなに迷うことなく帰り着けるはず。

「お一人ですもんね。了解しました」

彼は何かを勝手に察知して、独りで納得したように頷いている。

「ご自宅はどちらでしたっけ」

私は信号の向こうを指した。

「じゃあ、途中まで」

彼は自転車のスタンドを上げ、横断歩道の前まで行った。私は前後左右を確かめて、彼の背中を追いかける。パチンコ屋の横を通り抜け、平和堂の前までやってきた。

「私はココで」

私は足を止め、少し前を歩く彼の背中に声をかけた。彼は灯りが灯っていない平和堂の方をチラッと見て、自転車に跨りながら、私の方へ振り返った。

「じゃあ、おやすみなさい」

私も「おやすみなさい」と返すが、彼は颯爽と自転車を漕ぎ出し、スーッと遠ざかっていく。去り際もめちゃくちゃ決まってるじゃない、と思いながら、私は独りでちょっと暗い住宅街に足を踏み入れた。

『六月一二日（月）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年五月二四日　小説家になろうにて公開

六月一五日（木）

ショッピングモールの出入口に近いコメダから出て、比較的賑やかなフードコートの前を右に曲がる。サーティーワンの甘い匂い、隣のジュースタンドの匂いもちょっと心魅かれる。さっきまでコメダでシロノワールと向き合ってたんだから、別腹も何もなさそうなんだけど。

スタバの手前にある久世福商店でも、「父の日フェア」と題して、お酒やツマミが並べられている。前を歩いていた浪川さんは歩みを止め、並べられているお酒を手に取った。

「父の日って、なぁ〜んか節操ないよなぁ」

「そうですか？　母の日も、バレンタインも、割とそんな感じですけど」

イオンモールの中は、どこもかしこも「父の日」にかこつけて、食品から嗜好品からファッション雑貨、家具から家電まで売り付けようとしている。母の日もバレンタインもそれぞれ、「コレ」というコアはあるものの、節操のなさは大して変わらないような気がする。

「でも、母の日はカーネーション、バレンタインはチョコって一応あるだろ？父の日にネクタイとかお酒はまだ分かる気もするけど、甚平とか帽子とか、ただのシーズン先取り展開だろ？」

いつの間にか、当たり前のようにディスプレイされていて違和感を微塵も感じないが、そう言われればそんな気もする。とは言え、六月の中旬を過ぎて夏を先取り、っていうのもファッション的には売れ残りな気もする。

浪川さんは独りで色々眺め、商品を戻して前に進んだ。今度は左手のリカーショップの前で立ち止まる。

「父の日、なんかやるんですか？」

彼は店頭のディスプレイを眺めながら、「いいや、何にも」と言った。

「オレがやらなくても、瑞希か晃がやるさ」　彼は僕の方を見て、「どうせ、君もやらないんだろう？」と言う。僕は返す言葉が思い付かず、言葉に詰まった。

「オレはただ、面白そうな酒が安かったら買おうと思って、見てるだけ」

浪川さんは立ったり座ったりしながら、店頭に並べられたお酒やおつまみを一

つずつ入念に確かめていく。出先のお昼休憩とはいえ、のんびりアレコレ見過ぎではないかと心配になるぐらい、お店の中まで入っていって、隅々まで眺め倒している。

僕は腕時計に目を落とした。そろそろ戻らないと、午後の仕事が始まってしまう。クラフトビールを見ていた浪川さんに声をかけた。

「おお、すまん、すまん」

彼はビールをいくつかピックアップして、レジに向かう。パパッと会計を済ませ、袋に詰めてもらってお店を出る。リカーショップの先にある出口から屋外駐車場に出て、彼が止めた車のところまで戻った。

先日乗ったのとは違う社用車の助手席に乗り込んだ。浪川さんはシートベルトを閉め、ルームミラーを確かめる。さっき買った荷物は、いつの間にか後部座席に置いてあった。

「大学じゃなくて、Mサイズさんのオフィス下でいいんだっけ?」

僕が頷くと、彼は「了解」と車を発進させる。今から千里中央へ戻る彼にとっては逆方向に送ってもらう。あっという間に着くはずだ。寝てしまわないよう、グッと力強く拳を握りしめた。

『六月一五日（木）』——原田哲朗編

初出　令和三年六月二四日　ノベルアップ+にて公開

六月一六日（金）

「森田さんもいつか、茨木を出ていくのかな？」

武藤さんはコーヒーを入れ、応接スペースに戻ってきた。その顔には、割と本気っぽい寂しさが漂っている。

「確定じゃないですけど、ないとも言い切れないですね」

「そっか。そのときは、寂しくなるな」

彼は心底悲しげに、コーヒーを啜った。

「でも、せいぜい池田ですよ。陽菜ちゃんの通学と似たようなもんですって」

僕はなぜか必死になって取り繕う。リモートワークも充実して久しいこのご時世に、ほんの少し距離が生まれる程度で何が寂しくなるのか。分かるような気もするけど、分かりえない気も少しある。

実際、今も別に近いと言えるほどの距離感ではない。ココのオフィスまで、徒歩で三〇分くらいはかかる。武藤さんのご自宅までは、さらに二〇分ちょっと。それがグッと伸びて離れたところで何が変わる？　何も変わらない気もする。

「両親もそろそろいい年だし、亜衣もそろそろ小学校なんで、学校に上がってから転校するぐらいなら、今のうちにじっくり考えなきゃなぁ、と」

「そうだよねぇ。森田さんは元々池田の人、だったもんね」

武藤さんはしみじみと語る。

ただ、僕らや武藤さんたちの時代とは違い、別に池田と茨木とで大きな違いはない。花の第一学区だった時代はとうの昔。今はそんなの、関係ない。関係ないとは思いつつ、父母の今後を考えると、同居は僕ら一家になるだろう。だったら、早めに決めて向こうで暮らすことも考えなきゃいけない。

「それも、茨木っぽいと言えば茨木っぽいのかな」

「どこからかやって来て、定着する人は定着して、そうでない人はどこかへ出ていく」

「出戻って居着く人と、出戻りながら、もう一度出ていく人もいる。茨木は特に、それがしやすいのかもなぁ……」

地元で生まれ育った人も、地元に縛られることなく自由に出入りする。地元愛、

郷土愛がないんじゃなくて、そういう緩やかな器、雰囲気がココにはある。
「だから、『今を切りとれ』か」
「そして、『撮りたい表情、景色を撮れ、捻り出せ』ですね」
武藤さんは、僕の言葉にニヤリと笑った。
浪川さんの要望を叶えるなら、彼女が撮りたいものをとことん撮るべきだ。そして、その題材は恐らく、奥野沙綾という人物以外にない。だったら、気を衒わないベタベタなシナリオをベースに、監督と主演女優がやりたいようにやって、紡ぎあげたものをブラッシュアップする程度でいい。
武藤さんは、浪川さんがロケハンで撮ってきた川中心の写真を手元に引き寄せる。
「川物語が完成したら、次は山物語だな」
僕は思わず微笑んで、「ですね」と付け足した。
なんだかパチンコ、パチスロみたいなネーミングだけれども、山間部の話、イバキタを舞台にした作品があると、より魅力的になっていいかもしれない。
「おや？　森田先生？」
武藤さんは僕の表情から何か読み取ったのか、伺うような目で僕を見る。
「もう一班スタンバイして、ガチの山物語、作っちゃう？」
彼は底意地が悪そうな表情を浮かべ、僕に語りかけた。
キャストと機材があれば、シナリオと監督次第で作れなくはない。若手の作品だけっていうのも寂しいし、勉強がてらやってみてもいいかもしれない。
武藤さんの悪そうな笑顔に、僕も無言で笑いかけてみた。

『六月一六日（金）』――森田康徳編
初出　令和三年五月二四日　NXZ（旧サイト）にて公開

六月一八日（日）

一昨日の夜、森田さんから打ち合わせをしたいとダイレクトメッセージが来た時は、ちょっとだけ驚いた。「できるだけ近々で」と言われたから、「日曜日でも良ければ」とスケジュールを出すと、そのまますんなり通って今に至っている。

彼の奥様は何度かお客様としてお越しいただいているし、お嬢ちゃんたちとも仲良くさせてもらっていると思うけど、彼に自宅サロンへ赴いてもらうのはこれが初めてだろうか。

私は完全にオフのつもりで、テレビもつけっぱなしにしたまま彼を出迎え、お茶を淹れる。彼の手土産、蔦屋さんの若鮎に合わせ、久々に緑茶を出した。私が「どうぞ」と促すと、彼は「いただきます」とお茶に手をつけた。口を十分に湿らせてから、話を切り出す。

「日曜日なのに、お時間いただいてすみません」

「こちらこそ、父の日なのに良かったのかしら？」

今日、彼は一人でうちへやって来ている。お子さんたちは、ママと共に京都のお祖父ちゃんへ逢いに行っているらしい。彼は短く息を吸い、表情を少し引き締めた。

「単刀直入に申し上げると、沙綾さんを主演に、自主制作映画を撮らせていただけないかと思いまして」

「あら、そんなこと？」

「朋子さんの計画もあるかと思いまして、本人の許諾を取る前にお話だけさせていただけたらと……」

最近の沙綾は、何かと忙しくしているようで、大学生の課題を兼ねた映画制作にも関わっているし、瑞希さんの自主制作にも脚本作りから関わっているらしく、モデル、インフルエンサー以外の業務もそれなりに立て込んでいるらしい。

女優としてのキャリアになるかどうか、微妙なのはよく分かるけど、何事も経験な気もする。健康を害さない程度に数をこなす、圧をかけてもらうのは悪いことではないとも思う。

「お好きになさってくださって、結構です。森田さんにはヒイラギのことでお世

話にもなってますし」

「いいんですか？　ありがとうございます」

彼は深々と頭を下げた。その頭を見て、私は思いついた条件を付け加える。

「ただし、脚本や絵コンテは事前に私へ確認を取ること、撮影やビジュアル面は安藤さんに相談すること、試写に私を同席させること」

可能なら、「公開まで漕ぎ着けること」も付け加えたかったけど、それはやっていくうちに考えればいい。頭を上げた森田さんの顔には、「それだけでいいのか？」と言わんばかりに、弛緩した表情が浮かぶ。彼は、力が抜けた声で「それはもちろん、おっしゃる通りにさせていただきますけど」と言った。

「御用はそれだけ？」

彼は「わざわざお時間いただいたのに、すみません」と軽く頭を下げる。

「直接お会いして、お話ししておきたかったので」

ダイレクトメッセージなり、電話なりでパパッと済ませても良かっただろうに、わざわざご足労いただいて。その殊勝さに、ますます編集長が好きになる。クリエイターとして、どんどん色んなことに挑戦してもらって、経験もスキルも伸ばしてもらいたい。

彼が持ってきた若鮎を摘みながら、テレビから聞こえてきた「地震から丸五年」のフレーズに、「あの時どうだった」と思い出話に花を咲かせた。

『六月一八日（日）』――奥野朋子編

初出　令和三年五月二五日　Pixivにて公開

六月二〇日（火）

少々雨脚の強い雨に、遠くの景色が白いベールに覆われている。厚ぼったく、重さも感じるその白さは、薄灰色っぽくも見えた。

目の前のフロントガラスを叩く雨が、一定のリズムでワイパーに拭われていく。この雨の中、カッパを着てバイクに乗るのも、傘を指して少し濡れながら先を急ぐのも、私には到底できそうになかった。

運転席に座る武藤さんは、強い雨と渋滞という組み合わせにも関わらず、楽しそうにハンドルを握っている。私の視線に気がついたらしく、彼は前をしっかり見たまま口を開いた。

「寒いですか？」

「いえ、大丈夫です」

「じゃあ、ラジオがうるさい？」

「あぁ、いえいえ。気にしないでください」

ラジオからは、主に高速道路の情報が流れてきている。高速道路の方は、一般道ほど詰まってはいないとのこと。武藤さんはそれを聞いてか、「そっちに行けば良かったな」と呟いた。

「急いでないので、ゆっくりで大丈夫ですよ」

「でも、いつまでも余所の男と二人っきりでドライブって訳にもいかんでしょう」

彼はモノレールの高架まで来ると、一七一号線を右折した。モノレールの高架に沿って南下するらしい。こっちもこっちで混雑しているように見えるけど、彼は目の前に置いた地図アプリの案内を頼りに、車を進める。豊川駅の下を通り過ぎ、道路の向こう側にゴルフの練習場が見えてくる。それも過ぎて真っ直ぐ進むと、左手に緑が増えてきた。

「で、ココを左折、か」

お寺さんのような建物の方に曲がり、天理教の建物だったんだと分かったところで、もう一度左に曲がる。このままグリーンロードを道なりに行って、阪神高速の高架を潜ると、茨木警察署近くの交差点まで行けるらしい。

「何だか随分、アップダウンがある道みたいで、すみません」

「いえいえ。お心遣い、ありがとうございます」
と、武藤さんには言ってみたものの、左手に自然を眺めながらのウネウネ道は、中々に忙しない。交通量はそれほど多くなく、歩行者が急に飛び出してくる気配もなさそうだから、車を走らせる分には割と気楽かもしれないけど、助手席に座っている身には、少々応える。武藤さんの運転でこうなのだから、お父さんの運転だともっとキツいかもしれない。
右側の運動場が見えなくなると、大分穏やかな道になってきた。アップダウンはそれほど気にならない。
「左のこれは、ゴルフ場なんですね」
駅前をうろついているとたまに目にする、カンツリー倶楽部はここらしい。
「ゴルフはされるんですか？」
「いえいえ。全く。主人もたまにテレビで見るぐらいで」
「私も何回か誘われたぐらいで、とんとご無沙汰してます」
武藤さんは穏やかに笑う。体格の良さもあるし、ポロシャツみたいなゴルフウエアも似合いそうなんだけど、普段はほぼ作業着姿しか拝見しない。お父さんもそんなにお洒落な方じゃないし、武藤さんも、着られるものを着ているって感じなのかしら。
「私の顔に、何かついてますか？」
武藤さんは赤信号で止まったタイミングで、チラリと私の方へ顔を向けた。私が「いえ、何でもありません」と答えると、彼はそれ以上追求することなく、信号が変わるのに合わせて前を向いた。
「茨木駅のロータリーで良かったんですっけ？」
「厚かましくて申し訳ないんですが、東口の方でも良いですか？」
私のわがままに、武藤さんは嫌な顔一つすることなく、「了解しました」と言った。駅まで送ってもらって、阪急オアシスに寄って。今晩何を作ろうか、頭の片隅で考えながら、武藤さんの横顔に「ありがとうございます」と告げた。

『六月二〇日（火）』——小野寺香帆編
初出　令和三年六月二五日　MAGNET MACROLINKにて公開

六月二四日（土）

「まだちょっと寒いかと思ったけど、結構人いっぱいだったね」

康徳さんは呑気に、まだ少し濡れた頭を拭いていた。私は親子連れでごった返しているロビーで忘れ物がないか確かめながら、彼に任せた亜衣と映美をこっそり見守る。

夏にはまだ少し早い、六月末の雨の土曜日。しばらく外に出られていない子供たちのリフレッシュにもなればと連れてくるまでは良かったんだけど、「みんな考えることは同じだね」と康徳さんは笑う。

「この後も、みんな考えることが同じなら、イオンに寄らずに帰っちゃう方がいいか」

「ちょっと見たかったけどね」

「流石に仕方ない、か」

彼に子供たちの荷物を持ってもらい、空いた手で亜衣の手を握ってもらう。私は映美を抱き抱え、自分たちの荷物を肩から下げた。お隣に座っていた親子連れに軽く挨拶して、駐車場へ向かう。

子供達の体力と集中力が保たなくて早めに引き上げるから、未だマシなのかも。一七時を過ぎてからだと、ロビーも出入り口ももっと詰まってたかもしれない。更衣室ほど混雑することなく、スムーズに車のところまで戻り、子供たちと荷物を後部座席とトランクに載せた。私が助手席、康徳さんが運転席に座り、シートベルトをつけ、車を走らせる。

後部座席のチャイルドシートの中で、亜衣、映美が徐々に賑やかに遊び始める。あれだけプールで体力を消耗したはずなのに、まだまだ元気とは恐れ入る。康徳さんもルームミラーで後ろの様子を見ながら、笑顔を浮かべる。

「買い物、どうしよっか」

彼は、一七一号線へ抜けるか、名神高速沿いの太田橋方面へ抜けるかで悩んでいるらしい。

「とりあえず、アルプラザ目指すので良いんじゃない？」

「そっちの方が、サンデードライバーも少ない、か。了解」

彼は川に沿って、車を北へ走らせる。対向車が来るとちょっと怖い道幅だけど、彼は何なくイオンの裏を抜け、高圧線の鉄塔の下をグルっと回って、スーッと車列に合流した。太田橋を渡って、業務スーパーの裏へ抜ける道に車を進ませる。目の前にジャパンの看板が見えてくる頃には、後部座席がすっかり静かになっていた。

「どうする？寄っていく？」

彼は交差点を左折して、業務スーパーの方を指した。駐車場も割と空いているような気がするけど、土曜日の夕方に来ても、目ぼしい物はなさそうな気がする。私がスッと返事をしないでいると、何かを察したらしく、康徳さんはそのまま車を走らせた。

さっき潜った名神高速の高架の手前で、今度はグーっと右手の細い道へ入っていく。蓑原小学校の裏を抜け、茨木川の手前まで行く一方通行。自由に左右を走り抜けていく自転車に気をつけながら、広いとは言えない道をスムーズに抜けていく。

後ろの二人は随分前から動きをピタッと止め、チャイルドシートの中で寝息を立てている。もうしばらくは起きないと思うけど、どうしようかな。

出かける前に見た冷蔵庫の中身を必死に思い出す。食パンはあった気がするけど、野菜だ何だはちょっと心許ない。薬局もそろそろ寄っておきたかったんだっけ。アルプラザなら、この子らが起きても何とかなるか。

「アルプラザで、良いんだっけ？」

信号が見えてきたところで康徳さんが言った。私がしっかり頷くのを見て、彼は「了解」と呟いた。

『六月二四日（土）』——森田芽衣編

初出　令和三年五月二五日　アルファポリスにて公開

六月二五日（日）

久しぶりな気がする二人だけの夕食を終え、食卓で大河ドラマを見ながらビールを飲んでいる。志津香が贔屓にしている俳優が出ているというのに、彼女はまだテレビに背中を向けて、洗い物を片付けていた。

「もう直ぐ、出るんじゃないのか？」

私は、水の音に負けないよう大きめの声で言った。

「もう終わるから大丈夫。見逃したら、再放送でも見るわ」

洗い物ぐらい私にもできるのに、彼女はこちらを振り返ることもなく食器を洗い終えると、自分の手を洗い、タオルで手を拭いた。エプロンを外し、近くの椅子の背に引っ掛けながら、私の隣に座った。

「お前も飲むか？」

彼女は私のグラスをチラリと見て、首を横に振った。

「お昼も飲んだし」

「お茶は？」

志津香が小さく頷いたので、私は冷蔵庫から麦茶を取り出し、新しいグラスを出して注いだ。彼女はお茶で喉を潤すと、全身でテレビに向き合った。これ以上は、変に話しかけない方が良さそうだ。

私もテレビに視線を向けるが、彼女が見るからつけているだけで、話の流れや配役がよく分かっていない。妻の楽しい時間を邪魔しないよう、ひっそりと隣に座って、静かにグラスを傾ける。

今日は久しぶりに二人で電車に乗り、梅田まで出かけて帰ってきた。普段は子供らや孫がいるか、車で出かけることが多く、出先で一緒に飲酒する機会なんて滅多になかったが、今日はうめきた広場でやっていたキリンのフローズンビールを楽しんだ。

夜からの雨予報に備えて早々と切り上げてきたものの、屋外でビールを飲む妻を、もう少し見ていたかった気もする。もう一度強い雨が降れば、そのうち梅雨も明けて夏本番。今年の夏は彼女も連れ回して、外での飲食を楽しむのも悪くない。

私の視線を感じたのか、志津香がこちらをチラッと振り返り、「何？」と言った。私は「別に」と視線を逸らし、食卓の端に積み上げられたチラシの山に目を留めた。今日出掛けた時にもらってきたのか、旅行代理店のパンフレットがいくつか積み上げられている。目的地はそれぞれ、ハワイにニューカレドニアにモルディブ。それから、サイパンやグアム、ベトナムといった地域も混ざっている。

中は我々よりもグッと若い世代、ハネムーン向けらしいパッケージプラン、写真が載っていた。ハワイは我々もほぼ半世紀前に新婚旅行で訪れたけど、もう随分変わってしまっているようだ。

青い海や広い空の写真から顔を上げると、志津香がテレビを消して、こちらを見ていた。空になったグラスを持って、流しに運ぶ。私のグラスも一緒に片付けてくれた。

「旅行、行きたいのか？」

「そうねぇ。新婚旅行ぶりのハワイとか、『天国に一番近い島』のニューカレドニアとか、『深夜特急』をやってみる、とか」

志津香の思わぬ冒険心に内心驚いていると、彼女は「冗談、冗談」と大きな笑顔を咲かせた。

「あなたが免許返納する前に、車で温泉旅行ってところじゃない？」

「二人だけのドライブ旅行か」

「なんだか、終活っぽくなっちゃうけど――」

志津香はそこで言葉を切ると、グラスをさっと洗って水切りカゴに伏せた。

最後のドライブ、意外とすぐだな……。

『六月二五日（日）』――武藤幸次編

初出　令和三年六月一二日　Mediumにて公開

六月二六日（月）

「あの朋ちゃんが、臨時休業するなんてな」

女性専用のサロンスペースに、普段なら出入り禁止のおじさんが自然体でコーヒーを飲んでいる。自分が手土産に持ってきたお菓子を摘みながら、のんびり身体を休めている。

彼はコーヒーの湯気で曇ったメガネを拭きながら、ゆったりとした低音でボソッと呟いた。

「やっぱり、歳かね」

「エアコンと夏バテかしら」

私の回答に、彼は「ああ」と声を出して頷いた。「昨夜も一昨日も、雨だったつけ」と、言った。窓を開けて寝るには少々強い雨脚、エアコンを付けずに寝るには寝苦しい夜が続いていた。

私は、彼が持ってきた書類に目を落とした。疲れている人のためのサロンを、疲れたからと臨時休業するに至った一番の原因を思い出した。

「書類の差し替えなんてメールで十分だったのに、わざわざ菓子折持って来たのは、コレか」

「そう。直前の変更で、本当に申し訳ない」

彼は椅子に座ったまま居住まいを正し、深々と頭を下げた。来週末に予定されている女性起業家向けイベントのタイムテーブル。当初の予定では五〇分だった基調講演が九〇分に延びている。

「もう一つの講演が急遽キャンセルになってね。他も目一杯調整したんだけど、コレが限界で」

年齢の割におちゃらけた風貌をしている彼だけど、ふざけている気配はなく、嘘をついているようにも見えなかった。彼なりに精一杯やった結果なら、仕方あるまい。

「私が飲めば、丸く収まるのね」

「できれば、ギャラも据え置きだと助かるんだけど」

彼は「お願い」と顔の前で両手を合わせて、私に拝んだ。彼、安藤憲剛とは長

年、持ちつ持たれつでやってきた。友人として、できる範囲の無理はしてあげたい。

「分かったわ。了解。ただし、懇親会の出席は期待しないこと」

「つまり？」

「懇親会は、当日の体調次第」

彼は「了解」と頷いて、手元の資料にペンを走らせた。新しい条件を織り込んだ契約書を改めて郵送することなど、その後の手続きを確認しあった。

彼は自分が広げた荷物を鞄にしまいながら、「コレで一つ、肩の荷が降りた」と言った。「私に押し付けただけでしょ」と、嫌味を返すと、彼は苦そうな笑みを浮かべた。

「そうそう、夏バテだったら江坂に鰻食いに行こうよ」

「え、今から？」

彼はカバンから車のキーを取り出し、「足ならあるし」と微笑む。

「帰りは、お宅の婿殿に送らせるしさ」

彼が帰社する寄り道に付き合って、彼の部下である一輝さんと帰ってくるのも悪くはないが、九〇分に延びた講演の練り直しも早急に手をつけなくてはいけない。

「白焼きもあるぞ」

彼はグイグイ私の心を揺さぶってくる。バテた頭で考えたところで、下手の考え休むに似たり、か。

「憲ちゃんのポケットマネーってことなら、乗りましょう」

私の一言に、彼は「うっ」と唸って考え込む。少々間を置いてから、「よし、分かった。そうしよう」と覚悟を決めた。

「どうせなら、さっきの書類も片付けちゃおう。ハンコとか、準備よろしく」

彼は「駅前の駐車場で待ってるから」と付け加え、一足先に出て行った。私は急遽出かけることになった自宅サロンの戸締りと、手続きに必要そうな文具を取りに二階へ上がった。

『六月二六日（月）』——奥野朋子編

初出　令和三年六月一四日　Pixivにて公開

六月二七日（火）

学祭のミスコンに出たら、スッと上位に入賞して卒業後はどこかのアナウンサーでもやっていそうな、「ザ・女子大生」が目の前の席でアイスコーヒーを飲んでいる。私も同じ大学に通う女子大生には違いないのだけれども、キャンパスの違いか、学部の違いか、あるいはそもそもの育ちや遺伝子が違うのか、同じカテゴリーに属しているとは思えない。

隣でホッチキス留めしたA4用紙をペラペラめくっている沙綾さんに目を向ける。哲朗さんも一兄同様、ボリューミーで可愛らしい人が良いんだろうか。身体の凹凸まで控えめにならなくても良いのにと、自分の胸元に手を当てる。一瞬チラッと見た私の視線に気がついたらしく、上坂さんと目があった。彼女の微笑みに弾かれるように、視線をそらした。

沙綾さんは資料を何度か繰り返し見て、「なるほどねぇ」と何度か頷いた。彼女は上坂さんの顔を見ながら、手元の資料を上坂さんに差し出した。

「あなたみたいな人が、こんな企画を持ってくるなんて意外だわ」

上坂さんは、「そうですか？」と言いながら、資料を持ち帰るように手で示した。沙綾さんはそれを拒んで、さらに資料を突き出した。

「PDFでもらうわ。森田さんも持ってるんでしょ？」

上坂さんは「ええ、まあ」と言いながら、沙綾さんが突き返した資料を鞄に仕舞う。彼女が突っぱねたことと、上坂さんが資料を片付ける様に笑う要素は微塵もなかったけど、つい口元が緩んでしまう。

沙綾さんは私の顔を見て、一瞬ニヤリと笑うも、すぐに口元を指して表情を戻せと促してくれた。

「でもさ、森田さんも性格悪いよねぇ。とんでもない企画じゃない？」

沙綾さんはボソッと呟いて、アイスティーに口をつけた。資料を仕舞い終えた上坂さんは顔を上げながら、「そうですか？」と言った。

「私は、映像学部の胸を借りる良い機会だと思いますけど」

彼女の冷静な視線が、私の胸元に突き刺さる。

「それにしたってねぇ？」

沙綾さんが私に代わって返してくれた。
「私ごときでは相手にならない、と？」
「いえいえ、そんな。才能豊かな先輩と競えて大変光栄です」
「良いねぇ。やる気満々じゃん」
やると決まったからには、負けられない。森田さんのお膳立てにそのまま乗っかるのは面白くないけど、その思惑すら飲み込んでやろうじゃない。
隣の沙綾さんも両方の企画に関わる当事者、両作に出演するキャストという最も大変な役回りだろうに、随分楽しそうに笑っている。私と上坂さんの間に漂う緊張感も、彼女には日々を楽しくするスパイスに過ぎないらしい。
「まあ、明確な勝ち負けなんてないんだし、お手柔らかに」
自信に満ちた笑顔で、右手がスッと差し出される。
「こちらこそ、よろしくお願いします」
私はその手を、グッと力一杯握り締めた。上坂さんは表情一つ変えることなく、グッと握り返してきた。企画の意外性に通じるような、見た目に反する力強さだった。
彼女はスッと握手を解くと、腕時計に目をやった。
「そろそろ帰らないと」
彼女は鞄を肩にかけた。私たちも荷物を持って、腰を上げる。伝票は沙綾さんが摘み上げた。ほぼ手ぶらの彼女が先に行き、私たちはその後をついてレジに向かった。

『六月二七日（火）』——浪川瑞希編
初出　令和三年六月一五日　noteにて公開

六月三〇日（金）

向かいの席に座っている哲朗くんは、テーブルの下を向いて、何やら難しい表情でメッセージを打っている。相手は浪川さんか、あるいは最近、距離を詰めてきている女流作家の先生か。将来性は私にはよく分からないが、家柄も性格もそんなに悪くない彼は、案外モテるらしい。

本人にその気はあまりなさそうなところが、かえってモテるのかもしれない。

「哲朗くんは、夏休みはどうするんだ？」

メッセージを打ち終えたところに、声をかけてみた。彼は苦笑いを浮かべて、

「別に、仕事ですよ」と答えを濁した。

「せっかく彼女もできたんだ。海でも山でも行けば良いのに」

幸弘はお代わりのビールを選んでテーブルに戻ってきた。今度は黒いビールらしい。

「一人がアレなら、一輝くんと沙綾さんも呼んだら良い」

「山に行くんなら、香帆さんらに声をかけてバーベキューもできるんじゃないか？」

私の提案に、幸弘は珍しく同意して、「撮影チームの懇親会って形なら少しは援助できるかも」と付け加えた。

「みんなでバーベキューは楽しそうですね。でも、スケジュール調整が大変そうだな」

彼はそう呟くと、手元のビールを一口飲んだ。まだ苦味に慣れていないのか、喉越しの良さが分かっていないのか、小さな一口で少々顔を歪める。

「そう言う親父は、母さんと旅行なんだって？」

幸弘に話した記憶はなかったが、私が彼の顔を見つめていると、彼はスマホを握って、「母さんから聞いた」と言った。

「最後の家族旅行って、いつだっけ」

「アレだ、あの地域振興券の時に行った城崎温泉だ」

「そうだった、そうだった。カニもないのに夏場に行って、香織も真琴もブーブー文句言ってたっけ」

別に淡路島でも四国でも和歌山でも良かったけど、みんながあまり行かない方に行ったら、そこまで混雑しなかった代わりに喜ばれることもなかった、ちょっと悲しい思い出だ。

あれから幸弘は社会人になり、香りが高校生、真琴が中学生になり、家族揃って出かけることはなくなった。志津香と二人でちょこちょこ出かけることもあったけど、Gotoの時に出かけ損ねて以来、最近はご無沙汰している。

「お前のところも、そろそろ家族揃っての旅行は最後じゃないか？」

「陽菜の大学受験も考えると、確かにそろそろ最後だなぁ。今からじゃ夏は間に合わないし、秋か冬か」

幸弘はぶつぶつ呟きながら、一人の世界に入っていく。私は黙って話を聞いてくれていた哲朗くんに視線を向ける。

「お盆には、実家に帰るのかい？」

「わざわざ帰るってほどの距離でもないですけど」

「――お父さんの誕生日には、帰ってやってくれよ」

横から幸弘が割り込んで、熱のこもったメッセージをぶつける。

「ウチの大事な取引先だから、よろしく頼むよ」

「分かってますって」

幸弘は「分かっていればよろしい」とビールを呷った。今日は珍しく、早々に酔っ払っているらしい。私が「困ったもんだな」と哲朗くんに視線を送ると、彼は小さく頷いた。

『六月三〇日（金）』――武藤幸次編

初出　令和三年六月一五日　Mediumにて公開

七月四日（火）

ここ二週間ぐらい空梅雨気味だった反動か、猛烈な雨が降り続いている。阪急は動いているようだが、JRはダメらしい。凄まじい雨の中、オフィスから駅へ向かっても振替輸送で満員に近いらしい。

幸い、河川の氾濫に至るほどの雨量ではなさそうだけれども、山間の方では高齢者等避難の防災情報が届いていた。雨雲レーダーを見ても、もうしばらく雨は強いままのようだ。

「暗がりの共同トイレは、流石にちょっと怖いね」

オフィスのドアを開け、セリフとは裏腹に堂々とした足取りで上坂さんが中に入ってきた。さっきまでペンを動かしていた応接スペースに戻った。原稿用紙の上を走る、少し硬そうなペン先の音が聞こえてくる。

「帰らなくていいの？」

彼女はペンを止めずに、「風邪を引く覚悟で、濡れ鼠になれって？」と言った。

「阪急で帰ったって、そこから先の足がないの」

彼女はスマホの画面を僕に見せる。お父さんとのLINEは、「迎えに行けない。頑張れ」で途切れていた。

「お父さんに車出してもらうより、ココで一夜を明かす方が安全ってこと」

夏場とはいえ、もうそろそろ午後八時。強い雨が加わるとなれば、女子大生が一人で出歩くより、ココに籠る方が確かに理に適っている。

「僕が居てもってこと？」

「そこは、何も言ってないけど」

上坂さんは口元に笑みを浮かべ、僕の肩に触れる。僕は入り口のやや上を見ながら、「一応、監視カメラはあるから」と言った。彼女は「死角の一つぐらいあるでしょ？」と色っぽくささやくと、インクの匂いを漂わせて元の席に戻っていく。

「そんなことより、お腹空かない？」

彼女は原稿をトントンと揃えながら、僕の方を見て言った。僕もそろそろ晩ご飯にしたかったけど、何かあったっけ。オフィスを出れば、通りの向かいにコン

ビニぐらいはあるけど、ビルを出て戻ってくる間にずぶ濡れになりそうだ。

冷蔵庫には社長が置いている酒類とソフトドリンク、従業員が好き勝手に入れているお菓子、お酒のお供ぐらいは入っているけど、お腹を満たすには少々物足りない。オフィスグリコに手をつけるのも、まだ早い。

自分の引き出しにしまってある秘蔵の食糧に手をつけても構わないが、彼女の分も負担するのは気が進まない。ドリップコーヒーのパックをしまってある棚に、従業員用の非常食もあったはず。扉に手をかけ、中を覗いてみる。

「カップ麺とインスタントの味噌汁とパックのご飯、おつまみ用っぽい缶詰もあるけど、こんなんでいい？」

僕は、上坂さんが開けてくれたスペースに一種類ずつ並べていく。彼女はそれを見て小さく溜め息をつき、「キッチンはないんだもんね」と言った。「じゃあ、仕方ないか」とカップヌードル醤油味を掴むと、パパッと開封作業に取り掛かる。

「ん？　醤油がよかった？」

彼女は手を止め、僕の方を見る。僕は「いや、まだあるから大丈夫」と言いながら視線を逸らし、非常食を元通りに仕舞っていく。代わりに割り箸やら使い捨てカップやらを準備しながら、横目で上坂さんの動きを見つめてしまう。

ありそうでなかったシチュエーションに、正体不明の魅力を感じている。不思議な気持ちに戸惑いながら、気を逸らす方法を探し始めた。

『七月四日（火）』――原田哲朗編

初出　令和三年六月三〇日　ノベルアップ+にて公開

七月五日（水）

午前八時前に送ったメッセージが、未読のままになっている。普段なら即レスがあってもおかしくない時間帯なのに、三〇分以上返事がないどころか、未読のままということは、やはりまだ寝ているのだろう。

道中のパン屋で包んでもらった紙袋を片手に、出来るだけそっとドアの鍵を開ける。セキュリティにも変に反応されず、とりあえず胸を撫で下ろして自分の席に荷物を置いた。応接スペースを覗くと、椅子を連ねて横になっている哲朗がいた。寝息を立てている姿は可愛らしくも見える。

彼の額には、綺麗な字で書かれた上坂さんからのメッセージが貼られていた。どうやら彼女は、始発で一度自宅に帰ったらしい。「今日も学校で」というところに、底知れぬ若さを感じる。

しかし、二人で一夜を明かしながら、それにしては小綺麗な状態で入り口の鍵が降りていたということは、上坂さんが帰るまで彼は起きていたということだろうか？　交代で仮眠を取ったのであれば、この熟睡も仕方ない。

せめて、旨いコーヒーでも入れてやろう。ポットに給水してスイッチを入れる。コポコポと静かに湧き上がるのを待ちながら、哲朗の寝顔に目を向ける。思春期になってからは、身体つきも顔つきも一朗さんの遺伝子が顔を覗かせてきたが、顔のベースは妹の美桜ちゃんより明子さんに似ている。顎のラインや目元なんかはそっくりだ。

スマホのカメラを立ち上げて、出来るだけ息を潜めながら、画面を近づける。もう少しでいい感じの画角になりそうなところで、哲朗は目を開けた。反射的に体を動かしてバランスを崩し、椅子が好き勝手に散らばった。上に乗っていた哲郎の体は、背中から床に叩きつけられた。

彼は「いたた」と背中をさすりながら、僕を怪訝な面持ちで見てくる。

「なんですか、いきなり」

「可愛い息子の寝顔を送ってやろうと思ってね」

サッとシャッターを切ったのが功を奏したらしく、少し小さいが鮮明な画像が撮れた。彼はなおも何かを言いかけたが、目の前に手をやり、おでこに貼られた

メモに視線を向けている。その間に、サッと明子さん宛に写真を送ってしまおう。
「送信完了」になったのを確かめて、コーヒーの準備に戻る。彼の朝食用に買ったパンも応接スペースに持っていく。彼は椅子と服とを直し、改めて腰掛けた。
「目は覚めたかい？」
「ええ、まぁ。なんとか」
彼はまだ目が開ききらない様子で、のんびりした動きでコーヒーカップを口元に運ぶ。「いただきます」と口に出してから、パンをもそもそかじり始めた。
「今日も講義あるんだって？」
「そうなんですよ。午前中に必修科目があるんで」
彼はスマホを操作しながら、僕の問いかけに応答する。スマホを触る指を止め、僕に「冷蔵庫を見てもらってもいいですか？」と言った。言われるままに冷蔵庫を開けると、見覚えのない眠気覚ましドリンクが一本入っていた。
「随分、愛されてるじゃないか」
僕はそれを差し出すが、彼は少々苦い笑みを浮かべて、「そうなんですかね」と困ったように言う。
「とりあえず一回帰って、登校します」
受け取ったドリンクをグッと呷り、「朝食ご馳走様でした」と礼を述べると、荷物をまとめて慌ただしく帰り支度を整える。ほぼ徹夜だろうに、この後は風呂に入って、着替えて、学校か。
オフィスを出ていく背中に、「気をつけてな」と声をかけるのが精一杯だった。

『七月五日（水）』——武藤幸弘編

初出　令和三年七月一七日　カクヨムにて公開

七月七日（金）

今日の進捗を日報にまとめ、オンラインで勤怠を打刻した。念のため、チャットツールを見に行っても、目ぼしいやりとり、メンションはなさそうだった。

椅子に座りっぱなしだった腰を上げ、肩と首を解しながらゆっくり伸びをする。気がつけば二〇時前。さっきトイレに立ったのが一八時半ごろだった気がするけど、時間を忘れて集中してしまった。

空になったカップを持って、リビングに向かう。普段ならテレビがついていて、何かしら聞こえてきても良さそうな時間帯だけど、灯りすら点っていない。七夕なのに一日雨で撮休と聞いていた気がするけど、沙綾は出かけたんだっけ？

壁際のスイッチをつけると、食卓に突っ伏している沙綾の背中が見えた。「灯りもつけずに、何をしてるの？」と言いかけたところで、規則的な寝息を立てているのに気がついた。僕は出来るだけ音を立てないようにグラスを洗い、遮光カーテンを締めた。窓の外はまだ雨が降っているらしい。

寝室から毛布でも持ってこようか考えていると、沙綾はゆっくりと頭を起こした。顔に変な線をつけたまま照明が眩しそうに目を薄く開け、「仕事、終わった？」と掠れた声で呟いた。

完全に一日オフの化粧っ気のない顔に、逆にドキッとしてしまう。彼女の手元にあったにはティッシュと輪ゴムで作られたてるてる坊主。握り締めた手の中には、作りかけのそれがぐしゃぐしゃになって収まっていた。

「いま終わったよ。ご飯、食べた？」

沙綾はまだボーッとした様子で首を横に振る。僕は彼女に、よく冷えた麦茶を入れて目の前に置いてやる。彼女はコップを両手で包み込むように持つと、ちびちび飲み始めた。

この雨の中、今から何かを食べにいくには気が引ける。宅配で何か頼んでもいいけど、それもそれで悪い気がする。冷蔵庫を開けても、目ぼしいものはなさそうだ。野菜室も冷凍庫も、パッと食べられそうなものはあまりない。週末に買い出しする習慣が完全に仇となった。

冷蔵庫の前でひとり考え込んでいると、いつの間にか洗面所でスッキリしてき

たらしい沙綾が、冷蔵庫横のストッカーを触り始めた。
「お母さんからもらった素麺、この辺に仕舞わなかったっけ」
そういえばこの間、義母さんからお中元か何かで素麺もらったような。彼女は何度か引き出しを開け閉めすると、「あった、あった」と中から箱を取り出した。
「でも、麺つゆはなかったぞ」
「一輝って変なところで古いのね」
沙綾はこちらを振り返って、笑った。素麺の入った箱をカウンターに置き、改めてシンクで両手を洗う。髪をゴムで止め、エプロンをつけると意気揚々と鼻歌を歌いながら野菜室と調味料の棚をじっくり眺める。
「とりあえず、一輝にはお湯を沸かしてもらおうかな」
沙綾はスムージー用の野菜をいくつか取り出して、葉物やトマトを洗っていく。
「ほらほら、ボーッとしてないで動いた、動いた」
彼女の声に、僕は言われるがまま、両手鍋に水をたっぷり張ってコンロにセットした。沙綾は楽しそうに、包丁片手に野菜を加工していく。一体何が出来上がるのか、何を食べさせられるのか想像を膨らませながら、目の前の鍋がいつ沸騰するのか、気になって仕方がなかった。

『七月七日（金）』――浪川一輝編
初出　令和三年七月一八日　NOVEL DAYSにて公開

七月一〇日（月）

お店の出入り口まで芽衣さんたちをお見送りしていた郁美さんが、席まで戻ってきた。

彼女はソファ席に腰を下ろすなり、アイスコーヒーをたっぷり吸い込んだ。

「芽衣さん、大丈夫そうでした？」

映美ちゃんを連れて駅前からバスで帰ると言ってたけど、間に合うのだろうか。

郁美さんは「大丈夫、大丈夫」と脇に避けたメニューを開きながら言う。

「アルプラザのところまでなら、割と何本も出てるみたいだし、間に合わなければ駅前で買い物でもするそうで」

そういわれると、私も駅前からバスに乗った時は、割と選択肢が多かった様な気がする。乗り場が分散していて、どこの何分発に乗ればいいかはちょっと困ったけど。映美ちゃんはお利口さんだからいいけれど、小さなお嬢ちゃんを連れてのお出かけは大変だろうなと、遠い記憶を辿りながら、さっきまで目の前にいた二人に想いを馳せた。

「デザートとか、注文しません？」

郁美さんは、グランドメニューとは別に添えられた季節限定メニューを見ている。三角に立てられている小さいメニューにも、「メロン」の文言が踊っていてとても美味しそうに見える。

とはいえ、今し方ランチを食べたばかりで、あとはコーヒーぐらいしか入りそうにない。一口二口食べるぐらいならなんとでもなりそうだけど、隣や向かいのテーブルに運ばれてくるデザートを見る限り、食べ切るには少ししんどそうなサイズに思える。

「私はもうお腹いっぱいで」

「じゃあ、味見だけしません？　食べれるなら半分でもいいんですけど」

郁美さんは目を爛々と輝かせながら、私に同意を求めてきた。同意というよりは、背中を押して欲しそうにも見える。新メニューの開拓、インスピレーションを得るというのもありそうだし、仕事と思って頷いておく。

彼女は躊躇なく呼び出しボタンを押し、メロンを半分使ったメニューを注文し

た。

「パフェは流石に厳しいし、シフォンケーキはなんとなく想像できるんですけど、こういう映えるメニューは、自分でも挑戦してみたいですよね」

彼女は心底楽しそうに、デザートが届くのを待っている。自分のアイスコーヒーを飲み切ると、私のカップも気にかけてくれた。

「そんな、自分で行きますから」

「私もついでなんで。座っててください」

郁美さんの言葉に甘えて、ホットコーヒーのお代わりを頼んでしまった。彼女は空のグラスとカップを両手に持ち、向こうのドリンクバーへ歩いて行った。彼女がおかわりを持って戻ってくる間に、デザートはまだ運ばれてこない。ランチには少し遅い時間帯だけれども、どうやら人手が足りないらしい。

「来週、本当に良かったんですか？」

郁美さんは「いいんです、いいんです」と手を振りながら言った。

「身内のことなんで、身内でやります」

「ルミの時は良くしていただいたのに」

「だって、娘さんじゃないですか。こっちは実の父親ですから、なんでもいいんですよ」

郁美さんは豪快に笑うと、ようやく運ばれてきたデザートに目を向ける。スマートフォンで角度を変えながら何枚か写真を撮り、肉眼でも矯めつ眇めつ眺めてスプーンを差し込んだ。ここから眺めていてもとてもみずみずしそうな果肉と、メロン独特の香りが鼻をくすぐる。コレは中々、美味しそうだ。

『七月一〇日（月）』——小野寺香帆編

初出　令和三年七月一八日　MAGNET MACROLINKにて公開

七月一三日（木）

微かな緊張感を漂わせた華やかな女子大生が、私の隣でお行儀よく自分の注文が届くのを待っている。視線は少し離れた向こうのテーブルに向いているらしい。

「貴女もあちらのテーブルが良かった？」

私の言葉に、彼女はハッとしたらしく私の方へ自然な愛想笑いを向ける。嫌味も力みも感じさせない、非常にナチュラルな笑顔に、作品から受ける印象とは違う人物像も見えそうだ。

彼女は落ち着いた様子で、自分の声に耳を傾けながら言葉を紡ぐ。

「いえいえ。今日はあくまでも見学なので、お仕事の邪魔はできませんよ」

高すぎず、甘すぎず、声まで華やかで程よい心地よさを持っているとは、中々の人たらしのようで。脚本や物書きだけでなく、出役もやれば沙綾と釣り合いも取れそうな器量なのに、持って生まれた武器を全て使うつもりはないのだろうか。

「それに、朋子さんとご一緒できるなんて光栄です」

「誰に何を吹き込まれたか知らないけど、持ち上げたって何にも出ないわよ」

「奢ってもらおうと思ったんですけど、ダメですか……」

彼女はオーバーにしょげて見せるが、そういうコミュニケーションも重々心得ているところが少し、鼻につく。向こうのテーブルで沙綾と目の前のモニターを見てディスカッションしている瑞希さんの方が、個人的には素直で好みかも。

テーブルに運ばれてきた季節限定の大きなかき氷を、色んな角度で写真に収めると、「いただきます」とかじりついた。私はスイートポテトと二種類のお芋が載ったプレートに手を付ける。

見た目の可愛らしさに反して、しっかりお腹に溜まる感覚。咀嚼の満足感もあって、この後の晩ご飯はそんなにいらないかもしれない。

目の前で山のように盛られていたフワフワの氷は、瞬く間に嵩を減らしていく。さっきの緊張感はどこへ行ったのか、食べっぷりは中々見応えがある。私がそうやって見つめている間も、彼女の視線は向こうのテーブルに向いていた。

向こうは向こうで、こちらのことなど一切気にする様子もなく、運ばれてきたお芋とかき氷にキャーキャー言いながら、楽しそうに笑みを浮かべている。

「やっぱりあっちのテーブルで、一緒に楽しくやれば？」
「いえいえ。コレぐらいの距離で観察するのが今日の目的ですから」
目の前の彼女は、遠くを見るような目つきで沙綾を見つめている。
「そんな取材で、沙綾を魅力的に撮れるのかしら？」
「撮るのはあくまでも監督ですから。私はいいホンのための着想が得られればいいだけですから」
あくまでもやり方は変えずに、自分の得意な領域で勝ちに行く、か。その若さでそのこだわり、鼻っ柱の強さはご立派だけれども、その頑固さ、優秀さが作家として致命傷にならなければいいけど、いらぬ老婆心を抱きすぎかしら。
どっちに転んでも、若手クリエイターにはいい経験になりそうな予感。口を出しすぎず、程々のところで手も出さず、中立を保って見守ることに徹しよう。
そんなことを考えながら、目の前の伝票を自分の方に引き寄せた。

『七月一三日（木）』――奥野朋子編
初出　令和三年七月一九日　Pixivにて公開

七月一五日（土）

身体が左へ回転するのを感じて、目が覚めた。今の今までどんな夢を見ていたのか、思い出せそうで思い出せない。

それにしても、暑っついなぁ。寝起きの頭に、蒸し暑さが重なって、ますます思考が働かない。タオルケット、出したっけ？　その前に、洗濯機の水着、干さないと。畳に手をついて上体を起こす。

枕元に置かれたメモ書きによると、彩夏とお嬢ちゃんは既に帰宅したらしい。お昼前から五十鈴の市民プールに行って、帰ってきてから遅めのお昼を食べ、タオルと水着を洗濯機に放り込んでから、三人で川の字になって昼寝したんだっけ。で、いま何時？

窓の外はまだ少し明るいけど、一九時？　適当な晩ご飯を食べようにも、乾麺も冷凍ご飯も切らしてたな。今からご飯炊いて、色々片付けながら何か作るのも面倒くさいなぁ。

でも、このままゴロゴロしてても暗くなるだけだし、のそのそと壁に手をついて立ち上がる。まずは水分補給とお昼の後片付け。冷蔵庫を開けると、ポットにたっぷり入った麦茶が冷えていた。買い置きの素麺を食べ切った痕跡も、綺麗に片付けられている。

麦茶をコップに注ぎ、立ったままグーっと飲み干すと、その冷たさに頭が少しずつ冴えてくる。もういっぱいコップに注ぎ、ポットを冷蔵庫に戻しながら半分飲む。コップを食卓において、脱衣所の洗濯機のところまで行くと、お風呂場の突っ張り棒に、水着とタオルとが干してあった。

さっきのタオルケットも、もしかして彩夏？　何から何までやってくれるなんて、なんてよくできた人なんだ。コレが独り身と子を持つ親の差？　帰るときに起こしてくれればよかったのにと思ったけど、それも彼女なりの優しさか。

正体不明の敗北感に苛まれながら、飲みかけのお茶を飲み干した。LINEを立ち上げて、「今起きた。ありがとう」とメッセージを打ち、この後どうしようか思考を巡らせる。

寝汗は気持ち悪いけど、お風呂場の洗濯物はもう少しそのままにしておきたい

し、今からシャワーを浴びて外に出たとして、寝る前にもう一回シャワーを浴びるのもちょっぴり面倒臭い。

仕事用鞄の底から汗拭きシートを取り出し、首回りと腕まわり、手が届く範囲をサッと拭いた。パッと顔を作って、多少着替えて食べに行くのも面倒だし、久々に吉野家のテイクアウトでもしようかな。

学生時代に買ったティアドロップのサングラスをかけたら、スッピンでもなんとかなるでしょ。知り合いに会ったとしても、やり過ごせるさ。

そうと決まればお出かけ用のカバンに財布を入れ、洗面所で顔だけ洗って変な線がついていないか確かめる。お茶を飲んだコップを洗って片付けると、戸締りを確認して自転車の鍵を掴んだ。

泥除けに貼った学校指定のシールが外れただけの、十年選手の自転車に跨がり、近くの吉野家へ向かう。たこ焼き屋の前の交差点を南茨木の方へ曲がれば、あっという間に到着だ。

「おぅ、ルミじゃないか。また会ったな」

駐輪所に自転車を入れ、鍵をかけていると後ろから声がかかった。そちらを振り返ると、今日のプールでも遭遇した透が、持ち帰り用の袋を提げて立っていた。

『七月一五日（土）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年七月二〇日　小説家になろうにて公開

七月一六日（日）

野村さんと芽衣は、娘たちを伴ってもう一回ローラーコースターのスタート地点へ帰っていく。何回目か分からないぐらい、何度も何度も繰り返し滑り降りている。

最初に音を上げたらしい小野寺さんが、遠くで見守っていた僕のところへやってくる。僕は彼女にクーラーボックスから麦茶のペットボトルをとって差し出した。彼女はそれを受け取って日陰に入り、額から流れ落ちる滝のような汗をタオルで拭った。

「お疲れさん」

彼女はかすれた声で「どうも」と言い、ペットボトルの蓋を開けて一気に半分ぐらい飲み干した。

「昨日はプールに行ってたんだって？　野村さんから聞いたよ」

幼馴染みとはいえ、二日続けて友達母娘のお出かけに付き合ってやるなんて、いい人なんだろうな。小野寺さんはかなり疲れた様子でコミュニケーションもほどほどに、ベンチに腰を下ろした。蓋をしたペットボトルを額に当てて、随分暑そうにしている。

僕は家から持ってきたプラスチックの団扇を取り出し、彼女に風を送った。

「ありがとうございます」

僕はストックの団扇を差し出したが、彼女はやんわりと断って、自分のカバンから小さな扇風機を取り出した。百円均一でも買えそうな、電池で動くタイプ。文明の利器があるのなら、団扇はいらなかったか。

「首にかけるタイプも流行ったっけ」

「ありましたね、そんなの。でも、私にはコレが合うっていうか」

小野寺さんの掌に収まっているそれは、少し年季が入っているように思えた。独特のブーンという小さな音が、僕と彼女の間を埋めてくれる。

彼女は微妙な居心地の悪さも飲み込むように、もう一口お茶を飲んだ。遠くの方で点のように見える野村さんや芽衣の方へ視線を向けたまま、口を開く。

「で、どうですか、ヒイラギの方は」

もうそろそろ二回目の冊子が刷り上がってくる同人誌のことを切り出した。聞いてきたのは紙媒体の仕上がりよりは、先行して掲載しているウェブメディアの方だろう。

「順調、とは言い難いかもね。伸び悩んでるというか、反応が思ったほどないというか」

彼女や彼女の勤め先にも編集を手伝ってもらっているし、お母様に表紙の絵を頼んでいる手前、もっと部数が増えるような動きを取りたいところだけれども、メディアの作風や内容のせいか、どうにもこうにも手応えというものに乏しい気がする。

今回も百部で刷ってもらったけど、大量の在庫を抱えるほどでもなく、増刷や初版を増やすほどの兆候があるわけでもなく。双方の編集長としては何かしたい気もするが、始めたばかりで右往左往するのもよくない気もする。

「濃い目の作風ですもんね。読み手も選びますし、ご新規さんをどんどん獲得するようなメディア、同人誌じゃないですよね」

それにしたって、もうちょっと伸びてもいい気もしている。届くべき人に届いて、もう少し読み手のボリュームを確保できれば、具体的な次の手も考えられそうなんだけど。

小野寺さんは滑り降りてくる野村さん母娘に手を振ると、椅子から腰を上げた。

「もう少し焦らず、このまま続けてみましょう。油断は禁物ですけど、焦りも禁物です」

彼女は笑ってそう言うと、クーラーボックスから未開封のお茶を何本か持って日陰から日向に出て行った。

『七月一六日（日）』——森田康徳編

初出　令和三年七月二〇日　NXZ（旧サイト）にて公開

七月一七日（月）

いつもより一時間早めに起きて、子ども達とバタバタし始める前にウェブサイトのアクセス状況を確かめる。昨日、小野寺さんと話した通り、アクセスの伸びは芳しくない。絶対数がそれなりにあるかと言われると、それもそこまでであるとは言えない。

サイトも自分たちで作ったし、構造自体は技術的に間違いないものを入れたつもりだし、デザイン的にもそんなに特異なものにはしていない。検索エンジン対策もちゃんとできてるから自然検索での流入もあるわけだし、リピートユーザーもいるんだけれども、新規ユーザーが根付いている感がどうにも弱い。

キッチンの方から、芽衣が朝食の準備をしている音が聞こえてくる。僕は作業を一旦切り上げ、芽衣の手伝いと亜衣の朝の支度をフォローすることにした。芽衣のやりたいことがスムーズに運ぶように手伝い、亜衣や映美の要望が無理なく通るようにちょっとだけ手を添える。全員がやりたいようにやれるようサポートしながら、僕は僕で朝食をお腹に収め、子ども達や妻の身支度の合間を縫って洗面所で歯を磨き、髭を剃った。

亜衣を幼稚園に送り、家に戻ってコーヒーを淹れているとあっという間に十時前。そろそろ打ち合わせの準備に手を付ける時間。

しかし、資料の方向性、施策や提案が全く思い浮かばない。アクセス状況なんてみんなで共有しているし、そこからパッと見える答えなんてみんな大体一致している。ここから一歩踏み込んだ分析、提言が肝心だろうに――。

「――お腹が痛いなら、整腸剤は薬箱の中だよ」

映美に読み聞かせをしていた芽衣が絵本から顔も上げずに言った。

「別に、どこも痛くないよ」

「そう？　朝からずーっと難しそうな顔をしてるから。そういう表情は、いつも通りだっけ」

芽衣は顔を上げて笑った。

彼女の言う通り、僕が眉間にシワを寄せて考え込むのはいつものことだけれども、彼女に茶化されるのは久しぶりな気がする。

「芽衣の個人漫画より、ヒイラギの方が伸びてないから、どうしようか悩んでてね」

「そりゃあ、ポッと出の同人誌と比べられるようなモンじゃないからね」

それは、そうか。中身のクオリティ以前に、そもそも始めたばかり。自己評価が高すぎて、自信過剰になってただけかもしれない。

「目先の成果主義に走らないって始めたんなら、もうしばらくどっしり構えて、そのまま自信過剰にいいもの作ることだけ考えたら？」

全く持って、彼女の言う通りだ。「いつもの仕事」の癖で捉えちゃうから間違える。コレはそういった諸々のアンチテーゼとして始めたところもあるんだし、多少手応えがないぐらいでビビってても仕方がない。

「どう？　気分は晴れた？」

「ああ。ありがとう」

芽衣は映美に急かされて、読み聞かせに戻って行った。僕は淹れたてのコーヒーを飲みながら、二人のやりとりをぼんやり眺めている。

あくまでも同人誌だし、一人で答えを出す必要もない。みんなでしっちゃかめっちゃかになりながら意見を集約したって問題ないんだ。そういう打ち合わせをするのであれば、資料の構成は――。

『七月一七日（月）』――森田康徳編

初出　令和三年七月二〇日　NXZ（旧サイト）にて公開

七月一九日（水）

「兄貴が帰って来てから半年か。あっという間だな」
目の前で妙に親父くさく枝豆を摘む弟は、話し振りもなんとなく年寄り臭い気がする。ついこの間酒が飲める年齢になった程度だろうに、周りの環境がそうさせるのだろうか。
「あっという間に年末だって言ってるよ、きっと」
晃は渋い表情を浮かべ、「それはヤバいな」と言った。
「こういうところで管巻いて、時々同窓会やって、友達がだんだん結婚していって、自分も何となくで結婚して、子供が生まれて」
「ま、その他大勢のオレはそんな人生だと思うけどね」
「その他大勢で、家業継げるのか？」
晃は話の途中で通りがかった店員を呼び止め、生ビールのお代わりを注文した。顔馴染みの店員か、友達か、仲良さそうにやりとりをすると、僕の方に向き直った。
「その話は、また今度」
「いつ切り出されても、オレは継がないからな」
「分かってる、分かってる。今日はただの飲み会だって」
「友達が捕まらないからって、仕事終わりの兄貴を呼び出さなくてもいいだろう」
晃は顔の前で両手を合わせ、「悪ぃ、悪ぃ」と小さく頭を下げた。
「しっかし、兄貴も大変だな。例の映画」
晃の口振りからすると、今日の瑞希もパワフルだったらしい。体力が有り余っていそうな晃でも、疲れた表情を浮かべていたのはそれが原因か。瑞希も同席すれば良かったのに、まだ作業が残っているからと武藤さんのオフィスまで送って別れたらしい。
「晃の夏も瑞希に捧ぐ、か」
「水曜日か日曜日限定でな」
晃は乾いた笑みを浮かべながら、届いたばかりのビールをグッと呷った。僕も釣られて笑い声が零れる。

「家族旅行なんて歳でもないし、友達と遊びに行こうにも休みが合わないし。1日ぐらい、海かプールは行きたいけど、一人で行ったってしょうがないし」

晃の今の職場的にも、華がある気配はなさそうだ。

「ウチのフットサル部に入れてもらうか？」

デザイン会社のなんちゃってフットサルだけど、多少の出会いはなくはない。人数が足りないとは聞かないが、一人ぐらい外野が参入しても問題はないだろう。

晃は少し考えてから、「再来月以降かな」と言った。

「フットサルはフットサル、夏は夏。暑すぎる時期に走り回るのはちょっとね」

中学までサッカー一筋だった男とは思えないセリフだが、彼の言い分も分からなくはない。

「夏にしかできないことを先にやってから、フットサルかな」

「OK、OK。秋から行けるか、話だけ聞いとく」

僕はスマホを取り出し、念のために自分宛に「晃、フットサル、打診」とメッセージを送った。リマインドの設定は後でいい。ついでにカレンダーを見ると、会社主催の納涼会だの、BBQだののイベントも入っている。若い子が来ると断言はできないけど、意外とあの社長は人脈が広い。この辺りも誘ってみるか。

顔を上げると、晃は「すまん、トイレ」と席を立った。道中でさっきの店員さんにちょっかいをかけながら、店奥のトイレへ姿を消す。あいつはあいつで案外、上手にやってるのかもしれない。

戻ってきてからどんな話をしようか考えながら、メニューを手に取った。

『七月一九日（水）』——浪川一輝編

初出　令和三年八月二七日　NOVEL DAYSにて公開

七月二〇日（木）

最初は遠慮がちに手を伸ばしていたお菓子も、三つ目ともなると封を開けるところから口に入れるところまで、微塵も滞らない。「残しておいても一輝が食べるだけだから」と最初に言われたのに、哲朗さんは手元に置かれたものにも、まだ手をつけていない。

沙綾さんは、哲朗さんのカップに紅茶のおかわりを注ぐ。哲朗さんはまだ緊張が残っているようで、ちょっぴり硬い動きで「どうも」と軽く頭を下げた。

邪魔にならないところへポットを置いた沙綾さんは、自分の席に腰を下ろしながらお菓子を摘み、一口かじった。パリッと仕上げられたラスクの咀嚼音が微かに聞こえてくる。

「どう？　何か、思いつきそう？」

沙綾さんの問いかけに、返す言葉がパッと出てこない。昨日今日の問題じゃなく、一週間近く考えてきた宿題にも関わらず、私も隣の彼も、スッと回答が出てこない。

「サポートの哲朗くんは仕方ないとして、言い出しっぺのみぃちゃんが何にも持ってこれないのはダメなんじゃない？」

沙綾さんは、厳しい目つきと険のある声を私に投げかけた。哲朗さんが隣で身を乗り出して何か言いかける前に、彼女はすぐに表情を和らげて「ま、難しいんだけどね」と優しく言った。

「途中まで検討した捨て案はあるんでしょ？」

沙綾さんの言葉に、哲朗さんが「これです」と印刷した企画書を数点、鞄の中から取り出した。沙綾さんは更に「ボツ案もあるならデータをもらって良い？」と言った。

「じゃあ、リンクを送ります」

「サンキュー。コレね」

沙綾さんは手元にあるタブレットを見て、ボツ案も含めたデータを眺めてくれている。哲朗さんから受け取った書類も確かめながら、「なるほどねぇ。確かにコレだとパンチが弱いかもね」と呟いた。沙綾さんは書類を脇に置き、タブレッ

トから顔を上げた。

「王道のエンタメに、こだわりのビジュアル重視は良いと思うんだけど」

「映画として最後まで見てもらう面白さというか、ご褒美が足りない？」

哲朗さんの呟きに、沙綾さんは渋い顔で「う〜ん」と小さく唸る。

「主人公の成長というか、世界観の変化、ですよね。どちらかというと」

沙綾さんは首を小さく縦に振った。

単なる映像作品ならビジュアルが良ければ十分だろうけど、映画として作るつもりなら、主人公が主人公たる理由、意味合いをもう少し足さないと、見終えたときに物足りなさが残る気がする。それは、私もよく分かる。

単純なシナリオの問題じゃないし、キャラクター設定の問題でもない。私が私自身として何を描きたいのか、何を訴えたいのか。北摂の魅力、ビジュアル的なポテンシャルを伝えたい以上の「何か」を見つけないと、今回の取り組みは「映画」にならない気がする。

「でも、劇的なストーリー、奇抜な変化も足したくないよね。コレはコレで良いんだし……」

沙綾さんに渡した脚本に手が添えられる。自分自身を褒められているような気がして、恥ずかしいような、くすぐったいような不思議な気持ちになる。

「ま、とことん悩んで考えよう。そのために呼んだんだし」

沙綾さんは新しいお茶を入れるために、キッチンに向かってお湯を沸かし始めた。壁際の時計を見上げると、まだ一七時過ぎ。一兄が帰ってくるのもまだまだ先だし、遠慮しないでじっくりディスカッションしよう。帰ってきたら帰ってきたで、巻き込んでやる。

『七月二〇日（木）』——浪川瑞希編

初出　令和三年九月三日　noteにて公開

七月二一日（金）

金曜日の夕方に、アルプラザの食品売り場でレジに並んでいるのは久しぶりかもしれない。亜衣と映美の二人を連れながら、大人一人でそこそこ混雑するところに突っ込んでいくのはちょっぴり怖かったけど、二人とも大人しく、お利口さんで成長を感じた。ご褒美に、普段なら滅多に買わないポケット菓子も二つ、三つカゴに入れてしまった。

康徳さんに頼まれたのはネギだけだったのに、会計を終え、サッカ台で手提げ袋に荷物を詰め終えると、そこそこ大きな荷物になっていた。どうせ明日も買い出しするんだけど、まぁ、いいか。

週末の夕方、フードコートには学生さんが多い気がするけど、そもそも、もうそろそろ夏休み？　来週には色んなところで小学生や親子連れも見かけるようになる、か。シャトレーゼとかケンタッキーに後ろ髪を引かれながら、アルプラザを後にする。

亜衣と映美に気をつけながら、「もう直ぐ帰る」と康徳さんにメッセージを送る。すぐに「了解」と返事が帰ってきた。向こうはもう落ち着いている？

すぐ隣を行き来する自動車や、向かいからやってくる自転車に気をつけながら、川を渡り、住宅街に入っていく。亜衣が先に自宅のドアを開ける。扉で手を挟まないでと祈るように見守りながら、彼女が離したドアに手を伸ばす。奥から、康徳さんの「おかえり」という声が聞こえてくる。

映美と一緒にリビングへ入ると、康徳さんはキッチンから顔を出した。私たちに「おかえり」と言った。私は手提げ袋を食卓に置き、中身をそこに出す。彼は「買い出し、ありがとう。後は、よろしく」と言うと、両手を洗い、亜衣と映美を洗面所に連れて行く。

私はお菓子をストッカーに仕舞い、残りの食品を冷蔵庫にしまうべく、キッチンに足を踏み入れた。餃子を放り込んだスープと、チャーハンのセットという段取りらしい。スープは出来上がっていて、チャーハンは今から炒め始めるようだ。

とりあえず流しで手を洗い、買ってきた白ネギを刻む。スープとチャーハンのどちらに入れるのか、どんなチャーハンにするつもりなのか、戻ってきた本人に

聞いてみよう。

ほんの数分で、娘二人を連れた康徳さんが戻ってくる。彼は私の顔とキッチンを見るなり、「ネギはチャーハンかな。スープは温めるだけ」と言った。

エプロンをつけたままの彼を見つめていると、「あ、じゃあ、こっちを頼む。そっちは最後まで僕がやるよ」と、彼は取り込んでくれていた洗濯物を指差した。私は手を洗い、タオルで手を拭って、キッチンから出た。康徳さんから娘二人を引き継いで、入れ替わりに彼に調理を再開してもらう。

私はテレビをつけ、子どもたちが興味を持ちそうな番組にチャンネルを合わせると、畳まれていない衣類に手を伸ばした。亜衣と映美はすぐにテレビに夢中になり、大人しくはないものの、自分たちだけで遊んでくれている。

キッチンからは美味しそうなゴマ油と中華スープの匂いが漂ってくる。洗濯物を畳み終えたら、食器の準備ぐらいは手伝わなきゃ。週末の天気予報も、そろそろチェックしておかないと。半ば無意識に両手を動かしながら、この後の段取りに思考を巡らせた。

『七月二一日（金）』——森田芽衣編

初出　令和三年九月三日　アルファポリスにて公開

七月二五日（火）

平日夕方の茨木駅は、帰宅ラッシュには僅かに早いとは言え、人の流れが増え始めた。鉱次を連れた真琴は、「もう少し早く出ればよかったね」と呟いた。

「総持寺で降りて、車で帰るか？」

一駅分歩いて車を取りに行くには、少々距離がある。幸弘に訊いて、彼の車を借りて送るという方法も、なくはない。首からストラップで下げ、胸ポケットに収めていたスマホを取り出していると、真琴は「いいよ。電車で帰る」と言った。

「途中で新快速に乗り換えても一本だし、あんまり遅くなるとお母さんにも悪いし」

彼女は、一人遊びを始めていた鉱次の背中に「さ、帰るよ」と声をかけ、子供の背中に手を添えた。顔だけ私の方に向け、「じゃ、お母さんとお兄ちゃんによろしく言っといて」と言い残すと、こちらの返事も待たずに改札を通って行った。

ホームへ降りる手前で一度立ち止まり、鉱次と共に振り返って手を振った。鉱次は母親にされるがままに付き合って、真琴と共にホームへ姿を消した。私は二人の姿が見えなくなるまで見送って、早めの帰宅ラッシュを妨げないよう、駅の東側にあるデッキへ出た。

出入り口を塞がないよう、図書館の返却ポストの方へ避け、スマホを取り出した。

――もうすぐ、智希が駅に着きます。

五分前に来ていた史穂さんからのメッセージ。返事を打つ前に、「オアシスの前にいる」と智希からのメッセージが届いた。「いま行きます」と返事を打ちつつ、そちらへ降りるエスカレーターに向かう。

エスカレーターを降りたところから少し離れて、智希が愛犬と共に立っていた。テディは落ち着いた様子で智希の横でお座りしている。

「これが、お土産？」

智希は、私が両手に下げていた紙袋を指差した。私は頷きながら、右手で持っていた方を差し出す。

「鉱次が退屈そうにしてたぞ」

「そう？ 啓も居たんでしょ？」

今日のお出かけには、陽菜や智希にも声をかけたものの、陽菜には「勉強があるから」と断られ、智希には「部活があるから」と断られた。おまけに今日は、史穂さんも忙しいらしく、テディの散歩も智希に押し付けられていた。

彼のロードワークを兼ねたお散歩コースの途中で、今回の荷物の受け渡しが組み込まれたに過ぎないらしい。彼は紙袋を受け取ると、すぐさま「じゃあ」と背中を向けた。私はその背中に「家まで送るよ」と声をかけた。

「いいよ。まだまだ明るいし、中一の男子だぜ？」

彼は「テディもいるし」と、足元の愛犬に声をかけた。

「ペットの散歩には付き合えて、ジジィの散歩には付き合えないか？」

智希は少しだけ不服そうな表情を浮かべるも、小さく息を吐くと「行くよ」とテディのリードを軽く引いた。私は、彼らに置いていかれないよう、歩き始めた。

智希はまっすぐ消防署の方へ向かわず、次の信号を右手に曲がって、岩倉公園の方へ足を向けた。遊具ではしゃぐ子供たち、芝生で駆け回る学生の姿が見えてくる。公園の前で動きを止めた愛犬に、智希は「十分、遊んだだろ？」と声をかけていた。

『七月二五日（火）』——武藤幸次編

初出　令和三年九月九日　Mediumにて公開

七月二九日（土）

大量の写真が表示されているモニターを睨んでいると、向こうの方から野村さんが恐る恐るといった様子で近づいてきた。腕組みを解いて、眉間を緩めながらそちらへ顔を向ける。野村さんは手元のフラッシュメモリを差し出しながら、

「今日の動画、チェックしてもらってもいいですか？」と言った。

僕は「ありがとうございます」と言いながら、それを受け取った。今日の日付でリネームされている動画ファイルを開く。最近、例の映画プロジェクトが動き始めたため、週末のダンス練習には同席できていない。

二現場体制は沙綾さんも同じだろうに、疲れを感じさせない動きに思える。後ろの方でちょこちょこ動いているみぃちゃんも、最初の頃に比べれば、かなり動きにキレが出てきたような気がする。

「うん、コレでいいんじゃないですか？」

僕の言葉に、隣で縮こまっていた野村さんの表情が緩んだ。野村さんの映像編集もどんどん上手くなっている。Mサイズから直接依頼する案件はないだろうけど、この動画に関してはコレで十分だ。

「次から、ノーチェックで大丈夫ですよ。直接アップロードできるように、ログイン情報共有しておきますね」

野村さんの視線が、壁の時計に向いた。もうそろそろ、一七時半。

「今日の分は、僕の方で上げとくんで」

野村さんは「ありがとうございます」と頭を下げると、さっきまで座っていた席へ戻り、帰り支度を始めた。僕はそれを視界の隅に留めながら、受け取った動画ファイルのアップロードに取り掛かる。

入り口のドアが開くと、いつもよりラフな格好の武藤さんが顔を出した。野村さんは後ろを振り返り、少々緊張した面持ちで「お疲れ様です」と会釈した。武藤さんは「お疲れさん」と返し、「野村さん、今帰り？」と付け足した。野村さんは頷いて、早々に「お先に失礼します」と、僕にも頭を下げてオフィスを出ていく。

武藤さんは「ほいほ〜い」と軽い調子で彼女を見送ると、自分のコーヒーを入

れて、僕の方を見ながらカップを啜った。
「君も、いつまで仕事してるつもりだ？」
僕はアップロードの進行度合いを見ながら、「写真の選定が済んだら、引き上げますよ」と答えた。武藤さんは人差し指を立てて、左右に振る。
「期日は大事だけど、休むのも仕事だ。また、無茶してるんだって？」
「無茶なんてしてませんよ。今やりたいことを、できる体力があるうちにやってるだけなんで」
学問も、仕事も、半分遊びのような取り組みも。どれも手を抜かないで成し遂げたい。武藤さんは肯定も否定もせず、「でも、今日と明日はしっかり休みなさい」と言った。
「出来れば、ふらっと『いばフェス』に顔を出して、適当に飲み食いして、適当に写真とか撮って、SNSにアップロードしてもらえると、非常にありがたい」
武藤さんは笑顔を浮かべながら、「非常に」に力を入れて言った。
「分かりましたよ。じゃあ、動画のアップロードをしてるんで、電源は落とさないでください」
僕は充電していた自分のスマホをポケットに入れ、カバンから財布を取り出した。武藤さんは、「承知した」と笑顔で応えた。彼の「いってらっしゃ〜い」を背中に受けながら、Mサイズのオフィスを後にした。

『七月二九日（土）』——原田哲朗編
初出　令和三年九月九日　ノベルアップ+にて公開

七月三〇日（日）

シャワーも浴びて、スキンケアも済ませた。さっさと歯も磨いて、ベッドに入ってもいいんだけど、寝る前に一本ぐらいは開けたいところ。今日も一日暑かったけど、日中は仕事で飲めなかったし、打ち上げも早々に切り上げてきちゃったから、ビールを飲みたくて仕方ない気持ちだけがズーッと残ってる。

振替で明日は休みにしてもらったけど、今日のビールは今日のビール。明日は明日で飲むんだろうけど、それは明日の私が決めればいい。一昨日から冷蔵庫にいた五〇〇ml缶を取り出して、えいやとプルタブを起こす。

クーラーの効いた部屋で飲むビール、一日外にいた分と、長々とお預けをくらっていた分とで、極上に美味しくなっている。一気飲みは良くないんだろうけど、グラスに注いだ量の半分以上、三分の二がなくなった。軽くなった五〇〇ml缶を傾け、残りの液体を注ぎ込んだ。

お風呂上がりで乾いた身体に、五〇〇mlは瞬く間に吸い込まれる。一本だけと思っていたけど、もう一本ぐらいならセーフだろう。二本目はゆっくり飲もうと心に誓い、新しい缶を冷蔵庫から取り出して、空になったグラスへ注いだ。

ダイニングで食卓に座り、一人でこのままストイックにビールと向き合っていると、またあっという間に飲み切ってしまう。何かつまむのは控えるとして、とりあえずスマホでも持ってこよう。

自分の部屋に置いたカバンから、スマホを取り出して食卓に戻る。彩夏から「おやすみ」と通知が届いていた。LINEを開いて、「おやすみ〜」と返事を返した。

念のためにチャットツール、メールも開いてみたけど、お風呂に入る前に見たときから、目ぼしい更新はなさそうだった。武藤さんや哲朗くんは、まだあちらのオフィスで賑やかにやっているらしい。

前々から明日は休みの予定だったけど、一応カレンダーにも目を通す。私宛のスケジュールは登録されていない。気になるインタビューがお昼前に設定されているけど、この時間帯は一応動けるようにしておいた方がいいのだろうか？　何事もないとは思うけど、いつも通りに起きるようにしておこうか。

そうなると、昨日今日で行けなかった買い出しに早めに行って、身体を空けておかなきゃいけない。休日前だから夜更かしして、遅い時間に起きるのもできなくなったし、ふらっと出かけるのも、午後からになる。

デートの予定も、ショッピングの予定も、映画の予定も、何にもないから別にいいんだけど、夕方に彩夏でも誘って、今日はお休みで行けなかった居酒屋にでも行こうかしら。あとでメッセージだけ送っておこう。

さて、程よく酔っ払ってきたし、そろそろTwitterとインスタでエゴサでもしようかな。ハッシュタグとか決めてないから探すのも一苦労だけど……。

ネガティブな呟きもなくはないし、半分内輪で上げている写真もチラホラあるけど、純粋に楽しんでくれている地元の人っぽい写真、動画も上がってる。それを見ながら、一人でにやにや笑みを浮かべてビールを飲む。

誰かに見られたらヤバいなと思いつつ、連絡を取りたいアカウントをメモっていく。寝る前にDMだけ送るべきか否かを考えていたら、二本目のビールを飲み干していた。

『七月三〇日（日）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年九月一〇日　小説家になろうにて公開

七月三一日（月）

香織に頼んだ昨日、一昨日のデータ入力を確認していると、香織が僕の後ろを見やり、「あら、森田さん。こんにちは」と声をかけた。昨夜もいばフェスの会場で会ったはずなのに、蛍光灯の下で見る顔の黒さに少々驚いた。

挨拶も程々に、香織にお茶を入れてもらうように頼んで、森田さんと共に応接スペースへ移動する。

「月末の月曜日に時間とってもらって、ゴメンね。今日も、例の撮影？」

彼は頷きながら、「今日というか、昨日の深夜から今朝の早朝までですね」と言った。

「じゃあ、昨日、あの後から？」

「子供らのお風呂と寝かしつけもやってから、ですけどね」

「さすが森田さん、お義姉さんに任せっきりのウチの兄貴とは全然違うわ」

香織は、グラスに氷も入れたアイスコーヒーをコースターと共に森田さんの前に置いた。ガムシロップとフレッシュも手元に置こうとするが、彼は「ありがとうございます」と言いながら、ストローだけ受け取った。

「そのまま起きっぱなし？」

「いえいえ。明け方に撤収して、家に帰ってから仮眠、お見送り、二度寝でココですよ」

先に寝ている奥さんを起こさないように帰宅して、朝は普段通りの時間に起きて食卓についている彼の姿が容易に想像できた。

「じゃあ、銀行回りは今からだ」

森田さんは「そうなんですよ。とにかくバタバタで」と言いながら、グラスにストローを刺してコーヒーに口をつけた。彼がチラリと目をやった時計を見ると、そろそろ一三時を指そうとしている。あんまり、のんびりやらない方が良さそうだ。

僕は早速タブレットを操作して、カレンダーを表示する。

「例の親睦会、この辺の日程でどうだろう？」

明日から始まる八月、二週間先の週末あたりから「夏季休業」のスケジュール

が入っている。僕はその前を指しながら、空中にペン先で細長い円を描いた。天候に恵まれず、本腰を入れて撮影に入れなかった梅雨がようやく明けたのに、親睦会やらお盆休みやらで水を差すのも何となく気が引ける。

ただ、最初からこういうスケジュールになることも織り込んでくれていた森田さんは、顔色一つ変えることなく、「五日の土曜日か、お盆休みですけど、その次の一二日の土曜日でどうです？」と言ってくれた。

「次の週末となると、ちょっと急な気もしますけど」

「そうだね。その代わり、お盆となると、来れる人が限られちゃうか」

僕の言葉尻を捉えて、森田さんは「それは、お盆じゃなくても同じですよ」と突っ込んだ。確かに、そりゃそうだ。

「じゃあ、第一、第二で候補にしておいて、調整しようか」

「それでいいんじゃないですか？」

誰が来るのか、最終的に何人になるのかも、我々だけではどうせ分からない。他の候補日も加えて、後は全員に都合を聞いてみよう。家族連れも参加OKにしておいて、山の方のキャンプ場を借りるか、万博公園辺りのBBQ会場を予約するようにしよう。

ザックリとしか決まっていなかった親睦会が、森田さんの提案によってどんどん方向性が定まっていく。半分休みのつもりでゆるゆる仕事をするつもりだったのに、何だか、やる気まで湧いてきた。

『七月三一日（月）』——武藤幸弘編

初出　令和三年九月一〇日　カクヨムにて公開

八月二日（水）

施術室を片付け、さっきまで使っていたオイルの在庫を簡単にチェックする。お一人ずつ終わるごとに実施する、落とし物、忘れ物のチェックを兼ねた拭き掃除に取り掛かる。

普段なら、先に表の看板を架け替え、サロンの入り口を施錠した後にやる仕事だけど、今日は最後のお客さんを迎える前に済ませてある。

ベッドの掃除から床の掃除に切り替えるタイミングで、更衣室から沙綾が出てきた。彼女はスマホを見ながら、カウンセリング用のリクライニングチェアに身体を預けた。横の小さなテーブルには、水が入った紙コップが置いてある。それを口元に運びながら、沙綾は「あれ、お母さんは参加しないの？」と言った。

私はウェットシートを付けたモップをかけながら、「急に言われても、土日は忙しいから」と答えた。

「私は都合つけられても、お客様にはお願いできないでしょ？」

「そっか、そっか。一応、予約が取れない隠れ家サロン、だもんね」

床掃除をしているから表情を確かめられないけど、きっと底意地の悪い笑いを浮かべているのだろう。「どこで育て方を間違えたのか」と悩むべきなのか、女優、モデルとして「立派に成長している」と納得すべきなのか……。後者だと思って、無用なストレスを抱えずに忘れてしまおう。

ウェットシートを外し、ドライシートに付け替える。ドライ、ウェットで、もう一回ドライをかけて、入念に拭く。手と身体を動かしながら、さっきの施術や、今日一日の接客を振り返る。収支の確認や反省は、仕事着から着替えた後でいい。

今日も、一回一回の施術をちゃんとやれた。一日中サロンで仕事をしたのは久々な気もする。セミナーやら、交流会やら、他の仕事も楽しいけど、やっぱりココが本業で私の原点なのね。

モップをバックヤードに片付け、カウンセリングスペースに移動する。沙綾はまだリクライニングチェアの上でスマホを触っていた。彼女はチラッと私の方を見るものの、すぐさま自分の作業に戻る。

私は私で立ったまま、デスクのモニターに目を落とす。メールやSNS、チャット

ツールに、すぐ返信しなければいけないものは飛んできていない。あとは、ココと更衣室の照明を落とし、使わない器具の電源を切ればサロン業は終了なんだけど、沙綾はまだ居座るつもりなのかしら……。

私が顔を上げて沙綾の方を見ると、彼女はなおも、スマホを触っている。私は一つにまとめていた髪を解きながら、「晩ご飯も食べていく？」と彼女に訊いた。沙綾はようやく顔を上げ、首を横に振って、「もう、帰る」と言った。

「今から駅前まで行って、みんなでご飯だから」

「今から？」

私は思わず、時計に目をやった。そろそろ午後七時。沙綾は「そう、今から」と念押しした。彼女はリクライニングを戻して、椅子から腰を上げる。

「迎えがもう着くっていうから、帰るね」

「専属のドライバーがいるなんて、流石は主演女優ね」

「まあね～」

沙綾は誇らしげに、入ってきた時と同じように、居住用の玄関へ歩を進める。

私は彼女を見送りながら、サロンスペースの照明を切るスイッチを押した。

『八月二日（水）』――奥野朋子編

初出　令和三年九月一五日　Pixivにて公開

八月三日（木）

あまりの暑さに目が覚めた。窓が閉め切ってあって、サーキュレーターも動いてない。喉の渇きが尋常じゃないけど、それ以上に頭がクラクラする。ベッドの上で身体を起こして、エンジンがかかるのをボーッと待ってみても、仄かな気持ち悪さが胸の辺りに延々と居座っているだけで、状況は何も変わらない。

とりあえず、枕元のリモコンに手を伸ばし、サーキュレーターの電源を入れる。首振り機能で、生温い風が通り過ぎては戻ってくる。何度か風を浴びているうちに、多少は頭がハッキリしてくる。

家の中が随分と静かだ。耳を澄ましても、サーキュレーターが首を振るたびに奏でるカタカタという音しか聞こえてこない。窓の外はすっかり明るく、陽も十分な高さに登っているらしい。ベッドに座ったまま、机の上の時計に手を伸ばした。午前一〇時過ぎ。父も兄も、朝の家事を終えた母も、流石に出かけている時間。

バイトも休み、映画撮影も私のチームは休み。それで昨夜、飲み過ぎたんだっけ。晃兄は仕事があるからって、お酒は一滴も飲まずに先に帰って、沙綾さんは一兄が連れて帰って、碧さんと哲朗さんの部屋で飲んで、それから――。

それからの記憶が微塵もないけど、出かけた時と同じ服のまま寝てたんだから、どうにかして帰ってきて、ベッドまでは辿り着いたのか。ベッドの横に放り出してあったカバンをザッと確かめると、忘れ物も落とし物もないらしい。財布も鍵も入ってる。

とりあえず、水分補給とシャワーを浴びよう。充電していたスマホを取って、慎重に階段を降りる。リビングに入って、冷蔵庫を開けた。「天然水」のラベルがついた五〇〇mlのペットボトルと、ウコン的なドリンク剤が入ったビニール袋が、中身も出さずに突っ込んであった。両方取り出すと、底の方に流麗な文字で書かれたメモが出てきた。

「明後日もよろしく」と書かれた字を見るに、どうやら碧さんのメモらしい。何があったか全く思い出せないままグループLINEを立ち上げると「瑞希さんは無事に送り届けました」と碧さんのメッセージが残っていた。彼女はそれから電車

で帰宅したらしい。

彼女の心遣いと思うと素直に受け取り辛いけど、この気持ち悪さは早めに何とかしたい。先にビンの方をグッと飲み干し、口の中に残った後味を流し込む感覚で、ペットボトルの水で濯いだ。

何となく小腹も空いた気がするけど、炊飯器を開けてみてもご飯は残っていない。冷凍庫を開けても食パンは切れているらしい。シャワーを浴びてから冷蔵庫のご飯をチンして食べるか、とか考えてたら、スマホの画面に通知が出た。碧さんから、画像が送られてきたらしい。

――スッピンの寝顔も可愛いね。

メイクも落とさないで寝ずに済んだのは良かったけど、彼女にそんな写真を撮られたのはまずかった。調子に乗って飲まされすぎだよ、私。

返事を考えている間に、リマインダーから通知が届く。1時間後に、哲朗さんと共に「イオンモールで買い出し」の予定になっている。そういえば、そうだった。とりあえず寝汗を流して、出かける準備をしなくては。碧さん対策は、動きながら考える！

『八月三日（木）』――浪川瑞希編

初出　令和三年九月一五日　noteにて公開

八月六日（日）

亀岡から山間を通り抜け、昨日も見たような川沿いの道をクネクネ進む。信号を越えてしばらく行くと、見通しの良い直線道路が見えてきた。車で実家まで行き来する時はよく通る道なのに、もう少し行ってサイゼリヤ、その先のコーナンぐらいまで行かないと見慣れた景色という感覚にならない。

「このまま、真っ直ぐで良いんだっけ？」

サイゼリヤの看板が左手前に見えてきたタイミングで、隣でハンドルを握る雄輔が口を開いた。次の信号を右折してもいいけど、まだ真っ直ぐ行ったルートの方が、私としては見慣れている。

「うん。まだ道なりで。業務スーパーが見えてくるから、その次の信号まではこのままで」

「りょーかい」

雄輔は軽い調子で返事をすると、私の注文通りに信号を直進する。右側にコーナンの看板が見えてきて、だんだん生活圏に戻ってきたって感じがしてくる。業務スーパーの前は日曜日の夕方だというのに、駐車場に入れない車が列をなしていた。それを横目に道なりにカーブを曲がると、次の信号が見えてくる。

「次は右折だっけ？」

「そう。手前の横断歩道をさらに右折ね。グルっと曲がって細い方」

「ほ〜い」

雄輔は私に指示されるがまま、喫茶店の看板が置いてある細い道へ車を入れる。目の前に街の電気屋さんを見ながら、一方通行の狭い道を西へ進む。

「で、この後川沿いに出て、アルプラザでいいんだっけ？」

雄輔は左右の細道にも気をつけながら、前を見たまま言った。

「買い物してから、家まで送らなくて良いの？」

「そこまで付き合ってもらうのは、流石に気が引けるというか」

「別に良いよ。今から帰ったって、どうせ一人だし。お義兄さんにも、しばらく会ってないし」

「あれ、そうだっけ？」

月一ぐらいで康徳さんと共に、娘たちを連れて実家に帰ってるけど、雄輔は居なかったっけ。今年は牧人夫妻とやりとりする機会が多くて、実家との関係性も強くなってた気がしたけど、独身の末弟のことは記憶からすっぽり抜け落ちていたか。

「お義兄さんも忙しそうだし、邪魔になるならアルプラザで降ろして帰るけど」

雄輔は口を動かしながらハンドルを切った。車は川沿いの土手に出て、西国街道にぶつかる信号まで来た。左折すれば、すぐにアルプラザ。

カーナビの時計は、一六時二二分。今から折り返しで実家に帰っても、早くて一八時。ここまで送ってもらったのに、降ろしてもらって適当に「さようなら」というのも可哀想か。

「ノンアルコールでも良いなら、晩ご飯ご馳走するけど？」

「え、いいの？　ノンアルコールでも、何でも良いよ。じゃあ、駐車場に入れちゃうね」

雄輔は、アルプラザの裏口に回らず、駐車場の入り口へ向けて車を進めた。私はスマホを取り出して、実家宛に雄輔はうちで晩ご飯を食べてから帰る旨を伝え、康徳さん宛に雄輔の分も晩ご飯の頭数に入れてもらうよう、メッセージを送った。康徳さんからすぐに、「了解」の言葉が返ってくる。

雄輔はアルプラザの屋上駐車場へ車を止め、鼻歌まじりにシートベルトを外した。私は彼の嬉しそうな顔を見ながら、今晩の献立と、今から買わなきゃいけなかったリストとを頭に思い描いていた。

『八月六日（日）』――森田芽衣編

初出　令和三年九月一七日　アルファポリスにて公開

八月七日（月）

久々に、月曜日の中央図書館にやって来た。午前中にも関わらず、いつもより人が多いような気がするのは夏休みの真っ只中だからか。奥に見える自習室も満室のようだ。中高生ぐらいの受験生のみならず、課題図書を求める小学生や、長期休暇のお供に、絵本や児童書を求めに来た親子連れもチラホラ見える。

入ってすぐの返却窓口の列に並ぶ。右手の予約受取のコーナーも、普段より利用者の出入りが多いような気がする。自分の番を待つ間に、肩から提げたマイバッグから本を取り出した。三冊の文庫本をまとめて右手に持ちながら、順番に捌かれていく様子を眺めている。

流石に今日は人数が多いらしく、いつもは別の役割で使われている向こうの窓口まで、返却対応に活用されている。いま一組終わり、次の組が呼ばれた。四、五歳ぐらいの女の子と、その妹を連れた親子連れ。夫婦だろうか。大人は二人も付き添っている。

奥さんの方は、なんとなく見覚えがあるような。顔立ちがよく似た旦那の方は、奥さんより大分年若に見える。

「次の方、どうぞ」

よそ見をしていると、自分の前が空いていた。職員の視線が私を捉えている。私は後ろに並んでいた人に「すみません」と軽く頭を下げながら、そそくさとカウンターの前まで歩を進めた。手に持っていた本を職員に差し出す。

文庫本は一冊ずつ変なものが挟まっていないか、汚れがないかをチェックされ、機械に通された。一冊だけ奥の棚に置かれ、残りの二冊は「後ろの棚へお願いします」と戻ってきた。全て「F」の棚に置けばいい。

しかしながら、「かえってきた本」も思わぬ出会いが待っている。大して用もないのに「三〇〇」番台のワゴンを見てみたり、「八〇〇」番や「九〇〇」番のコーナーの前も歩いてみる。今回はあんまり面白い出会いはないらしい。「M」のコーナーも今一つ。大きな「F」の札がついていた棚に本を返した。

あとは、新着のコーナーと特集コーナーをチラッと見て、適当に文庫本のコーナーを眺めて帰るかな。目ぼしい本、どうしても読みたい本に、今日は縁が無さそうだ。

「あら、武藤さん」

「児童書は二階」と案内が貼ってある階段の前で、さっきの奥さんに呼び止められた。「ああ、どうも」と普段より声を抑えながら、名前を思い出そうと必死に頭を働かせる。

「森田の妻です。先日は、ありがとうございました」

彼女は子供たちに階段の前を塞がないように促しながら、私に軽く頭を下げた。そうだ、森田さんだ。二人のお嬢ちゃんも、ついこの間ご挨拶したんだっけ。でも、後ろにいる男性は、私の記憶にある「森田さん」とは明らかな別人だ。

森田さんは何かを察したらしく、後ろの彼を指しながら「弟です」と言った。男性は「どうも」と挨拶してくれた。そう言われると、全体的な雰囲気が似ているような……。

雄輔と名乗った彼は、姪っ子ちゃんに促されて、貸出機の方へ連れて行かれた。森田さんは、私に軽く頭を下げ、彼らをゆっくり追いかける。私は私で別れのやり取りをした後、文庫本の棚の前へ移動した。

『八月七日（月）』——武藤幸次編

初出　令和三年九月一九日　Mediumにて公開

八月一一日（金）

朝食を終え、早々にテレビの前で遊び始める亜衣と、隣でそれを見ている映美。私は食器を洗いながら、いつもよりエンジンの掛かりが悪そうな夫を眺めていた。彼はボサボサの寝癖を気にすることなく、ぼんやりとテレビや子供たちの方へ目を向けている。

「本当に、迎えに来てもらわなくてよかったの？」

目の前で流れる水の音に負けないよう、少し大きめの声で言った。彼は頷いて、ゆっくりと振り返った。大きな欠伸をしながら、「僕が運転するよ」と答えた。

「最近、雄輔くんに頼ってばっかりだし。帰りは電車って訳にもいかないし」

実家までの送り迎えぐらいなら、雄輔は喜んでやってくれると思うけど、彼なりに何かが引っかかっているのだろう。

「無理してない？」

彼は自信たっぷりに「大丈夫」と言った。私とのやり取りで多少は血が回るようになったらしく、徐々にいつも通りの彼に戻ってきた。私は彼に新しいコーヒーを入れる。彼が「ありがとう」とゆっくりそれを飲む間に、子ども達を洗面所に誘導して歯磨きを済ませた。リビングに戻ると、今度は二人とも子供番組に釘付けになり、テレビの前で大人しく座っている。

「じゃあ、今パパッと入ってくる」

康徳さんはコーヒーを飲み切ると、カップを流しに置いて風呂場へ向かった。しばらくすると、シャワーの音が聞こえてくる。

時計に目をやると、まだ八時を過ぎたところ。今から準備して九時過ぎ出発は流石に早すぎるけど、必要なものぐらい整理しておいてもいい頃合い。お盆のお供えと、道中の子供たちの水分、あとはいつものお出かけセット、と。酔い止めの薬も出しておかないと。

さっきまで朝食が並んでいた食卓に、荷物がどんどん固められていく。今回はパパッと日帰りだから、いつもより量は少ない。トローチタイプの酔い止め薬も、カバンの横に添えておく。

実家近くの駐車場も探しておかないと。牧人も車で来ると言ってたし、実家の

空きスペースはそっちに譲ろう。雄輔がもう起きていることを願って、彼に「駐車場、どこかあったっけ」とLINEした。自分で変に検索するより、彼の方が詳しいだろう。すぐに返信がなくても、向こうへ着くまでには何かしら返事があるはず。

シャワーの音が聞こえなくなると、今度は電気シェーバーの音が聞こえてきた。私は流しに残っていた食器を洗い、食器乾燥機のつまみを回した。康徳さんは、髪もしっかりセットし終えてリビングに戻ってきた。

彼は私に、「どうぞ」と洗面所の方を示した。私は「ありがとう」と返し、「子供たちお願い」と伝えて洗面所に移った。目元だけ簡単に化粧して、ボサボサの髪へ櫛を入れ、少しだけ整えた。

リビングに戻ると、康徳さんは外行きの格好に着替え、子供たちと楽しそうに遊んでいた。

「牧人くんへの誕生日プレゼントとか、買って行った方がいいの？」

彼は地図アプリを見ながら言った。私は首を振りながら、「いらない、いらない」と答える。

「了解。じゃあ、混むつもりでボチボチ行こうか」

康徳さんはトイレに向かった。私は亜衣と映美に酔い止め薬を舐めさせ、食卓の荷物を玄関に運んだ。康徳さんがトイレから出てきたら、順番に子供達と私のトイレを済ませて、外に出る。道中の段取りもなんとなく頭の中に描き、指を折り曲げながら一つ一つ確かめた。

『八月一一日（金）』――森田芽衣編

初出　令和三年九月二三日　アルファポリスにて公開

八月一四日（月）

藤堂のツテで入手した、過去二年分のノートと、去年の講義を記録した動画。一昨年の分はオンラインでアーカイブが残っていたから、それとノート、教科書とを照らし合わせれば、概ね理解できたように思う。

ノートも講義もデータで残しておいてくれた藤堂の知人、結果的にビデオ・オン・オンデマンドとなっていた一昨年の授業方針に感謝だな。上坂さんたちにお願いしても、あの人たちのことだから耳を揃えてデータを提供してくれただろうけど、藤堂のおかげで下手に借りを作らずに済んだのもありがたい。なんだかんだで、持つべきものは友だな。

今度、食堂で会ったら一食分ぐらい奢らないと……。

中身が頭に入った「つもり」で終わっても仕方がない。グループワークや実習は仕方ないとして、座学はテストもやっておきたい。カバンの中には、先生に頼み込んで入手した「当時のテスト」と、模範解答も入っている。今から広げて手をつけてもいいんだけど、小腹が空いてきたような気もする。モニターの右上へ目をやると、そろそろ一一時半。

周囲を見渡すと、電源が取れる窓際の席も半分ぐらいが埋まり、他の席も八割ぐらい埋まりかけていた。背後の大きなテーブル席も、互い違いにほぼ埋まっている

一旦切り上げて、あとは家でやろうか。隣のマクドナルドで食べて帰ってもいい。

僕はイヤホンを両耳から外し、ノートパソコンを閉じてカバンに入れた。藤堂の知人から借りた教科書も汚れや折り目がつかないよう、丁寧に仕舞う。動画を見ながらメモを取っていた筆記具もザッと筆入れに入れ、そのまま隙間にねじ込んだ。

氷が溶けて、底に残っていたガムシロと混ざった液体を飲み干し、空のプラカップを片手に、カバンを背負って椅子から腰を上げた。フタとストローを分け、カップも分別する。手を洗いたいけど、どうせならトイレを済ませてから出ようか。

運良くトイレは空いていて、サッと用を足して手を洗った。トイレを済ませて外へ出ようとしたところで、見覚えのある横顔が目の前を通り過ぎた。その背中を追いかける形で外に出る。

「陽菜ちゃん、だよね？」

僕が目の前の背中に声をかけると、女性は足を止めて振り返った。髪型や目元の雰囲気が大人っぽく見えるけど、目の形や輪郭はお父さんによく似ている。彼女は「どうも」と会釈すると、そのまま駐輪場から自転車を出した。

僕が自転車を出すのを気にかけることなく、そのままマクドナルドの方へ自転車を押していく。僕はそれを足早に追いかけた。彼女の自転車に並べる形で、自転車を停めた。陽菜ちゃんは、「何故、ずっと着いてくるのか」とやや鬱陶しそうな目で僕を眺めていた。

「今からお昼？　奢るよ」

表情が若干濁る。ちっちゃい頃はもっと素直な子だった気がするけど、高校生ともなるとそんなもんか。美桜とはまた一味違うややこしさだな。

「一緒に食べなくていいからさ。俺も、勉強したいし」

僕は自分のカバンに手を添えた。彼女も大きなカバンを下げている。陽菜ちゃんはツンとしたまま、店の中へ入っていく。僕がボサッとしていると、彼女はドアに手をかけたまま、「早く、早く」と僕に手招きをした。

『八月一四日（月）』――原田哲朗編

初出　令和三年九月二四日　ノベルアップ+にて公開

八月一六日（水）

目の前に見えてきた交差点を、たこ焼き屋さんのある方へ渡る。このまま道なりに行っても問題なく駅には着くけど、微妙に遠回りになる。僕の前を歩く親子みたいな女性二人は、後ろを気にすることなくおしゃべりし続けていた。

「今からでも、うちのサロンでバイトしない？」

朋子さんはさっきから延々と、鈴木さんを口説いている。さっき受けたマッサージは確かに即戦力だろう。朋子さんの手ほどきを受ければ、のれん分けも早そうだ。朋子さんの支援、プロデュースも女性起業家としては魅力的だろう。

鈴木さんは鈴木さんで、やんわりと誘いを断り続けている。駅の真下まで来ると流石に朋子さんも諦めたらしい。口説くのをやめて、鈴木さんに名刺を差し出した。

「卒業後でも就職した後でも、気が向いたらいつでも連絡しなさい。人生、あなたが思ってるより、ずっと長いんだから」

鈴木さんはやや苦笑いをしながら、「ありがとうございます」と名刺を財布に仕舞った。僕のことなんて忘れていたんじゃないかと思っていたけど、朋子さんは僕の方へ振り返った。

「それじゃあ、私はお酒を見て帰るからココで。奥さんにもよろしくね」

彼女は僕の返事を待たず、颯爽と隣のやまやへ入って行った。僕はその背中に軽く頭を下げ、一足先に改札へ向かうエスカレーターに乗っていた鈴木さんの後についた。彼女は二つ下のステップに立っている僕の方へ微笑んでくれる。

「勝手にマッサージしちゃいましたけど、大丈夫でした？」

エスカレーターから降りながら、彼女は優しい声で僕に訊いた。Mサイズのオフィスを出てからここまで歩いてきたけど、特に痛いところや具合が悪そうなところは出ていない。このところ、何となく滞っていた何かが無くなった気がして、ちょっぴり軽い気もする。

「いいマッサージだったよ。こっちこそ、急におじさんの身体を触らせてごめんね」

朋子さんが即戦力だと口説くぐらいなら、タダで受けて良かったのだろうか。

高校生の頃、「本気で習いに行った」と言っていたぐらいだから、習得するまでの費用もかかっていたはず。

「マッサージのお礼、本当にいいの？」

終わった直後にも訊いたけど、彼女は「素人の手遊びですから」と再び断った。

「あそこのケーキとか、そこのお茶ぐらいなら」

僕は改札横のケーキ屋さんや、改札の向かいにある喫茶店を指しながら言った。

鈴木さんは案内表示を横目で見ながら、なんとなく居心地悪そうな笑みを浮かべている。

「引き留めちゃってごめん。気持ち悪かったよね」

「気持ち悪いだなんて、そんな」

鈴木さんは全力で否定してくれる。

「執筆の機会を提供いただいて、感謝こそすれ、気持ち悪いだなんて思ったこと、一度もないです。あのマッサージも、全然足りないと思いますけど、そのお礼の一つですから」

京都行きの次の電車が入ってくるというアナウンスが流れた。鈴木さんは「失礼します」と頭を下げ、足早に改札を通り抜けていく。僕は彼女が風のように去っていく様を見届けていた。姿が見切れる前にこちらを振り返り、もう一度頭を下げてくれた姿がとても眩しく見えた。

『八月一六日（水）』——森田康徳編

初出　令和三年九月二四日　NXZ（旧サイト）にて公開

八月一七日（木）

日が落ちて、ようやく空が濃い紺色へ変わっていく。これで日中の暑さももう少しマシになれば最高なのだけれど、今夜も相変わらず、寝苦しそうだ。冷房と外の空気が混ざり合って、なんとも言えない微温さを味わいながら、まだ微かに冷たいビールを飲んだ。

向かいの席に座る哲朗は、色が違うビアカクテルに口をつけ、満更でもなさそうな顔をしている。隣に座っていた森田さんは、控えめなペースでグラスを傾けていた。

「強引に付き合わせちゃって、ごめんね」

僕の言葉に、森田さんは「いえいえ」と微笑んだ。

「たまにはこういうのも必要ですから。向こうは向こうで、お義父さん、お義母さんと美味しいもの食べに行くって言ってましたから」

森田さんは笑いながら、自分の前にあるハンバーグにナイフを入れる。なんとなく遠慮がちな動作で口へ運んだ。

哲朗は楽しそうに生ハムを二、三枚を箸で取って食べた。さっき運ばれてきたばかりの緑のビアカクテルを飲み切って、ドリンクメニューを開いている。

「お盆も全然帰らなかったんだって？」

僕の問いかけに、哲朗は顔を上げることも、返事をすることもない。メニューに目を落としたまま、「どうしよっかな〜」と呟いている。

「この間のパーティにはいましたよね？」

森田さんはビールで口を湿らせ、哲朗の横からドリンクメニューに目を走らせる。珍しくスーツで着飾っていた哲朗を見たのは、先週のことだった。森田さんも会場にいたんだっけ。

僕が「どうやら、あの時だけだったらしい」と言うと、森田さんは「へー」と半ば驚いた様子で声を上げた。「もっと帰って、親孝行した方がいいよ」と付け加えながら、森田さんはワンサイズ大きめのビールを頼んでいた。

「必要なタイミングで帰ってますよ。勉強と仕事で暇がないだけです」

哲朗は顔をほんのり赤らめながら、シャンディガフを頼んだ。

「じゃあ、来月の連休には帰れるよな？」
僕は若干嫌味なトーンを込めて言った。哲朗は肩を竦めただけで、明言を避けた。
「ま、程々に」
森田さんの優しい声かけには、素直に「はい」と答えた。
「哲朗君が近くにいてくれる安心感はありがたいし、心強いじゃないですか」
「実家も全然近いんだけどね」
「それも、そうなんですけど」
森田さんは乾いた笑い声を響かせながら、テーブルに運ばれてきた新しいビールに口をつけた。哲朗は僕たちのやりとりを気にすることなく、一人で飲んで、一人で食べている。
「兎にも角にも、二人にはますます頼っていくから、よろしく頼むよ」
森田さんは力強く頷いてくれたが、哲朗は僕のことなど眼中にないらしく、とにかく飲んで、食べてを繰り返している。難しい話、ややこしい話はもう十分だ。そっちがそのつもりなら、こっちも付き合ってやる。
森田さんにドリンクメニューを取ってもらって、ハーフ&ハーフに決める。豪快に食べる哲朗に合わせ、つまみも何か追加しよう。とりあえず、サラダは頼んでも良さそうだ。手を上げて、店員さんを呼ぶ。
明日のことも頭に片隅に入れつつ、今日はとことん飲んでやる。

『八月一七日（木）』——武藤幸弘編

初出　令和三年一〇月一日　カクヨムにて公開

八月一八日（金）

先月末に刷り上がってきたばかりの『ヒイラギ第二号』をめくりながら、次号の表紙に掲載する絵をどうするか、ぼんやりと考えてみる。参考資料に、もう一つ前の創刊号も鞄の中には入れておいた。

こうして、しっかりと物になって、確かな重みを纏ってくれていると、関わった作り手としては非常に誇らしい。締め切りギリギリまで粘って入稿した今回の表紙も、我ながら素晴らしい。もうちょっと手直ししたかった気もするけど、こうやって印刷物になってしまうと、これはこれで良かったんだろうなと、諦めきれなかったモヤモヤを自分の手で成仏させておく。

「もっとこうしたい」とか「もっとこうしたかった」という悔しさが多少あるのは悪いことじゃない。次に何かしらの形で生かせれば十分だ。程々の不満を残しつつ、無理のない範囲で向上心を育ててあげよう。と、そこまで妄想したのはいいとして、次の表紙をどうするか。既刊の二冊を並べてみても、「これだ」という確信、大まかな方向性すら出てこない。焦ったところでダメな時はダメだし、頑張ってみたところで解決するものでもないのだけれど、すぐに次の締め切りは来るし、そろそろ何かしらの案は用意したい……。

このまま一人で煮詰めていても仕方ないし、とりあえず、紅茶のお代わりを入れに行こう。私はカップを持って、向かいの壁際にあるドリンクバーへ歩を進めた。夏休みの真っ只中、金曜日のお昼過ぎにしては、思ったより混んでいない。

自分と同じような年代の、近隣の主婦っぽい人たちがチラホラとグループで座っていたり、ファミリーで遅めのお昼を食べに来ている組がいたり、保険の勧誘か説明を受けている人が窓際の席に座っていたり。絵に描いたような普段通りのファミレスに、私も身を置いていた。

「あら、芽衣さん？」

普段通りのファミレスから少し外れそうな雰囲気で、妙齢の女性が一人でテーブル席に座っていた。目の前には、まだ何も書かれていないB4サイズの紙が置いてある。鉛筆と消しゴムも入った筆記具を横に置き、無言で紙と向き合っていた。

周囲の和やかな雰囲気とは少し違う、ピリッとした空気を纏っている。アナロ

グ派の漫画家さんがいるのも、ファミレスとしては普段通りの範疇なのかもしれない。芽衣さんは私の視線にようやく気がついたらしく、穏やかな表情で会釈した。どうやら彼女も、来月号の原稿と向き合っているらしい。お互いに深い探り合いはせず、簡単な挨拶だけに留めた。私は新しい紅茶を片手に、自分の席へ戻る。

私が自分の席に戻ってからも、芽衣さんはしばらくじっと紙を見つめている。その向こうに広がる無限の世界から、何かを掴み取ろうとしているのだろうか。彼女は空中になんらかの絵を指で描いたかと思えば、鉛筆を取って軽い動きで線を引き始めた。ここからでは詳細は何も分からないけど、物凄いスピードで紙が入れ替わっていく。あっという間に、程々の厚みが積み上げられる。

芽衣さんは紙の上を軽く手で払い、ゴミを避けるとラフな線を引いた紙を丁寧に束ねてカバンにしまった。筆記具を筆入れにしまい、自分の出したゴミを持ち帰るように片付けていく。

あんな人と、同じ雑誌に関わっているだなんて。あの素晴らしさを少しでも表現できたらいいのだけれども、私が見つめる白い紙には、まだ何のイメージも湧いてこなかった。

『八月一八日（金）』——小野寺香帆編
初出　令和三年一〇月一〇日　MAGNET MACROLINKにて公開

八月一九日（土）

モノレールを降り、連絡通路を渡って、次の電車が来るのを待っている。特別に急いだつもりはないのに、立ち止まった瞬間からドッと汗が吹き出してくる。弱冷車で一駅乗っても大した効果は得られないだろうけど、宇野辺で降りて阪急茨木まで延々と歩くことを考えたら、こっちの方が断然マシだ。

もうそろそろ夕方といってもいい時間帯だろうに、まだまだ陽は高く、気温も湿度も一向に落ちる気配がない。乗り継ぎまでまだ二、三分あるのなら、道中のコンビニで何か買えば良かった。ホームを見渡しても、自動販売機までが遠く感じる。

ポケットからハンドタオルを取り出して一人で汗を拭っていると、ここまで一緒に帰って来た哲朗くんが、黄色い炭酸水を買って戻って来た。間もなく電車が入ってくるアナウンスが流れたが、僕は目の前に差し出されたペットボトルを受け取って、思う存分に水分を身体の中に流し込んだ。一回で半分ぐらいがなくなってしまった。

哲朗くんは哲朗くんで、もう一本買っていたらしく、軽く二口ほど飲んで電車に乗り込んだ。僕は慌てて蓋を閉め、彼の後に続いて乗る。向かいのドア前まで進み、ポケットに手を突っ込んだ。

「買い出しさせたみたいで、ごめんね」

小銭を探ってみても、十円玉は切れている。百円玉を二枚摘んで、哲朗くんに差し出すものの、彼は「いいんです」と受け取らなかった。

「今日一日付き合ってもらいましたし、新田さんにはお昼も出してもらったんで」

そういえば、エキスポシティでのお昼は新田さんが出してたっけ。

「学生が遠慮するなって」

「いやいや、数百円なんで」

哲朗くんは、頑なに受け取ろうとしない。「じゃあ、遠慮なく」と小銭をポケットに戻した。窓の外の青々とした風景を眺めていると、あっという間に隣の駅に着いた。茨木市駅のホームから、改札階へ降りていく。

「じゃあ、この後奢ろうか？」

駅前商店街で、瑞希や沙綾と飲む予定になっている。この後の予定も聞かずに誘ってみると、彼は申し訳なさそうに「行きたいのは山々なんですけど、先約がありまして」と自分の荷物を大事そうに抱えながら言った。

「瑞希も来るのに？」

「残念なんですが……」

彼と横並びで改札を通り抜けた。目の前のエスカレーターで下へ降りる。

「そっか。じゃあ、また今度だ」

「すみません。僕のワガママに付き合ってもらって」

哲朗くんは丁寧に頭を下げて、西側出口へ歩いて行った。僕はそれを見送りながら、東中央商店街の方へ足を向ける。スマホを取り出して時刻を確かめるものの、待ち合わせの時間にはまだ少し早い。いつものビアスタンドで一杯ひっかけるか、駅に戻って喫茶店か本屋に入るか。とりあえず、手元のペットボトルを飲み切ってしまおう。

通路の端に寄って、スマホを眺める。新田さんから、「今日はありがとう」とメッセージが届いていた。どうやら向こうも家に着く頃らしい。「また月曜日から、よろしくお願いします」と返事を出し、社内連絡用のチャットツールを立ち上げた。

次の木曜日に、「新田さんの誕生日」という連絡が入っている。しまった、何も用意していない。新田さんも新田さんで、一言言ってくれればいいのに——。

『八月一九日（土）』——浪川一輝編

初出　令和三年一〇月八日　NOVEL DAYSにて公開

八月二〇日（日）

向こうの方で元気に走り回る見知らぬ子供たちを眺めながら、プラスチックのチューブに微妙に残っている、もう冷たくもないクリームを必死に吸ってみる。膨らんだ部分が一気に凹むだけで、何らかの味やフレーバーを感じるほどの量は出てこない。

私の手を離れた片割れも、風前の灯。買う前の期待感を程々に満たしつつ、「とりあえず食べた」という事実を手に入れる。既に破り捨てられたパッケージが入っているコンビニの袋へ、微かな未練を感じながら手元のチューブを放り込む。陽菜ちゃんの方へ袋を差し出した。

「いいよ。入れて。私のワガママに付き合ってもらったんだから」

彼女は「じゃあ、遠慮なく」とおずおずと空のチューブを袋に入れた。もう一方の手に持ったアイスコーヒーを口元に運ぶ。私も彼女に見習って、口の中に残った甘ったるさを流し込む。

「家で、智希くんとこういうの食べるの？」

陽菜ちゃんは首を振った。私は両手で長めの筒を示しながら、「じゃあ、こういうの？」と訊くものの、彼女は再び首を振った。

「夏休みといえば、毎日のように一日一個はアイス食べてたけどなぁ」

「智希とか、お父さんとかは食べてます。私はあんまり」

彼女は緊張を漂わせたまま、言葉を紡いだ。一緒にダンス練習をするようになってしばらく経ったと思ってたけど、まだまだそういう距離感か。お父さんの仕事仲間だと思えば、自分もそうなるな。うん。

「この後は、図書館に行くんだっけ？」

彼女は頷いた。勉強道具が入ってそうなカバンと、真新しい文房具が入っているビニール袋を提げている。

「お父さんの誕生日をちゃんとお祝いするなんて、エラいね」

私の言葉に、陽菜ちゃんはキョトンとしている。

「ウチは新年早々に誕生日だから、ちゃんとお祝いしたのは、去年の還暦祝いぐらいかな。その前は、うんと昔。もう覚えてないなぁ……」

別に、彼女の年頃ぐらいにめちゃくちゃ反抗期だったこともないし、強烈に嫌いになるエピソードとかがあった訳でもないのに、めちゃくちゃ幼い頃にお祝いした記憶しか残っていない。

「だから、文面なんて何だっていいと思うよ。愛娘から手紙なんてもらったら、額縁に入れて飾るんじゃない？」

陽菜ちゃんは若干引き気味の表情を浮かべているが、あの武藤さんなら、そういうリアクションをとってもおかしくない。何なら、お呼ばれもしてないけど、受け取る瞬間の映像を記録に残したくなってきた。行けるメンバーにこっそりお願いしようかしら。

一人で妄想を捗らせていると、陽菜ちゃんの目付きがだんだんじっとりしてくる。

「何の参考にもならなくてゴメンね。さっきのパピコはお詫びも兼ねて……」

無言の圧が徐々に高まっている？　私が「そういう仕事」をしているのは知っていて、そういう仕事故のアドバイスを期待しているのも分かってるつもりだったけど、思いっきり期待外れに終わってしまったらしい。

「と、とにかく、短くてもいいから心を込めて書いたら大丈夫」

下手にアドバイスしてもアレだし、中身もアレコレ言えないし。陽菜ちゃん、そんな目をしてみたところで私にできる助言はコレぐらいしかないのだ。分かっておくれ……。

『八月二〇日（日）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年一〇月八日　小説家になろうにて公開

八月二一日（月）

上映時間の兼ね合いで食べ損ねたお昼を、半券でちょっとだけお得に食べた。家族で出かけると選びがちな中華も、一緒に食べる相手が違うと新鮮味があっていい。普段は注文し辛いサイドメニューも頼んでしまった。

ちょっと食べ過ぎた気もしつつ、下へ降りる前にお手洗いに入る。用を済ませて鏡に写る自分の顔をみると、いつも通りの化粧っ気のない地味な顔。食べた後の汚れや崩れも特にない。しっかり手を洗って出ると、哲朗さんはトイレを出たところにあるクレーンゲームを眺めていた。

私が「待った？」と訊くと、彼は首を横に振った。そのまま、横に並んでいるクレーンゲームを一つ一つ眺めていく。

「何か、欲しいものでもあるの？」

「ぜ〜んぜん。うわ、まだこのキャラクター現役なんだ」

彼が満面の笑みを浮かべて指を差した大きなぬいぐるみは、私もどこかで見覚えがある。十年、それより前から居るような気がする往年のスター選手。最近の人気アニメのグッズやら、クレーンゲーム限定っぽいお菓子に混ざって、海外アニメの人気キャラクターやら、某ゲーム会社の敵キャラ、ネコっぽいキャラクターのご当地っぽいものまで色々並んでいる。

グルグル回るお菓子をキャッチするゲーム機やメダルゲームの間を縫って歩きながら、哲朗さんは小さく頷いた。特に未練もないらしく、スッと下へ降りるエスカレーターに乗った。置いて行かれないように、私も後に続く。

「遊ばなくても良かったの？」

「あぁ、うん。眺めてるのが楽しいんだよね」

哲朗さんはとても楽しそうに笑う。

「色んな思惑が渦巻いてるというか、その片鱗が見える感じがしてさ」

半ば反射的に「ふーん」と応えてしまったけど、何も理解できなかった気がする。今はとりあえず、納得も同意も棚上げしておこう。

「スタバも喫茶店も、まだ早いよね？」

哲朗さんはお腹に軽く手を添えて言う。このまま一階まで降りればスタバはあ

るし、一回外に出てしまえばファミレスもある。線路をくぐって大学側へ出れば、そっちのスタバも選択肢に入れられる。

正面に見えるフードコートは人影がまばらに見えるけど、手前のスタバには既に列ができつつある。店内をサッと見回しても、すぐに座れる気がしない。今から他の喫茶店を探しながら歩いても、どんどん座りにくい時間になってくる。

「向こうのスタバも一杯だろうな〜」

彼はそう言いながら、スタバの前を素通りする。フードコートの手前で右に曲がった。後ろのサーティワンをチラリと見てみたけど、夏休みっぽい親子連れでそれなりの列ができているらしい。

線路側の出入り口に向かう哲朗さんの背中を追いかけながら、道中の雑貨やカバンに気を取られて足を止めてしまう。商品から顔を上げると、向こうの方に「無印良品」の看板も見えた。

私が付いてきていないのを察したらしく、哲朗さんはインフォメーションセンターの前で足を止めて振り返った。彼は私の視線を追いかけて、無印の方を指差した。私が頷くと、彼は無印の方へ歩き始めた。

とりあえず、先に化粧水を見て、おやつでも買おう。そこから先は、後で考える。

『八月二一日（月）』——浪川瑞希編

初出　令和三年一〇月一〇日　noteにて公開

八月二三日（水）

「駅まで見送ってもらっちゃって、すみません」
ガストでの打ち合わせを終え、今からまだ梅田で用事があるという郁美さんと、駅の改札前までやって来た。私は、自分の歩きが遅くなかったか尋ねると、彼女はすぐさま、「いえいえ」と否定してくれた。
「それに、まだまだ余裕はありますから」
彼女によると、午後七時に阪急梅田駅に着けば十分なのだとか。今から乗ると、確かに三十分ちょっと早そうだ。
「慌ててガストを出なくても良かったんですね」
「でも、香帆さんもお忙しいでしょうから、あんまり長居しても」
彼女は私を気遣いながら、改札の奥にある案内表示をチラッと見た。ちょうどいいタイミングで、次の特急がやってくるらしい。
「じゃあ、日曜日はよろしくお願いしますね」
彼女は颯爽とパスケースを取り出し、流れるように改札を通り抜けて行った。ホームへ上がる前にこちらへ改めて頭を下げると、エスカレーターの方へ姿を消した。

午後から打ち合わせを二本やり終えて、あっという間に午後六時。まだ明るい時間帯だけれども、駅を抜けてイオンを見て帰るのはちょっとシンドい気もする。せめて帰り道の無理のないところで寄り道するぐらいだろうか。
土曜日に買い出しに行った分で基本的に賄えるけど、何か面白いものがあれば買って帰りたい。とりあえず、下へ降りて、阪急オアシスを回って帰ろう。
駅前の塾に向かう小学生や、今から家に帰る子供たち、部活帰りや学校帰りっぽい高校生の姿もチラホラ。時折自転車に道を譲りながら、中央公園の方へ曲がる。道路向かいの角のラーメン屋さんは、今日も沢山並んでいる。
哲朗くんぐらいの年頃なら、友達と連れ立って並んだりするんだろうか。でも、彼にああやって行列に並んでラーメンを食べるイメージがあまりない。一人暮らしだというし、年相応にインスタント麺なんかも食べそうだけど、割と健康そうなイメージもある。

彼よりは、武藤さんの方が似合うかなぁ。濃厚なラーメンとか、街中の中華屋さんが好きそうなイメージ。濃い味付けを好みそうな気がするけど、日曜日はできるだけ身体に気を遣った味付けにしよう。

駐車場から出てくる車を一台やり過ごし、阪急オアシスの中へ入る。そんなに買わないと思うけど、カートにカゴを載せ、青果コーナーから順番に眺めていく。この辺りに目ぼしいもの、目新しいものは特にないかなぁ。

お肉もお魚も間に合っている。お酒も必要なものはあるし、乳製品やパンも急いで買わなきゃいけないものは特にない。あとは調味料のコーナーぐらいか。後ろに気をつけながらカートをキュッと左へ向ける。向こうに見える「だし」のところから見て行こう。

お味噌も出汁も、ビビッとくるものは特にない。塩、砂糖も特別に欲しいものはない。お酢やみりんも間に合っている。あとはソース、ケチャップぐらいか。カートを押しながら、そっちのコーナーへ入った。

「あれ、小野寺さん」

数時間前まで打ち合わせをしていた哲朗くんが、真剣な面持ちでソースの棚の前で立っていた。私は「こんばんは」と挨拶すると、彼は私の荷物を見るなり、「あの後、ずーっと打ち合わせされてたんですね」と言った。

「いい話できました？」

私が頷いて返すと、彼は「それは良かった」と微笑んだ。

『八月二三日（水）』——小野寺香帆編

初出　令和三年一〇月一〇日　MAGNET MACROLINKにて公開

八月二九日（火）

自分たちの手でペンキを塗ったという壁は、一つの汚れもなく、窓から差し込む光を柔らかく跳ね返していた。窓際の観葉植物は置いたばかりらしく、まだまだこれから伸びるのだとか。

調理場が丸見えの、長い長い一本の木を使ったカウンター席も、背の高い椅子ながら座り心地は悪くなさそうに見える。テーブル席の椅子も程々の柔らかさで、電源の取れる席も長居するのに丁度良さそうだ。

商店街の一番端で駅から少し歩くものの、この距離感で長居できて電源もある喫茶店というのはありそうでなかった。決して広くはない店内だけれど、窓や座席の配置を工夫することで狭さを感じさせない造りになっている。

向かいの席に座った沙綾の前に、パンケーキが置かれた。先に来ていたコーヒーに、お代わりも注いでくれた。まだ何も書かれていない便箋を睨みつけながら、沙綾はパンケーキにシロップをかけた。

「どう？　少しは書けそう？」

沙綾は便箋を脇に置き、スマホを文鎮代わりに乗せた。ナイフとフォークを取り、パンケーキを一口食べた。

「ぜ〜んぜん、思いつかない」

「せっかく陽菜ちゃんから便箋をもらったのに」

「お父さんへのメッセージなんて、全然出てこないな〜」

Mサイズのオフィスで受け取る前は、「父親の誕生日と手書きのメッセージ」に変なスイッチが入って、やたらと鼻息荒くなっていたのに、いざ書き出すとなると急に熱が覚めてしまうのは、誰に似たのだろう。少なくとも、私ではない。

「今から送ったって、間に合わないしな〜」

「だからって、メールの一通だけじゃ可哀想じゃない」

「じゃあ、お母さんが送れば？」

「私はもう、赤の他人だもん」

沙綾はブスッとした表情でコーヒーカップを口元に運んだ。私が貸した手元のペンを避け、カップを元の場所に置く。

「書かないんなら、ペンは預かろうか？」
私が手を差し出すと、彼女はスッとペンを自分の方に寄せる。
「もうちょっと借りててもいい？」
彼女のことだから、ダメだと言っても聞く耳を持たない。こういうことも織り込んで、使い捨て用のペンを差し出さなかった自分が悪い。書き心地がとても気に入っている一番のペンを人質に取られてしまっては、もう少し付き合う他ない。幸い、今日のスケジュールには余裕がある。ここを出たら、彼女のペンを買いに行こう。
沙綾は順調のパンケーキを食べ進め、しっかり味わいながらも便箋を見つめている。
「そもそも、英語の方がいいんだっけ。日本語でも大丈夫？」
「メールは英語だったんじゃないの？」
「アレはほとんど、定型文のコピペだから……」
いったい今まで、どんなメールを送っていたのやら。便利な世の中になったと思うべきか、娘の妙な要領の良さを褒めるべきか。それは後で悩むとして、「どっちでもいいんじゃない？」と答えた。
「向こうには健人もいるし、肉筆であなたのメッセージを送る方が大事なんだから」
沙綾は「そういうことか」と漏らしながら、最後の一口を頬張った。
「ここでもうちょっと粘ってもいい？」
私は別に構わないのだけど、とカウンターの向こうにいるオーナーさんへ視線を送る。彼はにこやかに笑顔を返してきた。とりあえず、違う種類のコーヒーを頼もうかしら。パンケーキのお皿を下げにきた店員さんに、メニューを持ってきてもらうようにお願いした。

『八月二九日（火）』――奥野朋子編
初出　令和三年一〇月一一日　Pixivにて公開

八月三一日（木）

久々に朝から降り続いた雨は、陽が落ちると共に小康状態になってきた。日付が変わる頃までには完全に上がりそうだ。そして日付が変われば、いつの間にか九月。まだまだ残暑は厳しいものの、あっという間に本格的な秋がやってきそうだな。

フロントのワイパーと、ダッシュボードの時刻表示を眺めていると、助手席側のドアが開いた。ビルから小走りに出てきた幸弘が、傘も持たずに乗り込んでくる。

「いやぁ、一日付き合わせて悪いね」

彼がシートベルトを締めるのを待って、車を走らせる。

「構わんさ。どうせ、暇だしな」

幸弘は折り目のない封筒を私に差し出した。私は顔をしかめて首を振る。

「受け取ってよ」

「今日は、ただの暇つぶしだ」

幸弘は「あ、そう？悪いね」と封筒をカバンにねじ込んだ。

「しかし、遅くなっちゃったな」

彼は窓の外と、目の前の時計を見ながら呟いた。

「子供らは、明日から二学期だろ？」

「大人にはただの月初だけどね」

確かに、幸弘の言う通りだ。夏休みが終わるからと言って、親の方に特別な準備は特にない。母親はまだしも、父親の存在感は希薄だろう。私もそうだったに違いない。

「俺と違って、二人とも優秀だから宿題だなんだも全くないし、陽菜は普通に登校日だったし、完全にただの木曜日だよ」

幸弘はなんだか自慢げだった。陽菜はともかく、智希も計画的に宿題を終わらせているとは。遊びと部活と愛犬の散歩ばかりのイメージだったが、優秀な姉のおかげか、史穂さんのおかげか、私の愚息よりはよっぽど出来るのか。

いつだったか、最終日でも宿題が終わっていないと泣きつかれて、提出期限ギ

リギリまで付き合わされたこともあったっけ。あれは、幸弘が小学三、四年生の頃だったような記憶がある。香織や真琴はそんな兄を見ていたからか、私や志津香に怒られることもなく、ちゃんとやるべきことをやっていたな。

家庭の中では少々問題児のイメージだった幸弘が、今や色んな人を結び付けている立派な経営者になっているのだから、人生、何があるか分からない。彼のおかげでたまに小遣い稼ぎさせてもらっているなんて、当時は予想だにしなかった。

「この後、うちに寄ってく？」

さっきまでスマホをいじっていた幸弘は、一通り連絡が終わったらしく、画面から顔を上げて私の方を見た。

「家で母さんが待ってるから、まっすぐ帰るよ」

私の返事に、幸弘は気のない様子で「そっか、そっか」と返した。彼はスマホを見ながら、「え〜」と少々気になる声を上げた。

「非常に申し訳ないんだけどさ、平和堂で降ろしてもらってもいい？　醤油が切れたんだって」

信号で一時停止すると、彼は史穂さんからのメッセージを私に見せた。

「醤油だけ買うのに待っててもらうのもアレだし、そこまで来たら歩いて帰れるし」

幸弘は窓の外をチラリと見上げながら言う。雨も、ほとんど降っていない。気になるようなら、平和堂なり、そこのコンビニなりで傘を買えば間に合うだろう。

「じゃあ、そこでいいか？」

私は車を少し先に進め、後ろをしっかり確かめてバス停の少し前で停めた。

「ありがとう。じゃあ、また」

幸弘はサッとシートベルトを外し、自転車に気をつけながら外へ出た。私は彼が手を振るのを横目で見ながら、元の流れに合流した。

『八月三一日（木）』——武藤幸次編

初出　令和三年一〇月一一日　Mediumにて公開

九月三日（日）

史穂さんが、志津香の代わりに台所へ立って、洗い物をしてくれている。里紗は志津香を椅子に座らせて、小気味いいリズムで肩を叩いていた。陽菜や智希は手持ち無沙汰そうに各々のスマホを眺めている。

「だから、兄さんの時みたいに盛大にやったらいいじゃない」

香織は自分が買ってきた食後のアイスを、啓と分け合いながら持論を強調した。

「ねぇ」と幸弘の同意を得ようとするものの、幸弘はリモコン片手にテレビを見たまま静かに否定する。

「父さんは父さんで、自分たちだけの計画があるんだよ」

幸弘の目が私に向けられた。

「夫婦水入らずで、カッコウつけたいんだって」

幸弘の物言いに、香織は即座に「何それ？」と反応した。「ダッサい発想」とも付け足した。幸弘はケラケラ笑って受け流す。

「肝心なのは、バァちゃんがどうしたいかじゃないの？」

周囲の話など聞いてなさそうな智希が、ボソッと呟いた。まだ何かいいたそうな香織も、流石に言葉を引っ込める。ここからでは横顔しか見えないが、志津香の口元は僅かに笑みを浮かべているような気がする。

「そうねぇ、お父さんがやりたいようにやってくれたら、それでいいわ」

志津香は、肩を叩いてくれていた里紗に「ありがとう」と言うと、椅子から腰を上げた。洗い物を終えたばかりの史穂さんの隣へ行き、「後はやるわ」と引き継いだ。少々不機嫌そうな香織から、空になったアイスのカップを受け取り、全員分のカップが入ったゴミ箱へ捨てた。

香織は啓を連れて洗面所へ行った。すぐに水の流れる音が聞こえてくる。

幸弘は壁の時計に目をやり、椅子に腰掛けたまま身体を伸ばした。

「さ、そろそろ帰るぞ」

彼は子供たちに声をかけ、一足先に玄関へ向かった。入れ替わりに香織が戻って来る。

「順番にトイレを済ませて帰るよ」

香織の声かけに混ざって、誰かが水を流す音が聞こえた。少しの間を置いて、玄関の扉が開く音も聞こえてくる。幸弘は、車のエンジンをかけたらしい。

子供たちはお互いに譲り合って、順番にリビングとトイレを行ったり来たりする。史穂さんは、志津香から何かを受け取っていた。

「送って行こうか？」

私は香織に声をかけた。香織は「いいよ。阪急で帰る」と言った。

「もうすぐ大河が始まるでしょ？」

彼女に時計を指されるまでもなく、もうそろそろ午後八時になるのは分かっている。大河ドラマをゆっくり見たいのは志津香であって、私ではない。

「妻の好きなドラマぐらい、一緒に見てあげな」

香織の言い分に、志津香が微かに笑った。香織は、史穂さんたちに「お先に～。またね～」と言い残し、啓と里紗を連れて玄関へ消えていく。志津香をテレビの前に置いて、外まで見送りに追いかける。突っかけを履き、香織たちと外に出ると、まだまだ暑さが残っていた。

「じゃあね～」と手を振る香織たちを見送っていると、私の後ろから史穂さん、陽菜、智希が出てくる。彼らは幸弘の車に乗り込んだ。

「じゃあ、また」

幸弘は窓を下げて挨拶すると、ゆっくり車を発進させた。車の中で小さく頭を下げる史穂さん、一応スマホから顔を上げて私の方を見る孫たちが少しずつ遠ざかっていった。

『九月三日（日）』――武藤幸次編

初出　令和三年一〇月一一日　Mediumにて公開

九月五日（火）

「じゃあ、二九日はよろしく頼むよ」

向かいに座っていた哲朗は、自分のパソコンを触りながら頷いた。彼の隣に座っている上坂さんは、自分のスケジュール帳にペンで何かを書き込んでいる。

「浪川さんは来れないんだよな？」

哲朗は「彼女は、衣笠キャンパスなんで」と応えた。キャンパスが離れているとはいえ、まだまだ後期の履修登録の時期だろうに。茨木キャンパス組の彼らだけピックアップして、明子さんの誕生日パーティに連れていくのはなんとなく引っかかる。

「じゃあ、これで上坂さんの一歩リードだ」

「でも、瑞希さん、明子さんに会ったことあるんでしょ？」

香織はコーヒーを自分のカップに注ぎながら、僕の後ろから声をかけた。僕は、少々驚いて、「え、そうなの？　初耳なんだけど」と言った。

「え、知らない？　随分前に本人から聞いた気がするけど」

香織は立ったまま一口飲んで、スッと自分の仕事に戻った。半ば事務員的に僕よりオフィスにいることが多い彼女は、僕よりはるかに社内の事情に通じているのかもしれない。

斜向かいの上坂さんの表情が僅かに曇った。

そんな話を微塵も出さなかった哲朗も哲朗だけど、水面下で情報共有もしてくれなかった明子さんも明子さんだ。信頼されているのか、いないのか、彼の後見人を今後も名乗るには自信がなくなってきた気もする。

哲朗は周りのことなど一切気にすることなく、自分のパソコンを見ていた。壁の時計を確かめて、「じゃあ、僕はもう出ますね」と腰を上げた。彼は自分の席に戻って、荷物を詰め始める。備え付けモニターの電源を落とす。

彼はカバンを肩にかけ、「今日はもう戻ってこないんで」とオフィスを出て行った。僕は一拍遅れて、その背中に「おぅ、了解」と言葉を投げた。

僕も自分の仕事に戻るべく、椅子から腰を上げる。上坂さんは同じ椅子に腰掛けたまま、スケジュール帳を脇に寄せてカバンの中を探っていた。

「次の打ち合わせまで、ここで作業してもいいですか？」

言い方も声もいつもとなんら変わる様子もないのに、目つきや全身から正体不明の迫力が放たれているような気がする。僕はできるだけいつも通りに聞こえるよう、「ああ、どうぞ」と応えた。

「ありがとうございます」

表情はとても柔らかな笑顔なのに、背筋にゾクっと悪寒が走る。彼女は無駄のない動きで原稿用紙を取り出し、執筆用のペンを筆入れから出すと一つ一つマス目を埋め始めた。頭が前に落ちて、少々丸まった背中から黒いオーラが漏れ出ているような気もする。

森田さんとの打ち合わせは、この後一五時から。まだ三十分少々、彼女はそこで書き続けるだろう。オフィスの端に設定した打ち合わせスペースから、目に見えない緊張感みたいなものが全体に拡がっていく。

僕は資料を自分のデスクに積み上げ、締め切っていた窓に手をかけた。

「クーラーついてるのに」

窓を大きく開けた僕に、香織は不満げな表情を向ける。僕は「換気だよ」と答えながら、最近の空調を信じて、窓をもう一つ開けてみた。

『九月五日（火）』——武藤幸弘編

初出　令和三年一〇月一二日　カクヨムにて公開

九月六日（水）

普段なら、お昼を食べて少しうつらうつらしていそうな時間帯。今日は「女帝」との謁見のおかげで、睡魔の影も形もない。以前とは違う調度品、家具の配置も全く違うのに、彼女が座っている席は、最初から彼女のために用意されたかのようにピッタリだった。

従来と異なるのは、従者となる仲間が私以外に三名もいること。チェックされている書類こそ私の仕事ではあるものの、紙が擦れる音しか聞こえない緊張感漂う空間に、近そうな立場の人間がいるのは心強かった。

永遠とも思える時間が過ぎ、女帝、朋子さんは手元の紙面から顔を上げた。

「うん。良いんじゃない？」

女帝の言葉に、止まっていた時間が動き出した気がする。ここで素直に受け止めて、無防備になるのは早計だ。小躍りしたくなる気持ちを抑え、固唾を飲んで次の言葉を待つ。

「実際の誌面は、もう少し小さくなるのよね？」

朋子さんは、もう一度A3の見開きを穴が開くように見ながら言った。私は「ええ、もう一回り、二回りほど小さくなります」と応えた。緊張のあまり、最初の「え」は随分上擦ってしまう。目の前に置かれたカップをこっそり手に取って、ちょっと冷めた紅茶を一口飲む。

「インタビューも写真も、とっても良いわ」

朋子さんの「ねぇ？」と同意を求める言葉に、隣に座っていた沙綾さんが気楽そうに頷いた。彼女は「レタッチもいいじゃん」と付け足した。

「可愛く撮ってもらって良かったね」

沙綾さんは、向かいに座っていた瑞希さんに笑いかけた。もう一度、「ね？」と私の向かいに座っている上坂さんに言う。

「私の場合、いつも通りですけどね」

上坂さんは自信たっぷりに言った。そんな彼女の振る舞いに、女帝は満足げな表情を浮かべている。私の隣で緊張が移ったのか、瑞希さんはいつもより縮こまって見えた。

「ヒイラギの告知も、コビトカバちゃんねるの告知も載せてくれるんだ」
沙綾さんは、朋子さんの手を離れた見本に目を通していた。記事の末尾を見やすいようにして、瑞希さんの前に差し出す。そこには、彼女たちが運営しているアカウント名と、そこへ飛ぶためのQRコードが入れてある。
「いよいよ、人気作家の仲間入りだね」
沙綾さんの明るい声に、瑞希さんの目にも光が戻ってくる。
「フリーのタウン誌なんで、影響力はそこまでないんですけど」
「そんなことないわ。地域密着で長年やってるんだもの」
朋子さんは私に「自分たちの影響力を卑下しないの」と付け加える。
「誇りと自信があるから、私のところに持ってきたんでしょ？」
女帝の言葉が一々突き刺さる。さっきまで想定していなかった角度から、守りの薄いところを突かれた感じ。座ってなかったら、腰から砕けていたかもしれない。
心の中のざわつきを、必死になんでもないフリを装って落ち着かせる。
「お二人は、コレで大丈夫ですか？」
一番重要な、インタビュー記事に出ている二人の承認がまだ取れていない。上坂さんは即座に「大丈夫です」と快諾してくれた。瑞希さんは、微妙に納得がいかないところもあるのか、渋々といった様子で頷いた。
「上坂さんと瑞希さんには改めてデータをメールするので、もし、気になるところとかあれば遠慮なく言ってください」
私はこの後の手続きを説明しながら、瑞希さんの様子が延々と気になってしまった。

『九月六日（水）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年一〇月一二日　小説家になろうにて公開

九月七日（木）

「へー。これがそのうち並ぶんだ」

僕は沙綾にA3サイズの見本を返した。昨日のうちに、彼女からPDFのデータも受け取ってはいたが、タブレットやスマホで見るより、大きく印刷されたものを見るほうがやっぱり良い。

「哲朗くんは、見た？」

斜向かいに座っている哲朗くんは、首を振った。沙綾は彼にもデータを転送しているようだったが、彼のそぶりを見るにそれすら目を通していないようだ。沙綾は彼に「見る？」と半分に畳んだ見本を差し出すが、彼は「すみません。ありがとうございます」と断った。

「製本されてから見ます」

彼の隣に座っていた瑞希の肩が微かに動いた。それからは表情を変えることなく、普段通りの動きでグラスを傾けている。

「コレで、父さんも母さんも鼻高々だ」

フリーペーパーの見開き一ページのみとは言え、ポスティングされることもある地域の有力誌。同世代のクリエイターとして、上坂さんと二人だけのインタビュー記事がどんと掲載されているのは兄弟の自分もなんとなく誇らしい。

ちゃんとスタイリストもついたインタビューだったようで、普段通りのヘアメイクとあまり変わらないように見えて、実物よりはるかに美人に撮ってもらっている。

「写真のレタッチも、かなりしてもらったんだろ？」

見本がぐちゃぐちゃにならないよう、慎重にカバンへしまっていた沙綾が顔を上げ、「ぜ〜んぜん」と応えた。

「全体の色味補正とか、一本だけ跳ねちゃった髪の毛とかは修正してもらったけど、あとは無加工だよ」

「盛るとか加工とか、そういうのとは無縁の雑誌らしいんで」

横から哲朗くんも沙綾の言葉を補強する。多少の演出、魅せ方の工夫はあっても正直が信条なんだっけ。そういうスタンスだから、地域密着の素朴なタウン誌

だけど信頼が厚いのか。普段のルミさんからは想像もつかないけど、あれで案外、真っ当な編集者だったとは。

「ただ、お義父さんには内緒でお願いします」

哲朗くんが小声で言う。

「お義母さんと晃さんには伝えてあるんですけど、お義父さんには秘密で通したいそうで」

彼の隣で、瑞希はちょっぴり縮こまって下を向く。秘密も何も、父と会う予定はしばらくないし、会ったとして話すこともないとは思うけど、わざわざ哲朗くんの口から言わせるぐらいの想いがあるのか。

「瑞希がそうしたいんだな？」

一応、本人の意思も確認しておきたい。目の前の頭頂部へ声をかけると、彼女はそのまま頷いた。

「顔を見せろって」

僕は椅子から身を乗り出して、瑞希の顔に両手を添える。彼女が持っているビールが零れないように気をつけながら、グイッと顔を上げた。ようやく本人の眼が見えた。一瞬驚いた様子だったが、すぐにまっすぐな目で僕を見つめ返してくる。眼が泳ぐ様子は微塵もない。

「よし、分かった」

僕は瑞希の顔を離して、自分の席に座り直した。瑞希は瑞希で、手元のビールを零さないよう、元に戻る。

「でも、コレのスタンド、そこら辺に結構あるよな？」

幸い、実家の地域ではポスティングされていなかったように思うけど、求人募集のフリーペーパーに混ざって置いてあったりする。万が一家に届いても母さんか晃が上手に隠すんだろうけど、本人が出先で不意に手に取る可能性もゼロではない。

瑞希は「その時はその時で」と言ったが、緊張感に満ちた日々が始まるぞと、心の中で他人事のように心配しておいた。

『九月七日（木）』——浪川一輝編

初出　令和三年一〇月一三日　NOVEL DAYSにて公開

九月八日（金）

「おかえり〜」

マイバッグを肩にかけてリビングに入った僕へ、芽衣が声をかけてくれた。さっきまで映美とお昼寝でもしていたのか、まだ眠そうな顔をしている。映美の方が元気そうに、目を大きく開いていた。

野暮用ついでに買ってきた翌朝分のヨーグルトと食パン、子供たちの牛乳を冷蔵庫にしまう。もうそろそろ亜衣を迎えに行く時間帯だけれども、おやつタイムには少し早い。僕は一旦冷蔵庫を閉めて、手を洗うために蛇口を捻った。

血の巡りが悪いのか、曇り気味の微妙な低気圧が作用しているのか、芽衣は状態こそ起こしているものの、珍しくボーッとしている。手元のタオルで両手を拭い、水切りカゴに伏せてあったコップをカウンターに並べた。冷蔵庫から麦茶のポットを取り出して、食卓まで運ぶ。

映美は器用に自力で椅子によじ登り、僕がよく冷えたお茶をコップに注ぐのを大人しく待っていた。僕は自分が飲む分と、芽衣の分もコップに注ぎ、映美にコップを渡す。彼女が零さないか見守りながら、自分の喉も潤した。

映美は空になったコップを僕に差し出した。「おかわり？」と訊くと、彼女は頷く。言われるがままに半分より少し多めに注ぐと、彼女はさっきと同じ勢いでグッグッと飲み干した。

お茶をひっくり返すことなく、コップを食卓に戻す映美に笑いかけながら、芽衣は隣の椅子に腰を下ろした。誰も手をつけていないコップを手にとると、一口で半分ほどを飲んだ。僕は減った分を継ぎ足した。あっという間にポットのお茶が尽きかけている。

僕は冷蔵庫を開け、ドアポケットを確かめた。すぐに次のお茶を沸かさないと、亜衣が帰ってきた時にはなくなりそうだ。雪平鍋に水を張り、換気扇とコンロのスイッチを入れた。

ストッカーの中を探り、麦茶パックを取り出した。予備のポットは食器棚か。回転が速いから大丈夫だろうけど、一度蓋も解体してサッと水で洗う。角の方も届く範囲で手を入れて、もう一度濯いだ。蓋と共に水切りカゴへ伏せて、水の沸

騰を待つ。

芽衣は僕が椅子に置いたマイバッグに手を入れ、残っていた荷物を外へ出した。出てきたのは、USBメモリと中身が入ったクリアファイル。彼女はクリアファイルの外から中の書類を眺め、裏から透けて見える中身を隙間から覗こうとしている。

「見ても良いよ」

芽衣は、「先に見ても良いの？」と言った。先も何も、僕は印刷した時点で既に見ている。僕が頷いて返すものの、彼女はこちらを一切見ることもなく、嬉しそうに二つ折りの紙を開いた。芽衣は大きく頷きながら、「へー、これが月末に印刷されるんだ」と言った。

「実際はもうちょっと小さくなるみたいだけどね」

先日受け取ったPDFを、設定通りにA3で印刷してみたものの、コピー機の設定のせいでわずかに縮小されている。タウン誌の実物はさらに一回り小さいものの、画質は今見ているものより上がるはず。

「ヒイラギのことも触れてくれてるんだ」

芽衣は、文末の方へ視線を向けた。確かそこには、瑞希さんたちの動画チャンネルや、そこまでのQRコードなんかが載っていたはず。上坂さんとの記事ということで、ヒイラギのURLやQRコードも載せてくれていた。

「ちょっとずつだけど、みんなが協力してくれてありがたいね」

芽衣の優しい笑顔に見惚れ、完全にお湯が沸き立っているのを見逃してしまった。次号の部数を上げるか検討している話や、少しずつ収益が上がりそうな話もしたかったのに、色んなものを吹っ飛ばしながら、ひとまずコンロの火を止めて、麦茶パックをお湯の中に放り込んだ。

『九月八日（金）』——森田康徳編

初出　令和三年一〇月一三日　NXZ（旧サイト）にて公開

九月九日（土）

Mサイズのオフィスで、今日の分の撮影データをチェックする。二作品同時に走っている状態で、映画撮影としては半分素人ばかりで進めているため、順調に進行しているとは言い難いけれども、余裕をたっぷりとったスケジュール的には、大きな問題はなくここまで来れている。

先月にやった最初の方の撮影では、現場ではデータのチェックをやっていたものの、必要なシーンの撮り漏れがあったり、そもそも撮影を失敗していて素材として使えないものも入っていたり、記録が不十分で動画素材とどのシーン、どのカットかが不明瞭なものもあったり、制作進行の拙さが目立っていたものの、こうやってその日のうち、できなければ翌日までにデータを確認することで、その辺りの問題は解決できているような気がする。

大学の同期と、バイト先の若手の混成チームで連携を撮りながら、この調子でポスプロも上映も順調にこなせれば最高なんだけど、油断は禁物。こういうタイミングで緩むのが一番怖い。

眼がしょぼしょぼしてきた気もするし、ヘッドフォンを付けっぱなしの耳も、微妙に痒さや痛みが出て来た気もする。ヘッドフォンを外し、机の上の目薬を手に取って、一滴ずつ垂らして馴染ませていると、隣に座っていた哲朗さんが「へー」と声を漏らした。

何事かと思い、目薬の刺激を感じながらゆっくり目を開ける。彼は私に、自分のモニターが見えやすいように動かした。

「メイキングの広報ブログが、アクセス伸びてるんだ。それも、この二、三日の間に」

彼が見せてくれているアクセス解析のグラフは、確かにグッと高い山ができているような気がする。彼は「で、さらに」と動画サイトのデータも見せてくれた。

「コビトカバチャンネルの再生数、視聴者も増えてるというか、伸びてるんだよね」

こちらはブログのアクセスに比べると、微増というレベルの伸びかただけど、確かに今までとは少し違うユーザーが見てくれているらしい。

急に伸び始める理由がピンと来ない。例のインタビュー記事が載ったフリーペーパーは、まだ見本にしかなっていない。

「案外、身内が今まで見てくれてなかったのかもね」

哲朗さんは、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、ボソッと呟いた。そういえば、主に沙綾さんが、ルミさんから受け取ったPDFを関係各所に転送していたような。アレがきっかけで伸びているとしたら、彼の説が説得力を帯びてくる。

「この調子なら、ヒイラギも伸びてるかもね。今度、森田さんに聞いてみる」

哲朗さんの権限では、ヒイラギのアクセス数は確認できないらしい。ただ、同様の現象が起きて、ヒイラギも身内や関係者によって底上げされている可能性は十分にある。

「なんだかんだで、部数も着実に微増だし、次号は思い切って増やす話もしてるらしい」

哲朗さんの目は、今は誰も座っていない武藤さんの席、奥の打ち合わせスペースへ順番に向けられた。

「フリーペーパーが月末に出たら、色々ハネるかもね」

哲朗さんは、私の方へ向けたモニターを自分が見やすい向きに変えながら、

「有名人の仲間入り、本当になるかもね」と私に笑いかけてくれた。

それは希望的観測すぎる、夢を見過ぎなのではと頭の片隅で思いながら、心の奥底で、激しく躍り出しそうになる気持ちも感じていた。

『九月九日（土）』——浪川瑞希編

初出　令和三年一〇月一三日　noteにて公開

九月一一日（月）

明日の天気予報でもと、テレビを点けて適当にチャンネルを合わせる。食卓の上には、立派な国際郵便が置いてあった。表には、久々に見る健人の日本語で、ここの住所と宛名が書いてある。

去年の終わりに転居して住所が変わったとメールしたら返事が来なかったけど、なんだかんだで見ていたらしい。メールも筆不精な息子の顔を思い浮かべながら、味わい深い彼の字をじっくり眺める。

残念なことに、私宛のメッセージや荷物はないらしく、先日送った沙綾のメッセージに対する元夫からの返事と、彼女宛っぽい小さなプレゼントが入っていた。自分で宛名を書いて、直接娘に送れば良いのに、日本語が書ける息子の手を借りて別れた妻に送ってくるなんて、なんて性格の悪いこと。

「ねぇ、ケビン？」

私の足元でのんびりとテレビを見ている愛犬の頭を撫でてやる。彼は私の顔を見上げ、ペロリと舐めてくれた。

天気予報を見るつもりで付けていたテレビは、「あれから二二年」と特集を始める。そう言えば今日は、911だった。当時は一歳になる直前の沙綾とカリフォルニアで生活していたっけ。結局アレから健人が三歳になるまで向こうで暮らして、こっちに帰って来たんだった。

その健人とも、離れて暮らすようになってもう何年？　確か、3.11の年末だったからえ〜っと――

スマホの通知に、現実に引き戻される。画面に出た通知は、沙綾からの「もう着くよ」のメッセージ。アプリを開いて、「了解」と返した。適当なスタンプも送っておく。アプリを閉じる前に、既読がついた。

結局、沙綾はどれだけ長居するのだろう？　晩ご飯を食べていくのか行かないのか、その返事はまだもらっていない。彼女がいらなかったとしても、私の食事がいつになるのか分からない。パパッと食べられるように、とろ火で温めてしまおうか。

ケビンにそのまま待っているように指示して、冷蔵庫から昨日作ったカレーの

入った鍋を取り出した。そのままコンロに乗せて、一番小さい火にして温める。
換気扇の音で、テレビが何を言っているか全く分からない。CMが終わると、ようやく天気予報らしい。
キッチンから出て、引いたままの椅子に腰を下ろす。天気予報が始まったかと思えば、インターホンが鳴った。画面には沙綾の姿が写っている。テレビの音を少し大きくして、「開いてるから、どうぞ」と応えた。
再びまだ暖かい椅子に腰を下ろし、明日の降水確率に耳を傾ける。とりあえず、傘はいらないらしい。週間予報に切り替わるタイミングで、沙綾がリビングまで上がって来た。
「へー。今日はカレーなんだ」
沙綾はケビンを乱暴に撫で回しながら、キッチンから漂ってくる匂いに鼻を傾ける。
「食べていく?」
「お母さんのカレーを食べたいのは山々だけど、一輝が待ってるからな〜」
「あら、そう? こんな時間に呼び出して悪かったわね」
彼女は「全然大丈夫。気にしないで」と食卓に腰掛けた。卓上の封筒を指して、「コレ?」と訊く。私が頷くと、彼女は中身を確かめ始めた。
「それで、お茶にする? コーヒーにする?」
私がコーヒーメーカーの前で訊くと、彼女は「おかまいなく。すぐに帰るし」とそっけなく答えた。

『九月一一日（月）』——奥野朋子編
初出　令和三年一〇月一三日　Pixivにて公開

九月一三日（水）

仕事の気分転換に、必要な道具をカバンに入れて外に出る。自宅からキャンパスまでの軽いウォーキングも、頭の刺激になってちょうど良い。

大学はまだ、夏休みの真っ只中。八月末までは見かけた小学生もいなくなり、学食も含めた校舎の中も、人影は少ない。こっちのキャンパスで部活に励んでいる人たち、卒業論文等で研究室に詰めている人たちと教職員、もしくは就活生のいずれかだろう。

それにしても、まだまだ午前中。学食も、そこのスタバも、人はほとんどいない。

電源が取りやすそうな端っこの席を探し、荷物を置いて先に座席を確保してから缶コーヒーを買った。こういうものがなくても、誰にも文句なんて言われないだろうけど、あんまりぼんやりしすぎた時の眠気覚ましに、横へ置いておこう。

とりあえず、缶コーヒー以外はテーブルの上に出さず、カバンを横に置いて椅子に身体を預ける。何を見るともなく、食堂全体を眺めるように視線をやった。ただただぼーっと、物の輪郭を捉えるのもやめて、ぼんやりとした視界で頭を空っぽにする。

耳に入れたノイズキャンセルもついたワイヤレスイヤホンからは、どこかの海の波の音が聞こえてくる。立体的な奥行きを感じさせてくれる心地よい揺らぎに、身も心も委ねてみる。十分に睡眠もとっているはずなのに、だんだん目蓋が重くなってきた。

このまま船を漕いで、睡魔に襲われるのも良いかもしれない。急ぎの仕事は終わらせてある。アポイントや準備も、今日はやらなくていい。程々の上がりを出せれば十分だし、夕方ぐらいまで開店休業状態でも大丈夫。

「ねぇ」

急に大声で話しかけられて、眠気が一気に吹き飛んだ。驚きのあまり、椅子から転げ落ちそうになる。左耳のイヤホンが僕の身代わりに耳から落ちたのは、たまたまだろう。僕に声をかけて来た人物は、自分の耳に髪をかけながら、転がり落ちたイヤホンを拾い上げた。

「驚かせちゃって、ごめんなさい」

彼女、上坂さんはにこやかにイヤホンを差し出した。僕は恐る恐る、「拾ってくれてありがとう」と、それを受け取った。上坂さんは流れるように、僕の向かいの席に座った。

「まだ授業もないのに、どうしたの？」

僕は右のイヤホンも取り出して、二つともカバンにしまった。僕と同様に、就活にも教職にも縁がないはずの彼女が、今日みたいな日にわざわざ茨木キャンパスまで出向く理由が思いつかない。

「もしかして、僕が何か忘れてる？」

「梅田で映画デートの約束してたって言ったら、信じる？」

彼女の問いかけに、僕はゆっくり首を振る。少なくとも、仕事関係のアポイントでやらかした、とかではなさそうだ。

「明子さんの誕生日の件で聞きたいことがあって」

「それで、わざわざ？」

「DMだとスルーするでしょ？」

公開のチャンネルでも聞けないことを、わざわざ聞きに来たらしい。それにしても、よくここにいると分かったもんだ。僕の疑問をよそに、彼女は自分のスマホを取り出して、写真を探しているようだった。

「去年の様子だと、若いお客さんは一人もいなくて、結構ラフなパーティみたいじゃない？　でも、この間の一朗さんのパーティだとカッチリだから」

彼女は、どこで入手したのか分からない二枚の写真を僕に見せつける。

「どっちのつもりがいいのかな、と思って」

「ど、どっちって？」

「だから、カジュアルで良いのか、フォーマルが良いのかってこと」

どうやら、「うちのパーティ」と母の好みなんかを聞きたいらしい。それを聞いてどうしたいのか、その辺りは聞かない方が良さそうだ。さっきまで休ませていた目と頭をフル回転させて、模範解答を捻り出さねば……。

『九月一三日（水）』――原田哲朗編

初出　令和三年一〇月一三日　ノベルアップ+にて公開

九月一五日（金）

哲朗と昼食を取っていると、彼は自分のスマホを僕に差し出した。先月の一朗さんのパーティで撮影した集合写真と、去年の明子さんの誕生日会で誰かが撮った写真。集合写真の方は出席者全員に送られているが、もう一方は哲朗が撮った、もしくは持っているにしては微妙に違和感のある写真だ。

「コレを、上坂さんが見せて来た、と？」

彼にスマホを返しながら、哲朗の話を聞き返した。彼は、口を開けずに咀嚼しながら頷いた。

「え、彼女はどこかの工作員？」

「女性のジェームズ・ボンドとか、そんな話題もあったよね」

香織も昼休憩で暇なのか、隙があれば話に入り込もうと茶々を入れてくる。僕は「あった、あった」と話に乗りながら、「黒髪はともかく、アジア人女性のジェームズ・ボンドは無理がありすぎるだろ」と切り返した。

そもそも、ジェームズ・ボンドならフィクションの世界。「四次元の壁」やそれを越えて云々するお話は、あまり好みではない。

「そういえば、駅前のビルに探偵の学校みたいな看板あるじゃない？」

香織は身振り手振りを交えて、駅向こうのデッキからそんな看板がいつも目に入ると訴える。僕も確かに見覚えがあるが、正確には「の」はなかったような。

それに――

「宝塚が地元の学生が、わざわざ通わないだろう」

「兄貴って、本当につまんないよね～」

香織は哲朗に同意を求めたが、彼は乾いた笑い声を漏らし、曖昧にやり過ごした。仮に接点があったとしても、学校で学んだスキルのみで、ここまで情報収集するのは難しいだろう。

一朗さん関連の公開情報、同じ大学の卒業生という情報に、地元もそれほど離れていないという条件も加わるが、それらを駆使しながら必要なネタを引っ張ってくるのは、彼女の才能だろう。

個性的ではある物の、コミュニケーション自体は非常に高く思えるし、硬軟織

り交ぜた交渉術、人たらしのスキルも高い気がする。そこに、文章の奥に秘められているような、底知れない黒い何かが加われば、探偵というか、何らかの工作員、エージェントというのも向いているのかも知れない。

「随分と厄介な人物に好かれたんだな」

「好かれているとか、そういうのは――」

哲朗は慌てて取り繕う。言葉数を増やされても、耳にも頭にも中身が入ってこない。上坂さん自身にも、そういう感情はあんまりないのだろう。若さ故の悪い病気みたいなものと、高スペック、高スキルなだけに、どんな男でも堕としてやりたいプライドでもあるのだろう。

哲朗も若さ故に翻弄されてはいるものの、根本的なところで突き放している節がある。そう簡単に心を変えない頑固さが、逆に有能なスパイの心に火をつけたのか。

不意に、卓上の電話が鳴り出した。慌てて受話器を取ろうとするが、香織が手で僕を制しながらスッと立ち上がり、外向けの声を作って電話に出てくれた。お得意さんからの電話なのか、香織と二人で楽しそうに喋っている。

「えーっと、朋子さんから。一番ね」

香織は受話器を胸に押し当てて、僕に言った。僕は「了解」と、小さくまとめた弁当を持って立ち上がった。哲朗は慌てて、弁当の残りを掻き込んでいる。

ちょっと早いけど、昼休憩はここまで。デスクに置きっぱなしだったコーヒーで喉を湿らせ、受話器を片手に赤く光っているボタンを押した。

『九月一五日（金）』――武藤幸弘編

初出　令和三年一〇月一四日　カクヨムにて公開

九月一七日（日）

ルミは家の中を見回しながら、リビングまで入って来た。電器屋さんのビニール袋と、マクドナルドの紙袋を入れたビニール袋を両手に下げている。重たそうなマクドナルドの方を食卓に起き、小さい袋を持ってキッチンの方へ入って来た。

「アルカリの単二で良かった？」

彼女は目の前のカウンターに、電池の入った袋を置いた。そのままシンクで両手を洗う。私は彼女の置いた袋を覗き込み、品物を確認する。

「一個で良かったのに、とか言いたいんでしょ？　バラ売りしてなかったから、二個入りが一番小さかったの」

私は何も言ってないのに、彼女は一人で少々不機嫌そうに言った。手元に下げたタオルで両手を拭い、食卓の椅子に腰掛けた。

私は引き出しを開けて財布を取り出す。

「レシートは？」

彼女は首を振って、「良いから、良いから。早く食べよう」と私を手招きする。私はとりあえず財布をエプロンのポケットに入れ、彼女の向かいに座った。

「本当にいいの？　お昼も出すけど」

「だから、良いって。一回の飲み放題より安いんだし」

私には、「飲み放題」の相場がイマイチ分からないけど、ルミは私のことなど気にかけることなく、自分で買って来た袋をガサガサと音を立てながら開けていく。

「一個はポテトのセットにしたけど、一個は単品ね。ドリンクはコーラにしたんだけど、要る？」

私が首を横に振ると、彼女はニヤッと笑って、「じゃあ、もらうね」と自分の手前に置いた。中身を全部取り出したらしく、彼女は大きい方の紙袋をグシャグシャに潰してビニール袋の中へ放り込んだ。もう一つの小さな袋は、横にそのまま避けて置かれた。

「そっちの袋は？」

「期間限定のシェイク二つ」

ルミは「ごだから大丈夫」と付け加えた。
「こっちがいつもので、こっちが何だっけな。なんかチーズがすごい奴」
彼女は大小二つの包みを、真上から指差した。「どっちでもいいよ？」と言われると大きい方に目が行くけど、そんなに食べられる歳ではない。例年通りの「いつもの奴」を選んで包みを開けた。まだほんのり温かく、両手に熱が伝わってくる。
「じゃあ、いただきます」
私は思い切ってかぶりついた。独特の食感をした卵が、お肉に負けじと存在を主張している。大きい方を選んだルミは、サイズに四苦八苦しながら一口食べた。鼻の頭に黄色いチーズが乗っかった。
彼女は両手についた汚れも気にすることなく、そのままコーラを流し込んだ。しばらく忙しなく口が動き、ゴクッと飲み込むと共にキラキラした目でこちらを見た。
「コレは、凄いわ。去年も凄かったけど、それを超えて来たね」
ルミは一度ハンバーガーを包みごとお皿に置いて、卓上のティッシュで鼻を拭った。
「一口食べる？」
「じゃあ、一口だけ」
自分の包みを一旦置いて、ズッシリと重みのあるハンバーガーを手に取った。形が大きく崩れなさそうなところを見極め、少し潰しながら齧る。濃厚でややクセのあるチーズと、特製ソース、中の卵が非常に合っている。私はハンバーガーをルミに返して、さっきまで飲んでいたお茶を飲んだ。
「本当に今日も、お父さんいないんだよね？」
ルミはポテトを摘みながら言った。
「夕方には帰るって言ってたけど」
「じゃあ、それまでにシェイクも片付けなくっちゃ」
ルミは「ふふふ」と笑った。

『九月一七日（日）』——小野寺香帆編
初出　令和三年一〇月一四日　MAGNET MACROLINKにて公開

九月二〇日（水）

食後のコーヒーを味わいながら、お腹を落ち着かせる。子供たちを旦那に任せて、外でゆっくりランチを摂るのはいつぶりだろう？　子供のことを気にしないで、食事に集中できるのはとてもありがたい。

「さて、と。そろそろ、例のものを」

向かいの席に座っている敬子さんは、隣の座席に置いたカバンを探り、中身が見えにくい色の四角いビニール袋を取り出した。テーブルの上に置いて、品物を押し出した。前回は、わざわざテーブルの下に手を回してやり取りしたっけ。

私はそれを受け取り、小さく開いて隙間から中身を確かめる。

「確かに」

私はそのままカバンの底の方に、慎重にビニール袋を仕舞った。

「いつも急な呼び出しでゴメンね」

「敬ちゃんのせいじゃないから、気にしないで」

彼女の方が忙しいはずなのに、毎回、入念に根回しをして時間を作ってくれる。定期的にこうやって呼び出してくれるおかげで、お昼時に外食もできている。

「新しい職場はどう？」

「一言で言うと、まあまあ。可もなく不可もなくってところかな」

前の職場を辞めて、しばらくは資格を生かして友達のお手伝いもしていたらしいけど、結局、先月の頭から看護師に復帰しているのだとか。

「そっちはそろそろ、第三号が出るんじゃないの？」

「今回は思い切って、五〇〇部刷るんだって」

敬子さんは「へー、一気に五〇〇？」と目を丸くした。スモールスタートで始めたはずなのに、少しずつ部数を増やすはずが、アクセスの増加も鑑みて思い切って増やすことを決めたらしい。

「でも、芽衣さんのフォロワー、一万とか二万とか居るんでしょ？」

「私の場合、長いことやってるだけだから」

義理の妹の手前、夫を立てて謙遜してみるものの、執筆者の認知度や作品のクオリティーを鑑みると、もう少し思い切った勝負してもいいんじゃないかとは思

う。

「でも、数千部とかになってくると他の仕事はやりにくくなるか」

「あ〜、それはあるかもね」

ウェブ制作の仕事とか、コンサルティングの仕事なんかは減らさないと厳しくはなる。本人も作家の一人として関与したいだろうけど、それも辞めて編集や営業活動に専念せざるを得なくなるかもしれない。

「可哀想な気もするし、思い切って一本に絞っちゃう方がいい気もするし、難しいところだな〜」

そっちを選んだ方が経済的にも安定するだろうし、ヒイラギに込めた想いも達成しやすくなるんだろうけど、「作家の彼」がもっと活躍するところ、大きくなるところを見たい気もする。

「そうそう、一本に絞るといえば、いよいよ姉さんが腹を括ったんだって」

「本当に？」

敬子さんは首を縦に振った。

「年内か、年明け早々には退職して、自分のお店に集中するんだって」

いきなり自分のお店を構えるには至らないとしても、今までの取り組みで少しずつファンも獲得して来ているみたいだし、宿借りとかを経て、一国一城の主になる日も遠くはないのだろう。

「やっぱりお兄ちゃんも、」

「一つに絞った方がいいのかな〜」

本人の意向が最優先には違いないけど、背中を押すべきか、相談ぐらいはするべきか。コーヒーの苦味と共に、悩ましい気持ちを飲み込もう。

『九月二〇日（水）』——森田芽衣編

初出　令和三年一〇月一四日　アルファポリスにて公開

九月二一日（木）

スマホのアラームも時計の目覚ましもセットせずに寝ていたのに、枕元で唐突に唸り始めたスマホのバイブに起こされた。すぐに鳴り止むと思っていたのに、延々と終わらない。重たいまぶたをうっすら開け、画面を手元に引き寄せると電話が鳴り続けているようだった。

時刻は午前十時、電話の相手は上坂さんと出ている。彼女なら、僕が出るまで延々と呼び出し続けるだろう。まだゆっくり惰眠を貪りたかったが、身体を起こして緑のボタンを押した。

「もしもし？」

「あ、起きた？」

自分のガサガサ声に驚いて、唾を飲み込んだ。辺りを見回すと、寝る前に買った無糖の炭酸水が残っていた。キャップをひねると、微かにガスが抜ける。

「昨日のメッセージにいつまでも既読がつかないから、モーニングコールしてみたんだけど」

十時にモーニングコールって、と言いかけた言葉を炭酸水と共に飲み込んだ。

「散々引っ張り回した上に、無理やり飲ませちゃったし、大丈夫か気になっちゃって」

そういう風に振り回した自覚はあるんだ。昨日は僕も雰囲気とお酒に飲まれて、無邪気さを素直に信じてしまった。自分もそれなりに飲んだはずなのに、アレだけやっても、一緒にいた相手を気遣う余裕があるんだと見せつけられて、電話口の向こうではさぞかし勝ち誇った顔をしているんだろう。

「じゃあ、来週の件と今日の夕方、よろしくね」

彼女は自分の要件だけを伝えると、一方的に電話を切った。ほとんど休日の今日のスケジュールで唯一の予定が、夕方のミーティング。それまでには、人前に出られるように準備をしなきゃいけない。

とりあえず、スマホに充電ケーブルを挿し直す。ついでにメッセージを立ち上げると、確かに日付が変わるギリギリの時間帯に、上坂さんから「無事についたよ〜。おやすみ〜」のメッセージがスタンプと共に届いていた。

あと二、三口で飲み切りそうな、気の抜けた温い炭酸水を片手にキッチンの方へ行く。とりあえず電気ケトルでお湯を沸かすようにセットして、朝食のパンを冷凍庫から出す。

「そうだ、帰りに買おうと思ってたんだ」

昨日は早めに仕事を切り上げて、帰りに食パンを買おうと思っていたのに、上坂さんの用事に付き合わされて、買いそびれたんだった。帰りにコンビニへ寄った時は、たまたまプライベートブランドの六枚切りが切れてたんだっけ。

ここで余計な出費は痛いけど、仕方ないからパン屋へ寄ろう。僕はあんまり行ったことのない、駅前から北へ行ったところに、ハード系のパンが美味しいパン屋があると、母に教えてもらったことがある。

先にシャワーを浴びて、洗濯機を回そう。今から干すにはちょっと遅い気もするけど、今日中に手をつけておかないと、着るものもタオルもなくなってしまう。

炭酸水を飲み切って、ペットボトルのラベルと蓋を分ける。一旦元の部屋に戻って、カーテンを開けた。窓の外はとても明るく、街は元気に活動し始めている。

僕は、替えのパンツとタオルを取り出した。

『九月二一日（木）』——原田哲朗編

初出　令和三年一〇月一五日　ノベルアップ+にて公開

九月二五日（月）

沙綾は、一人分も残っていなさそうなカレーに水を注いだ。片手鍋の持ち手を両手で握り、適当なところで蛇口を締めた。慎重にコンロへ鍋を置き、電源を入れる。彼女はお玉を鍋に入れ、温まるのを待ちながらゆっくりかき混ぜていく。

「えーっと、それから……」

彼女は引き出しを探り、何を足すか考えている。顆粒の昆布出汁と、顆粒のカツオ出汁を見比べながら、唸り声を上げた。

「どっちかっていうと、カツオの方が合うんじゃないか？」

「そう？　まぁ、一輝の好みに任せるけど」

沙綾は昆布出汁を袋に戻し、カツオ出しの小袋を開けた。勢いよく全部入れようとするから、途中で「半分ぐらいでいいんじゃないか？」と声をかける。

「全部は多いって」

「ちょっとぐらい濃い方が美味しい気もするけど、まあいいや」

半分より少し多めに入ったところで彼女は手を止めた。袋の口を何度か折り曲げ、塩や砂糖の隣に置いた。出汁が溶けるように混ぜながら「美味しくなかったら、一輝のせいね」と笑って言った。

「分かってる、分かってる。で、次は」

沙綾は僕が言い終わるより早く、冷蔵庫からカットネギを取り出した。うどん二玉と共に、僕が帰り道のコンビニで買って来た追加の食材。白ネギか青ネギを大きめに切って入れるのも美味いと思うけど、ネギを切る手間を考えたら、カットネギで十分だ。

「ネギを入れるんでしょ？　言われなくても分かってるって」

彼女はカットネギの蓋を開け、徐々に煮立って来た鍋の中を見ながら、「本当に、全部入れるの？」と疑いの目で僕を見つめる。

「全部は多くない？」

「大丈夫、大丈夫。それに、残したって使わないだろ」

彼女は、裏返しにした蓋を元に戻し、蓋についた注意書きを読んだ。賞味期限は明日になっている。ここで使い切らないと、賞味期限までに消費する可能性は

非常に低い。沙綾は「それもそうね」とネギがたっぷり入ったパックを鍋の上でひっくり返した。

パックに張り付いたネギも、しっかり手で拾っていく。綺麗に空になったパックはゴミ箱に捨てられた。

「で、うどんだ」

沙綾は冷蔵庫からうどんを二袋取り出した。裏面を見て、「あ、しまった」と声を上げた。

「うどんは別で茹でた方が良かった？」

沙綾は僕に疑問を投げかける。そのままカレーの出汁に放り込んで茹でれば完成なんだけど、二人分に分けることを考えたら別に茹でた方が良かったか。

「OK、分かった。とりあえずお湯を沸かそう」

沙綾は片手鍋の火力を最低に落とし、別の鍋に水をたっぷり張って、隣のコンロにそれをセットした。少々強めの火力で沸騰させにいく。うどん用のお湯が沸くまで、沙綾はカレーの鍋が焦げ付かないよう、ゆっくりお玉でかき混ぜ続けている。

「で、金曜日は半休なんだっけ？」

彼女はうどんが入った袋の裏面を読みながら、もう一方の手を動かし続けている。

「社長がパーティに出席するから、急ぎの仕事がない連中は休みでいいんだって」

「なんだかんだで、哲朗くんのご両親てスゴいのね」

沙綾は隣の鍋を気にかけながら、間が持たないのか、うどんの袋を二つとも開け始める。流石にお湯の中には入れないらしく、一旦そこまでで手を止めた。

「急に言われてもスケジュールは動かせないから、一人で楽しんで」

彼女は、ボコボコと沸騰し始めた鍋の火力を少し下げ、カレーの方は一旦スイッチを切った。お湯の中へうどんを放り込み、引き出しから菜箸を取り出してかき混ぜ始める。

袋の表示によると、茹で時間は九〇秒。スマホのタイマーを起動して、僕は湯切り用のザルを探しにキッチンへ足を踏み入れた。

『九月二五日（月）』――浪川一輝編

初出　令和三年一〇月一五日　NOVEL DAYSにて公開

九月二八日（木）

ハッピーアワーというには早過ぎる時間帯にも関わらず、地元醸造のビールスタンドは賑わっていた。表にこそ待合席を兼ねたベンチが置いてあるものの、一階の入ってすぐのスペースも、ちょっと急な階段を登った先の二階のスペースも基本的には立ち飲み席しかない。

それでも、いくつか設置された無骨なテーブルは半分以上埋まっていた。カウンターにはりついて、店主や店員とズーッと喋っている人もいる。

「どれにする？」

僕を先導して来た武藤さんが、カウンターのメニューを指した。個性的な名前とそれぞれの特徴が書いてあるものの、違いはよく分からない。悩んでいる僕に、お店の人がそれぞれ解説してくれるものの、クラフトビールに明るくない身には、イマイチピンとこない。

「じゃあ、二番で」

どうやら一番スタンダードっぽいものを選ぶ。武藤さんはメニューを見て、

「一番新しいのは、コレだっけ？」と店員さんに確かめる。

「じゃあ、二番とソレを大きい方にしちゃう？」

武藤さんは心底楽しそうに、ニヤニヤと笑っている。

「一応、まだ仕事するんですよね？」

「だ〜いじょうぶだって。度数は高いけど、ビールの一杯や二杯」

武藤さんはカウンターの店員さんに「ねぇ？」と同意を求めた。オーダーを待つ彼は、曖昧に笑って受け流す。結局、武藤さんは「どっちも大きい方で」と押し切ると、二人分の金額を現金で支払った。

すぐに大きなグラスにビールが注がれ、カウンターの向こうから差し出される。

「それ、森田さんのだから」

武藤さんはすぐ後ろのテーブルを指して、「そこで、いい？」と店員さんに確かめた。向こうは、もう一杯のビールを差し出しながら、「どうぞ」と応えた。

「じゃあ、オレがこっちにしようかな。森田さんはそっちでいい？」

彼はカウンターの真後ろに陣取り、僕はその隣、壁を背にする位置に立った。

「カッコ良かった奥さんと、肚を決めた森田さんに」
武藤さんは僕の準備や反論を待たず、一人で僕のグラスに乾杯し、早々にビールに口をつける。喉を鳴らしながら、最初の一口でグイグイ飲んでいく。
「いやぁ、美味いっ。お彼岸も過ぎたけど、最高だよね」
彼にワンテンポ遅れる形で慌てて一口飲んでみる。ガツンと強めの苦味が確かに美味い。「いつも、ありがとうございます」と店主の奥さんらしい人が、うずらの燻製らしきものをテーブルに持って来てくれた。武藤さんは自然に爪楊枝を取り、一個を口に放り込んだ。彼の圧に負けて、僕も同様に後追いする。
「本当にやりたいよね、一万部。可能なら、もう一桁」
「まぁ、まずは千部をクリアしなきゃですけど」
「行ける、行ける。肚を括った編集長が、弱気でどうする」
武藤さんは、少々強めに僕の背中を叩いた。まだビールを一口飲んだだけなのに、さっきからかなり酔っ払っているような気がする。僕は自分のビールを零さないようにバランスを保ち、少しでも中身を減らすべく口をつけた。
普段より少々声の大きい武藤さんが気になるのか、店員さんが僕らの話に、興味深そうに耳を傾けている。
「自分たちの手作り文芸誌で、十万部目指そうとしてるんですよ」
「十万部ですか？　ソレはスゴいですね」
著名な文芸誌、雑誌もそんなに売れていない中、今月やっと五百部刷った同人誌が十万部は夢のまた夢。流石に吹聴しすぎだと止めにかかるが、「いいじゃないですか。目標はデッカく行きましょうよ」と店主がキラキラした目で肯定してしまう。
コレはどうやら、とんでもないことになりそうだ。

『九月二八日（木）』――森田康徳編
初出　令和三年一〇月一五日　NXZ（旧サイト）にて公開

九月三〇日（土）

「随分悩んでるじゃないか」
そう言う透は、全く悩む様子もなく、能天気にビールを口に含んだ。
「悩みもするよ。私のせいで色んな人の人生狂ってないか、気になって」
「うん。狂ってる、狂ってる」
彼は手元のフリーペーパーをめくりながら、私の顔も見ずに言う。
「オレも野村も、お前のせいでこうなってるからな〜」
フリーペーパーを最後のページまでめくった透は、ソレを卓上に戻して、代わりに分厚い雑誌を手に取った。
「でもさ、そんなのお互い様だろ。オレもお前の人生を狂わせてるかもしれない」
彼は誌面からチラッと顔を上げ、私の目を見て真剣な表情を作ると、急に吹き出した。
「ダメだダメだ。お前と真面目な話はできないわ」
笑いながら、顔の前で手を大きく左右に振る。一呼吸置いて息を整えながら、ビールの隣に置いてある和らぎ水を一口飲んだ。グラスをおいて、もう一度ゆっくり息を吐く。ようやく落ち着いたらしく、フリーペーパーと分厚い雑誌を揃え、鞄の中に仕舞った。
「汚れちゃ悪いよな」
フリーペーパーの裏面も確かめて、グラスについていた水滴なんかでシワができていないか、入念にチェックしてくれる。
「コレは後でゆっくり読むよ。感想もその時に送るわ」
彼は鞄の口を閉め、話題に戻るためのおまじないかのように、ビールに口をつけた。
「仮におまえのせいで何かが変わったとしても、その後にどんな選択をするか、どんな行動を取るかは、その人の責任というか、自由だろ」
「それはそうなんだけど、大事な人の人生を壊しちゃってる気がしてさ」
透は「ふ〜ん」と言ったきり、枝豆の山から一つ摘んで食べた。
「私なんか気にしないで、やりたいようにやって欲しかったな〜って」

「それは流石に望み過ぎだろ」

彼は空になったサヤをガラ入れに放り込み、次の枝豆を手に取った。

「職場の人か、取引先か、お客さんか、詳しいことは知らんけど、大事だと思える人がいるなんて、幸せなことだろ」

そんな話を、家に帰れば「大事な人」がいる透にコンコンと説教される。少なくともこの構図は地獄な気がする。

「それを、自分のワガママで変わらないで欲しい、とか望むのは欲張りすぎるわ」

「別に私のワガママで言ってるんじゃなくって」

「いいや、ワガママだね。でなきゃ、子供の屁理屈だ」

彼は手に持ったままだった枝豆を口に入れ、グラスに残っていたビールを飲み干した。隣のテーブルに料理を運んできた店員さんを呼び止め、お代わりを注文している。ついでに私はレモンサワーを注文した。

店員さんは空きのグラスも回収して一階へ降りて行った。

「欲張りすぎると身を滅ぼすし、考えすぎは身体に悪い」

透は、すっかり冷え切って誰も箸をつけていなかった、一個だけ残っていた唐揚げに手をつけた。

「大して賢くもないお前が一人で悩んだって、大した答えなんて出ないんだから、考えるのも悩むのも、時間の無駄だよ。それを理由に飲めるのは良いことだけど」

彼はテーブルに運ばれて来たビールを受け取り、店員さんに「ありがとう」とにこやかな笑顔を向ける。早速一口飲んで、喉を湿らせるなり口を開いた。

「お前は難しいこと考えないで、自分がやりたいようにやればいいんだよ。バカ丸出しで、自由奔放にさ」

「誰がバカだ。誰が」

私は拳を固く握って、透の肩に思いっきりパンチした。さっきまでにこやかにしていたムカつく顔が、いい感じに歪む。本気で痛そうに振舞う彼を見ていると、自分の悩みは随分軽くなって来たように思う。そういう生き方しかできないんなら、そういう生き方でっていうのも、ありなのか……。

『九月三〇日（土）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年一〇月一七日　小説家になろうにて公開

一〇月二日（月）

お昼過ぎにオフィスを訪れたときには在席していた香織さんは、夕方前には帰宅した。打ち合わせを終えて上長向けの資料を作り始める頃には、仲良し女子大生三人組がタイムカードに退勤時刻を打っていた。

上長からの返事を待ちながら、私は打ち合わせスペースの方へ目を向ける。武藤さん、森田さんと哲朗くんたちの白熱した会議はまだまだ終わりそうにない。

私は、隣で動画編集に勤しんでいる瑞希さんの横顔を何となく眺めていた。動画サイトへの投稿が完了するのを待ちながら、隙間時間を上手に使っているらしい。可能なら私もオフィスへ戻って、溜まっている事務作業を処理したいところだけど、上長から「武藤さんへの伝言があるから」とのメッセージに、この場を動けずにいる。

せめて、内容だけでも送ってくれたらメモを残して動くのに。チャットツールに目立った動きは特にない。

「返事、まだないんですね」

瑞希さんは左耳からイヤホンを外しながら、話しかけてくれた。彼女は作業の手を止めずに、壁の時計に目をやる。

「この時間だと、忘れて帰っちゃってるかも。一回、オフィスに電話しちゃうとか」

瑞希さんの言葉に、「流石にそれはない」と言いかけるものの、断言できないと思って取り下げる。「じゃあ、ちょっとうるさくするけどゴメンね」と彼女に断りを入れ、少しは静かそうな窓際の一角に移動した。外の廊下に出ても大して変わらないし、ここでボリュームを抑えてしゃべる方がマシでしょう。

事務員さんが帰っているのか、数コール待ってようやく誰かが出てくれた。電話口の同僚に、上長の行方を確かめてもらう。しばらく保留の音楽を聴きながら待っていると、上長は既に退社しているとのこと。感謝を述べ、私もこのまま直帰する旨を伝えて電話を切った。

定時をとっくに過ぎているとは言え、返事の一言ぐらい返して欲しかった。元の席に戻り、チャットツールで上長宛に、伝言は後日受け取る旨と、定時を過ぎ

たので直帰する旨を伝え、私のステータスを「離席中」に変更してツールを終了した。

日報をチャチャっと出して、オンラインで「退勤」ボタンを押す。

私の隣で作業していた瑞希さんは、動画サイトの設定画面を開いて、作業していた。タイトルやらサムネイルやらを設定して、公開する時刻も指定して設定を保存すると、その画面もブラウザも閉じてしまった。

デフォルトの壁紙になっているデスクトップを、ゆっくりと閉じる。一瞬、打ち合わせスペースの方へ視線を送るも、すぐに目を逸らしてノートパソコンを片付け始めた。

私も遅れないように帰り支度を整え、何となく彼女の支度が終わるのを待つ。瑞希さんは机上のペンと哲朗くんの机にあった正方形の付箋を引き寄せると、大きめの字で「先に帰ります」と私の名前も添えて書いてくれた。

それを哲朗くんの机にあるモニターに貼り付け、ペンと付箋を元の場所に戻してからスマホを取り出し、誰かにメッセージを送信した。

「さ、帰りますか」

瑞希さんはさっぱりした様子で、柔らかい笑顔を私に向けてくれた。私は「お先に失礼しま〜す」と一応声を出し、返事を待たずに瑞希さんとオフィスを後にした。

『一〇月二日（月）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年一〇月二〇日　小説家になろうにて公開

一〇月五日（木）

自転車を押しながら、香織さんと沢良木辺りの大通り沿いを歩いている。十月に入り、陽が落ちるのも段々早くなっているらしく、目の前はすっかり夕景っぽい色が広がっていた。

「なんか、ゴメンね。荷物持ちもしてもらったのに、啓とも遊んでもらっちゃって」

香織さんは僕の少し前を歩き、後ろを振り返りながら言った。彼女の案内で、最寄りのコンビニまでやってきた。最寄りとは言いながら、さっきまで遊んでいた公園からはそれなりに歩かされた気がする。とはいえ、そんなことを香織さんに訴えたところで、彼女はさっきと同じ調子で「ゴメンね」と言うだけだろう。

僕は自転車を駐輪スペースに停め、鍵をかけて香織さんと共に店内へ入った。まだ微かに熱を持っている身体に、程よい冷房が心地いい。

香織さんはスタスタと脇目も振らず、ドリンクコーナーへ歩いていく。僕も慌ててそれに付いていく。

「どれにする？」

普段はあまり来ないローソンの品揃えに目移りしていると、香織さんは「こっちの方が良かった？」と隣接しているお酒のコーナーを指さした。

僕は「いや、こっちでいいですよ」と、いつもとは違うメーカーの無糖の炭酸水を選んだ。期間限定のフレーバーでもなく、特保のものでもない、スタンダードな奴。ペットボトルを手に取ると、香織さんは「全然、冒険しないんだ」と僕から商品を受け取った。

「他にも何かいる？」

彼女がいう「何か」とは、お菓子やホットスナックの類を言っているのだろう。小腹が空いた気もするが、それはそれで、じっくり時間をかけて選びたい。僕は「いや、それだけで」と答えると、「本当に君はつまんないなぁ」と笑いながら、レジへ向かった。

僕が香織さんの後ろに並ぼうとすると、彼女は手を振って「先に出てて」と言った。僕はそれに素直に従い、先に大通りへ面している外へ出る。大きなトラッ

クがたくさん止まっている駐車場を眺めながら、香織さんが出てくるのをジッと待った。

「お待たせ」

香織さんは袋ももらわず、シールを貼っただけのペットボトルを僕に差し出した。僕は「ありがとうございます」と受け取り、早速開けて一口飲んだ。喉の渇きが若干マシになる。

「で、お母さんの感触はどうだったの？」

香織さんは僕の隣で腕を組んで立っている。僕は炭酸水をもう一口飲む。

「上坂さんは、お眼鏡に適ったのかって聞いてんの」

香織さんに言われるまで忘れていたけど、上坂さんと母とのファーストコンタクトはちょうど先週の出来事だったっけ。武藤さんは同じ会場にいたけど、香織さんにその辺の話までは伝わっていないのか。

「どうなんですかね。僕にはよく分かりません」

当日、ずーっと上坂さんと共に居た訳ではないし、母が出席者とどんな話をしていたのかも、全然見ていなかった。直接自分で引き合わせ、紹介したような気はするけど、あれは結局、武藤さんにやってもらったっけ？

その時の細かい反応も、あんまり覚えていない。先週の話だというのにほぼ記憶に残っていないということは、大したハプニングもなかったのだろう。

「じゃあ、今のところはやっぱり瑞希さんだ」

「な、何が？」

「も〜、分かってんでしょ」

香織さんは強めに僕の背中を叩いた。僕は炭酸水を吹かないように口を閉じ、ペットボトルから零さないように身体を動かした。香織さんは一人楽しそうに笑うと、「じゃあ、今日はありがとね」と言い残し、僕に背中を向けて歩いて行った。

『一〇月五日（木）』——原田哲朗編

初出　令和三年一〇月二〇日　ノベルアップ+にて公開

一〇月六日（金）

いつもの席でうつらうつらと船を漕いでいると、目の前の机に軽い衝撃が走った。急な音にびっくりして目が覚めた。

「起こしちゃって、ゴメンね」

高らかに音を立ててしまった張本人、森田さんは申し訳なさそうに顔の前で両手を合わせた。彼は私の前に積み上げた三冊の雑誌に手を置いて、「各号、一冊ずつで大丈夫だった？」と確かめる。

「全部ありますよね」

私の問いに、三冊を少しずつずらして表紙を見せてくれる。私は頷いて、「確かに」と答えた。

「わざわざご用意していただき、ありがとうございます」

先月末に出て在庫がまだオフィスにあった第三号以外の二冊は、バックナンバーを管理している森田さんが、自宅から持ってきてくれていた。彼は顔色一つ変えることなく、「いやいや、気にしないで」と笑顔を浮かべる。

「でも、そろそろバックナンバーも在庫がなくなってきちゃったな」

「追加で発注しちゃう？」

「流石にそれは、まだ早いでしょう」

武藤さんと森田さんとで、楽しそうに言葉を交わしている。私はそれを横目に、ずらされた雑誌の四隅を揃えて重ね直す。三冊となるとそれなりの重みがあった。注意を払って手を離しても、多少の音が鳴るのも仕方がない。

とりあえず、自宅まで持って帰らないと話が進まない。私はカバンの中を確かめて、雑誌が入るだけのスペースを作っていく。一冊ずつ立てて入れないと収まらない気がする。手前の第三号から手に取って、順番に詰めていく。

「でも、浪川さんたちには感謝だね」

自分の名前が出たので、何となく顔を上げる。本を詰める作業は止めずにそちらへ目をやると、森田さんはフリーペーパーの例のページを広げて私の方を見ていた。

「君らのおかげで、ヒイラギの一〇〇〇部も見えてきそうだよ」

「本当、大したもんだよね」

森田さんの言葉を、武藤さんが補強する。例のインタビュー記事も、今の上坂さんとの関係も、元を辿れば彼らがきっかけだったような気がするけど、乗っかった結果、いいように踊らされている気もしてくる。ま、それはそれでアリどころか、全力で最後までやり切ってやろうかと思っている自分もいるんだけど。

「撮影の件も、無理言っちゃってゴメンね」

森田さんは再び、謝るポーズをしてくれた。私は「いえいえ、そんな」とできるだけ柔らかい声で応えた。

「こっちはどうせ、授業もあるんで」

二班体制で、おまけにこっちは学生と半分素人のチームでは、夏休みの間に全部撮り切るなんて無理だった。余裕のあるスケジュールを組んでいたつもりだったけど、天候不順や自分たちのスキルを考慮に入れてなかったから、どんどん遅延も積み重なった。

幸い、夏の景色として撮っておきたかったシーンは済んでいるし、後は冬や春の画でも問題ない。

「でも、撮らない間に猛勉強するんでしょ？」

私の隣で、刷り上がったヒイラギをめくっていた上坂さんが、誌面から目を離さずに横槍を入れる。疑問符が浮かんでいそうな森田さん、武藤さんに、インタビュー記事がきっかけで教員に火がついてしまった経緯を説明した。

「それで、ヒイラギを持っていくんだ」

森田さんと武藤さんは、納得したように頷いていた。涼しい顔で、我関せずとページを目くる上坂さんを横目で見ながら、私は心の片隅で、「そうやっていられるのも今のうちだからな」と何とも雑魚っぽい言葉を思い浮かべていた。

『一〇月六日（金）』——浪川瑞希編

初出　令和三年一〇月二一日　noteにて公開

一〇月七日（土）

土曜の昼下がりから、息子の事務所で仕事の邪魔をしないよう、平日は娘が座っているらしい席に座り、先日刷り上がったばかりのヒイラギ、第三号を読み耽っている。浪川さんでもいれば、目の保養にずっと眺めていられただろうし、哲朗くんらがいれば若者の話や仕事ぶりを楽しむこともできただろうに、残念ながら今日はそれぞれ学校らしい。

浪川さんのライバルらしい上坂碧氏も、今頃は真面目に講義を受けているのだろう。中々に骨太で、底知れない暗さを称えている文体の持ち主ながら、非常に器量の良い華の女子大生というのも、興味深い。

私の後ろで盛り上がっていた会議が、どうやらひと段落ついたらしい。幸弘や森田さんが、打ち合わせスペースから順番に姿を現す。

「森田さんにも伝えておいたから」

誌面に目を落としていると、頭上から幸弘が声をかけてきた。中身にのめり込んでいたから一瞬何のことか分からなかったが、森田さんの顔を見て思い出した。

「姉には僕からきっちり伝えておくんで」

「ああ、そうですか。よろしくお願いします」

私が頭を下げると、森田さんも「いえいえ、こちらこそ。いつもありがとうございます」と深々と頭を下げてくれた。

「撮影の方も、一旦学生チームはお休みですし、こちらで工夫して対応しますんで」

「勝手を言って申し訳ないんですが、すみません」

「いえいえ。いつも無理なお願いに付き合っていただいて、本当にありがとうございます」

「本当、本当。武藤さんも、もっとお父様に感謝しないと」

森田さんの後ろから、奥野さんが姿を現した。息子のオフィスには似つかわしくない、優美な衣装が、彼女には非常によく似合っている。化粧品特有のキツい香料も感じない。

水を向けられた幸弘は、笑顔でやり過ごしながら、「で、この後、朋子さん

は」と予定を尋ねた。
「駅からバスで戻るわ。夕方からの予約も入ってるし」
「森田さんは？」
「僕も今日はバスかな。用事は済ませちゃったし」
奥野さんと森田さんは、それぞれバスの時刻表を確かめている。手段の多い森田さんとは違い、彩都西までの本数が少ない奥野さんは、しばらく駅前で時間を潰さなきゃいけないらしい。
「嫌でなければ、お二人とも送りますよ」
私は、ヒイラギに指を挟んだまま二人に言った。幸い、今日は車で来ている。
「耳原の辺りなら近所だし、彩都西もたかが知れてるし」
「じゃあ、お言葉に甘えようかな」
奥野さんはそう言うと、一旦鞄を椅子に置いて、ハンカチを取り出すなり、
「その前に、お手洗いに」とオフィスを出て行った。森田さんは答えを決めかねているらしい。そんな彼に、幸弘は「森田さんも乗って行きなよ。積もる話もあるみたいだし」と背中を押した。
「じゃあ、僕もお願いしていいですか？」
「えぇ、もちろん」
幸弘は、私の顔を見てニヤニヤ笑いながら、「それも持って行きなよ」と言った。私が「いいのか？」と訊くと、幸弘の代わりに森田さんが「どうぞ、どうぞ」と応えてくれた。
「じゃあ、私もお言葉に甘えて」
数少ない手荷物に、ヒイラギ第三号も加える。奥野さんが戻ってくると、入れ替わり立ち替わりでトイレを済ませ、幸弘のオフィスを後にした。

『一〇月七日（土）』——武藤幸次編
初出　令和三年一〇月二三日　Mediumにて公開

一〇月八日（日）

キッチンから漂ってくるクリームの甘い匂いに、遠くの方でケビンが切なそうに声を上げている。キッチンにいるはずの沙綾が、「近所迷惑でしょ」とケビンを叱っていた。彼女がそんな風に声を荒らげたところで、彼は微塵も言うことを聞かないだろう。それに、美味しそうな匂いについ反応してしまうのは仕方がない。

私は愛犬と娘のやりとりを棚に上げ、目の前のモニターに意識を向け直す。キーボードとマウスを操作して、最後のページまで目を通した。

「で、これを印刷したのがこれです」

一輝さんが、一番前にPDFを表示して、モニターを指しながら横に置いたA4用紙を指差した。彼は再び、「コレが、これです」と画面のデータと印刷物とを紐づけるかのように指を動かした。

「書き換えたいところがあれば、こっちを編集してください」

彼は横からキーボードを操作して、スライドの編集画面に切り替えた。

「新しく印刷する場合や、編集方法が分からない時は、またボスに連絡してください」

「忙しいのに、ゴメンなさいね」

「いえいえ。お世話になってますから」

彼は笑いながら、持ってきた印刷物を、持ってきた真新しいクリアファイルに納めてくれた。私は「メディアを取り出す」ボタンを押して、「コレで、外しちゃって大丈夫かしら？」と画面を確かめてもらいやすいように身体を引いた。一輝さんはモニターを見ながら、「ああ、コレで大丈夫ですね」とUSBメモリをゆっくり取り外す。

彼はそのまま、食卓の椅子にかけていた薄手の上着のポケットへ、USBメモリを放り込んだ。それを見ていた沙綾が、目の前の鍋をゆっくりかき混ぜながら声をかける。

「ねぇ、終わった？」

一輝さんは、私の方をチラリと見て「多分」と返事をした。私は彼に頷いて返

し、背中を向け、開いていたファイルを順番に閉じた。電源は切らずに、モニターも閉じる。

食卓の方へ振り返ると、洗面所で手を洗ってきたらしい一輝さんが、リビングへ戻ってきていた。私も彼に倣って両手を洗いに行く。キッチンの方がにわかに騒がしくなり、ちょっぴりヒヤッとする音も聞こえてくる。パパッと手を洗い、リビングに戻ると、沙綾と一輝さんとで夕食の準備を進めてくれていた。幸い、何かを落としたり、何かを割ってしまった様子はない。

「もうちょっと丁寧に扱って頂戴」

「高いのは分かってるから、大丈夫、大丈夫」

怪我をしていないのなら、食器の値段なんてどうでもいい。どうしても身振り、手振りが大胆になりがちな彼女には、野暮な注文だろうし。奔放な育ち方をした割には、シチューをお皿に盛り付けるぐらいは出来るようにもなっている。

一輝さんは一輝さんで、穴だらけの彼女をサポートしつつ、彼女では考えもつかないようなところを、しっかりケアしながら動いていた。一皿一皿、仕上げにパセリを散らしながら食卓に並べ、冷やしておいたワインの栓も抜こうとしてくれている。

一輝さんは、沙綾に何を握られているのか。そんなことを考えながら、久しぶりにケビン以外の誰かと夕食を共にする日曜日。資料作り、また頼んでみようかしら。

『一〇月八日（日）』——奥野朋子編

初出　令和三年一〇月二三日　Pixivにて公開

一〇月一〇日（火）

亜衣のベッドで二人とも深い眠りに就いてしまった。やっとぐっすり寝てくれた映美を起こさないようにそっと抱き抱え、隣の彼女のベッドにゆっくり下ろす。寝冷えしないように布団をかけ、亜衣の方も布団をかけ直す。

この間までタオルケットも蹴飛ばしていたのに、次の週末あたりから毛布も出すかどうかという気候らしい。日中の暖かさはまだしばらく続くらしく、秋らしい秋を感じられないまま、パッと冬らしい装いにするのも二の足を踏む日々が続きそうだ。

煌々と点いているLED照明を、常夜灯に切り替えた。照明用のリモコンを、ドア横につけたスタンドへ戻す。しばらく子供部屋のドアに手をかけたまま、二人の様子をジッと確かめる。どうやら本当に寝入ったらしい。音を立てないように、ゆっくりドアを閉めた。

「お疲れ様」

飾り付けがついたままのリビングへ戻ると、芽衣が椅子に腰掛けたまま振り返った。

「映美も随分、重くなったな」

「そう？　そんなに変わらないと思うけど……」

さっきそっと持ち上げた時は随分重く感じたけど、僕より抱きかかえる頻度の多い彼女がそういうのなら、彼女の方が正しいのだろう。

「まだまだ衰えるのは早いよなぁ」

僕は自分の両腕をさすりながら、芽衣の向かいに座る。彼女は頷きながら、

「仕事もプライベートも、まだまだコレからだからね」と付け加えた。

「心も身体も鍛えなきゃ、か」

僕は椅子の前に置いたままの、娘たちからの手紙を開いた。まだまだ拙い字による一言メッセージと、自由奔放な線で描かれた似顔絵が添えてある。

「鍛えなきゃなら、要らない？」

いつの間にかキッチンの方へ移っていた芽衣は、朋子さんから頂いた高そうなウイスキーを僕に見えるように掲げていた。

「要る要る。鍛えるのは飲んでから」

芽衣は箱のままのウイスキーと、背の低い分厚いグラスを二つ持って戻ってきた。僕は彼女から箱を受け取り、中の瓶を取り出した。中身は、シングルモルトのとても高そうなウイスキー。

とりあえず一口、ストレートで口に含んでみる。中々刺激的な味わいが口の中に広がり、喉に熱さが駆け抜けていく。口から吐く息も独特の香りを含んでいるような気がする。

芽衣は、常温の水とつまみのナッツを持ってきた。彼女は自分のグラスにいくつか小さな氷を入れて、ウイスキーを注いだ。僕は再びウイスキーを少し注いで、同量の水を注ぐ。さっきより味わいもアルコールも柔らかくなって、甘いバニラのような香りが膨らんだ。

「うん。美味しい」

芽衣はウイスキーを一口飲み、ナッツを口に放り込んだ。僕はキッチンに入り、冷蔵庫からよく冷えた炭酸水と、食器棚から空のコップを取り出した。食卓に戻って、常温の水を空のコップに移す。ハイボールを作る前に、コップに入り切らなかったペットボトルの水を飲み干した。

「朋子さんに、いい感想書けそう？」

芽衣の呟きに、一瞬キャップを開ける手が止まった。彼女からもらった万年筆の箱が視界に入り、微かにざわついた心を静める。グラスにウイスキーを注ぎ、瓶に蓋をした。

「書くさ。コレの感想も、今日の話も」

万年筆の箱を手元に引き寄せ、箱の上から矯めつ眇めつ、それを眺める。まだまだ課題は山盛り。本当に、鍛えて鍛えて鍛え抜かねば……。

『一〇月一〇日（火）』——森田康徳編

初出　令和三年一〇月二四日　NXZ（旧サイト）にて公開

一〇月一一日（水）

作業着姿でない弟を見るのは随分久しぶりだった。私服の中でも比較的かっちりしていそうなボタンダウンシャツとチノパン、カジュアルなジャケットというのも、非常に違和感を覚える。

晃が来ているものといえば、サッカーのユニフォームか、中学や高校の制服、そうでなければ母がイオンや平和堂で買ってくる謎の服といったイメージしかない。流石に、実家の仕事を手伝うようになってからは自分で色々買いに行くようだ。

その中でも、今日は比較的ちゃんとしている部類の服装をしている。ユニクロで買い揃えたのは間違いなさそうだが、そこら辺の大学生に見えなくもない。

「なんだよ」

晃は僕の方を見て、嫌そうに言った。

「いや、絵に描いたような『馬子にも衣装』だなと思ってね」

「どうせオレは、都会的でオシャレな兄貴と違って、ダサいの土方だよ」

「そんなことは言ってないだろ」

「目がそう言ってるんだって」

晃は僕がさっき入れたコーヒーに口をつけた。

「ウチじゃ、コーヒーメーカーも床暖房もないぜ？」

「そうだっけ？」

一度足を踏み入れたっきり、しばらく顔を出していない実家のリビングを脳裏に思い描く。あの時もしばらくぶりだったから、何がどう変わっていたか、一つずつ確かめる余裕もなかった。

真新しい電気ポットぐらいはあったような気がするけど、食器棚や冷蔵庫、エアコンがどんな形で、どんな色をしていたかも覚えていない。

「わざわざスリッパも履かないし」

彼は自分が履いている来客用のスリッパに目をやった。向こうに行った時、来客用のスリッパは出てきた気がする。僕は晃に「スリッパは、お客さんだけだよ」と答えた。

晃は自分の腕時計を見た。そろそろ昼過ぎ、僕の昼休みもボチボチ終わる。
「出発は何時だっけ？」
「予定では、午後一時。連絡もらってから、下で集合、のはず」
じゃあ、ほぼ予定通りか。沙綾だけならいざ知らず、今日は朋子さんも同行するらしいから、とんでもない遅刻はしないだろう。晃は一瞬スマホを確かめ、すぐにスリープへ戻した。
「で、結局、兄貴はあの人と結婚すんの？」
晃はぶっきらぼうに言い放った。答えを求めている様子ではなかったが、僕は答えを濁しながら、曖昧に肯定した。すると、彼は「マジかぁ」と項垂れた。
「あの人はともかく、あのオバちゃんが親戚か」
「別に、そんな親戚付き合いもしないって」
「たま〜にだから、余計にさ。兄貴はいいけど、緊張しっぱなしというか、馴れる気がしないっていうか」
あ〜、それはそうかもしれない。彼より頻繁にやりとりしていそうな瑞希も、朋子さんの前ではまだまだ緊張しまくっている。もっとも、それは僕にしたって大して変わらない。
「でも、別に怖い人じゃないよ。気持ちがピリッとするだけで」
「それが怖いんだろ〜」
でも、その「怖い人」と今日は半日一緒にいることになる。間に沙綾がいて、ただの運転手に近いポジションだったとしても、ピリついたままの半日は中々の試練だろうな。
晃への言葉を考えている間に、彼のスマホが鳴った。どうやら、いよいよその試練が始まるらしい。慌てて出ていく弟に心の中でエールを送りつつ、僕は僕で、午後からのリモート業務を開始した。

『一〇月一一日（水）』——浪川一輝編
初出　令和三年一〇月二四日　NOVEL DAYSにて公開

一〇月一四日（土）

おやつの時間も過ぎて、そろそろ夕方というタイミング。今の時期にコレぐらいの時間帯は、若干肌寒い。向こうで浪川さんや康徳さんらと走り回っている亜衣、映美の二人は寒さを感じるどころか、ちょっと汗ばむぐらいらしい。

私は屋根の下でベンチに座り、沙綾さんがコンビニで買ってきてくれたホットコーヒーに、両手を添えて暖まっている。沙綾さんは私の向かいに座り、湯気を立てながらコーヒーを飲んだ。

「お茶も奢ってもらったのにコーヒー代まで」

私は、沙綾さんに頭を下げた。彼女は「いえいえ」と応えた。

「おまけに半日遊んでもらっちゃって。何から何まで、ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。普段から母が迷惑かけてるのに、今度は彼氏までお世話になっちゃって」

「迷惑だなんて、そんな……」

今日も元々は、朋子さんに呼び出されたのがキッカケだった。彼女とのやりとり、あるいは施術してもらっている間はそれなりに緊張もあるけど、それが嫌だとか、負担になる感覚はあまりない。

娘たちにもよくしてくれるし、旦那のことも強くバックアップ、時にはハッパもかけてくれているし、感謝こそすれ、迷惑だなんて思ったことはない。

今日は何やら、浪川さんからのお礼も込められているようだけど、こんなに良くしてもらうような「お世話」をした覚えもあまりない。康徳さんが何かしたのかと思ったけど、どうやら私の何かが彼の何かに役立ったのだとか。

「ちなみになんですけど、旦那さんってご兄弟いらっしゃいますよね？」

沙綾さんが、いつも溌剌として彼女にしては珍しく、おずおずとした様子で声をかけてきた。私は思わず真剣な表情で、彼女の方を見る。

「兄弟っていうか、お姉さんと妹さんがいるね」

「義理のお姉さんとか、妹さんとのお付き合いって、どんな感じですか？」

「どんなって言われても……」

普段、どんなお付き合いしてたっけ、と脳味噌を働かせる。敬子さんとはなん

となくウマが合うというか、趣味が合うというか、なんとなく通じるものがあって旦那も知らない付き合いがあるぐらいだけど、姉の郁美さんとはそこまで仲がいいという感覚はない。

沙綾さんとはちょっと違うニュアンスで線が太いというか、主張の強い性格をしていることもあるけど、お姑さんより距離があるお付き合いをしているかも。

私が素直にそのまま伝えると、沙綾さんは「やっぱり、そういうもんですよね～」と苦笑いを浮かべた。

「妹の瑞希さんとは今でも仲良くしてるというか、歳の離れた親友ぐらいの気持ちなんですけど、どうも真ん中の弟さんが距離感が難しいというか、仲良くなれる気がしなくって」

そういえば、彼女と瑞希さんは色々やってたっけ。それぞれちょっぴり気難しそうな性格をしているだけに、仲良くしているのが不思議に思える。浪川さんのすぐ下の弟さんというのは、私はあまり面識がないから、性格や空気感云々は全く分からない。

「ま～、無理しなくてもいいんじゃない？　お姑さんとか、義父さんとかと仲が良ければ、なんとかなるとも思うし」

沙綾さんはさっきと同じトーンで、「ですよね～」と笑みを浮かべた。彼女が視線をやった先にいる康徳さんも、私の弟たちとはギクシャクしながら関係性を築いて行った。器用な彼女のことだから、きっと上手くやるだろう。

『一〇月一四日（土）』――森田芽衣編

初出　令和三年一〇月二五日　アルファポリスにて公開

一〇月一七日（火）

章二さんは、お店の入り口近くにある大きな冷蔵庫の前で、お店の人と楽しそうに喋っている。さっきもさっきで、カウンターの中にいる調理担当のスタッフさんや、カウンターで喋っていた他のお客さんに声を掛けていた。

「社交的なお父さんなんですね」

隣のテーブルから、浪川さんがルミに声をかけた。

「社交的、なのはいいんだけど全然戻ってこないよね」

ルミは章二さんの方へ視線をやりながら、少々ぶっきらぼうに言った。彼女が言うように、章二さんは私たちの席へ戻ってこないし、案内されてからズーッと歩き回っている。

「あんなに落ち着きのない人だったっけ」

「落ち着きがないと言うか、サービス精神が旺盛なんでしょうね」

家ではブスッとしているか、偉そうにふんぞり返っているか、側から見ると絵に描いたような「面倒臭そうながんこ親父」をやりがちなんだけど、本来は、あんな感じで好奇心旺盛かつ社交的な人。

「家でもああなら良かったのに」

「内弁慶で不器用な人だから」

ルミは「内弁慶にも程があるって」とボヤいた。彼女にとっては、ただただ厳しくて怖い父親の姿しか見せていなかったから、その気持ちは分からなくもない。父親としてそういう振る舞いしか知らなかった、できなかった章二さんの気持ちも分からなくもない。

「前に一度、お会いしたことありません？」

浪川さんの向かいに座っている作業着姿の男性が、私の顔をジッと見ながら言った。私は頭の中に疑問符を浮かべながら、相手の顔をジッと見る。浪川さんと顔や全体的な雰囲気が良く似ている気がする。視線を引いて、浪川さんと向かい合って座っている姿をぼんやり眺めると、なんとなく見覚えがあるような気もしてきた。

すると、向こうが何かを思い出したらしく、「そうだ、そうだ」と声を上げた。

「あの時に隣に座っていたオバさんだよ」

彼は向かいの浪川さんに「ホラ、あの時の」と迫るものの、浪川さんは「あの時？」とまだピンときていないようだった。

「半年ぐらい前かな。まだ寒い時に、商店街近くの喫茶店で一緒にメシを食った時」

半年前？　商店街近くの喫茶店で浪川さんと出会ってたっけ？

私がのんびり頭を捻っていると、浪川さんは「ああ、あの時の」と思い出したらしい。

「スケッチブックを勝手に弄っちゃった時の」

スケッチブック？　そういえば、喫茶店でスケッチブックを見直していた時に、色鉛筆で横から手を出されたっけ。もしかして、あの時のスーツの男性と、作業着の男性が彼らなのか。

「その節はすみませんでした」

浪川さんは座ったまま深々と頭を下げた。あの時の彼が「あの浪川一輝」なら、瞬時に的確な加筆ができたのも、納得できる気がする。私は深く頷き、半年ほどの疑問をお腹に落とし込んでいく。

「いえいえ。浪川さんのおかげで、いい絵になりました」

私もお礼を込めて深々と頭を下げた。それを見ていたルミは訝しげに、「なんか、随分と畏ってない？」と言った。

「だって、あの浪川一輝くんでしょ？　手ほどきを受けるなんて光栄じゃない」

ルミは全くピンときていない様子だったが、浪川さんは「いえいえ。昔の話ですから」と謙遜していた。確かに私の知っているのは子供の頃の彼の活躍だけど、最近も色々と活躍しているのも知っている。

ダメで元々と章二さんを誘って外へ飲みに出てみたら、憧れの人と隣の席でお酒を飲めるだなんて……。

『一〇月一七日（火）』――小野寺香帆編

初出　令和三年一〇月二六日　MAGNET MACROLINKにて公開

一〇月一九日（木）

夕方にパパッと幸弘のオフィスを訪れて、土産を置いたらサッサと帰るつもりだったのに、何故か年若い娘さんたちを前にして、居酒屋で日本酒を飲んでいる。華やかな彼女らにはあまり似つかわしくない、非常にオジサン臭い店だ。

当人らは周囲の目や私の考えなど全く気にせず、自分たちのペースでビールやつまみを頼んでいる。瑞希さんは早々に日本酒に切り替えた。

「そうか、そいつは災難だったね」

私が志津香とドライブ旅行に出かけている間に、思わぬ出来事があったらしい。

「でも、武藤さんが旅行にでも行かないと、いつまでも接点生まれなかったかもね」

「それはそうかも」

沙綾さんはビールを飲み切ると、通りかかった店員を呼び止めて、日本酒の銘柄が書いてあるボードを要求した。今は階下にあるらしく、女子大生っぽい店員は「少々お待ちください」と空きのグラスを大量に持って階段を降りて行った。

「でも、お兄ちゃん的には、沙綾さんより朋子さんの方が気ぃ使うわ、みたいに言ってたけど」

瑞希さんはグラスに並々と注がれた日本酒に口をつけ、一口啜ってグラスを小皿から引き揚げた。彼女のお兄ちゃん、晃くんでなくても、朋子さんを目の前にするとピリッとする。朋子さんより年長者であるはずの私でも、たまに緊張してしまう。

「弟もいるし、苦手ってことはないとは思うんだけど、なんか距離感が難しいんだよね」

見た目的にも性格的にもはっきりしていそうな沙綾さんに、男性が苦手という印象はない。むしろどんな男性でもいいように振り回す素質もありそうだけど、それも上手にいなす一輝くんが特別なだけであって、晃くんは彼女にとって「そこら辺の男性」と大差ない気もする。

アーティスト肌で気難しそうな人柄という点では、沙綾さんが距離感を図かねている晃くんよりも、彼女が懇意にしている一輝くんや瑞希さんの方が当てはま

りそうなもんだが、引っかかっているのはそういうことでもないのだろう。

「武藤さんの時はどうでした？　奥さんのご兄弟とか……」

沙綾さんの問いが私に向けられ、ようやく「ああ、そういうことか」と腑に落ちる。とはいえ、志津香の兄や姉と出会ったばかりの感覚や気持ちなんて、全く覚えていない。親御さんとは別の緊張感があったような気はするが、それをどう乗り越えて、どう人間関係を構築して行ったかも覚えていない。

「ほぼ半世紀前の出来事だから、あんまり覚えてないな」

沙綾さんの落胆が、仕草に現れている。

「ご期待に添えず、申し訳ない」

私が軽く頭を下げると、彼女はハッとした表情で居住まいを正し、「こちらこそ、ごめんなさい」と謝った。私は「いやいや、気にしていないからいいよ」と彼女に言った。

「まぁ、赤の他人でもないし、友達とも違うし、独特な距離感、緊張感はあるだろうね」

とっさのフォローに、沙綾さんは「ですよね」と得意げな表情で言った。コロコロ変わる表情、大きな身振りは見ていて楽しい。

「まぁ、何度か会えば大丈夫じゃない？」

沙綾さんの横から、瑞希さんが笑いかけた。

「私とお兄ちゃんの兄弟だし」

長男の一輝くんと、末っ子の瑞希さんと気が合うのなら、真ん中の晃くんも大丈夫だろう。彼の顔を脳裏に思い描いてから、彼用の土産を買っていないことに気がついた。

『一〇月一九日（木）』――武藤幸次編

初出　令和三年一〇月二六日　Mediumにて公開

一〇月二〇日（金）

JR茨木駅まで移動して、西口から地上へ降りて線路沿いに北上する。居酒屋裏の地域猫たちを眺めながら、線路横の歩道橋を上り下りすると春日商店街へ入っていく。餃子の専門店を通り過ぎ、その先の丁字路も曲がらずに真っ直ぐ行って、お花屋さんの前で足を止めた彼は、趣のあるドアを開いた。

商店街の雰囲気とは打って変わって、非常にムードのある薄暗い店内。落ち着いた間接照明が、如何にもな空気を作り上げている。

予約もせずに足を踏み入れたのに、店主は快くカウンターの奥の席へ案内してくれた。彼が一番奥の席に行き、私は一つ手前の席に荷物を置いた。コートを掛けてもらい、荷物をテーブル下のフックにぶら下げる。

彼は椅子に座りながらグルっと店内に視線を巡らせ、店主が持ってきたメニューを「ありがとう」と受け取った。

「久々に来たけど、また味が増したね」

「そう？　私は初めて入るわ」

JRの駅前まで出てきても、どこかで買い物に立ち寄るか、さっさとバスに乗り換えて帰ってしまう。商店街の奥の喫茶店もこの間行ったけど、それもわざわざ声が掛からないと行かなかったように思う。

「朋ちゃんは何にする？」

彼は私にもメニューを見せてくれるが、説明を読むだけでは何が何やら分からない。どうやら彼は海外のピルスナーに決めたようだけど、私は同じメーカーの黒ビールを選んだ。

彼はそのまま前菜の四種盛りと、自分用のカレーも注文した。私は自分の腕時計に目をやり、時間を確かめる。

「まだ五時前だけど、そんなに頼んで大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。俺は従業員じゃないからね」

彼はニヤッと笑って、運ばれてきたビールに口をつけた。「うん、美味い」と呟くと、一緒に運ばれてきた四種盛りにも早速お箸をつける。ポテトサラダの上の方を一口持って行った。

私は彼の言動に一抹の不安を覚えながら、目の前の黒ビールに口を付ける。独特の香りと甘みが強烈なクセになっている。このクセの強さはハマるかもしれない。店主がグラスの横に置いてくれた瓶を見て、銘柄を確かめる。

「他所で買おうと思っても、全然売ってないんだよ」

新しい来客に応対して忙しそうな店主の代わりに、彼が説明してくれる。彼の言葉に疑問を抱きながら、銘柄をスマホで検索してみると、専用の通販サイトが数件出てくる。通販サイトから注文するしかないとなると、フラッと街中のリカーショップを訪れたって買えないかもしれない。

彼が飲んでいるピルスナーも一口、味見をさせてもらう。これもこれで、クラフトビール特有のアルコールの強さ、ホップの苦味がガツンと来る。「大丈夫」と言っていたけれど、こんなのを一杯、二杯飲んでから、本当に仕事ができるのだろうか。

彼は四種盛りをチマチマ摘みながら、今日のセミナーの感想も話してくれる。褒め言葉はありがたいのだけれども、ビールが美味しすぎて話が全然入ってこない。おツマミも、一つ一つしっかり手間がかけられていて、ちゃんと美味しい。

期待値がしっかり上がったところで、彼の前にカレーがやってくる。こんな早い時間に血糖値をグッと上げてしまって、本当に大丈夫なのか。私の心配を他所に、彼は大きな口でカレーを掻き込んでいく。

匂いに負けてジッとカレーを見ていると、彼は「スプーン、もう一つもらおうか？」と聞いてきた。私は「一口だけ」と彼からスプーンを受け取り、ルーを小さくすくって舐めてみた。

『一〇月二〇日（金）』——奥野朋子編

初出　令和三年一〇月二六日　Pixivにて公開

一〇月二二日（日）

「つまり、二人の出会いは君がキッカケなんだ」

沙綾さんは、私と哲朗さんを指で差しながら言った。哲朗さんはキョトンとした表情で私の方を見るけど、私も詳しいことは知らない。お誕生日席っぽいところに座っている晃兄に視線を送る。

彼は私の視線をスルーして、沙綾さんの言葉に「ま、そういうこと」と答えた。

「御膳立てから先は、本人たちのアレだけど」

「でも、それがこうなってるんだから、大したもんよ」

晃兄は自慢げに「まあね〜」と鼻を膨らませた。沙綾さんは仕切りに、凄いだの、偉いだのと彼を持ち上げる。この間まで「距離感が分からない」と悩んで周りに相談までしていた割に、凄まじい馴染みっぷり。

もしかして、一兄と哲朗さんにわざわざ時間を合わせてもらってまで、こういう会を開かなくても良かったりする？　私が沙綾さんの隣に座る一兄に視線を送ると、彼は小首を傾げた。隣の哲朗さんも、何となく居心地が悪そうにビールジョッキを傾けている。

完全に蚊帳の外の我々を他所に、沙綾さんと晃兄は意気投合して、二人で仲良く喋っている。一々聞き耳を立てて話を聞くのも面倒臭くなってきちゃった。彼女らには聞こえないよう、声を抑えて「なんか、ごめんね」と哲朗さんに言った。

「別に良いよ。兄弟の集まりに混ぜてもらって光栄だよ」

彼はそう言いながら、私に微笑んでくれた。一兄にも「忙しいのにごめんね」とヒソヒソ言うと、「良いって。気にするな」と答えてくれた。

「オレより、二人の方が忙しそうじゃないか」

一兄の言葉に、哲朗さんは苦笑いを浮かべながら、「まぁ、おかげさまで」と答える。

「ヒートアップしちゃった先生の特訓は、その後どうなんだ？」

「全然終わらない。お陰でバイトとか全然行けてなくて」

隙あらば課題を詰め込んでくるお陰で、写真屋のバイトどころか、Mサイズのオフィスにすら中々顔を出せていない。船木さんからは、「暇ができたら、いつで

もおいで」とは言ってもらえてるけど、流石にそろそろヤバい気がする。
実践的なテクニック、スキルを中心に鍛えてもらって入るものの、現場や実践で試してみないと血肉にならないところもある。その辺りの相談も、近々先生とやらなきゃな。
「アレ、じゃあ二人が顔を合わせるのはいつ振り？」
「チラッと顔を合わせてはいますけど……」
哲朗さんが上を見ながら記憶を辿っている。Mサイズのオフィスに出入りはしているから顔は合わせているけど、こうやって落ち着いて食事をするのは、後期の授業が始まって以来かもしれない。
「なんだかんだで、晃と沙綾に感謝だな」
一兄の視線は、勝手に盛り上がっている二人の方へ向けられる。哲朗さんは納得した様子で「そうですね」と頷いた。私は微塵も納得できていない。
「お待たせしました。涙巻きで～す」
店員さんが、刻みワサビがたっぷり乗った細巻きを運んできた。盛り上がっていた二人も動きを止め、運ばれてきたお皿に目をやった。
「え、何それ」
晃兄が呟いた。私が「涙巻きだけど」と答えると、沙綾さんが「みぃちゃん、それ食べんの？」とちょっぴり引いた様子で言った。
「流石にそれは、ちょっと減らした方がいいんじゃないか？」
一兄まで、上に乗ったワサビを箸で落とせと合図する。そこまでやられると、このままかぶりつきたくなる。思い切って、一つ口に入れた。強烈な刺激が鼻を駆け抜けていく――。

『一〇月二二日（日）』――浪川瑞希編
初出　令和三年一〇月二六日　noteにて公開

一〇月二三日（月）

右手を見ればJRの高架が見え、左手の方を見れば向こうの方に阪急電車のすれ違いが見える。目の前には、右の方から左の方へ流れていく川がある。土日や夕方なら、すぐそこの高架下やランニングコースを走る人がもっといるのだろうけど、月曜日の午前中は流石にといった様子。

私はここまで歩いてきた足を休め、呼吸を整えながら、目の前の流れを延々と眺めている。対岸の河川敷を駆け抜けていく人、のんびりウォーキングしている人を時々観察しながら、その人の人となりや生活を勝手に想像してみたりする。

こうして、ただボーッとしながら、たまに人間観察していると何かが閃くかもしれない。アイディアの端緒、描きたいシーンのぼんやりとしたイメージ、妄想するきっかけが少しでも掴めれば十分なんだけど、すぐにポンポンと出てこないから、こんなところで川や河川敷を観察しているのだろう。

左手、下流の方を眺めていると、黒いジャージに身を包んだ男性が、こちらに向かって歩いてきている。豊かなグレイヘアと歩き方に、なんとなく見覚えがあるような気がすると思って見ていると、向こうも私の視線に気がついたらしく、こちらを向いた。

「ああ、どうも」

顔がはっきり分かるところまでくると、相手の男性は手を上げて挨拶してくれた。

「先日はお土産、ありがとうございました」

「いえいえ、いつもお世話になっておりますから」

相手の男性、武藤さんはウォーキングを中断して、立ち止まってくれた。彼は、私の周りを見ながら、「今日は、お一人ですか？」と訊いた。

「旦那に任せて来ちゃいました」

武藤さんは小さく声を漏らしながら、小刻みに頷いた。

「武藤さんは？」

「健康のために少し歩こうかと」

彼は対岸の方を指差しながら、下流の方へ空中で弧を描きながら説明してくれ

た。お家がある上流の方からではなく、下流の方から歩いて来たのは、すでにランニングコースのゴール地点まで行って来たからしい。

微妙に蛇行する川に沿って、玉島小学校の裏辺りまで行くと、それなりの距離がある。

「あそこまで行って戻って来たんですか？」

「いやいや、運動としては全然足りないくらいですよ」

武藤さんはサラッと言った。

「本当は走った方がいいんでしょうけど、この年で急に走るのもね」

彼の懸念に思わず「そうですね」と同意の言葉が漏れた。武藤さんは何かを思い出したようにスマホを取り出し、「ああ、でも今度ね」と画面を操作して私に見せた。

「ノルディックウォーク教室があるとかで、これに妻と参加しようかと」

次の土日に、近隣の有志が主宰でノルディックウォーキングの講習会をやるらしい。参加する前に自分で調べて、杖はすでに買ってあるのだとか。

「まだ枠があるみたいなんで、森田さんもどうです？」

私が武藤さんにスマホを返すと、彼はそれを仕舞いながら言った。

「気分転換にもなるし、頭にもいい刺激になるらしいですよ」

健康に大きな不安があるとは言わないものの、体力維持に何かしたい気持ちはある。杖をつきながらの全身運動は、頭も確かに動いてくれるかもしれない。

私が「旦那と相談してみます」と言うと、武藤さんは「そうですか。ではでは」とウォーキングを再開して上流の方へちょっぴり早足で歩いていく。

ウォーキングか。ここでボーッとしているよりは、良いかもしれない。ちょっと行ったところにあるパン屋さんにでも寄って、お昼ご飯を買って帰ろう。

随分と先に行ってしまった武藤さんの背中を、無理のない速さで追いかける。

ちょっぴり肌寒い空気がちょうど良い。閃きよ、来るなら今だ。

『一〇月二三日（月）』――森田芽衣編

初出　令和三年一〇月二七日　アルファポリスにて公開

一〇月二五日（水）

笠井さんとコーヒーを飲みながら、哲朗が来るのを待っている。僕はアイスコーヒーを飲み、笠井さんはホットコーヒーを飲んでいる。彼はカッターシャツの上にベストまで着込んでいた。

「すっかり冬の装いですね」

僕に比べれば厚着の彼に、僕はそう言った。彼は苦笑いを浮かべながら、「いやいや、コレはそこまで分厚くないですから」とベストを摘みながら言った。

「週末ぐらいから、また冷え込むって言ってましたよ」

「もう一一月ですもんね」

多少寒くてもあまり厚着をしない僕でも、流石にそろそろジャケットやコートを羽織らないとダメかもしれない。日中の日向はまだまだ暑い分、朝夕の冷え込みとの落差が体に堪える。

笠井さんは自分のシステム手帳を見ながら、何かを言おうと顔を上げた。その顔の奥に、哲朗の姿が見える。僕は椅子から立ち上がり、手を振った。哲朗は小走りで「遅くなって、すみません」と近づいてくる。

僕は財布を握ってレジの方を指しながら、「なんか頼む？」と彼に尋ねる。哲朗は空いている椅子に腰も下ろさず、「いえ、すぐに戻らなきゃいけないんで」と言った。

「そっか、そっか。じゃあ、とりあえずコレ」

立ったままの彼に、椅子に腰を下ろしたまま半分に畳んだA3用紙を差し出した。

「再来月はコレで決まりそうだから」

哲朗はA3用紙を開き、横長の紙にザッと目を通す。

「了解しました。で、コレだけですか？」

哲朗は再び用紙を半分に畳んで持ち、ゆっくりした口調で僕らに確かめる。僕は頷きながら、「忙しいのに、ごめんね」と答えた。

「データで送ってもらえば良かったのに」

「せっかく印刷してもらったからさ。それにコッチがついでだから」

僕は真新しいクリアファイルも哲朗に差し出した。彼はそれを受け取ると、

「じゃあ、戻りますよ？」と確かめ、僕が頷いて返すと、「じゃあ、失礼します」と資料をクリアファイルに入れ、来た時と同じような小走りで来た道を戻って行った。

「なんか、すみません。僕がランチしましょうと言ったばっかりに」

笠井さんは椅子に座ったまま深々と頭を下げた。

「いえいえ、気にしないでください。そういうのも大事じゃないですか」

忙しそうな哲朗には申し訳なかったが、たまにはこうなってしまう日もある。彼には後で何らかのフォローを入れておけば何とかなる。

「そういえば、さっき何か言おうとしてませんでした？」

僕は、哲朗が来る直前の笠井さんを思い出し、彼に訊ねてみた。彼は「ああ」と再びシステム手帳を開きながら、「来週一日、息子さんの誕生日ですよね？」と言った。

「え、そんなことまでメモしてくれてるんですか？」

「ええ、まあ。大したことじゃないんですけど」

笠井さんは謙遜するが、彼の付き合いを考えると、膨大な量のメモがあの手帳には書き込まれていることになる。その量を想像するだけでも気が遠くなるが、彼はそういうのが得意そうなのも何となく分かってしまう。

「中学一年生、でしたっけ」

「そうです、そうです」

笠井さんは「いやぁ、若いなぁ～」と声を漏らしながら、システム手帳をゆっくり閉じた。

「将来の進路は」

「いや～、まだまだ全然」

「そうですか。娘さんも優秀だからな～」

智希も陽菜も、直接笠井さんとの面識はなかったはずだけど、彼は色んな情報を整理して、彼や彼女らを想像しているように見える。この細かさがあればこそ、か。せめて薄手のベストかホットコーヒーぐらいは見習わなきゃな……。

『一〇月二五日（水）』――武藤幸弘編

初出　令和三年一〇月二七日　カクヨムにて公開

一〇月二七日（金）

来月末の第四号に向けた表紙の初稿が仕上がった。各々の「痛々しさ」を大切にしているヒイラギでは、余程のことがない限り、修正はかからない。文字を載せたときの色味補正や入稿用にデータの修正はあるだろうけど、とりあえず目下の気になることはクリアできた。

データの送付やその後のやりとりは自宅に戻ってからゆっくりやるとして、仕上がったばかりの目や気持ちを一旦冷ましていく。場所を貸してくれたルミに、お礼を兼ねて掃除でもして行こう。

建て替えた頃に、ルミのリモート勤務が決まったため、ほぼ彼女の一人暮らしと仕事用の家になっていた。時々来ることがあっても、玄関とリビング、トイレぐらいしかウロウロしていない。

食器棚や冷蔵庫はほとんど残して行ったため、新しめの壁や床に大してミスマッチな印象は拭えなかった。で、肝心の掃除用具だけど、建て替える前に使っていた納戸と似たような場所に仕舞ってあった。一旦掃除機を引っ張り出し、リビングまで持っていく。

コートなしだと少々肌寒いけど、窓という窓を全開にする。コンセントを差し込んで、近い場所から掃除機をかけていく。色んなものが新しくなっているはずなのに、構造自体はあまり変えていないからか、とても懐かしい気持ちになってくる。

コンセントを挿しては外し、掃除機を持って順番に家の中を回っていく。在り し日のルミや章二さんの影を思い浮かべながら、色んなことを思い出してしまう。

掃除機を一通りかけ終え、元の納戸に片付けた。入れ替わりで床拭きモップを取り、ウエットシートを付け、掃除機をかけた順番で床を拭いていく。掃除機をかけた時も気になったけど、ルミはあまり熱心に掃除をしていないらしい。ウエットシートの両面をしっかり使い切りながら、何枚か取り替えたところでようやく床拭きもひと段落ついた。

床拭きモップも納戸に戻し、キッチンへ移動した。ガスコンロの周りやレンジフード、中の換気扇の汚れも気になるし、シンクの中や蛇口の汚れも気になって

きた。もうそろそろ大掃除も始めないと、年末にパパッとやるだけじゃダメだぞと思いながら、ここはもうルミの家だから、と割り切ることにした。

簡単な掃除で身体を動かしている間は気にならなかったけど、流石に窓全開は寒くなってきた。キッチンの窓と向かいの掃き出し窓だけ小さく開け、後の窓は順番に閉めて回った。ついでにカーテンも閉めておく。

再びキッチンに戻って、冷蔵庫やストッカーを開けてみた。乾物や乾麺、野菜の類はあまり入っていない。色んなインスタント食品や冷凍食品、お酒や加工肉は潤沢に入っていた。調味料が入ってそうな扉を開けてみるものの、みりんやお酢が切れていた。

晩ご飯に何か作って、それもお礼にしようかと思ったけど、これでは作りようがない。平和堂にでも行って帰って、何か作ってもいいんだけど、それはやり過ぎな気もする。

冷蔵庫の前で一人で悩んでいると、玄関で鍵の降りる音がした。そちらへ目をやると、スーツ姿のルミが姿を現した。

「あら、おかえり」

「ただいま〜」

ルミはカバンを食卓に置きながら、「どう、捗った？」と訊いてきた。

「おかげさまで、一区切りつきました」

「それは良かった」

ルミは荷物をそのままに、両手を洗いに洗面所へ向かった。私はその背中を見ながら、何から話そうか、頭の中で色々と考え始めた。

『一〇月二七日（金）』——小野寺香帆編

初出　令和三年一〇月二八日　MAGNET MACROLINKにて公開

一一月二日（木）

テーブルの上で綺麗に割り勘して、最後は僕がレジで支払った。僕らを招集した主催者は、晃くんに支えられてようやく立っている。レシートを受け取り、一歩外に出ると夜風がとても心地いい。

一足先に出ていた上坂さんは、ちょっぴり寒そうに道の端で両手を擦り合わせていた。僕は後ろから来た二人にせっつかれ、出入り口の前を開ける。

「おぅ、悪いね」

藤堂に肩を貸して支えている晃くんは、僕に軽く謝った。僕は「いいって。気にしないで」と言った。男どものやりとりを、上坂さんは少し離れたところで冷ややかな目で見つめている。

「で、上坂さんは阪急だっけ？」

彼女は声を出さず、頷いて答えた。特に急ぐ様子もないが、さっさと帰路につきたいように見える。それを見ていた晃くんは、「お前もあっちだったよな？」と僕に確かめてきた。僕が頷くと、「じゃあ、駅まで送ってやって」と言った。

「こいつの事は心配すんな」

僕が、彼に支えられながらグロッキーになっている藤堂を見ているとバレてしまった。彼は藤堂の方をチラッと見て、崩れかかっていた体勢を一度立て直す。

「本当に一人で大丈夫？」

とっさに手を出しかけるものの、晃くんは「大丈夫、大丈夫」とやんわり断った。

「こいつの介抱は慣れてるから、こっちは任せてさっさと行きな」

晃くんに支えられながら、藤堂は情けない声で「原田〜」と僕の名前を呼んでいる。それに後ろ髪を引かれるが、晃くんは追い払うように手を振り、「さっさと行け」とアゴのジェスチャーまで付け加えた。

「じゃあ、また」

僕が晃くんに別れの挨拶をする前に、上坂さんは阪急の方へ向けて歩き始めていた。

「おう、じゃあな。先生も、よろしく頼むよ」

晃くんは、どんどん遠ざかっていく「先生」にも声をかけた。僕は置いていかれないように、足早に先生の後を追いかける。自転車や他の歩行者にも気をつけながら、先生の横まで歩いた。

「あの人よりは、あなたの方が適任ね」

風を切って颯爽と歩く速度に歩調を合わせていると、先生は僕の方をチラッと見て呟いた。僕が「えっ？」と聞き直すと、彼女は「何でもない」と応えた。

「中々有能なお兄さんじゃない」

彼女は再び前を向いたまま言った。どうやら、晃くんのことを言っているらしい。

「才能豊かなお兄さんに、実直で人を見る目があるお兄さん、か。羨ましいわ」

「あれ、上坂さん、ご兄弟は？」

「生意気な妹が二人」

生意気な妹、か。自分にも思い当たる節はあるけど、上坂さんに三姉妹の長女っぽさもあまりないような。彼女は尚もズンズン歩きながら、僕の顔を見上げて「長女っぽくないって思ったでしょ」と突っ込んだ。僕が「いや、そんな」と否定しかけると、即座に「ウソついたって、顔に書いてある」と言った。

市役所の南側、消防署の前で信号に捕まって立ち止まる。曲がってくる自動車に気をつけながら、横断歩道を渡り切った。向きを変え、歩行者用信号が切り替わるまでの短い時間が、永遠のようにも感じられる。

隣で深刻に考えている僕のことなど微塵も気にしていない様子で、上坂さんはキリッとした表情を微塵も崩さず、目の前の信号が変わった瞬間に歩き始めた。僕は一瞬遅れて、それに続く。

時折外灯に照らされながら、堂々と闊歩する姿は中々画になる。黙っていれば横顔もキレイなんだけどな……。前を見つめていた横目が、チラッと僕を見て笑顔に変わった。

『一一月二日（木）』——原田哲朗編

初出　令和三年一〇月二八日　ノベルアップ+にて公開

一一月四日（土）

たまにしか見ない土曜日朝の番組も、今月はほぼ毎週見るんだろうなと脳裏をよぎった。チャンネルは同じなのに、平日とは微妙に違う構成に、時間を間違えそうになる。

食パンをかじって、三個一パックのヨーグルトを一つ食べ、インスタントのコーヒーといういつもの朝食は済み、二杯目のコーヒーを飲むか、歯を磨くか少し悩む。でも、コーヒーは道中でも隙間時間に飲むかもしれない。変にバタバタするぐらいなら、今から片付けて早めに出よう。

ゴミを片付け、お皿とマグカップを洗って水切りカゴに伏せた。洗面所で自分の顔や髪型を確かめながら、歯ブラシを手に取った。食べる前にメイクを済ませ、着替えも半分ぐらいは終わっている。家の中専用の防寒着を脱いで、下を履き替えれば、あとはジャケットとコートで外には出られる。

で、何を持っていくんだったっけ。昨日とほぼ同じ荷物がカバンの中に入っている。昨日持って帰ってきた飲みかけのペットボトルって、その後どうしたんだっけ。今日は関係者パスと社員証ぐらい持っていけば、あとは何とかなるか。

歯磨きを済ませ、口を濯ぐ。もう一度鏡で自分の顔を確かめ、鏡と洗面台の汚れを気にかけながら、電気を消してリビングへ戻った。カバンの中に入ったままだったペットボトルを取り出し、少しだけ残っていた飲み残しを一気に飲んだ。フタとラベルは燃えるゴミにして、ペットボトルは軽く濯いで窓のところに置いた。前から並んでいるビンや缶も、一回そろそろ袋に分けて捨てるように準備しなくっちゃな。

テレビの時計に目をやると、七時四二分。そろそろ着替えて出かけなくては。忘れ物がないように、もう一度カバンの中を確かめる。社内用ケータイも、お財布もちゃんと入っている。昨日から入れっぱなしの物も全部あるし、問題ない。

先に下を履き替え、防寒着を脱いでブラウスに袖を通した。パパッとボタンを閉めて、ジャケットにサッとブラシをかける。裏と表を一応目視してから、ジャケットを羽織った。

傘は多分必要ないと思うけど、どのコートを着ていくべきか少々悩む。でも、

昨日の帰りは寒かったからなぁ。日中はどうせ日向だし、着ないつもりでちょっと厚めの方にしよう。

ジャケットのボタンを閉め、コートを羽織る。テレビをリモコンで消して、戸締りと電気の消し忘れを確かめて外に出た。ひんやりした空気に頭がキリッとしてくる。世間的には三連休の中日。いつもの住宅街より、さらに人が少ない気がする。

それでもすれ違う近所の愛犬家に時折挨拶をしながら、南茨木の駅へ向かった。人通りの少ない歩道を、自転車で駆け抜けていく。漕げば漕ぐほど風が冷たい。

住宅街の細い道を、右に左に折れながら西に向かう。途中の小学校や公園で、やる気に満ち溢れた少年野球チームや、気合の入った近所のスポーツマンが、まだ八時前だというのに、本格的に活動し始めていた。

その爽やかなやる気に後押しされながら、桜通りも横切り、貨物の高架も潜って駅に辿り着く。駅前の駐輪場に自転車を預け、モノレールの駅を目指した。次のに乗っても、着くのは恐らく八時半。

「ま、ゆっくり行くか」

多少早くても何とかなるでしょう、と寒さにちょっぴり震えながら、自分に言い聞かせた。

『一一月四日（土）』——小野寺ルミ編

初出　令和三年一〇月二九日　小説家になろうにて公開

一一月五日（日）

久しぶりに、丸一日オフの日曜日。午後から雨模様で、夕方のケビンの散歩まで、家で独り静かに読書か映画鑑賞でもと思っていたのに、何故かキッチンから延々と賑やかな音が聞こえてくる。

読書に集中したくても、音が気になって仕方がない。字面をゆっくり追いかけながら、少しでも物語に入り込めるよう試行錯誤してみる。

「本当に誕生日会やらなくて良かったの？」

やっと物語の世界、空気を掴みかけたところで、キッチンから沙綾が声をかけてきた。彼女は手元の作業から顔を上げ、私の方を見る。

「一日オフの日曜日なら、お客さん呼べば良かったのに」

彼女は私の返答を待たず、失敗したらしいレシピを最初からやり直すべく、手元のスマホに視線を落とした。何度もトライしているが、SNSの動画と簡単な文字情報しかなく、彼女のスキルでは参考動画のようにパパッと成功には辿り着けないらしい。

私は壁にかけたカレンダーへ視線をやった。色々と書き込んであるカレンダーだけど、自分の誕生日までは印をつけていない。家族や親戚、知人の誕生日ならいざ知らず。それに、もはや祝ってもらって嬉しい年齢でもない。

「あっちの家で沢山人呼んで、私が女王だ、ってやってたお母さんも好きだったけどな」

「私が女王だなんて、一回も言ってないけど」

「口には出してないけど、全身からそういうオーラが出てた」

一度集まるのをやめた頃より、さらに数年前。沙綾と共に暮らしていた頃は、まだまだそんな感じだったかもしれない。流石に今は丸くなったと自分では思っているけど、周りの様子を見るに、まだまだ尖りっぱなしのような気もする。今度の誕生日でアラフィフなのに、いい加減に落ち着かなくては。

キッチンの方から、沙綾の唸り声が聞こえてくる。どうやら、また上手く行っていないらしい。読みかけの本に手近な栞を挟み、彼女の方に近付いてみる。沙綾は「手は出さないでよ」と、燦々たる状況を手で覆いながら私に注文をつけた。

「手は出さないし、口も出さない」

私は沙綾のスマホを摘み上げ、レシピ動画を再生した。出来上がりは確かに見栄えする、透け感のあるパイらしい。その見栄えを作り上げるまでの工数も、相応にかかるようだ。扱う材料も中々クセがありそうな物がチラホラ。ベースのパイ生地をシートでお手軽にしたところで、そんな簡単にお手本通りにできるとは思えない。

沙綾は眉根を寄せながら、腕を組んで考え込んでいる。失敗も一度や二度ではなく、彼女が持ってきた材料の半分ぐらいが失敗作に費やされていた。出来損ないと言えるレベルですら、まだまだ程遠い。

「無理しなくていいわよ」

私がそう言っても、沙綾は納得していないようで、しかめっ面のまま不機嫌そうにしている。

「ケーキもパイも、無いならないでいいし、出来合いのものを適当に買ってくるのでも十分だし」

年々、甘すぎる物も積極的に食べたいとは思わなくなってきた。どうせなら、コンビニスイーツよりは美味しいものを食べたいと思うけど、それで誰かに負担をかけようとも思っていない。

「貴女の気持ちはよく分かったから」

そういうと、やっと納得したのか、沙綾は頷いて腕組みを説いた。

「じゃあ、あと一回だけ。手も口も出さなくていいから、そこで見ててもらってもいい？」

彼女は私からスマホを受け取ると、改めてレシピ動画を食い入るように見つめ、手順を何度も確かめる。やる気と気合いに満ちた表情で、再び最初の工程に着手した。

『一一月五日（日）』——奥野朋子編

初出　令和三年一〇月二九日　Pixivにて公開

一一月六日（月）

このところ残業続きだったから、早めに仕事を切り上げて帰ってきたのに、リビングでカバンを置いたところで、大事なことを忘れていたと気がついた。カレンダーの木曜日のところに付いている印、繰り返し見ていたはずなのに忙殺のあまり、記憶から消していた。

Googleカレンダーにも妙なところにスケジュールが入っていると思っていたけど、朋子さんの誕生日じゃないか。社長があまり強調しないから、完全にスルーしている。

「木曜日、お義母さんの誕生日だよな」

キッチンで夕食の準備をしてくれている沙綾に、気まずいなりに声をかけた。彼女は明るく「そうだよ」といいながら、暖かい豚汁をカウンターに置く。

「あ〜、でも、無理しなくていいよ。お母さんからもそう聞いてるし」

沙綾は笑顔で言うと、僕に背中を向けて炊飯器の蓋を開けた。二人分のご飯をよそってくれている。僕は彼女が用意してくれた食事を、順番に食卓へ並べていく。沙綾は自分のご飯茶碗を持って食卓につくも、グラスを出していることに気がついて冷蔵庫の前へ戻って行った。

ビールを持って再び椅子に腰掛けると、二つのグラスに均等に中身を注いでくれた。沙綾は空っぽになった缶を脇に除け、僕にグラスを持たせて勝手に乾杯すると、勢いよくビールを飲んだのちに両手を合わせ、「いただきます」と食事を開始した。僕も勢いに負けてビールを飲むも、一口飲んだ後で「いただきます」と挨拶をしたものの、箸を取って食べ始める気にはならなかった。

沙綾は自分で作った豚汁を一口食べ、「うん、美味しい」と自分に感想を述べる。豚汁にもメインの焼き鮭にも箸を付けない僕を見て、彼女は「どうかした？」と言った。

「お義母さんの誕生日だって言うのをすっかり忘れてて、仕事がさ」

「佳境なんでしょ？　知ってるよ」

タイミングが非常に悪く、今週末が期日だった。その前日に早期に切り上げてお誕生日会というのは、今からでは何ともしようがない。

「本っ当に、ゴメン」
「だから、気にしなくて大丈夫だって。大丈夫じゃなかったら、ボスがそんなスケジュール組まないでしょ？」
沙綾は僕のことなど微塵も気にせず、自分の食事をどんどん進める。彼女の言うことも一理ある。とはいえ、あの社長は社長で、自分だけはきっちり出席したりするんだろう。
「だから、冷める前に食べて欲しいな」
「あ、ああ。ゴメン」
沙綾は「謝らなくていいから」と笑って言った。僕はようやく箸を取り、豚汁から口をつけた。生姜がたっぷり効いていて、非常に美味い。
「お義母さんの誕生日会は、夏にやったよね。お義父さんの誕生日は？」
沙綾が記憶を辿るように上を見ながら、僕に訊ねた。
「親父の誕生日は年末。三〇日」
「ふーん。で、おいくつになるの？」
沙綾の質問に、「え、あれ？」と言葉が詰まる。親父って今、いくつだっけ。
「寅年っていうのは聞いたような気がするんだけど」
沙綾は箸をおいて、スマホを取り出すと「寅年」で検索する。
「流石に六〇歳以上には見えないから、一九七四年生まれの四八歳で、来月四九歳？」
沙綾の答えで恐らく合っている。僕は頷きながら、「ああ、そうじゃない？」と答えた。
「じゃあ、お祝いしなきゃ」
「いやいや、いいって」
実家で一緒に生活してた時から、親父の誕生日を祝った覚えがない。年末の忙しさも相まって、適当に扱われていたのかもしれない。僕が「いい」と言ったのに、沙綾は「私がやりたいの」と話を聞いてくれない。
彼女が一人で乗り気でも、親父の誕生日会なんて実現するはずがない。ただ、ほぼマブダチの瑞希や最近妙に仲が良くなってきた晃を取り込めば、可能性はいくらでもあるのか。彼女がやるなら、そこに俺も出席せざるを得まい。
食べ始めたときとは違う億劫さに、箸の進みが遅くなる。「冷める前に早く食べちゃって」という沙綾の声を聞きながら、半ば機械的に手と口を動かした。

『一一月六日（月）』――浪川一輝編

初出　令和三年一〇月二九日　NOVEL DAYSにて公開

一一月九日（木）

安藤さんの手元のカップにも紅茶が注がれた。アップルフレーバーの紅茶で口を少し湿らせ、朋子さんに出していただいたフォークでアップルパイを一口サイズにカットして口に運んだ。

「うん、美味い」

ちょっぴり緊張して反応を待っていた朋子さんより先に、安藤さんが感想を漏らした。ティーカップを手に取り、紅茶を一口飲む。「紅茶との相性も抜群だな」

朋子さんのサロンではあまり耳にすることがない、ボリュームと迫力のある声に少しビクついてしまう。朋子さんは、安藤さんに向けて口の前で指を立て、ボリュームを下げるように要請する。

隣で安藤さんが反応している間に、朋子さんはゆっくり味を確かめながら、頷いた。一瞬の沈黙が非常に長く感じる。僕は思わず、「お口に合いましたか？」と訊いてしまった。

「非常に美味しい」

朋子さんの評価に、ひとまず胸を撫で下ろした。僕が作った訳でもないのに、妻の名代として妙に緊張してしまった。静かにゆっくり息を吐いて、緊張感を外に出していく。

「私にはちょっと甘い気もするけど、アップルパイだもんね。これぐらいで丁度いいわ」

「味にうるさい朋ちゃんが太鼓判とは、珍しいね」

「味にうるさいとは失礼ね」

安藤さんは、「事実だろう？」と朋子さんに突っ込んだ。著名なガイドブックで星を獲得したお店に連れて行って、ボロクソに言われた経験があるとかないとか、誰かに聞いたような気もする。

言い方には二人とも微妙なトゲがあるものの、表情や雰囲気はとても和やかだ。こんなに楽しそうにしている朋子さんは、僕は見たことがない。安藤さんがいるからこその反応なのだろう。

朋子さんとのやりとりが一息ついたのか、安藤さんは僕の方を見た。

「私までお相伴させてもらって、ありがとうございます」
「ああ、いえいえ」
「プレゼントとかケーキとか要らないって言ってたのに、わざわざすみません」
朋子さんにも、「いえいえ」とおうむ返しに深々と頭を下げた。朋子さんは安藤さんを指差しながら、「この人なんて、前々から来るって言っておきながら、手ぶらで来てるんですよ。おまけに、芽衣さんのアップルパイまで」と言った。
「だって、要らないって言うから」
安藤さんはちょっぴりむくれながら、朋子さんに反論する。
「要らないって言ってても、こうして持たせてくださるんだから、素晴らしい奥さんよ」
「素晴らしい奥さんっていうのは、間違いないね」
安藤さんは大きく頷きながら、もう一口アップルパイを口元に運んだ。
「やっぱり、お姉さまとかお母さまからの指導もあって？」
朋子さんはティーカップを両手で包みながら、僕に訊ねてきた。一瞬何のことかと思ったけど、すぐにアップルパイのレシピのことだと理解した。
「ああ、いやコレは彼女の自己流というか、どこかで見たレシピをそのまま、だったような」
「プロの監修なしで、コレか。へーっ」
安藤さんが隣で、非常に感心した様子で唸っていた。本人じゃないから詳細はよく分からないけど、姉や母の反応を見て微調整を積み重ねた可能性は、なくはない。直接、ああだこうだと言われている姿は見なかったように思う。
「やっぱり、才能のある旦那のところには、才能のある奥さんが嫁いでくるんだね」
「私たちには、長く引き止める才能がなかった、と」
朋子さんと安藤さんは、何やら笑い合っている。その真意は、聞かない方が良さそうだった。

『一一月九日（木）』――森田康徳編
初出　令和三年一〇月三一日　NXZ（旧サイト）にて公開

一一月一一日（土）

久々に午後からオフの土曜日なのに、リビングには何となく緊張感が漂っている。普段なら僕が帰宅するまで食卓でゲームに勤しんでいる智希が、今日は晩ご飯を終えるなり自分の部屋に引き揚げていた。

キッチンで食器を片付けながら、史穂が壁の時計をチラチラ見ている。彼女の鋭い目つきが、リビングに緊張感をもたらしているようだ。僕はできるだけ平静を装い、彼女が入れてくれた食後のコーヒーを飲みながら、普段はあまり見ることがないテレビをぼんやり眺めている。興味深いという気持ちや新鮮さがなくはないものの、気もそぞろに僕も時計の方が気になっていた。

食卓に置いていたスマホが鳴った。画面を見ると、哲朗からの通話。普段はほとんど文字のやり取りなのに、珍しい。僕は史穂に哲朗からの電話だと伝え、スマホを持ってリビングから掃き出し窓を開けてベランダに出た。夜風に何か一枚羽織れば良かったと思いつつ、ゆっくり窓を閉めて電話に出る。

「遅くにすみません。LINEより電話の方がいいと思って」

電話の後ろが若干賑やかだ。声の後ろで色んな音が行き交っている。

「全然いいよ。で、どう？」

「今、そっちへ行くバスに乗ったんで、よっぽどでなければ間に合うと思います」

ベランダから家の中を覗いて、時計を確かめる。もうそろそろ、二〇時一五分といったところ。

「JRだっけ？」

僕の問いかけに、哲朗は「そうです、そうです」と答えた。東口のバス停から乗ったら、まぁ、何とかなるか。家の中を見ていると、史穂が食卓に置いた自分のスマホを手に取っている。

僕は心の奥底でゆっくり胸を撫で下ろし、夜空を見上げた。

「半日、密偵みたいなことさせて悪かったね」

「いえいえ。タダでライトアップ見れて、いいリフレッシュができました」

「それは良かった」

哲朗は、「じゃあ、また月曜日」と言い、僕は「ああ、おやすみ」と返した。

哲朗からの返事を聞いて、通話を終えた。ベランダより少し暖かい室内に戻る。

「なんだったの？」

史穂は「哲朗くんから、こんな時間に電話なんて珍しい」と食卓を拭きながら付け加えた。僕は「いや、別に。仕事の話」と適当にお茶を濁すと、彼女はそれ以上追求してこなかった。

史穂は食卓を拭き終えると、息をつく暇もなさそうに、納戸の方へ向かった。扉を開け、掃除機を引っ張り出す。僕は彼女に「ああ、いいよ。オレがやる」と掃除機を受け取った。

「そう？　じゃあ、お願い。終わったら、ウエットシートで床拭きもよろしく」

僕は「りょ〜かい」と返事をして、とりあえずリビングまで掃除機を持っていく。

「あと、智希の部屋まで行ったら、お風呂の準備もお願いしてきて。本人も分かってるとは思うけど」

「ほ〜い」

僕の返事を聞く前に、史穂は食卓に戻り、家計簿をつけ始めた。普段は、こういう掃除も陽菜や智希がお手伝いしてくれているのだろう。四角いところを丸く掃かないように気を付けながら、掃除機を動かす。

家具の下や絨毯の上の埃も逃さないように、腰をかがめたり、物を避けたりしながら反復運動を繰り返す。コードの長さやベストな電源の位置、本体の動きも我ながら全然分かっていないなと思いながら、このまま平穏な土曜日が終わりますようにと心の片隅で祈っていた。

『一一月一一日（土）』——武藤幸弘編

初出　令和三年一一月二日　カクヨムにて公開

一一月一四日（火）

康徳さんは椅子に腰掛けたままグッと上に身体を伸ばし、一気に脱力した。気持ちよさそうに声が漏れている。充実感に満ちた表情から、「一仕事終わりました」という気持ちが伝わってくる。

「行けた？」

「うん、行けた」

ほぼ鸚鵡返しに、力強い声が帰ってくる。今のところ、二ヶ月に一回やってくる山場。今回もなんとか無事に乗り越えたらしい。

「部数は一旦、刻んで七〇〇。来年一発目で一〇〇〇部かな」

「いよいよ大台じゃん」

「だね」

私の感覚としては、今月末の第四号で一気に一〇〇〇部でも大丈夫な気がするけど、主宰者、編集長としての判断、戦略があるのだろう。次で一〇〇〇部でも十分順調だとも思う。

「部数を伸ばすより、次の目標の毎月刊行の方が大変なんだろうな」

康徳さんは、近くで遊んでいた映美に「ねー」と語りかけるも、彼女は何のことやらさっぱりと言った様子で、首を傾げて遊びに戻った。

「文章のストックはあるけど、一気に倍はキツいよね」

漫画や表紙イラストの期日、猶予も半分になるのも楽ではない。執筆以外の事務作業、その他の業務も倍になってしまうと、「部活っぽさ」は薄れて「お仕事」になっていく。それだけでなく、単純に康徳さんを取り巻く今の体制では、その業務を捌き切るのは無理がある。

「もう少しアマチュアの手作り感で行きたい気もするし、やるならちゃんと仕事にしたい気持ちもあるし、悩ましいよね」

「充分に人が集まってくるまでは、しばらく今のままがいいんじゃない？」

「芽衣はそう思う？」

康徳さんは「それも正しいよな」と頷いた。ウェブメディアもあって、紙媒体もある後発の同人誌としては悪くない成長をしているとは思うけど、いきなり大

風呂敷を広げるのは時期尚早な気がする。

執筆陣もまだまだ「濃い」だけの人もいるし、埋もれている才能に届いていない気もするし。何より、編集が足りないように思う。康徳さんの色、雑誌として守りたい空気や方向性にいきなり合致する編集者なんて、そんなにいないだろう。

「色んな人に作家の取りまとめはしてもらってるけど、ちゃんと編集を育てないとダメなんじゃない？」

「そ〜なんだけどさ、『マトモな編集』も難しいし、オレっぽい感覚の編集は、育てるのはキツいかな。波長が合う人と出会う方が早い気がする」

編集としてしっかり仕事をしてもらうには、他に充分な仕事も必要だし、と彼は補足した。既にできる人の中から、合う人を見つけていく、出会うには、しばらくは今のまま部数を伸ばす他ないように思う。

「鶏か卵か。部数か編集者か。こういうとき、大抵は鶏も卵も、だよね？」

康徳さんは一人で何か考えながら、「こいつは大変だ」と呟いた。

「でも、皆んなでやればいいんじゃない？　私も手伝うし」

今度は私が映美に「ねー」と笑いかけた。彼女は私につられて嬉しそうに笑う。

「最初からそのつもりだけど、皆んなでやるのも大変なんだぞ〜」

彼は笑いながら言うと、手元の大きなノートを開いた。既に色んな書き込みがしてあるページをめくり、新しく何かを書き込んでいく。まずは自分なりのプランをまとめるらしい。真剣な表情で目を輝かせながら、縦横無尽にペンを走らせていた。

『一一月一四日（火）』——森田芽衣編

初出　令和三年一一月二日　アルファポリスにて公開

一一月一五日（水）

私はコートを着たまま、哲朗さんのモニターを、彼の後ろから見ていた。立ったまま、裾が暴れないように両手を左右のポケットに入れながら、動画サイトの分析画面をジッと見ている。

「爆発的に視聴回数が増えるとか、チャンネル登録者数が増えるとかはなさそうだけど、ジリジリと高評価、新規訪問者は増えてるね」

先月の上旬に一度グッと伸びて、そこから急落するようなことはなかったけど、勢いそのものは一旦落ち着いたらしい。ジワジワと伸びているようには思うけど、数としてはそこまで多くない。

「パッと見て物凄く良くなった印象はないけど、コンマ何秒のカットの位置とか、数センチレベルでのアングルとか、着実に良くなってる。単純に、見ていて気持ちいい」

「本当に？」

哲朗さんは「本当、本当」と頷いた。照明のコントロールとか、音声周りとか、とても細かいところを気にするようになって、一本一本のクオリティは上がっているという自信はあったけど、客観的な評価が得られてようやく実感が持てた。

「本当はもっと、エフェクトバリバリな動画とかもやりたいんでしょ？」

哲朗さんは分析画面を閉じながら言った。

チャンネルの方針というか、自分の見せたいもの、切り取って伝えたいものが合わないから、要所要所でピンポイントかつワンポイントでしかそういう表現は足せていない。

気合の入ったアーティスティックな動画、エフェクトたっぷりのプロモーションビデオやミュージックビデオのオーダーがあればやれるけど、今の環境でそういう話は多分来ない。

「セカンドチャンネル作るとか、それ用のチャンネル作るとか、やってみる？」

彼は私の方を見ながらも、さっきまでやっていた仕事用の画面を一番前に持ってくる。何もかも彼に頼ってやってもらう必要もないし、それ用のチャンネルを立ち上げるなら自分でやった方がいい気もする。

「でも、そんなチャンネル作っても続かない気もするんだよね」
自分の勉強にはいいけど、自己満足の世界を出た「作品」に至ることは恐らくない。それを沢山作ってみたところで、誰にも見られないだろうし、誰かに見てもらいたくてやるような性格でもない。
「また、機会があればやってみる。今はまだ地道にコツコツ、かな」
「そっか。了解」
彼はそう言うと、ちょっぴり手持ち無沙汰な様子で私を見ていた。私が「仕事の邪魔しちゃって、ごめんね。ありがとう」と言うと、彼は「ああ、じゃあ」と画面に向き直り、仕事に戻った。
「浪川さんは、今から京都だっけ？」
いつの間にかこっちを見ていた武藤さんが声をかけてきた。私が「はい、先輩のプロジェクションマッピングを見に」と答えると、彼は「哲朗も行けばいいのに」と言った。
「どっかのライトアップのイベントだろ？」
哲朗さんはモニターから顔を上げる。
「誰かの密命で、この間行きましたよ」
「あれは万博だろ？　今度は京都じゃん」
そういえば、彼に頼まれてこの前の土曜日、万博の紅葉を見に行ったっけ。なんとなく落ち着かない雰囲気の中、ライトアップされた日本庭園を歩くのは中々楽しかった。哲朗さんは、武藤さんの圧に負けじと言葉を探している。
「学校関係の人がいるのに、一緒に行けないですよ。仕事もあるし」
「夏の撮影で、みんなももう知ってるんだろ？　仕事は別に明日でも大丈夫だし」
武藤さんの口撃が止まらない。側から見ると、哲朗さんは段々余裕がなくなっているような気がする。
「どこぞの男に声をかけられても、知らないぞ」
「大丈夫ですよ。友達と一緒に行くんだよね？」
哲朗さんが真剣な面持ちで私の顔をジッと見る。その真剣さがなんだか可笑しくて、やましいことは微塵もないのに視線を逸らしてしまう。それにちょっとヤキモキしているような哲朗さんを見ているのも、なんとなく面白くなってきた。
イベントへ間に合わせるには、もうそろそろオフィスを出て駅へ向かわなきゃいけない。でも、こっちのやりとりももう少し見ていたい気もする。さぁ、どうする私。

『一一月一五日（水）』――浪川瑞希編

初出　令和三年一一月二日　noteにて公開

一一月一八日（土）

「爺ちゃんが子供の頃もさ、門限ってあった？」

いつものように、智希と犬の散歩に付き合っていると、孫の方から何気ない会話を切り出された。彼は私の方を見て、興味深そうに回答を待っている。私は

「ああ、あったよ」と答えた。

「何時だったかは覚えてないけど、せいぜい夕方とか、遅くても晩ご飯までだったかな」

半世紀近く前の話を、急に思い出そうと思ってもパッと出てこない。当時は必死だったはずなのに、それが午後六時までだったのか、午後七時までだったのか、当時の実家を思い浮かべてみても、時計の針まで思い出せない。

「どうしても遅くまで遊びたい時とか、なかったの？」

「遊びたくても金はなかったし、遊ぶ場所も大してなかったな。暗くなったら帰るで十分だったよ」

「お祭りの時とかは」

「そういう時は特別に許してもらったな。必死に約束してさ」

絶対に守るからと約束するのに、そういう時に限ってハメを外して、大目玉喰らって。またその時期がやってきたら何事もなかったかのように、守れない約束をしては雷を落とされる。そういう繰り返しだったっけ。

「やっぱり、皆んなそうなんだ」

少し肩を落とした智希の様子が気にはなったが、私は「ああ、そういうもんだ」と答えた。そういえば、幸弘からも似たような話を聞いた気がする。陽菜が万博まで紅葉の夜間ライトアップを見に行って、門限ギリギリで帰ってきてヒヤヒヤしたと言ってたっけ。

「まぁ、お姉ちゃんの場合は、お父さんもお母さんも心配だったんだろ。年頃の女の子だしな」

今月の頭に十三歳を迎えたというのに、まだまだ線が細く、背丈も思ったより伸びていない彼に、「年頃の女の子」がピンと来るかは分からなかったが、彼はそれに何も言わず、「うん、そうだね」と納得した。

「あれ、武藤さんじゃないですか」
ファミリーマートの前で、威勢のいい大きな声に呼び止められた。智希が一瞬ビックリしていたが、相手を見て緊張を解いた。彼がリードを握っている愛犬も、警戒を解いて撫でてもらっている。
「お孫さんと散歩っすか？」
私は頷いて、「まぁ、そんなところ」と答えた。
「晃くんこそ、こんなところでどうしたんだ？」
「現場がちょっと早めに終わったんで、瑞希の出迎えっす」
晃くんによると、どうやら今日はJRで京都から帰ってくるらしく、駅向こうのイートインがいっぱいだったからコッチに移動してきたのだとか。
人通りが多くないとは言え、まだ午後五時前。明るいとは言えないものの、無理に出迎えにこなくても良いような気もする。
「妹想いなんだね」
私が素直に想いを述べると、彼は「それもありますけど」と一旦言葉を切った。
「明日の打ち合わせを家の外でしたくって」
「明日？」
「そう、明日」
そう言えば、明日は何かイベントがあるんだったっけ。幸弘も、朝から京都まで行かなきゃ行けないとか言ってたような。
「何時に出るとか、そういう話が家だとしにくいもんで」
「あ〜、なるほど」
コンビニの前で立ち話をしていると、晃くんのスマホが鳴った。どうやら仕事の話らしく、邪魔にならないように別れの挨拶をして、智希と共に彼の下を離れた。名残惜しそうにしていた愛犬を半ば引きずるようにして、河川敷へ降りていく。
ふと、智希の横顔を見ると、ちょっぴり落胆しているように見えた表情がいつの間にか、キリッとした顔つきに変わっている。目にも力が戻っているようだ。彼は愛犬のリードをしっかり握り、下流へ向けてきびきびと歩き始めた。私も置いていかれまいと、その速度に合わせて足を進める。息が弾む速さに、身も心も少しだけ軽くなった気がした。

『一一月一八日（土）』――武藤幸次編

初出　令和三年一一月二日　Mediumにて公開

一一月二〇日（月）

この二、三日ずっと嗅いでいるような匂いが、急に漂ってきた。今日こそはあの匂いと距離を置くつもりだったのに、オフィスに備蓄しているカレー味のカップ麺に、哲朗がお湯を注いでいる。

「私も、カレーにしようかな」

哲朗の姿を見ていた香織も、同じカップ麺を手に取り、お湯を注いだ。同じ匂いが、微妙に違う角度から漂ってくる。その匂いに若干辟易しているのが顔に出ていたらしく、香織に怪訝な表情を向けられた。

「どうしたの？　カレー嫌いだったっけ？」

「あ、いや、そういう訳じゃ」

一足先に出来上がったらしい哲朗は、僕の方を気にかけながら蓋を開け、箸でよくかき混ぜる。香織も「変な奴」と言いたげな表情を浮かべながら、哲朗の後に続いてカップ麺を食べ始めた。

普段なら自分も匂いに釣られてしまうが、自宅でも外でも偶然とは言えカレーが続いてしまうと、流石に嫌になってきた。少々肌寒いけど、オフィスの窓を開け、そこら中に漂っているカレーの匂いが外に出ないか期待してみる。

打ち合わせスペースで同じカップ麺を向かい合って食べながら、香織は合間に哲朗への質問を織り交ぜる。

「そう言えばさ、哲朗のお袋の味って何？」

彼は想定外の質問だったのか、「え？」と一瞬詰まると、答えを探して言い淀む。

「何かないの？　それこそカレーとか、唐揚げとか」

「実家に帰った時に出てくるとしたら、ローストビーフとかステーキとか。でも、あんまりお袋の味って感じはしないですね」

哲朗の回答に、香織は「何それ、変なのー」と笑って茶化した。

「実家にいた時も、カレーは滅多に出なかったかな。レトルトとかは、こっそり隠れて食ってましたけど」

香織は「ふーん」とさっきよりは真剣な面持ちで話を受け止めている。

「じゃあ、うちのカレーはコレ、みたいなのもないんだ」
「全くないっすね。こっちに来てからも、一回も作ってないかな～」
「一人暮らしだと、そうだよね。良ければ今度、招待しようか？」
香織の提案に、哲朗は「え、良いんすか？」と思わぬ反応を見せた。すぐに良い反応が返ってきて一瞬驚いていた香織だったが、すぐに何か悪いことを思いついたのか、影のある表情を浮かべながら、「じゃあ、また調整して声かけるね」と言った。哲朗は素直に、それに応じようとしている。
僕は彼らの間に割って入った。
「香織のカレーも良いんだけど、コレは行った？」
哲朗に、イベントのチラシを差し出した。ウチも少しだけお手伝いして、イベントの概要や中身もある程度把握しているであろう、万博で現在開催中の、カレーの祭典。哲朗は気の抜けた声で、「ああ、例の」と呟いた。
「武藤さんは初日に行ったんですっけ？」
「マジで美味いカレーも、ちゃんと知っとかないと」
哲朗は僕の圧に負けたのか、それともとりあえず受け流そうとしているのか、相変わらず気が抜けた調子で、「ああ、はい」と相槌を打った。哲朗の隣からチラシを覗き込んでいた香織が、「二三日もやってるんだ」と言った。
「子供らと行ってこようかな。哲郎も、一緒に行く？」
「行きたいのは山々なんですけど、その日はバタバタで」
哲朗の答えに香織は顔を背け、彼には見えにくいところで小さく舌打ちをした。どうやら何かのあてが外れたらしい。
「あ、でも別の日に行きますよ。皆さんの応援にも行きたいし」
哲朗は香織の思惑など微塵も気にならない様子で、明るい表情を浮かべて言った。こういう男が近々行きますんで、現地のルミちゃん、スタッフの皆さん、もう一踏ん張りしてください――。

『一一月二〇日（月）』――武藤幸弘編
初出　令和三年一一月三日　カクヨムにて公開

一一月二二日（水）

食卓で、テレビの前で遊ぶ子供らの様子を眺めながら、チャットツールやメールボックスを定期的にチェックする。会社員ではないから休日前ということもないし、向こうも向こうで祝日だろうと何だろうと仕事があれば動く人たちだろうけど、今日のところは、僕が送ったメールやメッセージに対して返事が来なければ、店仕舞いしようと思っている。

キッチンでは芽衣が、晩ご飯のカレーを温めていた。

「明日までは残らないよね？」

僕は仕事用のツールを立ち上げたまま、明日や週末用のイベント情報を検索し始めた。芽衣はカレーをゆっくりかき混ぜながら、「うん、食べ切ると思う」と、換気扇の音に負けないように答えてくれた。

仮に残ったとしても、容器を移して冷凍でもして、一人前のカレーうどんにでもして食べるだろう。彼女のカレーうどんも美味いんだけど、僕は中々ありつけない。

食べ切るようであれば、外で晩ご飯を食べても良いな。ただ、二人を連れての夜の外食はまだシンドいかもしれない。無理なく日中で引き上げて、夜は夜で何か考える方がいいのかな？

一人で妄想の世界に浸っていると、いつの間にか午後七時を過ぎていた。急ぎの用事っぽかったメールもチャットも返事が来ていない。メールは後日に返すとして、チャットツールの方はステータスを離席中に変更し、こちらも後は二四日の朝以降に返事する旨を送っておいた。

それぞれのツールを終了し、パソコンの画面を閉じた。娘が二人ともテレビに食いついているのを確かめてから、ササッと仕事部屋へパソコンを置きに行く。電気も付けずにドアを開け、机の上に置いて、横に放置してあった電源を繋いだ。通電のランプを確かめて、リビングから聞こえてきた芽衣の呼びかけに、「は〜い」と答えてそちらに戻る。

亜衣と映美は、二人ともいつの間にか両手をしっかり洗って、それぞれ自分の席についている。僕も一旦リビングに顔を出してから、洗面所で手を洗ってリビ

ングへ戻った。皆んなが待っている食卓について、両手を合わせた。亜衣の声に合わせて、「いただきます」と唱和する。

子供らの口に合わせた甘みの強いカレー。芽衣が入れてくれたビールを飲んだ。

「やっぱり、全然違うよね」

芽衣は昼間に食べたカレーを思い出しているらしく、自分の作った二日目のカレーとビールを味わいながら、小難しい顔をしている。久々に食べた、しっかり辛くてスパイシーな大人向けのカレーは、流石にコレとは全く違う。カレーといえば、ほとんどコッチになって久しいお陰で、外で食べるカレーは非常に新鮮だった。

「コレはコレで好きだけどね」

僕がそう言うと、彼女は「まあね〜」と少々自慢げに言った。

「今年のカレーは、次が最後かな」

芽衣の言葉に、僕は「え、もうそんな時期？」と壁のカレンダーに振り返った。概ね月に一回のペースで出てくる我が家のカレー、次に作るとしたらクリスマスの時期か、完全な年の瀬か。

「チキンも、予約するならそろそろやんないとね」

芽衣はついでのようにボソッと呟いた。

そうだ。もうそろそろクリスマスの算段も考えないと。あっという間に年末進行も考えなきゃいけなくなってくる。今年のクリスマスはどうするか、毎年のように訪れる悩みの種が、今年もまたやってきた……。

『一一月二二日（水）』——森田康徳編

初出　令和三年一一月四日　NXZ（旧サイト）にて公開

一一月二四日（金）

事務所に届いていた印刷物を、直帰ついでに義母の仕事場へ持ってくるだけのつもりだったが、何故か小包の梱包を手伝っていた。大事に持ってきたクリスマスカードと、年明け早々のホームパーティの案内チラシは、九割近くがその小包の中に納められていた。

僕は最後の一つの封を閉め、机の一角に置いた。郵便ポストに投函できるサイズよりは一回り、二回りほど大きく見えるが、両手で抱えて持つようなサイズではない。ただ、三つずつほど重ねて置くと、それなりのボリュームに見える。

「結構な数ですね」

朋子さんが入れてくれたお茶に口をつけながら僕が言うと、彼女は何も言わず、曖昧に微笑んだ。

伝票は今から一つずつ貼ると聞いたときは、気が遠くなりそうだった。それを物ともせず、丁寧に一つずつやり切る気持ちがあるから、長年愛されるサロンのオーナーをやれるのだろう。

僕がボーッと小包の小さな山を見つめている間、朋子さんは僕が持ってきたチラシをジッと見ていた。印刷前の決定稿でOKはもらっていたものの、改めて「女帝」にじっくり検品されると背筋が伸びる。

沈黙に耐えかねて、僕も残っていたチラシを一枚手に取った。四年ぶりのホームパーティ、作っている時からずっと目に入っていたはずなのに、やっと日付が目に留まる。

「あっ、この日」

「ああ、気にしないで。分かってるから」

朋子さんは笑いながら、手にしていたチラシをテーブルに置いた。自分のカップに、ポットから紅茶を注ぐ。

「オタクのボスにも言われたんだけどね。決めちゃったものは、しょうがないじゃない」

笑いながら軽い口調で言うものの、どこか突き放すような印象もあった。その凛というか、ツンとした言い方に、沙綾との繋がりみたいなものも感じる。そう

いうところに振り回されながらも、最後まで付き合ってしまう社長に、同情や親近感を抱かざるを得ない。

「この間から、何回もすみません」

彼女の誕生日も、納期の直前でスケジュールを合わせられなかった。来月のクリスマス会も、先約があって都合がつかなかった。今度こそはと思っていたのに、結局年始のイベントも「仕事優先」になることが確定した。

朋子さんは「ああ、いいのいいの。何にも気にしないで」と言った。

「私のことなんか気にしないで、あなたたちはあなたたちで良いようにして頂戴」

僕がこっちへ戻ってくる時も、同じ調子、同じ口調でそう言われて、元々の住まいを僕と沙綾のために明け渡してくれた。その出来事からも、ほぼ丸一年。バタバタだった去年の年末からもうすぐ一年か。

「それで、どう？　慣れた？」

朋子さんが、ちょっぴり意地悪そうな表情を浮かべて訊いてきた。

「おかげさまで、何とか」

「そう。それは良かった」

朋子さんはまだ何か言いたそうな様子で、口元に笑いを浮かべながらお茶を飲む。追求のためのトゲがない言葉、失礼のない表現を必死に考えていると仕事用のスマホがポケットの中で震える。通知は、事務所からの電話だった。

朋子さんに「すみません」と断ると、彼女はどうぞ、とジェスチャーで出るように促してくれた。お言葉に甘えて電話に出る。電話口の向こうは、「まだ仕事が残ってる」と叫ぶ社長だった。

「分かりました。今すぐ戻ります」

急ぎの仕事は一通り終わらせたつもりだったけど、チェックが甘かったらしい。出来ればこのまま直帰したかったけど、定時にはまだ余裕がある。オフィスへ戻って、素直に残務と向き合おう。

僕は、同情の目を向けてくれている朋子さんに、オフィスへ戻る旨を伝えた。そんな目をしないで欲しいと思いながら、淹れてもらった残りのお茶を飲み切った。

『一一月二四日（金）』——浪川一輝編

初出　令和三年一一月七日　NOVEL DAYSにて公開

一一月二六日（日）

日が暮れてから、ほろ酔い気分で帰宅する。それも、平日じゃなくて日曜日に。若い頃や独身の頃でもやったことがないのに、今になってやれるようになるとは、人生は分からない。

今日は一日一人で外出し、郁美さんと一足早い忘年会も済ませてきた。自宅の鍵を開けていると、カバンの中でスマホが鳴った。通知を見ると、郁美さんから「無事に帰宅しました」のメッセージが届いていた。

とりあえず家の中に入って、玄関で靴を脱いでから、私も似たようなメッセージを送り返した。顔を上げると、リビングの方から賑やかな音が聞こえてくる。

「おかえり〜」

リビングに続くドアを開けると、ルミが食卓でお茶を飲みながらおかきを食べていた。彼女は壁の時計を見て、「案外、早かったね」と言った。

「もっと遅くなるかと思った」

「私もそのつもりだったんだけど、日曜日だから閉まるのが早くって」

私はリビングにカバンを置き、コートを室内干しのラックにかけた。洗面所に行くか迷いつつ、片付け具合の確認も兼ねてキッチンのシンクで両手を洗った。パッと見るかぎりでは、洗い物も残っていないし、水切りカゴにもマグカップぐらいしか残っていない。コンロの周りも綺麗に片付いている。

水切りカゴに伏せてあったコップを取って、水道水を蛇口から注いだ。酔い覚ましに一口飲む。カウンターから食卓の方を見ると、椅子の上に畳んだ洗濯物も置いてあった。

ルミはかなりダラっとした体勢でテレビを見て、時々釣られて笑っている。どうやら自分で買ってきたらしいおかきも、順調になくなりつつあった。

私はコップを空にして、サッと洗って水切りカゴに伏せた。自分の湯飲みを食器棚から取り出して、ルミの隣に腰を下ろす。ルミはテレビを横目で見ながら、私の湯飲みにお茶を注いでくれた。よそ見をしながら急須を持つから、置き直す瞬間にちょっとヒヤッとした。

「せっかく全部やってくれたのに、よそ見で台無しね」

私の言葉に、ルミは「えー、溢してもないのに？」と口を尖らせた。その反応がおかしくて、私はつい吹き出してしまった。

「冗談、冗談」

「もしかして、まだ酔ってる？」

ルミのツッコミに、私は「まさか～」と言ったけど、心地いい気分はまだ抜けていない気もする。

「で、お父さんは？」

最近寝るのが早くなっているとは言え、流石にまだまだ早過ぎる。娘だけ残して外に出るとは思えないけど、どうも姿が見当たらない。

「ああ、お風呂」

ルミは風呂場の方へ視線をやった。そう言われると、そっちから音が聞こえてくるような気もする。やっぱりまだまだ酔っているらしい。

テレビを見て楽しそうに笑うルミをぼんやり眺めながら、ゆっくりお茶を啜る。ジッと見ていると、ルミはこちらを見て、「なんか、見たいものあった？」と訊いた。

「ううん。別に。何時までいるのかなと思って」

「心配しなくても適当に、というかお父さんが出てきたら帰るよ」

別に早く帰って欲しいという意味ではなかったのだけれども、彼女も彼女でそろそろ引き上げようとしていたのかもしれない。ルミは時計と風呂場とをチラチラ見ながら、残りのおかきに手を伸ばした。

『一一月二六日（日）』――小野寺香帆編

初出　令和三年一一月八日　MAGNET MACROLINKにて公開

一一月二八日（火）

「彼女ができてから、初めてのクリスマスだな」

武藤さんは、やけに楽しそうに言った。嫌味すら感じるそのニヤニヤ顔に、初めて軽いイラ立ちを覚える。この人にイラつく日がやってくるなんて、こっちで一人暮らしを始めた頃には想像もつかなかった。それだけ、濃い関係が出来ているということだろうか。

こっそり息を吐いて、イライラも外に吐き出す。気持ちを整えて言葉も探している間に、目の前にいた一輝さんが口を開いた。

「イルミネーションとか、見に行ったりしないの？」

「それが、この間一人で行かせちゃってんだよ」

「えー、マジですか？」

僕のリアクションを待たずに、武藤さんと一輝さんの間で盛り上がっている。そっちがそのつもりなら、僕は何も言うまい。黙ってビールを傾け、段々慣れてきた強い苦味にささくれ立った心をなだめてもらう。

「そう言う一輝くんは、どうすんの？　並のクリスマスじゃ、あの娘は満足しないでしょ」

「そうなんですよね。でも、ギリギリまで仕事じゃないですか」

「確かに、今年のカレンダーはなかなか意地悪だよね」

来月のスケジュールまでハッキリと把握してなかったけど、彼らがそんな風に言うと気になってくる。スマホを取り出して、12月のカレンダーを確かめる。最後の二週間が大変なことになっていた。

「二四日が日曜日っていうのも、ね」

一輝さんが武藤さんに同意を求めると、彼は大きく首を縦に振り、「そうなんだよ」と強い同意を示した。

「幸い、うちは中学生と高校生だからいいけどさ、香織のところとか大変だろうな」

今度は一輝さんが小刻みに何度も頷いて、「あ〜、確かに」と呟いた。

「クリスマス会を別途やるらしいけど、それはそれとしてって感じだろ？」

武藤さんは「なぁ？」と今度は僕に同意を求めてきた。僕は曖昧に笑いながら、ビールに口をつけた。それを見ていた一輝さんは、残りが少なくなっていた武藤さんのグラスを指して、「次、何にします？」と訊ねた。

武藤さんはカウンター横のメニューボードをその場から見て、「う〜ん、同じのかな」と言った。僕の顔を見て、「お前は？」と言う。

「僕は、まだいいです」

「じゃあ、それで」

武藤さんが一輝さんにそう伝えると、彼は「了解です」と財布を持ってカウンターへ行こうとした。武藤さんは彼を呼び止めて、自分のカードを彼に渡す。二人の間でどっちが出すのかしばらくやりあった後、一輝さんが折れて武藤さんのカードで二人の代金を支払っていた。

「で、義理の兄貴としてどうよ」

カウンターの前で新しいビールが注がれるのを待っている一輝さんの背中を見ながら、武藤さんが僕に言った。

「仲良くやれそうなのか、そうじゃないのか、どっちか訊いてるんだよ」

「義理の兄貴云々は分かりませんけど、ギスギスはないですね」

僕も一輝さんの方をジッと見ていると、グラスを二つ受け取ってこっちに振り返った彼と、視線がかち合った。向こうは少々不思議そうな顔でこっちを見ている。僕は少々慌てて、「何でもないです」と言った。

「そう言えば、来年も福男走るんだって？」

一輝さんからグラスを受け取りながら、武藤さんが言うと、一輝さんは「今のところは、そういうことになってますね」と苦笑いを浮かべながら答えた。

「お前も行く？」

武藤さんは陽気に笑いながら僕に言った。急なパスに僕は驚いて一輝さんの方を見る。彼も一瞬驚いた様子だったが、「一緒にいてくれると助かるな」と僕に笑いかけた。僕が答えに悩んでいると、武藤さんは一人楽しそうに「冗談だよ、冗談」と笑っていた。

『一一月二八日（火）』——原田哲朗編

初出　令和三年一一月八日　ノベルアップ+にて公開

一一月三〇日（木）

前の予定が微妙に早く終わり、約束の時間にはまだ大分早い。とはいえ、一度自宅に戻ってから、もう一度出直してくるには微妙な時間。近くの喫茶店で時間を潰すぐらいなら、ダメ元で聞いてみよう。

カバンから社内用ケータイを取り出し、Mサイズのオフィスへ電話をかけてみる。香織さんが少々他所行きの声で電話口に出た。

「あら、ルミちゃん。お休みじゃなかったっけ」

「休みは休みなんですけど、武藤さんと約束してて」

私はこの後のアポイントについて香織さんに説明すると、武藤さんは外出中らしい。

「私もそろそろ、お昼休憩に出ちゃうけど……」

香織さんはそこで言葉を切ると、電話の向こうで「哲朗はいる？」と聞いていた。送話口を塞いでいるのか、微かにくぐもったやり取りが聞こえると、香織さんの声が再びはっきり聞こえてきた。

「哲朗はいるらしいから、何時来ても大丈夫よ」

「わざわざ、すみません。ありがとうございます」

香織さんは「いえいえ〜」と出た時と同じく、良き母親っぽい声で別れの挨拶をして、受話器を置いた。

哲朗くんがいるのなら、何か要るものがないか訊けば良かった。差し入れというほどでもないけど、途中のコンビニで無糖の炭酸水でも買って、持って行ってあげよう。彼がいらないというなら、この後の水分として持ち歩けばいい。

JRの駅前商店街を抜け、途中のファミリーマートで五〇〇mlの炭酸水を一本買った。会計を済ませながらスマホで時刻を確かめると、当初の予定よりまだ三〇分ほど早い。何時でも大丈夫と言ってたし、言葉を信じてオフィスへ行ってみよう。

意を決してビルの中に足を踏み入れ、そのままMサイズのオフィスまでエレベーターで上がる。ドアの前までくると、電気は間違いなく点いていた。普段ならそのまま開けて入るけど、一応三回ノックして「失礼しま〜す」の声と共にドアを

開いた。

目隠しになっている棚の向こうから「は〜い」と声が聞こえ、棚をグルっと回って哲朗くんがドアの前までやって来た。彼は私の顔を見るなり、「ああ、どうも」と微笑んだ。

「新刊の受け取りですよね〜」

彼は「どうぞ」と応接スペースへ私を誘導し、オフィスの隅に積み上げられている段ボールの方へ向かった。その背中に「誰？」と女性が問いかけると、彼は背中を向けたまま、「ああ、小野寺さん」と答えた。

哲朗くんと入れ替わる形で、上坂さんが応接スペースへ顔を出した。私が「こんにちは」というと、あちらも同じく「こんにちは」と会釈し、哲朗くんの方を見た。

「ねぇ、お茶って入れたほうがいいの？」

「ああ、いいのいいの。すぐに帰るから」

上坂さんの問いに哲朗くんが答える前に、私は身振りも合わせて断った。手に下げていたビニール袋に炭酸水が入っていたことを思い出し、それを上坂さんに差し出した。

「一本しか買ってないんだけど、差し入れ」

上坂さんは「どうも」と受け取りながら、ヒイラギの最新号を持ってきた哲朗くんの方を振り返る。彼はその視線を受け止めながら、私に「ありがとうございます」とお礼を述べてくれた。

「コレ、ですよね。一冊で大丈夫でした？」

彼は「一言言ってくれれば、自宅まで届けたのに」と言いながら、新刊を差し出した。私は「一冊で、大丈夫」と頷いて、それを受け取る。パラパラっと中身に目を通し、少々重みのあるそれを、カバンに仕舞った。

視線を感じて顔を上げると、哲朗くんが私の方をじっと見ていた。

「なんか今日、雰囲気違いますね」

「そう？　いつもと一緒だよ」

いつもと違うところがあるとすれば、今日は完全にプライベートな服装という程度。

「あ、もしかしてデートですか？」

哲朗くんの横で冷静に私を眺めていた上坂さんがボソッと呟いた。哲朗くんは、

「え、そうなんですか？」と少々驚いた様子で言った。

「だって、髪型とかメイクとか」
「あ〜、確かに。今日はより一層、綺麗というか可愛いというか」
上坂さんの分析に、哲朗くんが頷きながら同意する。全然そんな予定はないけど、褒められる分には悪い気はしない。このままいい感じに、サッと引き上げねば——。

『一一月三〇日（木）』——小野寺ルミ編
初出　令和三年一一月一〇日　小説家になろうにて公開

一二月二日（土）

目の前の棚に並んでいる色んなお酒を、腕を組んで眺めていた。すぐそこに、缶ビールや缶チューハイが冷やされているコーナーもあるんだけど、今日はこっちの棚から何か選んで帰りたい。

ただ、気持ちとは裏腹にどれを選べばいいのか、全く分からない。お酒の違いも分からないし、銘柄ごとの違いもよく分からない。家で両親や兄がどんなお酒を飲んでいるのかもあんまり覚えていないし、こうやってズラッと並んだ瓶やラベルの中から、「コレだ」と指名するだけの記憶もない。

外で飲む分には、ある程度選択肢が限られているから何となくでも選べるけど、ここで変なものを選ぶと大変なことになるし、あんまり大きいのとか高いのはやめて、小さめの手頃なやつにしよう、ってところまで考えてまた振り出しに戻る。

やっぱり清酒や焼酎、ウイスキーよりは梅酒みたいなものの方が良いんだろうか、と適当に一つ瓶を取り出してラベルの説明書きを眺めていると、後ろから声をかけられた。

「浪川さん？」

声の方へ顔を向けると、「ああ、そのマスクはやっぱり浪川さんだ」と武藤さんがニコッと笑った。

「こんなところで珍しい。ご家族のお使いか何かですか？」

「ああ、いえ。自分用に、ちょっと」

武藤さんは頷きながら、「ああ、そうですか」と言った。彼はそれ以上私のことを気にすることなく、ささっと自分が欲しいものを見極めてカートに乗せたカゴの中に、二、三本の瓶を放り込んだ。

私がじっと見ていたことに気がついたらしく、彼はこちらを向いて、「どうされました？」と言った。

「ああ、いや、えっと、何を選んだら良いか、分からなくって」

「ああ、なるほど」

彼はカートを押して、私の側まで戻ってきた。

「探しているのは、梅酒でいいんですか？」

彼の質問に、私は曖昧に「えー、まぁ」と答えた。私の答え方も見ていたらしく、彼はサッと瓶を二つ選んで手に取った。

「スッキリが良いならこういうのとか、こっちのタイプですかね」

右手に持った瓶と、棚に並んでいる同じメーカーの紙パックを指しながら言った。お酒に疎い私でも、聞き覚えのあるメーカーだ。左手の瓶には太めの文字で「梅酒」と書いたラベルが貼ってあった。

「甘いのが良いなら、こういうのとか、ああいうのとか」

「はちみつ」やら、「黒糖」やら、黒っぽい瓶も指差しながらお勧めしてくれる。私は少し悩んで、左手の瓶を選んだ。武藤さんは右手の瓶を棚に戻して、同じメーカーの紙パックを棚から出した。

「有名なものと飲み比べれば、段々分かるようになりますよ」

そう言いながら、瓶と紙パックを自分の買い物カゴに入れた。私が困惑していると、彼は「他に、欲しいものありましたか？」と訊いてきた。私が首を振ると、彼はカートを押してレジの方へ向かう。

「え、ちょっと」

「まぁ、まぁ、良いから良いから」

彼は私の声に耳を貸さず、自分の買い物と合わせて、私が買う予定だったお酒も買ってしまった。わざわざ袋を別に購入し、私に荷物を分けて渡してくれる。

私が財布を出そうとすると、彼は頑なに断った。

「たかが数千円ぐらい、気にしないでください。若い娘に身銭を切るのもジジイの楽しみですから」

武藤さんはお酒の棚で出会った時と同じぐらいの、満面の笑みを浮かべた。そのビッグスマイルに、さっきまでの悩みが少し軽くなった気がした。

『一二月二日（土）』——浪川瑞希編

初出　令和三年一一月一一日　noteにて公開

二月五日（火）

遊び疲れた娘たちは、二人ともソファの上で横になっている。子供部屋から毛布を取ってきて、起こさないように注意しながらかけてあげた。

「ベッドに連れて行った方がいいんじゃないの？」

食卓でコーヒーを飲んでいた母が、二人の寝顔を見ながら言った。

「お風呂もまだだし、孫の寝顔をじっくり見たいでしょ？」

私は亜衣の口元の汚れを優しく拭きながら、母に向けて言った。映美の方はそこまで汚れていないらしい。

「私のことなんか気にしないで、お風呂に入れちゃいな」

母の言うこともっともだけど、ようやくひと段落ついたところ。康徳さんももうそろそろ帰る頃だし、本格的にベッドへ連れていくのはそれからでもいい。お風呂に入れるのも、旦那にお願いしよう。

二人ともぐっすり寝ているのを確かめて、私は母の向かいに座った。彼女はそこでコーヒーカップに手を添えたまま、孫娘の方を眺めている。

「近くで見てきたら？」

母は首を振って、「起こしちゃ悪いから」と言った。私は「そんなこと、気にしなくてもいいのに」と言いながら、卓上に放り出してあったレシートを引き寄せた。金額を確かめながら、財布を開く。

母は私の動きを見ながら、「ああ、いい」と手を振った。

「本当にいいの？」

「いいよ、タマには。お父さんも、外で飲んでるし」

父の件と、母が今夜の食費を出してくれるのがどう関係しているのかはよく分からないけど、康徳さんが外食するからと宅配ピザを取ってしまった私には、異議を唱える余地はない。

「で、そっちはどう？」

「も〜、バッタバタ」

牧人のところに晴ちゃんが生まれて、半年ちょっと。まだまだ実家で同居には至らないようだけど、受け入れを見越した掃除や片付けが大変らしい。私たちも

時々手伝いに行くものの、そんなに手助けができているとは思えない。
「じゃあ、やっぱり年始は長居しない方がいい？」
私の質問に、母が顔を歪めながら考え込む。
「お泊まりは全然いいんだけど、牧人たちの予定がまだ分からなくって」
「あ〜、なるほど。じゃあ、それが分かってから」
「ごめんね。そうしてくれる？」
私は「了解」と応えながら、手元にメモを引き寄せて「後日連絡」と書き殴った。雄輔も同じタイミングで帰ってくるなら、上手に調整しないとダメ、か。
「でも、もう確定しないとお節とか大変なんじゃないの？」
「本当にねぇ。あんたはどうすんの？」
「ウチはまだ、クリスマスとかもあるから……」
母と違って、手作りするとも限らないし、そもそも大した物は毎年作らない。子供らがもう少し大きくなってきたら、そういうのもやんなきゃいけない気もするけど、その時はその時で助けてもらおう。
母の方を見ると、彼女は娘たちの方を見ていた。コーヒーを飲み切り、時計を見上げると、「さて、そろそろ帰ろうかな」と言った。
「康徳さんはまだなんでしょ？」
彼女にそう言われてスマホを確かめるものの、「帰る」というメッセージはまだ来ていない。母は椅子から腰を上げ、静かに伸びをした。私は娘たちの様子を見に近寄った。
「起こさなくていいよ」
母はそう言いながら、パパッとコートを着て、マフラーを巻いた。そそくさと玄関の方へ向かう。せめて玄関までは見送らなければと、私は慌てて母の背中を追いかけた。

『一二月五日（火）』——森田芽衣編
初出　令和三年一一月一一日　アルファポリスにて公開

一二月七日（木）

武藤さんに印刷していただいた地図や書類に目を通していると、横に座っていた哲朗くんに「当日はアテンド、頼むぜ？」と肩を叩きながら言った。そう言われた哲朗くんは、いつになく歯切れの悪い言い方で、「はい」と返事をした。

「一応お願いしてる側なんだから、もっと気持ちよく返事しろよ」

武藤さんは、「ねぇ？」と同意を求めるように私の方を見る。

「自分家の話なんだし、依頼主とのやり取りなんかも、ちゃんとサポートしてくれよ」

「それは、もちろん分かってますよ」

「分かってるなら、相応の言い方ってもんがあるだろ？」

武藤さんの言い分もよく分かっているからか、行き場のない感情に苦しんでいるようだった。不機嫌とは似て非なるニュアンスで、哲朗くんは「すみません」と私に頭を下げた。

「私は別に良いから、気にしないで。武藤さんも、ね？」

私は武藤さんに笑いかけたが、彼は微妙に納得していない様子で、「そうですか？　じゃあ、良いんですけど」とボヤキもトーンも織り交ぜて言った。

「兄貴～、電話～」

電話に対応していた香織さんが、武藤さんを呼んだ。彼はそれに返事をして、相手の名前と何番の保留かを確かめる。「ああ、あの件ね。了解」と腰を上げた。

「じゃあ、あとはよろしくお願いします」

私たちにそれだけ言い残して、彼は自分の席へ戻って行った。すぐに受話器を取って、電話口の相手と何か話し始めた声が聞こえてくる。　私は手元の資料に視線を戻し、まだ目を通せていない部分にサッと目を通す。メニューや予算、スケジュールも事前に打ち合わせした通り。地図に関しては、武藤さんは武藤さんでも幸次さんにも同じものが渡っているのなら、特に困ることはない。

万が一があるようなら、哲朗くんに案内してもらえれば大丈夫だろう。確認し終えた書類を持ち帰るべく、武藤さんからいただいた新しいクリアファイルにそれらを収めた。資料から顔を上げると、まだ暗い雰囲気を漂わせている哲朗くん

が、鎮痛な面持ちで座っていた。
「何か、気になることでもあった？」
私は小声で哲朗くんに話しかけた。彼は一瞬驚いたものの、「え、ああ、何でもないです」と言った。
「本当に？　タダのおばちゃんには話せない？」
私が笑顔を作ると、彼は社長の方を一瞬見やった。まだまだ話は盛り上がっているようで、だんだん声のボリュームが大きくなっている。彼は私の方へ僅かに身を寄せた。
「実は、夕方からみぃちゃんと約束があって」
「もしかして、神戸の？」
声を抑える彼に合わせて、私も小声で言うと、彼は小さく頷いた。そういえば、ルミもそんな話をしていたような気がする。
さっきのスケジュールをもう一度確かめると、午後三時頃までの予定にはなっている。そこから片付けなり順調に進めても、解散は早くて午後四時前。彼だけ現地解散にしてもいいけど、それでも先約の集合時間に間に合うかは、彼にしか分からない。
スケジュールとメニューにもう一度目を走らせる。最初は居てもらった方がいいけど、後半は別に我々だけでも問題はない。
「集合時間と、場所ってどうなの？」
私はスケジュールを広げて、哲朗くんに問いかけた。彼の答えを聞きながら、当日の進行と展開の予想を擦り合わせていく。動かせそうな予定と、出なきゃいけないタイミングをやりとりしていると、だんだん哲朗くんの表情が明るくなってきた。
「じゃあ、そういうことで」
私がそう言うと、彼は元気よく「よろしくお願いします」と言った。

『一二月七日（木）』——小野寺香帆編

初出　令和三年一一月一二日　MAGNET MACROLINKにて公開

一二月八日（金）

ドアが開くたびに、車外の冷たい空気が入ってくる。二つ前の万博記念公園を過ぎれば、車内の乗客も乗降客も数える程度。金曜日の夜ならもう少し乗っていても良さそうなのに、二十二時台は流石に少々遅いのかもしれない。

私たちと一緒に山田から乗って、ずっと向かいの席にいた乗客も降りて、今乗り込んできた人が代わりに座った。すぐにドアが閉まって、列車が発車する。窓から外を見ても、ほぼ真っ暗。眼下を走る車の明かりも、随分と疎らな気がする。

私の隣で延々とスマホを触っていた沙綾は、SNSのチェックでも一通り済んだのか、不意に顔を上げて周囲を見回した。窓の外にも目を向けて、自分のスマホに視線を戻した。

「まだ十時半にもなってないじゃん」

時間だけ確かめて、スマホをカバンに仕舞った。

「九時だからって、慌てて電車乗らなくてもよかったんじゃない？」

「貴女はそうでしょうけど、私が困るのよ」

沙綾はそれでも不満そうな表情を浮かべている。

「今日はあくまでも私の付き添い。貴女だけで行けば良いじゃない」

「それはそうなんだけど……」

三宮に着いた時から、彼女は終始不満そうに見えた。私の都合で行きたいところに行き、お決まりのお店を周り、新しく見たかったところを見て、やっておきたかったことを一通りやる。

沙綾が付いて来なくてもやるつもりだった予定を全てこなして、事前に決めた予定通りの電車で帰っている。私としては、ランチのお店やお茶をするタイミングについて彼女の意見を取り入れただけでも大きな譲歩だと思っているけど、彼女はそう思っていないらしい。

「一人で行ったってどこ行けば良いか分かんないし、一輝と行ったってお買い物しにくいし」

「瑞希さんとか、他のお友達と行けば良いじゃない」

「みぃちゃんは明日行くんだって」

沙綾は「来年、誘ってみるか〜」と呟いた。
「あら、クリスマスもまだなのに、もう来年の話？」
「でも、もうほぼ年末って感じじゃない？」
沙綾の意見も分からなくもない。寒空の中、山のような人混みに紛れて神戸の夜を歩いてしまうと、一足早いクリスマスを迎えた気持ちになる。街もテレビも、見るものも聞くものもクリスマス一色の日が続いて、あっという間に年の瀬の話題へ移っていく。
クリスマスを迎える準備も今日で整ったし、年始の色んな算段もほぼ付いている。忘年会とか納会にちょっと顔を出せば、あとは自分用の家事ができれば、それで良い。
「そう言えば、掃除は進んでるんでしょうね？」
「えっ？」
沙綾は不意打ちに言葉を詰まらせた。
「綺麗に使わないようなら、さっさと売り飛ばすからそのつもりで」
私は優しい声音と満面の笑みで娘に釘を刺した。彼女にしては珍しく、神妙な面持ちで「はい」と答えた。なんとなく、しゅんとして見える。
「おせちも、自分たちで何とかしてね。ウチに来られても、貴女たちの分は何にもないんだから」
私の追い討ちに、沙綾はすっかりしょげ返ってしまった。今のうちにコレぐらい言っておけば、流石に自分たちで何とかするでしょう。もっとも、その甘々な予想は、一回も現実になったことはないんだけど。

『一二月八日（金）』——奥野朋子編
初出　令和三年一一月一四日　Pixivにて公開

二月二一日（月）

郁美さんに頼まれていた書類を、昼休み前にスタバへ呼び出した哲朗くんにチェックしてもらっている。授業を早めに抜けて来れたらしく、昼食でも一緒にと思ったが、ゆっくり話しながら食事をできるところが、ここの学食ぐらいしか思いつかなかった。

彼は今日も弁当持参らしく、学生さんに混じって自分だけ割安のランチを食べるのも悪い気がして、ここのコーヒーだけ奢らせてもらった。月曜日の午前中でも、近隣の主婦や商工会議所へ訪れる人がチラホラいるらしく、公園側のテラス席も含め、座席は半分近く埋まっているように見える。

書類に蓋をした万年筆を走らせながら二周してくれた哲朗くんが、顔を上げた。

「うん、コレで良いんじゃないですか」

事前に何度も内容を擦り合わせ、その結果みたいな書類だから、わざわざ確認してもらうまでもない気もするけど、念のため当事者の一人を巻き込んで再提出の可能性を減らせたのなら、彼にとっても無駄ではなかっただろう。

彼は二枚の書類を私が持って来たクリアファイルに納めた。

「データはまた、送っといてください。コレは」

「ああ、それは私が後で持って行こう」

哲朗くんが自分の荷物として手元に置こうとしたクリアファイルに、私は手を伸ばす。彼は「じゃあ、よろしくお願いします」と、クリアファイルから手を離した。いつもの彼なら、ここでコーヒーを持って立ち上がり、サッと教室へ戻っていきそうなものだが、彼はペンを胸ポケットに納め、コーヒーを口に運んだ。

「コレで、一区切りですか？」

彼のゆったりとした問いに、私は「ああ、まあ」と曖昧に応えた。

「最後が妹の誕生日会ですみません。おまけに、終わりまで同席できなくて」

「いやいや、将来有望な妹さんと出会えて光栄だよ。久しぶりに、君のお母さんにも会えたしね」

私が笑ってみせると、今度は彼が曖昧に「ははっ」と笑った。

「しかし、アレは君が生まれる前だから四半世紀以上の話かな。私の方はすっか

り忘れてたけど、流石に優秀だね」
「いやぁ、そんな」
母親が褒められても謙遜してみせる息子。ウチの幸弘には、とてもできそうにない。
「妹さんのあの性格は？」
気が強いというか、上昇志向の強さは哲朗くんやあの御母堂からは想像がつかない。お父さんも何となくで知ってはいるけど、どちらかというと哲朗くんに受け継がれているように思う。
「アレは僕へのアテツケというか、両親への反発というか」
哲朗くんは半分笑いながら言った。
「君も君で、お父さんに反発してるんだろ？」
哲朗くんは、乾いた笑いを浮かべながら、後頭部を手で触った。
「複雑なもんだな」
哲朗くんに向けて言いながら、他人事のような物言いに内心、「何を言ってるんだ」とツッコんだ。どこの家庭もそうそう一筋縄では行かない、当たり前の話ではないか。
「それはそうと、神戸はどうだった？」
微妙な空気に耐え切れず、強引に話題を切り替えた。
「ああ、えーっと」
哲朗くんも姿勢を切り替えて、記憶の掘り起こしにかかったらしい。私がコーヒーカップを口元に運ぶと、彼も同じタイミングでカップを口元に運んだ。喉を湿らせて、ゆったりとした気持ちで、後日談を聞かせてもらおうじゃないか。

『一二月一一日（月）』――武藤幸次編
初出　令和三年一一月一五日　Mediumにて公開

二月一四日（木）

寒空の下、小野寺さんを解放しながら笠井さんと共にゆっくり歩いている。前にもこんなことがあった気がするけど、アレは去年の出来事だったか、今年の出来事だったか、記憶が定かではない。

「いつもすみません」

小野寺さんが僕と笠井さんの間で、鼻声になりながら謝った。

「全然、気にしないでください」

笠井さんが男前な表情で言うが、明るさと角度的に小野寺さんには微塵も見えていないだろう。笠井さんの決め顔に、笑いを堪え切れず軽く吹いてしまった。彼にはバレないように顔を逸らし、気持ちを落ち着かせるべく、一呼吸置く。

「そうそう。ルミちゃんがはしゃがない忘年会なんて、物足りないって」

不意に小野寺さんが目を輝かせながら、僕を見上げた。

「ハメを外して飲み過ぎるアラサー女でも、大丈夫ですか？」

彼女は若干のアルコール臭を漂わせながら、心配そうな面持ちで言う。ついつい、「ルミちゃん」とちゃん付けで呼んでしまうけど、そう言えば良い歳なんだつけ。相対的に若い部類に入るけど、アラサーであればそろそろ自分なりの頃合いってやつを覚えてもらっても良い気もする。

答えに窮して笠井さんの方へ視線をやるものの、彼には華麗にスルーされてしまった。こういう時に安易に助け舟を出してくれないところが、彼の魅力でもある。

「まあ、いつもだと困るけど、たまになら」

「本当に？」

僕は勢いで、「本当、本当」と応えた。何が「本当に」なのかは分からないが、彼女がそれで落ち着くのなら、今はそれで良い。小野寺さんはそれっきり、再びグロッキー状態に戻って、僕らに身体を預けながらトボトボ歩いている。

「若い人も増えて、賑やかになって来ましたよね」

笠井さんが前を向いてボソッと言った。

「まぁ、半分身内みたいなもんですけど」

「それでも、良いじゃないですか」

笠井さんは笑顔で言った。

去年もそれなりの規模感だったけど、今年は輪をかけて多くの人が集まってくれた。哲朗や小野寺さんらを中心に、森田さんより若い人たちも沢山来てくれた。オジさんやオバさんの集まりじゃなくなって、随分華やかな集まりにもなりつつある。

「食事のメニューも、当日の催しも、そろそろ再考しないとダメですね」

「そうですね。新年会は間に合わないですが、次々回ぐらいから若い人の意見も取り入れていかないと」

ついこの間まで、森田さんより若いのは哲朗ぐらいのもんだったのに、安藤さんのところも合流すると、森田さんですら一気に上の世代へ押し上げられてしまう。

「僕らもいつの間にか、年寄りですよ」

僕は「若い人の意見」と言った笠井さんの言葉に、つい反応してしまった。彼に笑いながら言うと、彼も「そうですね」と笑い返す。

「まだまだ若輩者のつもりなんですけどね」

「僕もですよ」

二人で穏やかに笑い合っていると、真ん中の小野寺さんが微妙に揺れた。二人揃って身構えたが、彼女は何事もなかったかのように落ち着きを取り戻し、元のペースで足を動かし始めた。笠井さんと同じタイミングで、ふぅと息を吐く。

顔を正面に向けると、向こうの方に平和堂の看板と信号が見えてきた。もうそろそろ、目的地。再びデジャブを感じながら、後少しだと自分に言い聞かせた。

『一二月一四日（木）』——武藤幸弘編

初出　令和三年一一月一五日　カクヨムにて公開

一二月一六日（土）

眠さのあまりグズっていた二人の娘と共にお風呂に入り、入浴後の着替えと寝る前の歯磨きも済ませてベッドに連れて行った。普段ならしばらく寝てくれない亜衣も、今日はすんなり寝入っていた。寝冷えしないように掛け布団をしっかりかける。

寝室で室内用の上着をパジャマの上から羽織って、リビングへ降りた。先日ようやく出して一所懸命飾り付けたクリスマスツリーがテレビの前でドンと存在感を誇っている。

芽衣は、どうやら僕たちと入れ替わりでお風呂に入ったらしい。風呂場の方からそれらしい音が聞こえてくる。僕は音量を抑えてテレビを付け、適当なザッピングを経て、地上波発放送らしい映画に合わせた。まだ始まったところだろうに、何が何やらよく分からない。

キッチンへ入って、何を出すか考える。先月飲み切らずに仕舞ったままになっていた、安物のワインが残っていた。今年のボージョレだけで良かったのに、欲を出したせいでそのままとは。

ズボンのポケットからスマホを取り出し、「グリューワイン」で検索した。スーパーで買えるパウダータイプのスパイスばっかりだけど、適当に作ってなんちゃってで飲む分には事足りる。

「ホット赤ワイン」のレシピに則って、小鍋にワインを注いで火にかけた。子供たちに素直に寝ててくれよと願いながら、換気扇のスイッチを入れる。しばらく聞き耳を立てていても、上から降りてくる気配はなさそうだ。レシピ通りにはちみつや生姜、スパイスを加えて火を強める。沸騰直前で火を止めた。オレンジやレモンのスライスなんて、常備していない。冷蔵庫に残っていたマーマレードを取り出して、目分量で入れてみた。

「何してるの？」

肩にかけたタオルで髪を拭きながら、芽衣が「良い匂いね」とキッチンへやって来た。

「ホットワインでも、と思って」

「あら、良いじゃない」
芽衣は「ちょっと待ってて」と言い残し、寝室へ上がって行った。そっちから、ドライヤーの音が微かに聞こえてくる。僕は小鍋の火をとろ火にして再び点けた。温度が下がりすぎない程度に時々軽く揺すって、ツマミを何にするか考える。
確か冷蔵庫に、朋子さんからいただいた良いチーズが入っていたような。ドアを開け、中を入念に探っていると、芽衣が後ろから「何を探してるの？」と声をかけて来た。
「チーズって、どこだっけ？」
「あのチーズは来週まで取っとかない？　折角のクリスマスだし」
芽衣は僕の同意を待たず、ぬるりと冷蔵庫のドアから僕の手を離してそのまま閉めた。芽衣は食卓に放り出したままのビニール袋を探り、チーズのおかきを取り出した。
「コレにしない？」
実家から適当にもらって来たお菓子の中から、ホットワインに合いそうなツマミを見繕って、チーズのおかきも含めて適当なお皿に開けてみる。ワインを普段使いのマグカップに入れ、先に座っていた芽衣の向かいの席に座った。
僕から自分のカップを受け取った芽衣は、「お疲れ様」と乾杯して、一口飲んだ。
「マーマレードがちょっと甘いかな」
彼女の感想に僕は疑問を抱きながら、味を確かめてみる。蜂蜜の甘さにマーマレードの甘味も加わって、確かにちょっと甘さが強い気もする。
「レモン汁でも足す？」
「このままでいい」
ちょっと酸味を加えればバランスは整うのに、立ち上がりかけた僕を制して、彼女は自家製ホットワインをもう一口飲んだ。小包装のお菓子をツマみ、口に放り込む。
「来週にはクリスマスで、あっという間に年末か〜」
芽衣はカレンダーを見ながら、気の抜けた声で言う。クリスマスが終わればツリーの片付けが始まって、すぐに大掃除とできる範囲でのおせち作り。その先も何となくで思い描きながら、ホットワインの甘さと口の中に残るマーマレードの皮が気になって仕方がなかった。

『一二月一六日（土）』――森田康徳編

初出　令和三年一一月一五日　NXZ（旧サイト）にて公開

一二月二〇日（水）

さっき届いた衣装を着てから、年季の入った姿見の前に立つ。鏡面が埃まみれで、鏡としての機能を満足に果たしていない。適当に拭いて衣装にホコリがつくのも嫌だなと思っていたら、彩夏が代わりにキッチンペーパーを持って来てサッと拭いてくれた。ホコリが舞わないよう、上手に畳んで中へ織り込んでいく。

普段使わないところは当然のように掃除が行き届いていない。見ないフリをして来たけど、見てしまったからには近いうちに気合を入れた大掃除をしなくては。

「ほらほら、前見て」

姿見のフレームに積もったホコリやら、部屋の隅に気を取られていた私に、彩夏が声をかけてくれた。私の肩を叩いて、鏡の方へ向けと指で差し、自分は鏡に映らないよう脇へ避けて座った。できることなら直視したくなかったけど、えいやと気合を入れて、自分の装いを確かめる。

「うわぁ、えぇー」

着る時から随分短いなー、肌の露出が多いなーと思っていたけど、改めて向き合ってみると、かなり攻めた衣装になっている。ザ・サンタな赤基調のミニスカ。量販店で手に入る大人なアレとは違って、生地も作りも大分しっかりしていて、それなりの値段なんだろうな、という印象もある。

左右に体をくねらせて、後ろの感じも確かめた。ただでさえ短いスカートが、かなりヒラヒラと頼りない。

「コレだと、完全に見えるよね？」

鏡越しに、彩夏に同意を求めてみる。彼女はそれに応えず、衣装が入っていた箱の方へ行き、中に残っていた物を持って来た。

「あ、見せパン」

赤いスパッツスタイルのアンダースコート。今日は履かないけど、当日はコレも着けるのか、とマジマジと眺めてしまった。ミニスカサンタのコスプレというか、チアガールの特殊な衣装といったところか。

背の高い沙綾さんや、出るところが出てる彩夏なら似合うんだろうけど、背もそんなに高くないちんちくりんの私や、細身の瑞希さん、陽菜ちゃんには荷が重

そうだ。ま、当日は踊る方に必死で、他のことを考えてる余裕なんてないだろうけど。

姿見の前で自分の姿をアレコレ確かめている私を見ながら、彩夏はニヤニヤと微笑んでいた。彼女の後ろに、私が受け取ったのと同一の、未開封の箱が置いてある。

「彩夏は着ないの？」

彼女は頷いて、「ルミが着てくれたから、どんなもんかもよく分かったし」と言った。

「サイズとかもあるし、合わせとかなくて良いの？」

「うん。大丈夫」

私のところに届けられた荷物ではあるものの、箱にはきちんと「野村彩夏様」と宛名書きがされていた。取り違えがなければ、それぞれに合わせたサイズの衣装が入っているのだろう。

確認も済んだし、彼女が着替えないのであれば、さっさと元の服に戻ろう。一人でこんなのを着ていると、だんだん恥ずかしくなってくる。彩夏が持って来た見せパンを箱に戻し、脱衣所へ行こうとすると、彩夏に呼び止められた。

「もう着替えちゃうの？　可愛いのに、もったいない」

「自分は着ないんでしょ？」

「誰かが着てるからいいんじゃない」

彩夏はスマホを取り出して、私に向けた。「ほら、可愛いよ」と言いながら、次々にいろんな角度から写真を撮っていく。私は「コラ、やめろ」と止めようとするが、彩夏に上手く躱されてしまう。

「コレなんか、良いんじゃない？」

彩夏は写真を私に見せながら、意地悪な笑みを浮かべている。どこにアップして、誰に送るつもりだ？　先に着替えて、データの奪取を考えよう。まずは脱衣所へ行って着替えねば。

『一二月二〇日（水）』――小野寺ルミ編

初出　令和三年一一月一六日　小説家になろうにて公開

二二月二二日（金）

立派な一本木のカウンターで、哲朗くんと横並びに座ってビールを飲んでいる。久しぶりにココへ来てみると、彼は以前の反応が嘘のようにどんどんビールを飲み、次の銘柄をどうするか、店員さんと話し合っていた。

僕は目の前にいる調理担当らしいスタッフの動きを観察していた。一朝一夕に真似できるものは一つもないとして、無駄のない動きや段取りの確かさは、見ていてとても気持ちがいい。

プロフェッショナルな仕事に自分ももっと頑張らなきゃなと感化されていると、話し終えた哲朗くんが次の銘柄を決めてオーダーした。苦味が強く、アルコール度数も高いタイプらしい。

「珍しいね」

以前はもっと甘味が強そうなフルーティなタイプとか、色味がちょっと変わっているタイプを頼んでいたような気がする。哲朗くんは男らしい表情で、「そろそろ、そういうのに挑戦しようと思って」と言った。

「焦って無理しないほうがいいぞ」

「別に、無理してないですよ」

彼は店員さんが運んできたグラスを受け取り、早速一口飲んだ。苦味が強いのか、さっきまでの強がりが嘘のように、一瞬顔をしかめた。

「ほら、言わんこっちゃない」

「想像より、苦かっただけですよ」

彼は頑なに強がって、もう一口飲んだ。やっぱり苦そうに見える。僕も次は、同じ奴にして、味を確かめてみようか。

哲朗くんがオーダーした銘柄を、手元のメニューで確かめていると、彼はお口直しにポテトサラダに箸をつけた。一口食べて、ビールを飲む。今度は平然を装っていた。

「君は、明日行くんだよな？」

僕が急に話題を振ると、彼は一瞬「明日？」と呟き、「ああ、朋子さん主催のクリスマス会ですよね？」と言った。

「一輝さんは欠席でしたっけ」
「納品と、取引先の忘年会があるからさ」
年内ギリギリの仕事をなんとか片付けて、明日の納品に間に合ったのは良かったけど、そういう日に限って朋子さんのイベントが入っている。
「うちのボスは出席するのにな」
「お誕生日もお祝いに行ってたんですよね？　凄いなぁ、安藤さん」
「本当にな」
似たような仕事をしているはずなのに、自分より仕事の多い立場でありながら、朋子さんのことは絶対に外さない、不思議な人。今度、仕事のコツを聞いてみよう。でないと、義理の息子候補の立場も危ぶまれる。
「で、細やかなお願いなんだけど、沙綾の写真、お願いできないかな？」
明日のクリスマス会で、みんなとダンスを披露すると言っていた。サンタのコスプレで瑞希と共に踊る沙綾をこの目で見れないのが残念で仕方がない。僕の内なる熱情が届いていないのか、哲朗くんは頭に疑問符を浮かべたような表情でこちらを見ている。
「記録係もするんで、写真も動画もバッチリ撮って来ますけど」
「それはそれとして、君の個人的な記録としてさ」
コレまでもダンスの記録や、各種イベントの公式記録を担ってきたのは分かっている。広報、プレスっぽい記録でない半分プライベートな物を期待しているのだけれども、彼は今一つピンと来ていないようだ。
「瑞希のサンタコスとか、記録係の仕事だけで良いのか？」
僕がそう言うと、彼は微妙に表情を変えた。
「そういう写真を、沙綾の分も撮って欲しいだけだよ。アングルとかシチュエーションとか、全部任せるからさ」
哲朗くんは神妙な面持ちで頷いた。これで、今夜の取引は成立だ。あくまでも、健全なイベントの健全な一瞬を切り取ってもらうだけ。コレで、明日の仕事も頑張れる――。

『一二月二二日（金）』――浪川一輝編
初出　令和三年一一月一六日　NOVEL DAYSにて公開

二二月二四日（日）

啓と智希に一つずつケンタッキーのバケツを持たせ、えっちらおっちら、ようやく阪急の線路を潜るところまで来た。ちょうど目の前を両側から阪急電車が行き来する。信号待ちをしていた啓が微かに喜んでいた。

隣の智希も、ついこの間まで電車に興奮していたように思うが、流石に中学生ともなると見慣れた電車には冷静な反応を示すか。

ガード下を抜け、真っ直ぐ大同町へ抜ける方が早いが、歩きやすさを考慮して水尾の方から迂回するルートを選ぶ。この辺りを歩き慣れていそうな智希に、少しだけ先を歩いてもらう。

元茨木川緑地に沿って少し進んだところで、住宅街の方へ曲がった。細い道を抜けると、少し広い道路と大きな公園が見えてきた。智希はスッと公園の中へ入ると、グルっと周遊しそうな散歩道に足を踏み入れる。

小高い丘で遊んでいる子供達や、向こうの方でキャッチボールやミニサッカーに興じている小学生も見えた。啓は羨望の眼差しでそちらを見ているが、智希は歩調を緩めることなく、前へ前へと進んでいく。

「啓も居るんだし、もうちょっとゆっくり歩いたって良いんじゃないか？」

私は智希の背中に声をかけた。智希はこちらを一瞬振り返る。

「でも、あんまり冷めたら良くないし」

「それはそうだが、さすがにちょっと早い気がするぞ」

智希は「そうかなぁ」と呟きながらも、少し歩幅を小さくしてくれた。彼や彼の愛犬との散歩に付き合うときは今ぐらいのペースだが、啓には少し早い。啓が無理なく付いていける速度にしてもらいながら、水尾図書館が見えるところまでやって来た。図書館には背を向けて、フレスコの隣を真っ直ぐ目の前の信号を目指して抜けていく。

団地の向こうにも公園があるらしく、賑やかな声が聞こえてくる。啓はそちらにも興味津々、未練たらたらの様子で智希の後を追いかけて足を動かしていた。

「遊びたいんなら、寄り道しても良いんだぞ」

「良いよ。さっきも散々遊んだし」

智希の即答に、啓は何か言いかけた口を閉じた。確かに受け取りに行く前に、岩倉町の広い公園で散々走り回ったが、啓はまだまだ物足りないのだろう。同時に、智希に嫌われたくないメッセージも、啓の小さな身体からビンビンに放たれている。

「遊ぶなら、持って帰ってから遊ぼうよ。外は寒いし」

今から公園に繰り出したところで、スペースも早々空いていない。小さなゴムボール一つで小学生を相手に中学生が延々と遊ぶには限界もある。私がもっと動ければ多少は違うのだろうけど、せいぜい荷物板ぐらいが関の山。

啓は智希の「家で遊ぼう」の誘いに乗ったらしく、若干遅くなっていた歩きに力強さが戻ってきた。智希はそれを見て、歩く速度を少し早める。若園町の交差点を真っ直ぐ進み、水尾小学校の裏に抜けた。

道が不規則に入り組んだ住宅街の中に入り、智希の案内でどんどん幸弘たちの家に近付いていく。見覚えのある通りに出ると、聞き覚えのある犬の泣き声が聞こえてきた。智希の愛犬が、上から私たちに向かって吠えている。

周りの家の飾り付けを見ながら、今日がクリスマスイブだと痛感する。孫に手を引かれながら、家族の集う息子宅に帰ってきた。

『一二月二四日（日）』——武藤幸次編

初出　令和三年一一月一六日　Mediumにて公開

二二月二五日（月）

芽衣さんは、向かいのキッズスペースで子供達と遊んでいる義理の妹さんに、笑顔で手を振っていた。私たちは、家族連れで賑やかなフードコートの中、少し離れたところからコーヒー片手にそれを眺めている。

芽衣さんは、椅子に置いた荷物がずり落ちないよう、手を添えながら積み直した。

「沢山借りるんですね」

私はその量に、つい声に出してしまった。彼女は「ええ、まあ」と頷いて、

「ほとんど、子供の絵本ですけどね」と付け加えた。

「中央図書館の方が近いし、選択肢も多いんじゃないですか？」

「そうなんですけど、時々、違うところを見たくなりません？」

彼女の答えに、私は無意識に頷いていた。

「実は私も、そういう気分で」

「あらー、じゃあ偶然が重なって」

芽衣さんは心底楽しそうに笑った。一瞬、視線が子供たちの方へ向いた。私も釣られてそっちを見るものの、何事もなかったらしい。義理の妹さんと目で合図し合い、再びこちらに視線が戻る。

「そういえば、この間のルミちゃん、活躍ご覧になりました？」

芽衣さんはカバンからスマホを取り出した。先日のクリスマス会で、普段一緒に練習している方々とお披露目会をしたのは、知っている。動画もつい先日、見せてもらった。芽衣さんは、彼女が個別に記録した写真や動画を私に見せてくれる。先日見た公式記録の動画より、躍動感や息遣いがリアルに思えた。

「カッコよかったなぁ。衣装が少し派手だけど、それを上回る躍動感がもう最高でした」

芽衣さんは目をギラギラ輝かせて、興奮気味に捲し立てた。現場で見ていた彼女の様子も、なんとなく目に浮かぶ。

「創作意欲も刺激されました？」

「それはもう、バリバリと」

私はボソッと呟いたつもりだったのに、彼女はオーバー気味にリアクションしてくれた。反応の大きさに自分で気がついたらしく、「あ、すみません」と身体を窄めて、軽く頭を下げた。

「じゃあ、もう次の原稿も終わっちゃいました？」

私は心がないふりをして、そのまま畳みかけてみる。芽衣さんは、「ああ、いえ、まだ」と、さっきまでの勢いが嘘のように、萎んだ風船みたいになっていた。

「でも、年内には手を付けますよ。手をつけて、可能ならそのまま仕上げまで」

芽衣さんは力強く言い切った。その言い切りっぷりは流石だなと思わされる。あの時垣間見たプロフェッショナルなスタイルを学ぶなら、ここで切り出さなきゃいけない。私は意を決して、口を開いた。

「お邪魔でなければなんですけど、その様子、見せてもらってもいいですか？見せてもらうっていうか、一緒に作業させてもらうというか」

私は早口で言葉を付け足していく。どうしても学びたい気持ちが前に出過ぎて、どうにかこうにか飲みやすい条件にならないか、相手の顔も見ずにアレやコレやと切り出してみる。

「ダメ、ですよね？」

私は恐る恐る顔を上げた。芽衣さんの顔を見ると、ちょっぴり怖い気がした表情は、さっきまでの若いお母さんのソレと全く変わらなかった。

「別に、いいですよ。旦那も子供もいないはずだし」

彼女の軽い言い方に、私はホッと胸を撫で下ろした。

「ただ、途中の原稿は見ないでくださいね。恥ずかしいんで」

彼女は口に手を添えて、小声で私に言った。完成した原稿がそれなりの人に見られるというのに、恥ずかしいというのは意外な気もする。反面、私と同じ気持ちなんだと安心もした。

「貴重なお絵かき組ですもんね。一緒に頑張りましょう」

芽衣さんは私に、スッと手を差し出した。私はその手を取って、「こちらこそ、よろしくお願いします」と握り返した。

『一二月二五日（月）』——小野寺香帆編

初出　令和三年一一月一七日　MAGNET MACROLINKにて公開

二二月二六日（火）

三人分の食器と、カレーが入っていた鍋をシンクで洗っている。みぃちゃんが後ろで、残りのご飯を炊飯器からラップに移して小分けにしてくれていた。もう一人の客人は、向こうの僕の部屋に籠もって、漫画でも漁っているのだろう。缶ビールを持ってドアの向こうへ姿を消してから、中々戻って来ない。

シンクの中を片付けると、後ろから炊飯器の内釜が放り込まれた。僕はそれも洗って、横の水切りカゴに伏せた。食卓には、一食分ずつタッパーに取り分けた残りのカレーと、同じサイズのご飯が綺麗に並んでいる。

「もうちょっと冷ましてから、冷凍庫に入れてね」

「冷蔵庫じゃなくて？」

みぃちゃんは頷いた。タッパーの蓋に手を添えると、確かにまだ熱い。ラップに包んだご飯の方は、もっと熱そうだ。

「食べるときは、しっかり中まで温めてね。焦げ付きやすいから、しっかり混ぜること」

僕が軽い調子で「りょうか〜い」と答えると、みぃちゃんは真剣な面持ちで「本当に分かってる？」と言った。

「ウェルシュ菌、怖いんだから」

ウェルシュ菌？　彼女が口にした用語がいまいち分からず、首を傾げてしまった。後で検索してみよう。

みぃちゃんは食卓で、自分が飲んでいた缶ビールを口元に運んだ。どうやらもう、空っぽらしい。僕の分は食べている最中になくなってしまった。冷蔵庫を空けてもストックは見当たらない。

「お茶かコーヒーか、どっちがいい？」

僕がみぃちゃんに訊ねると、奥の部屋から缶ビールと漫画を手にした上坂さんが、「私は紅茶かな」と言いながら出てきた。彼女は僕らの視線など微塵も気にすることなく、漫画を食卓に置き、缶をシンクの中に持って行った。

「濯いで潰した方がいい？」

僕は彼女に、「そのままでいいよ」と答えた。彼女は「そう？　じゃあ、お言

葉に甘えて」とみぃちゃんの隣の席に腰を下ろし、足を組んで漫画を読み始めた。
僕はとりあえず、電気ケトルに水を入れて沸騰させるようにセットした。ストッカーの中を覗き込み、何が入っていたか確かめる。
「イエローラベルとドリップコーヒーはあるけど、どっちにする？」
「じゃあ、私も紅茶で」
「かしこまりました」
僕は小さなティーポットと、百均で買った無地のマグカップを用意した。ピラミッド型のティーバッグを二つほど入れ、お湯が沸くのを待つ。
みぃちゃんは隣の上坂さんを横目で気にかけながら、僕に向かって話題を切り出した。
「年末年始って、どうするの？」
「年明けたら挨拶に帰るぐらいかな」
ここで年明けを迎えても何にもやることがないのはよく分かっているけど、実家に帰って寝泊りするよりは、まだマシだと思っている。武藤さんに誘われて、そっちへ行く可能性も十分にある。
みぃちゃんは「ふーん」と、頷いた。何かを考えているように見える。
「何、どうしたの？」
「お父さんの誕生日が、三〇日でさ。今年はお誕生日会しようか、ってなってて」
みぃちゃんはおずおずと言葉を紡いだ。横で漫画を読んでいたはずの上坂さんは、いつの間にか顔を上げて、「流石にそれは、遠慮しようかな」と言った。僕は内心、「そりゃ、そうだろう」とツッコミながら、みぃちゃんがそれを切り出した理由を考えた。
「僕が出席しても、大丈夫？」
「というか、出席してもらえるとありがたくって」
イヤなものを見るような目で上坂さんを一瞥しながら、みぃちゃんは口をモゴモゴさせながら言う。何かしら、話しにくい事情があるらしい。大体の予想を脳裏に描きながら、沸いたばかりのお湯をポットに注いだ。

『一二月二六日（火）』――原田哲朗編
初出　令和三年一一月一七日　ノベルアップ+にて公開

二二月二七日（水）

「不和のお父様が、近々お誕生日なんですって？」

レンジフード用のフィルターを手渡しながら、一輝さんの背中に向けて言った。

彼は手元や足元に注意を払いながら、私に「ええ、まあ」と曖昧に笑って答える。

トイレや脱衣所の換気扇には、もうフィルターを付けてもらっている。私では中々手が届かない高いところを中心に、自宅もサロンも掃除は一通り片付いた。

夕方からの納会に合わせて、こっちの応援に彼を差し向けてくれたおかげだろう。

彼はたまたま休日だったという弟くんまで連れて来てくれたが、流石に手が多すぎて彼は沙綾の方に回された。あっちの大掃除も順調に片付いているのだろうか？　彼らではダメでも、一輝さんがいれば心配ない、か。

一輝さんは手慣れた様子で代わりのフィルターを付け、「コレで、大丈夫ですよね？」と私にチェックを求めた。ここから確認する分には何の問題ないのに、狭い踏み台の上でわざわざ身体を引いてくれる。私は「OK」と指で丸を作った。

一輝さんは踏み台から降り、小さく畳んだ。

「コレは……」

「そこの隙間に入れておいて」

彼は私に言われるがままに、ゴミ箱と壁の間にある隙間に、畳んだ踏み台を周りにぶつけないよう、そっと差し込んだ。

私はパッと辺りを見回した。その場から見える範囲で、部屋をザッと眺めてみる。気になるところが全くなくなったとは言わないものの、彼にも手伝ってもらって掃除する分には、この辺りが潮時かな。

壁の時計に目をやると、会場へ向かうにはまだまだ早い。この時間にお昼を食べてしまうのも、何だかもったいない気もしてくる。かと言って、何かをやるにしても中途半端な時間。手持ち無沙汰な時間にお茶をしてもいいんだけど、今のうちにやっておきたいこと、何かあったかしらと思っていたら、向こうの部屋からケビンの声が聞こえてきた。

今日は帰ってくるのも遅いし、今のうちにもう一回散歩へ行ってしまおうか。

「犬の散歩に行こうと思うんだけど、どうかしら？」

スマホを見ながら私を待っていたらしい一輝さんは、顔を上げて私の方を見た。
スマホはポケットに仕舞われる。
「一緒に行っても良いんですか？」
その「良いんですか？」は、私とケビンの両方に向けられたのだろう。私はともかく、ケビンも特に問題はなかったような……。彼の気分もあるだろうから、やってみてから悩めば良い。
「じゃあ、準備してくるから」
私は、散歩から戻ったら、そのまま納会へ向かおうと彼に伝え、コート以外の彼の荷物も持ち出してもらうことにした。彼はそれに了承し、ついでに戸締りまで取り掛かってくれた。
私はそれに感謝しながら、リードとコートを取りに行く。お散歩用のセットも持ち出して、ケビンにリードをつけた。一輝さんの準備が整うのを待って、二人で一緒に外へ出た。
「忘れ物、無いわよね？」
一輝さんに一応確認して、彼が頷くのを待ってから鍵をかけた。ケビンは私たちが歩き出すのを待ってから、我々の横を付いてくる。
日差しがある分、日向はそれなりに暖かいものの、日陰に入るとそこそこ寒い。日中でコレだから、帰ってくる頃はもっと寒いかも。散歩帰りに解散した後、防寒着を見直さなきゃなと考えながら、いつもの散歩ルートを辿り始めた。

『一二月二七日（水）』——奥野朋子編
初出　令和三年一一月一八日　Pixivにて公開

一二月二九日（金）

コーヒー豆が焙煎される香りを身体中に浴びながら、私たちはホイップクリームが添えられたバームクーヘンに、フォークを入れた。クリームを乗せて口に運ぶ。

「うん、美味しい」

向かいに座る史穂さんは、コーヒーとのマリアージュも含めた感想を言った。決して広くはないお店に、定期的に人が入ってきては、コーヒー豆や焙煎を頼んでいく。お隣のお客さんも、焙煎待ちついでにお茶をされている人らしい。

「年内は今日までなんだって」

史穂さんに言われて、「あ〜、なるほど」と膝を叩いた。そういえば、この辺りのお店も何件かは「謹賀新年」や「賀正」と書かれた年末年始休業の案内を出していた。

「ウチも形の上では昨日からお休みなんだけど、出社しないだけでカタカタやってるわ」

「ウチもです」

史穂さんは、「それ、ウチのせいよね？　ごめんなさい」と言った。私は即座に「いえいえ、とんでもないです」と答えた。

「森田さんご夫妻には、大変お世話になりました。また、来年もよろしくお願いします」

「ああ、いえ、こちらこそ、お世話になりました」

史穂さんが深々と頭を下げるから、私も頭を下げた。向こうがなかなか頭を上げないから、こちらも頭を上げにくい。たっぷり間を置いて、史穂さんが頭を上げ、私も合わせるように頭を上げた。

史穂さんは、思い出したようにフォークを手に取り、バームクーヘンを一口大に切る。

「今日は、お嬢ちゃんたちは？」

「旦那と、私の下の弟が」

彼女は新しく入ってきたお客さんを目で追いかけながら、コーヒーカップを口

元に運んだ。
「お宅は？」
「ウチはほら、みんな自由だから」
史穂さんは、ケラケラと笑いながら言った。二人とも思春期、中高生ともなると手がかからなくなるのも当然か。いつかウチも、そんな風になるんだろうか。それはそれで楽なんだろうなと思う反面、寂しい気もする。
「あそこで芽衣さんとすれ違ったおかげで、私も今、ちょっとだけ自由だし」
彼女はニコッと笑った。そんな彼女はかなりの軽装、私も大した荷物もなく、すぐそこの駅前ですれ違った。彼女は向こうの郵便局へ、私はすぐそこの銀行へ。年内最後の平日にバタバタしていたら、史穂さんとすれ違って、「ちょっとお茶しない？」と今に至る。
「あ、もしかしてすぐに帰らなきゃいけなかった？」
私がぼんやりしていると、史穂さんが申し訳なさそうに言った。私は慌てて、
「いえ、全然、大丈夫です」と言った。
「良かったー。この時期はどうしても、私たち主婦はバタバタするもんね」
彼女は残りのバームクーヘンを食べ、コーヒーを飲んだ。お皿に残っていたクリームを上手にフォークの上へ乗せていく。
「だから、休める時には休んどかないと」
かき集めたクリームは口に入るのかと思いきや、コーヒーの中に投入された。コーヒーをよくかき混ぜながら、「ね？」と私に笑いかけた。私も釣られて、ふふっと笑ってしまった。
史穂さんは、私が食べ終わるのを待ってくれた。私が取ろうと思った伝票を彼女は目の前でサッと持って行って、私が財布を出す前に払い終わってしまった。
お店の外に出て、横の駐輪スペースに止めた自転車のカギを外しながら、「すみません、ご馳走様です」と言うと、彼女は「気にしないで」と自転車のスタンドを上げた。
「じゃあ、良いお年を」
史穂さんは狭い歩道を、自転車を押しながら駅の方へ歩いて行った。私はそれを見送りながら、反対方向へ自転車を押して歩く。彼女も今頃、自転車に跨っているんだろうなと思いながら、周囲を見回した。

『一二月二九日（金）』――森田芽衣編

初出　令和三年一一月一八日　アルファポリスにて公開

一二月三〇日（土）

駐車場から出てきた、父と母を乗せた車は、晃兄の運転によって車列に合流した。見通しの良い直線道路なのに、交通量のせいか、すぐに目で追えなくなる。

私たちの後ろに立っていた一兄は、ふぅと息を吐いた。その隣にいた沙綾さんは「つつがなく終わったね」と笑った。

「お祝いしたことないって言ってたけど、十分お祝いしてたじゃん」

「アレがお祝いだったなんて、お前、知ってた？」

沙綾さんに笑われたのが悔しかったのか、お鉢が私に回ってきた。私も答えに窮して、一瞬考え込んでしまう。

「まぁ、時期的に家族の忘年会っぽくはあるけどね」

「それはそうね。お誕生日会にしては静かすぎるというか、めちゃくちゃシュールだよね？」

沙綾さんと哲朗さんは、楽しそうに笑い合っている。これがほぼ毎年の恒例行事になっている私たちには、そのシュールさもよく分からない。まぁ、黙々と蟹を食べる会だったから、変なトラブルもなく終わったのは良しとしよう。

「で、どうする？」

一兄が沙綾さんに訊いた。

「飲み足りない気もするし、はしゃぎ足りない気もするな」

「哲朗くんは？」

哲朗さんは腕を組んで少し考えてから、「歩きますかね」と応えた。それを聞いた一兄は、沙綾さんに「オレたちも、とりあえず歩いて駅まで行くか」と言った。

「ちょっと遠くない？」

「腹ごなしと酔い覚ましにさ」

一兄は一足先に、茨木市駅の方へ向かって歩き始めた。沙綾さんの方に振り返って、「駅前まで行けば、カラオケもバーもあるし」と言うと、さっきまで気怠そうだった彼女の顔が一気に華やいで、「よし、乗った」と言った。

「ほら、行くよ」

沙綾さんは私たちの背中を押して、一兄の後を追いかける。哲朗さんは私に、「どうする？」と言いながらも、足を動かしていた。私が肩をすくめて見せると、彼は笑顔を見せた。

一兄を先頭に、ひたすら真っ直ぐ西河原西の交差点を目指して歩く。すっかり陽も落ちてそれなりに肌寒いけど、みんな元気よく、楽しそうに歩いている。交差点までくると、一回向かい側に渡ってから、一七一号線を渡った。茨木川を越えると、JRの高架が見えてくる。　集団で車や自転車に気をつけながら歩いていると、ポケットの中のスマホが震えた。信号を渡ったところで取り出すと、晃兄から、無事に帰り着いたというメッセージだった。

「今どこ？　だって」

一兄に画面を見せた。

「極楽湯の交差点っと。ついでに、一五分後に阪急茨木集合っと」

一兄は私のスマホを手に取り、勝手に晃兄にメッセージを送ってしまった。私は怒っていますよ、と頬を膨らませながら、一兄からスマホを取り返した。一兄は「そんなに怒るなって」と笑いながら言った。

「ハンドルキーパー押し付けちゃったし、飲ませてやろうよ」

「帰れなくなったら、哲朗の家に押し掛ければ良いし」

一兄は、沙綾さんの言葉に「それ、いいね」と冗談めかして言った。哲朗さんは本気で困惑しながら、「そんなに沢山、無理ですよ」と抗議している。

「とにかく、不完全燃焼の忘年会をパーっとやろうぜ」

沙綾さんは「いいね、いいね」と陽気さ全開で一兄の言葉をどんどん煽る。一兄はいつの間にパーティーピーポーになったのか。あるいは、沙綾さんが彼をそうさせているのか。その真意は、私には分からない。

ただ、そういう二人とそれに翻弄されている哲朗さんとを眺めるのは、なんだかとても幸せな気持ちになってくる。まだまだ気が早いけど、こういう家族も私は好きだ。

『一二月三〇日（土）』――浪川瑞希編

初出　令和三年一一月一八日　noteにて公開

一二月三一日（日）　午前〇時

翌朝起きてからでは間に合わない黒豆の仕込みを終え、ようやく日元から離れた。甘い匂いがまだ微妙に漂っている。換気扇にはもう少し働いてもらおうか。

基本的には自分が食べる用の、おせちとはとても言えないレベルの代物。この時期限定の、ちょっぴり特別な常備菜と言った方が正しいんだろう。どうしても食べたいものだけ、自分で作る。必要に応じて後は買えば、それでいい。

母が祖母から受け継ぎ、私が母から受け継いだ手書きのレシピを、本棚のいつもの場所に戻した。これも良い加減にデジタル保存しなきゃと思いながら、スキャンしてPDFにするだけの作業を、ついつい先送りしてしまう。また来年、また来年と言いながら、このまま時間と共に消えていくような気もする。

最低限の灯りしかつけていない部屋の片隅で、ぼんやりと本棚の暗がりを見て物思いに耽っていると、屋外で雨が降り出した音が聞こえてきた。天気予報では、夜の遅い時間から明け方にかけて降ると言ってたっけ。

雨に合わせて、家の中も少しひんやりしてきた気もする。寝室の灯りを点けに行き、キッチンに戻って換気扇と照明を切った。足元に気をつけながら、自分の部屋へ入る。隣のケビンは、静かによく眠っているらしい。

このままお風呂に入って床に就いても良いんだけど、明日は休みだし、読みかけの本を最後まで読んでから寝ようかしら。読書のお供に、それっぽい音楽でも探そうか。

スリープにしていたパソコンを立ち上げた。動画サイトやプレイリストを開く前に、メールやSNSをチェックする。年末とあって、みんな楽しそうにやっている。タイムラインを眺めていたら、チャットが立ち上がった。

――ママ、起きてる？

私がオンラインになったのを見たらしく、健人がメッセージを送ってきた。

――おはよう、早起きなのね。
――今日なら、ママも起きてると思って。

向こうは多分、土曜日の朝。一七時間の時差は、中々合いそうで合わない。普段はメールでやり取りするのが精一杯だけど、今日ならほぼリアルタイムでコミュニケーションできる。

――ビデオ通話にしても良い？

お風呂に入っていたら、ノーと答えていた。一応、机上の鏡で確かめると、いつもの顔は保てているように思う。健人は私の答えを待たずに、通話を掛けてきた。私はビデオをオンにして、それに出た。

「元気？」

数年ぶりに見る息子の顔は、だいぶ大人の顔つきになっていた。こっちで生活していた頃より、顔も体も相当しっかりして、母親似だったはずの彼はいつの間にか、父親にそっくりになっている。

「元気よ。そっちは朝から元気いっぱいじゃない」

「まあね。朝の自主トレしてきたところだからさ」

彼は笑いながら、脇に抱えたバスケットボールを指先で回して見せた。彼の背後には、所属するチームのユニフォームが飾られている。

「お父さんはどう？　元気？」

「お父さんもおばあちゃんも、とっても元気さ」

健人は画面の向こうで、オーバーにリアクションして見せる。その様子に、

「ああ、向こうの子になったんだな」と妙に納得してしまった。

「そっちのパパはどう？」

「まだまだ元気にしてるけど、だんだん歳は取ってきたかな」

私はドアの向こうの愛犬を思い描いた。健人はちょっぴり寂しそうに、「そっか」と言った。

「来年こそそっちに行って、また撫でたいな」

「いつでもいらっしゃい。お姉ちゃんと一緒に待ってるわ」

お姉ちゃん、のワードに健人は少し嫌そうな顔をした。その様子がおかしくて、私はつい笑ってしまった。

もうすぐ来年。明日一日過ごしたらやってくる来年が、今から楽しみになって来た。健人と他愛もない話をしながら、どんどん楽しみを募らせていく。

『一二月三一日（日）　午前〇時』――奥野朋子編

初出　令和三年一一月一九日　Pixivにて公開

一二月三一日（日）　午前六時

家を出た時には濡れていたアスファルトも、一時間ちょっとの間にだいぶ乾いてきた。河川敷も普段より湿ってはいたが、歩きにくいと言うほどではない。それよりも、気温の方が厄介だ。風もそれなりに強く、早歩きで体温が上がったはずなのに、汗のおかげで散歩する前より冷えてしまったように思う。

帰る前に、ホットコーヒーでも飲んで帰ろう。JR総持寺の駅を抜けて、ファミリーマートに足を踏み入れた。店内をぐるっと周り、今朝の食パンがなかったのも思い出して一緒に買うことにした。コーヒーは、ホットドリンクコーナーのペットボトルの奴にしよう。

会計を済ませ、イートインのコーナーに向かうと、先客が机に突っ伏して寝息を立てていた。間に一つ空けて椅子に座ると、顔が見えた。浪川さん家の次男坊、晃くんだった。

私がビニール袋をガサガサさせながらコーヒーを取り出していると、晃くんがゆっくり身体を起こした。眠そうに大きな欠伸をしながら、身体を伸ばしている。彼は片目を瞑りながら、私の方を見た。私に気がついたらしく、「あ、おはようございます」と言った。

私は「おお、おはよう」と返した。彼は、手元にある飲みかけのペットボトルを手に取り、蓋を開ける。

「早いですね」

彼は中身を飲み、口を湿らせてから言った。喉はまだ十分に開いていないらしい。

「ジジイだからね。君は、朝帰り？」

晃くんは欠伸を噛み殺しながら頷いた。

「もうちょっと行けば自宅だろう？　どうしてこんなところで」

「極楽湯でひとっ風呂浴びてから帰ろうと思って」

「ああ、なるほど」

河を越えれば、道路脇にある。土日は午前六時からだったっけ。ゆっくり入浴してから帰ったら、七時ぐらいか。変な時間に朝帰りされるよりは、そっちの方

がいい。

しかし、そもそも今日は空いているのだろうか。晃くんが水分補給している間に、スマホを取り出して検索を掛けてみた。年末年始の営業にはなっているものの、土日扱いでオープン自体はしているらしい。

散歩で私も汗まみれ。一緒に行きたいぐらいだが、買ってしまった食パンはさっさと持ち帰った方がいいだろう。少なくとも、銭湯には持って行かない方がいいように思う。

「あ、もう開いてる？」

晃くんは時計に目をやって呟いた。スマホを仕舞う前に時刻を確かめたら、確かに六時を過ぎている。晃くんは気怠そうに座ったまま身体をほぐし、ペットボトルに残っていた水分を飲み切った。

椅子から立ち上がると、店内のゴミ箱に空になったそれを放り込んだ。

「じゃあ、オレはこれで」

私は晃くんが出ていくのを、その場で見送る。晃くんは、「あっ」と声を出して、一瞬立ち止まった。

「良いお年を」

「あ、ああ。良いお年を」

彼はすっきりとした表情で、コンビニの外へ出て行った。彼と入れ替わる形で、一瞬、外のひんやりした空気が店内に入ってくる。私はだんだん温くなってきたコーヒーを一口飲み、まだまだ残っているところに蓋をしっかり閉め、ビニール袋に入れ直した。

イートインの椅子を片付け、コンビニを後にする。帰宅したら、まずは朝食を摂って、志津香の邪魔をしないように、洗車でもしに行こう。正月用のお酒も、忘れずに買いに行かねば。

『一二月三一日（日）　午前六時』――武藤幸次編

初出　令和三年一一月一九日　Mediumにて公開

一二月三一日（日）　午前八時

レンズが大きいサングラスを掛けていた沙綾は、さっきまで付けていたカバのマスクを脇に置いて、アイスコーヒーを飲んだ。僕はそれを見ながら、ホットコーヒーを啜る。

「次が、二五分発だっけ？」

沙綾の問いに、僕はスマホで探し当てた時刻表を見ながら頷いた。

「七番のりばだって」

「三〇分ぐらいか。結構長いな～」

「目の前で行ったところだから、仕方ないさ」

哲朗くんの家を出てから、阪急の駅前じゃなくて、JRを目指して歩いてきたのがよくなかったらしく、タイミング悪く目の前でバスを逃してしまった。あと五分早く出ていれば間に合ったのに、その五分が起きれなかった。

沙綾はまだ眠そうな顔をしながらも、スッとした姿勢でコーヒーを飲んでいる。

「乗る前にトイレには行きたいけど、どこだっけ？」

「確か、あっちのビルの中じゃなかったっけ」

僕は指で、そこまでの道を差した。このまま、二階のデッキを渡って行った途中、右手のビルに入ったら男女それぞれのトイレがあったはず。東出口の方にもいくつかあった気がするけど、どうせバス乗り場は西側なんだし、距離的にも大して変わらないんだから、西側に行けばいい。

「そうすると、もうちょっと早く出なきゃダメ、か」

「一〇分ぐらいは見ておいた方がいいかもな」

「りょ～かい」

沙綾はそう言いながら、再びコーヒーに刺さったストローへ口をつけた。僕もスマホで時間を確かめながら、思ったほど時間がないと思いながら、コーヒーを飲む。

「バスで一回帰るでしょ。それから～」

「シャワーを浴びて、仮眠を取ろう」

「寝なくてもいけるって」

「いやいや、二時間ぐらいは寝た方がいいって」

沙綾は不満そうな声を上げる。哲朗くんの家で少し横になりはしたが、睡眠が足りているとは思えない。二日酔いというほどの症状もないものの、バスに乗ってから降りるまでの間に寝たとしても、半日ぐらいは満足に動けないだろう。

「午前中しっかり寝て、それから動いた方がいいって」

沙綾はなおも、「えー」と抗議する。バスがある間に帰ろうって何度も言ったのに、始発で帰るとダダを捏ねたのは誰だったっけ？　ついつい意地悪を言いそうになり、言葉を押さえ込んだ。

どう説得するか考えているうちに、スマホが震えた。さっき設定したアラームが作動したらしい。カップに残っているコーヒーを慌てて飲む。沙綾はマイペースにストローでくるくるとコーヒーを混ぜている。

「もう動かないと」

「え、そんな時間？」

沙綾は僕に「慌てすぎだよ～」と笑って言った。確かに余裕は多めに見ているけど、次のバスを逃せば一時間以上待たなきゃ行けない。僕は沙綾のコーヒーに口をつけて、一気に飲み干した。お腹に冷たいものが入ってくるのを感じながら、グラスとカップを返却口へ運んだ。　僕がバタバタしている間に、沙綾はマスクをつけてカバンを持った。僕が「行くぞ」という前に彼女の方から先に店を出た。

トイレによって、七番のりばへ戻ってくるまで、ほとんど余裕はない。少し足早に沙綾の手を引いて、デッキの上を歩いた。沙綾が無理なくついて来られる速度で、例のビルへ向かう。

ちゃんとついて来られているか、不意に振り返って確かめると、沙綾は楽しそうに笑っていた。変な女に引っかかってしまったもんだなと思いながら、その変なところをこの上なく可愛いと思ってしまっている自分も、とことん変なんだろうな……。

『一二月三一日（日）　午前八時』――浪川一輝編

初出　令和三年一一月一九日　NOVEL DAYSにて公開

二月三一日（日）　午前九時

一人暮らし用の小さな食卓に、卓上の三面鏡を置いて広げてしまうと、それ以外のものを置くスペースはほとんどない。私は申し訳ない気持ち半分、早く済ませなきゃという焦り半分で、慣れない化粧とあまり見たくない自分の顔に向き合っている。

部屋の主は、向こうの部屋から戻ってきた。洗濯物を干し終わったらしい。

「部屋干しだと、今日は乾かないかもね」

哲朗さんは元気そうに笑って言った。私はシャワーを浴びてもなお、頭が寝ているような気がするのに、彼は何事もなかったかのように手際良く家事を済ませていく。そのテキパキとした動きに、私はより一層焦らされる。

「向こうは一回仮眠してからって、言ってたから早くてもお昼過ぎじゃない？」

彼は自分のスマホを操作しながら、「八時半のバスには乗れたんだって」と一兄たちの状況を教えてくれた。八時半に駅前を出たのなら、帰り着くのはまだまだ先。無駄に焦る必要もない、かも。

私はちょっとだけほっとして、落ち着いて目元のメイクに取り掛かる。

「モノレールで行っても、バスで行っても、昼前には着いちゃうな。どうしよっか？」

私が目も手も離せない状況になってから、彼は意見を求めてきた。私は変にズレないよう呼吸を整えてから、「着いてから考えればいいんじゃない？」と応えた。一旦左目だけ終わらせて、「向こうも何時に着くか分からないんだし」と付け加える。

「それもそっか。そうだよね」

彼は納得してくれたらしい。ただ、手持ち無沙汰そうに、ずっと目の前に立っているのは変わらない。私は「ああ、ごめんなさい」と手元を少し片付けて、三面鏡を手前に引いた。彼は「あ、ごめんね。気にしないで」と結局座らない。

「時刻表とかお店とか、調べてくるよ」

彼は出てきたばかりの部屋へ戻った。そっちの部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。私は微妙なモヤモヤを抱きながら、半分しか終わっていない目元

のメイクを再開する。

この後、また沙綾さんと会うのでもなければ、こんなにメイクすることもないのに。やったとしても、どうせ向こうでダメ出しついでのオモチャにされるんだけど。

ここで寝起きして、こうやって顔を作るのもだんだん慣れてきた。ひょっとすると、自宅で化粧する方が下手かもしれない。徹夜も外泊も朝帰りも、いつの間にか普通になってきた。どこまでやれば正解なのかも分からないけど、目元も一通り終わったし、こんなところで良いんじゃない？

三面鏡を閉じて、哲朗さんのいる部屋へ持っていく。こっちの部屋も、随分「私」が侵食している。申し訳ないと思いながら、いつもの場所へ三面鏡を片付けた。

「お待たせ」

エキスポシティまでの乗り換えを確認していた哲朗さんに話しかける。彼はこちらを振り返って、「うん、可愛い」とさりげなく言った。彼は私の反応を気にすることなく、「どっちで行こうか」と、モニターへ視線を戻す。

どっちだろうと、今の私にはどうでもいい。私も自然体を装って、「どれとどれ？」と彼の後ろからモニターを覗き込むように身体を密着させる。上坂さんならどうするか、普段は考えたくもない相手だけど、今回ばかりは力を借りよう。

大晦日はまだまだ、始まったばかり……。

『一二月三一日（日）　午前九時』——浪川瑞希編

初出　令和三年一一月二二日　noteにて公開

一二月三一日（日）　午後〇時

なんちゃっておせち作りにも区切りを打って、キッチンを旦那に明け渡す。どうしても作っておきたいものは一通り済んだし、どうせ、お互いの実家を行き来して適当に摘むから、今のところは自分たちの食べたいものと、作りやすいものさえ作ってしまえば、それでいい。

義実家の味は義姉さんが受け継いでるし、実家の方で受け継ぐべきレシピはせいぜいお雑煮ぐらい。どうしても食べたかった時に、記憶を辿って作れたこともある。どうしてもというものがあれば、牧人の奥さん、桃子さんに頑張ってもらおう。

康徳さんの手で、主に子供向けのカレーが作られていく。お昼を済ませたら、あとは明日のお雑煮用の準備と、夜のお蕎麦が段取りできれば十分。午後は子供たちを連れ出して外へ行ってもらうし、時間ができれば年内最後のお絵かきまでやれればベストではある。

「明日は何時着だっけ？」

康徳さんはルーを鍋に割り入れ、お玉でかき混ぜながら言った。私はスマホを取り出して、母とのやりとりを確認する。

「えーっと、お昼前ならOKだって」

「お昼前、か。泊まれるなら今晩行っちゃう方が楽な気もするけど、それはダメなんだよね？」

私が頷くと、彼は「そっかー」と言いながら、鍋の様子を見て火を点けた。だんだん、カレーの匂いが強まってくる。

「布団が足りないんだって」

「じゃあ、仕方ないか」

私は彼の動きに合わせて、食器とご飯を用意しようとする。彼は「あー、いいよ。ゆっくり座ってて」と私に食卓へ座っているように勧めた。

「朝から動きっぱなしだろう？　昼ご飯ぐらい、僕に任せて」

彼はカレーが焦げ付かないようにかき混ぜながら、ご飯や食器の準備を進める。娘たちのスプーンも並べ、ドリンクも用意した。匂いに誘われた娘たちが、準備

がバッチリ整った食卓へやって来る。
私は二人を連れて、洗面所へ移動した。彼女らと手をしっかり洗い、食卓に戻る。康徳さんは、私たちが戻って来るタイミングに合わせて、配膳を終えた。娘たちを椅子に座らせ、「いただきます」と食事を開始する。
今日のカレーも、いつも通りにちゃんと美味しい。明日明後日とおせちに飽きても、このカレーが待っているのは心強い。
「明日の朝からだと、めちゃくちゃ混みそうだよね」
康徳さんはカレーを口に運びながら言った。道路状況は確かに、彼のいう通りだろう。とはいえ、今日もすでにそれなりに混雑しているとも聞く。
「思い切って電車、も混むよね。多分」
私はそれにも頷いた。頑張って電車で行ったとしても、恩恵はほとんど受けられない。行きも帰りも手間が増えるだけ。だったら、飲めないドライバーさんには申し訳ないけど、渋滞を覚悟で車を選んだ方が賢明な気がする。
「めちゃくちゃ早い時間に出発して、どこかで時間調整する？」
康徳さんは、「二人が寝ている間に車に乗せてさ」と付け加えた。
「早くって、何時ぐらい？」
「六時じゃあんまり変わらない気がするから、五時とか？」
五時か。早めに寝れば無理な時間ではない。ただ、そんな早くに出たとして、時間調整するような場所があったっけ？
「一応、ダメ元で聞いてみるね」
私はそう言いながらスマホを取り出して、母にメッセージを送ってみた。カレーを食べている間に、「早くても大丈夫だよ」と返事が来た。
「お父さんが起きているから、来てくれても大丈夫、だって」
康徳さんは「そっか、そっか」と頷いた。父も老いたとは言ってたけど、もうそんな調子だったとは。私は、「じゃあ、そのつもりでよろしく」と母に返信した。

『一二月三一日（日）　午後〇時』――森田芽衣編
初出　令和三年一一月二二日　アルファポリスにて公開

一二月三一日（日）　午後一時

スーツケースを引きながら、三階までエスカレーターで上がる。頭上の、年季の入ったからくり時計は、二体のピエロが一三時ちょうどをお知らせしてくれた。お店の名前が変わっても、大規模な改装工事が入っても、ずっと残っている。

動いている姿も見られてなんとなくジーンと来ていると、フードコートの方から声がかかった。そちらを見ると、透と奥さん、お子さんがご家族でお昼ご飯を食べていた。

「大層な荷物だな。今から旅行か？」

透は後ろのスーツケースを見て言った。私は、隣の奥さんに「こんにちは」と会釈をする。微妙な気まずさを感じながら、私は首を振った。

「二、三日、実家に泊まるだけ」

「それでその荷物？」

「うっさいなー。色々持っていくものがあるの」

私は透の追求をやんわりいなしながら、フードコートの空いた席を探す。買っていくものの目星はついたものの、まだ約束の時間には少し早い。買い物ついでにここで時間調整、と思ったけど、延々と透に付き纏われるなら、外に出て向かいのサイゼリヤにでも行こうかしら。

ザッと見渡してみると、お昼時の割には割と空いている。お昼ご飯は家で済ませてきた身で、椅子だけ借りてコーヒーを飲むのは気がひけるかなと思いきや、全然そんなこともない。適当に甘味を頼んで小腹を満たしても良い。

「隣の席、空いてるぞ？」

透は自分たちの隣を指差して手招きする。たとえそこしか空いていなかったとしても、わざわざそこに座りたくはない。

「気まずいから、良いって」

できることなら、こうやって言葉を交わすのも遠慮したい。最初から他人行儀に敬語で話せば良かったと、後悔している。透は私の気持ちを汲み取ることもなく、強引に自分たちの席へ連れていく。

「悪いんだけど、俺の代わりに家族を見てて」

彼は自分の席へ私を座らせると、彼はトレイを持って返却口の方へ向かった。私はスーツケースを邪魔にならないところへ移動させ、奥様の方へ向き直る。幼なじみの奥さんやお子さんと置いてけぼりは、非常に気まずい。

「強引に、すみません」

「いえいえ、こちらこそ」

奥さんが軽く頭を下げるから、こちらも合わせて頭を下げた。緊張に身体が自然に縮こまる。俯いていると、ベビーカーの中からお子さんが私をジッと見上げて来る。透の面影を感じながら、ジッと見つめられるのもめちゃくちゃ気まずい。

沈黙の最中、顔を上げると透が食器を返して戻ってきた。

「いやぁ、悪い、悪い。助かったよ」

彼は何事もなかったかのように、奥さんに「さ、行こうか」と声をかけ、ベビーカーのストッパーを外した。

「オレたちも今からお出かけでさ、バタバタなのよ」

彼はベビーカーのハンドルに手を置いて、周りを見ながら上手に通路へ出した。

「また来年、ウチに来いよ。お礼はその時にでも」

彼によって強引に座らされはしたけど、わざわざお礼をされるようなことはしていない。私は、奥さんと何か話をしている透に、「お礼なんて良いよ」と言った。

「奥さんにもご迷惑だろうし」

「そっか。悪いな」

奥さんは私に、「すみません」と頭を下げた。透は無関心な様子で「じゃあな。良いお年を」と、ベビーカーを押してフードコートを出て行く。奥さんはそれを追いかけた。随分前に切れたと思っていた腐れ縁も、どうやら来年以降も続くらしい。この厄介さを飲み込むには、甘味の一つでもお腹に入れなくては。アイスにするか、あんみつにするか、それが問題だ。

『一二月三一日（日）　午後一時』――小野寺ルミ編

初出　令和三年一一月二二日　小説家になろうにて公開

一二月三一日（日）　午後三時

パイとコーヒーを乗せたトレイを持って、ルミがテーブルまで戻ってきた。期間限定のパイもまだあったそうだけど、彼女はいつものアップルパイを選んでいた。私は彼女が運んできたSサイズのホットコーヒーを手元に移した。

「ブラックで良かったっけ？」

ミルクも砂糖も貰わなかったけど、とルミは言った。私はどっちでも良かったけど、頷いた。

「そっちこそ、いつもので良かったの？」

「結局、これになるよね」

ルミはアップルパイの封を開け、慎重にかじりついた。それでも熱いらしく、口の中から熱を逃しながら食べている。落ち着いたところで、ホットコーヒーをブラックのまま啜った。彼女は口の中を冷ますように息を吐く。意を決して、もう一度食らいついた。

「で、三つ葉の買い出しは良かったの？」

彼女は相変わらず熱を逃しながら、口を動かしている。

「買い出しも行きますよ。でも、こういうのもしたいじゃない？」

ルミは私に、「まあね」と同意した。周りを見渡すと、私たちのように近所から来ている親子連れや、ドライブがてらに立ち寄った人たちもチラホラみかける。ちょうど混み合う時間帯らしく、私たちの後からレジ前の列が長くなっていた。

「考えることはみんな一緒っていうか、タイミングも一緒なんだもんね」

「そこの洗車場もいっぱいだったもんね」

ルミと一緒に歩いてここまで来たけど、ケーキ屋さんの横のセルフ洗車場が賑やかだった。今日まで開けてくれているスーパーや食品売り場も、きっと駆け込みのお客さんでいっぱいだろう。

「三つ葉の買い出し」なんて、章二さんを置いてルミと外に出るための方便だから、無理に買わなくても構わない。あまりにもごった返しているようなら、適当に散歩して帰れば良い。

「お母さんたちはどっか行かないの？」

ルミは食べ終えたアップルパイのパッケージを、トレイの上でクシャッと丸めた。
「そういうあなたは、どこか行かないの？　年末年始に、無理に実家で過ごす必要もないんだし」
どちらかと言えば、私たちがルミの元へ行く方が過ごしやすそうなもんだけど、彼女は「だって、あっちの方が広くて寒いんだもん」と言った。
「一緒にどっか行く相手もいないし、お母さんと一緒で、人混みもあんまり得意じゃないし」
「積極的に見つけに行かないと、いつまで経っても独りのままよ」
ルミは「分かってますぅ〜」と、ムスッとした。むくれている表情もそれなりに可愛いと思うんだけど、親バカかしら。先日見せてもらったダンス動画も、中々良いセン行ってそうなんだけど、周りが既婚者ばっかりだから？
ここで「イイ人〜」とか言い始めたら収集がつかないから、この辺で辞めておく。親が勝手に動いて見つけてきても、反発するだけだろうし、本人がその気になるまで見守る他ない。
「そういえば、あの荷物に何が入ってるの？」
私は話題を無理やり変えた。彼女が引っ張ってきたスーツケースの中身を訊ねる。
「お父さん用のお酒と、家で余ってたお菓子」
「じゃあ、おつまみも見て帰らなきゃ」
この辺りのスーパーで、三つ葉とお父さん好みのおつまみを買えるところはどこだったかな？　コーヒーを飲み終えるまでに、できるだけ空いてそうなところを捻り出したい。今年こそ少しくらい、ゆっくりできると思ったのに、最後までバタバタ確定か。

『一二月三一日（日）　午後三時』——小野寺香帆編
初出　令和三年一一月二二日　MAGNET MACROLINKにて公開

一二月三一日（日）　午後六時

おせちを作るのに邪魔だからと、昼過ぎから家の中にいた智希と共に追い出された。年末にやることと言えば洗車だろうと、割安のセルフの洗車場へ行ってみると、考えることはみんな一緒だったらしく、我々と同じような親子連れでごった返していた。

混み合っている中、なんとか男二人でザッと掃除して戻ってきたものの、まだ少し早い気もして、寒いのを我慢しながら車の中を片付ける。ザッとゴミを拾って、ハンディの掃除機で拾い切れない汚れを取る。智希には硬く絞った雑巾で車内を手当たり次第拭いてもらった。陽も暮れてきたし、「適当でいいぞ」と智希に声をかけて掃除を打ち切った。

掃除するために引っ張り出した道具を、一つ一つ元の場所へ片付けていると、門を開く音が響いた。智希が、「おかえり」と声をかけている。

「おかえり。早かったな」

玄関前には、コートとマフラーを付けた陽菜が立っていた。彼女は僕へ返事をすることなく、こちらを一瞥して家の中へ入って行った。僕がぼんやり突っ立っていると、智希がバケツや掃除機を持って、「お父さん」と声をかけてきた。

「おお、ありがとう。中へ入ろう」

僕がドアを開け、智希を先に中へ入れた。彼が靴を脱ぐスペースを確保しながら、後ろ手にドアを閉める。家の中とはいえ、玄関や廊下は少し肌寒い。掃除用具の収納は智希に任せ、僕は一旦リビングへ向かう。

陽菜は自分の部屋に籠っているらしく、リビングにその姿はなかった。

「あら、おかえり」

史穂はまだ、キッチンで忙しそうにしていた。換気扇を全力で回しながら、点けっぱなしの年末特番を時折眺めている。音量を上げないと満足に聞こえないだろうに、一度、「余計なお世話だ」と言われて以来、何もしないようにしている。

時計を見上げると、午後六時。晩ご飯やら紅白やらには、まだ少し早い。キッチンの稼働状況や食卓の上に並んだ大小様々なタッパーを見る限り、もうしばらく外に出ていた方が良さそうだ。

いつの間にか洗面所で手を洗ってきたらしい智希が、微妙に濡れた手を乾かすように、鍋が上に乗ったストーブの前に行く。史穂に嫌な顔をされながらも、そこで暖を取りながら時計を見上げる。

「あ、テディの散歩」

智希が呟くまで、すっかり忘れていた。夕方の散歩がまだ終わっていない。智希は手慣れた手付きで散歩に必要なものを用意する。リードを持って、テディのケージがある上の階へ、階段を上がって行った。

「陽菜も一緒に連れて行ったら？」

史穂は手を動かし、鍋の状況を確かめながら言った。

「手伝わせなくても良いのか？」

僕の問いに、史穂は「邪魔にしかならないから、連れて行って」と言った。何がなんでも、ってことらしい。

僕は先に上へ行った智希の後を追いかけて、子供部屋の方へ上がる。階段の向かいの部屋からテディを抱えた智希が出てきた。彼は隙あらば逃げ出そうとするテディを上手に制しながら、「アレ？」と僕を見て言う。

「お姉ちゃんも連れて行けってさ」

「ふーん。じゃあ、先に降りてるからよろしく」

彼はテディを抱えたまま、慎重に階段を降りていく。僕はその後ろ姿を見送りながら、陽菜の部屋のドアを三回ノックした。

『一二月三一日（日）　午後六時』——武藤幸弘編

初出　令和三年一一月二四日　カクヨムにて公開

一二月三一日（日）　午後九時

JR茨木にバスが到着した。どうやって帰るか散々悩んだ結果、朝と同じルートで帰ってきた。朝と違うのは、目の前の階段でデッキに上がり、改札まで行ったところでみぃちゃんと離れること。

僕は大きな紙袋を抱えて、先を行くみぃちゃんの背中を追いかける。みぃちゃんは上まで行って立ち止まり、後ろを振り返った。

「一つぐらい持とうか？」

「全然気にしないで。大丈夫、大丈夫」

僕は両手の袋を高く持ち上げて、彼女に「へっちゃらだ」とアピールした。大きさや形から来る独特の持ちにくさはあるものの、重さはそれほどでもない。みぃちゃんは僕が隣まで来るのを待ってから、駅の方へ歩き始めた。

「本当に、駅までで大丈夫？」

僕が心配のあまりそう訊くと、彼女はケロっと「大丈夫、大丈夫」とさっきの僕を真似して言った。

「駅からはすぐだし、あなたが無駄に往復する必要ないし」

彼女はさっきも、「バスの方が安上がりでしょ」と一輝さんたちを駅で見送りながら、この帰り道を選択した。

「それに、家まで見送ってもらったら、そのままウチで待ってもらうことになるけど、それは辛いでしょ？」

彼女は笑いながら言った。彼女のご両親に特別嫌われているとは思わないが、特有の緊張感は捨て切れない。お義父さんから熱い歓迎をされるのも、それはそれで辛い。彼女の誕生日にしこたま飲まされたのを、まだ鮮明に覚えている。

「そっちはそっちで準備があるだろうし、今はここで解散しよう」

駅の構内に入ると、彼女は僕の手の中から一番小さな紙袋を取り、改札へ向かった。もう少し引き止めたい僕の気持ちを振り切るように、「あとの荷物はよろしく」と言い残して改札を通って行った。次の電車が入ってきたらしく、あっという間にホームの方へ姿を消した。

僕は大きな荷物を持たされたまま、彼女が消えた方向を見つめていた。すぐに

降りてきたお客さんで改札の前がいっぱいになる。僕は邪魔にならないよう、大きな荷物を持ったまま東口から駅を出た。みぃちゃんを乗せた電車は、あっという間に総持寺の方へ向かって発車する。

クリスマスのイルミネーションが残るココで、茫然と立ち尽くしている暇はない。さっさと帰って、再び出かける準備をしなくては。事前にどんなもんか確かめるべく、オフィスの方へ足を運ぶ。

普段もそれほど賑わっているとは思えない駅前商店街だけど、今日はさらに活気が少ないようだ。平日の深夜ぐらいの雰囲気に、「やっぱり最後まで送ればよかったかな」と今更ながら、みぃちゃんのことを考えてしまう。彼女は彼女なりに、無事に家に帰り着けると言い聞かせながら、オフィスの前を通り過ぎて市役所の方へ歩みを進める。

公園前の交差点で、一度向かいの歩道へ渡った。帰宅には余計な遠回りになるけど、左手にこの後の目的地がある。普段は閑散としているありふれた神社だけど、今日は出店がズラッと並んでいた。流石にまだ早くて人もそんなにいないけど、年越しの前後から人が集まってくるのだろうか。

僕は楽しそうな雰囲気に後ろ髪を引かれながら、この後の予定を思い出して、その場を後にした。二三時半までにウチへ再集合して、そこから初詣に出かける。今度はダブルデートではなく、みぃちゃんと二人きり。

今更、誰かに見られたらどうしようと、妄想が加速する。とりあえず風呂に入って落ち着こう。彼女から預かった荷物も、洗濯物も、しっかり片付けておかないと。こんなにバタバタな大晦日、初めてだけどめちゃくちゃ楽しいな。

『一二月三一日（日）　午後九時』――原田哲朗編

初出　令和三年一一月二二日　ノベルアップ+にて公開

一二月三一日（日）　午後一〇時

紅白の途中で子供達とお風呂に入り、ニュースで中断される頃には二人ともベッドの上で寝息を立てていた。中々寝ないと必死に寝かしつけ、一緒に寝落ちしていたのが懐かしいぐらい、最近はスッと寝てくれている。

夕飯の片付けと、明日以降の段取りを終えた芽衣が、遅れてお風呂に入っている。僕はその間に、食卓へパソコンを持ち出して、SNSをチェックしていた。今年を締めくくるブログも投稿し終え、それに因んだ投稿をそれぞれのSNSで発信する。

サッと返せそうな返信もいくつか終え、芽衣がお風呂から上がってくると同時に、パソコンの電源を落として、寝室へ片付けに行った。リビングへ戻り、水分補給を済ませてトイレに立つ。用を済ませて出てくると、芽衣もしっかり寝る準備を整えていた。

僕は彼女の視線に気が付き、「ああ、ごめんね」とトイレの前を空けた。

「先に、ベッドに入ってる」

芽衣は僕に頷きながら、トイレのドアを閉めた。普段からするとまだまだ寝るには早い時間だけど、かなり眠そうな顔をしていた。僕は彼女に宣言した通り、一足先にベッドへ入った。

スマホを充電しつつ、改めてさっき投稿したブログ記事をチェックする。編集長をやっているメディアサイトでは校正もしっかりやっているのに、個人のブログだと何故か誤変換や引っかかる表現がチラホラ見つかる。セルフチェックの甘さを実感しながら、「今日は修正しない」と改めて心に決めた。

芽衣があくびを噛み殺しながら寝室へ入ってきた。トイレと歯磨きにしては、随分遅かったような。僕がスマホを持ったまま彼女を見つめていると、彼女は「戸締りも確認してた」と小さな声で言った。

「ああ、ありがとう」

「どういたしまして」

芽衣はそのまま、ぬるりと僕の隣へ入って来た。僕はスマホを枕元に置いて、しっかり布団の中へ身体を収める。足先の方はまだまだひんやりしていた。芽衣

は僕の横で、スマホと置き時計のアラームをそれぞれセットする。
「まだ十時か。明日が早いって言っても、流石に早すぎるかな」
「そう？　大晦日だから早い気がするけど、こんなもんじゃない？」
芽衣はすっぽり肩まで布団に収まって、仰向けに天井を見つめている。僕はその横顔をジッと見つめた。
「なぁに？」
「別に。なんでもない」
芽衣は大きなあくびを一つすると、そのまま目を閉じて身体を向こうへ向けた。僕はそれを、後ろから抱きしめる。彼女の温かみと匂いを感じながら、裡なる睡魔の到来を待った。もうしばらくは訪れそうにない。
とりあえず、枕元のリモコンに手を伸ばし、部屋の照明を落とした。常夜灯も点けない部屋の中は真っ暗だ。暗がりを見つめながら、今年の出来事と来年の出来事を改めて思い描く。
思い起こせば色んなことがあった。自分のことも、親族のことも、仕事仲間のことも色々あった。来年もきっと、色んなことが起こるだろう。心配なことも不安なことも沢山あるけど、痛々しさを手放さずにやっていこう。オレの人生、まだまだこれからだ。

（完）

『一二月三一日（日）　午後一〇時』――森田康徳編
初出　令和三年一一月二四日　NXZ（旧サイト）にて公開

あとがき

二月一二日に投稿した浪川瑞希編の『一月二日（月）』から始まって、一一月二四日に投稿した森田康徳編の『一二月三一日（日）午後一〇時』を持って完結。男女五人ずつ、微妙に住んでいる地域や年代を変えた、一〇人の語り手による一人称掌編を、一二〇〇字を目安に各回読み切りの書き下ろしで二〇本というのは中々厳しい取り組みでした。

壮大な縦軸、伝えたいテーマや強烈なコンセプト、しっかりしたプロットがある「面白さ」を主に据えた連作ならまだしも、「何でもない日常の、何でもない瞬間を切り取る」テーマを据え、「変に詳しく書くとボロが出る」からと「美味しそうなエピソードを敢えて避ける」ようにもなるし、エピソードを積み重ねた結果、「地理や空間的にも茨木限定」の縛りもいつの間にか加わって、書きにくさも面白味のなさもぐんぐん高まっていったように思います。

どこから読んでもそれなりに読めて、前後のエピソードを読まなくても完結しているというのも目指しつつ、読んだところで得るものなんて特にない、面白味もそこまでないというのも敢えて狙いつつ、とにかく書き下ろしで発信するだけに集中してみたらどうなるかという実験も十分にできた気がするので、また折りを見て次の作品を書いていけたらと言うところです。

もしもですが、奇特な方がいらっしゃいましたら、投稿サイト横断で日付に沿って時系列に追いかけていただいたら、多少の補完ができて、投げっぱなしのエピソードも増える体験もできるかと思いますので、色んなところで拙作をお楽しみいただけましたら幸いです。

二年後、本当にこう言う人たちがいるんじゃないか、自分もこの中の誰かみたいなことをしてるんじゃないか、個人的な未来予測が多少なりとも実現しているんじゃないかという期待も持ちながら、二〇二三へ向けて頑張りたいと思います。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

2023

令和八年五月三一日 初版発行

著者　長谷川　雄治
発行年月日　八年五月三一日
発行者　長谷川　雄治
連絡先　hasegawa@kamenwriter.com
X(Twitter)　@kamenwriter01
URL　https://www.kamenwriter.com

© 2026 長谷川　雄治

※ 引用・私的利用の範囲を超える無断転載・複製・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）・AI学習への利用を禁じます。
※ 表示やファイルの不具合、記載内容に関するお問い合わせがある場合は、上記連絡先までご一報ください。